

本州四国連絡道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告 IV

禿山遺跡他

1998年3月

兵庫県教育委員会

本州四国連絡道路建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告 IV

禿山遺跡
尼ヶ岡遺跡
塩壺東遺跡
高尾遺跡
岩屋台遺跡

1998年3月

兵庫県教育委員会



本州から淡路島を望む(北上空から)



北淡路西部(南西上空から)



北淡路東部(南西上空から)



淡路島北東端(北上空から)



北淡路北東端(南上空から)



淡路島北東端(南東上空から)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



遺跡周辺(国土地理院 空中写真)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



両遺跡遠景(東上空から)



両遺跡全景(南上空から)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



禿山遺跡全景(南上空から)



禿山遺跡全景(北上空から)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



尼ヶ岡遺跡全景(西上空から)



尼ヶ岡遺跡近景(北上空から)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



①両遺跡遠景(南東から)



②両遺跡遠景(南西から)



③両遺跡遠景(南から)



④禿山遺跡調査前全景(北東から)



⑤禿山遺跡調査前近景(北から)



⑥禿山遺跡調査前近景(北から)



⑦禿山遺跡調査前近景(北東から)



⑧禿山遺跡調査前近景(南東から)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



①尼ヶ岡遺跡調査前全景(西から)



②尼ヶ岡遺跡調査前近景(南から)



③尼ヶ岡遺跡調査前近景(V区・南西から)



④尼ヶ岡遺跡調査中近景(南西から)



⑤禿山遺跡調査中近景(南西から)



⑥禿山遺跡機械掘削状況(東から)



⑦尼ヶ岡遺跡調査状況(SH-6)(北西から)



⑧尼ヶ岡遺跡調査状況(SH-6)(北から)

禿山遺跡



SH-1(西から)



谷部土器出土状況(西から)

尼ヶ岡遺跡



S H - 1 ~ 3 (南西から)

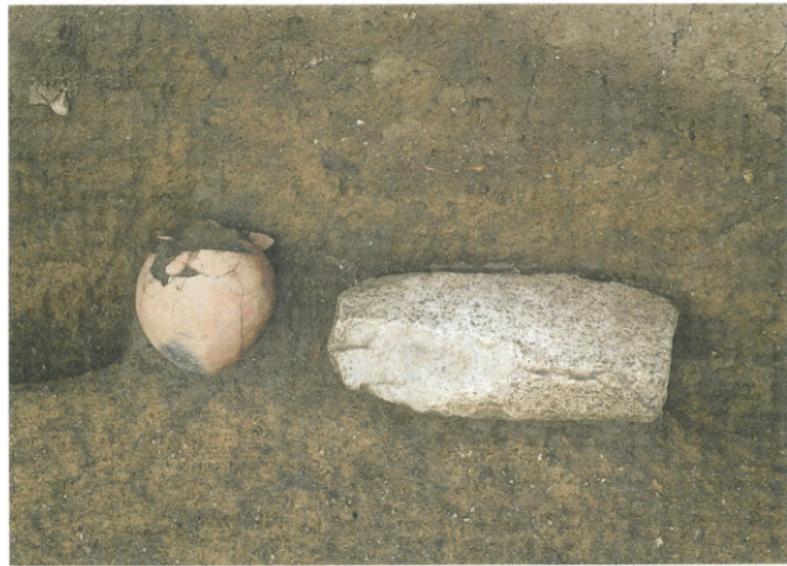


S H - 4 (西から)

尼ヶ岡遺跡



SH-6(南から)



SH-6 遺物出土状況(南から)



SD-1 土器群検出状況(北から)



III区テラス 土器群出土状況(南から)

塩壺東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡



遺跡周辺(国土地理院 空中写真)

塩壺東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡



①塩壺東遺跡調査前全景(北東から)



②塩壺東遺跡調査前全景(北西から)



③高尾遺跡調査前全景(東から)



④岩屋台遺跡調査後全景(東から)



⑤塩壺東遺跡全景(南西から)

高尾遺跡



調査後全景(東から)



遠景(北東から)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



禿山遺跡 谷部出土土器



尼ヶ岡遺跡 SD-1 出土土器

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡



尼ヶ岡遺跡 居住跡出土土器



尼ヶ岡遺跡 II区土器群出土土器

例　　言

1. 本書は本州四国連絡道路(津名～淡路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査および整理作業は本州四国連絡橋公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。

2. 本州四国連絡道路(津名～淡路)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告はI～Vまでであり、本書はそのIVあたり、弥生時代の合計5遺跡を収録している。なお、Iは古墳時代～中世の12遺跡、IIは塩壺遺跡、IIIは佃遺跡、Vは丸山遺跡を収録している。

3. 本書に収録した遺跡名・全面調査年度・所在地・遺跡調査番号は以下の通りである。

禿山遺跡	(平成3年度)	津名郡東浦町白山	(910012)
尼ヶ岡遺跡	(平成3年度)	津名郡東浦町白山	(910013)
塩壺東遺跡	(平成4年度)	津名郡淡路町岩屋	(920162)
高尾遺跡	(平成3年度)	津名郡淡路町岩屋	(910072)
岩屋台遺跡	(平成3年度)	津名郡淡路町岩屋	(910073)

4. 各遺跡の発掘調査は本州四国連絡橋公団の委託を受け、兵庫県教育委員会が行ったが、現地調査にあたっては、橋詰建設株式会社、津名土木株式会社と請負契約を結んで実施した。

5. 遺跡の航空写真は、平成3年度調査分は関西航測株式会社、平成4年度調査分は写測エンジニアリング株式会社にそれぞれ委託して撮影したものを使用した。

6. 使用した写真のうち、遺構については各遺跡の調査担当職員が撮影したが、遺物写真については、平成5年度は株式会社三宮写真館、平成7年度は株式会社衣川および株式会社サンスタジオに委託して撮影したものを使用した。

7. 本書の遺物の図版番号は、図版番号と一致する。また、土器の色調および一部遺跡の土層色名は、「標準土色帖」によるものである。

8. 本書の編集は尾崎比佐子の補助を得て岸本一宏が行い、本文は石器を山本　誠が、その他は岸本が執筆した。

9. 発掘調査および整理作業・報告書作成にあたっては、下記の諸氏にご教示・ご指導をいただいた。

岡本　稔・波毛康宏・浦上雅史・伊藤宏幸・川吉知子・櫛宜田佳男・藤井　整・福島孝行・山本三郎・別府洋二・岡田章一・岡山真知子（順不同、敬称略）

記して謝意を表するものである。

本文目次

例 言.....	i
本文目次.....	iii
挿図目次.....	iv
表目次.....	v
写真図版目次.....	v
第1章 はじめに	
第1節 調査の経過と体制.....	1
第2節 整理作業の経過と体制.....	3
第3節 遺跡の環境.....	5
第2章 遺 跡 の 調 査	
第1節 烈山遺跡 東浦町	9
第2節 尼ヶ岡遺跡 東浦町	15
第3節 塩壺東遺跡 淡路町	25
第4節 高尾遺跡 淡路町	27
第5節 岩屋台遺跡 淡路町	28
第3章 ま と め と 考 察	
第1節 遺跡のまとめ.....	69
第2節 出土土器のまとめ.....	71
第3節 北淡路の弥生時代集落の動態(予察).....	95
出土土器観察表.....	107

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	7	禿山遺跡	
第2図 禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡		第30図 遺構出土土器	48
調査区位置図(1/2,000)	9	第31図 谷部出土土器(1) 下層	49
第3図 禿山遺跡 調査区割設定図	10	第32図 谷部出土土器(2) 下層	50
第4図 尼ヶ岡遺跡 調査区割設定図	15	第33図 谷部出土土器(3) 下層・中層	51
第5図 尼ヶ岡遺跡		第34図 谷部出土土器(4) 中層	52
S H - 1 ~ 3 遺構配置図	16	第35図 谷部出土土器(5) 中層	53
第6図 尼ヶ岡遺跡 S H - 8	18	第36図 谷部出土土器(6) 中層・上層	54
第7図 尼ヶ岡遺跡 S H - 4・S D - 1		第37図 谷部出土土器(7) 肩部・その他	55
S D - 6 遺構配置図	19	第38図 包含層出土土器	56
第8図 塩壺東遺跡 調査区位置図(1/2,000)	25	尼ヶ岡遺跡	
第9図 岩屋台遺跡 調査区全体図	28	第39図 V・VI区出土土器	57
第10図 岩屋台遺跡 調査区位置図(1/2,000)	28	第40図 S D - 1 出土土器(1)	58
禿山遺跡		第41図 S D - 1 出土土器(2)	59
第11図 遺構全体図	29	第42図 S D - 1 出土土器(3)	60
第12図 S H - 1	30	第43図 S H - 6・IV区包含層出土土器	61
第13図 S H - 2・S X - 1 ~ 4	31	第44図 S H - 7, II・III区間斜面出土土器	62
第14図 S H - 1・S D - 1・谷部	32	第45図 III区テラス土器群出土土器(1)	63
尼ヶ岡遺跡		第46図 III区テラス土器群出土土器(2)	64
第15図 遺構全体図	33	第47図 尼ヶ岡遺跡III区・塩壺東遺跡・高尾遺跡	
第16図 S H - 1	34	包含層出土土器	65
第17図 S H - 2	35	第48図 禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡・塩壺東遺跡	
第18図 S H - 3	37	出土石器	66
第19図 S H - 4・S D - 6	38	第49図 尼ヶ岡遺跡出土石製投弾	67
第20図 S D - 1	39	第50図 尼ヶ岡遺跡・塩壺東遺跡・高尾遺跡	
第21図 S D - 1 土器出土位置図	40	出土石器	68
第22図 S H - 6・S D - 2 ~ 4	41	第51図 出土土器の型式分類(1)	74
第23図 S H - 6・S D - 2 ~ 4 配置図	43	第52図 出土土器の型式分類(2)	75
第24図 S H - 6 北東部遺物出土状況	43	第53図 出土土器の型式分類(3)	76
第25図 S H - 7・掘削状遺構	44	第54図 出土土器の型式分類(4)	77
塩壺東遺跡		第55図 禿山・尼ヶ岡遺跡出土土器	
第26図 遺構全体図	45	編年試案(1)	81
高尾遺跡		第56図 禿山・尼ヶ岡遺跡出土土器	
第27図 調査区位置図(1/2,000)	46	編年試案(2)	83
第28図 調査区全体図	47	第57図 淡路地域の弥生後期土器	87
第29図 土層断面図	47	第58図 淡路地域の弥生後期～古墳前期土器	88

第59図 禿山・尼ヶ岡遺跡との併行関係 土器(1).....	92	第63図 北淡路高地性集落の土器(2).....	97
第60図 禿山・尼ヶ岡遺跡との併行関係 土器(2).....	93	第64図 北淡路高地性集落の土器(3).....	98
第61図 禿山・尼ヶ岡遺跡との併行関係 土器(3), 高尾遺跡類似資料.....	94	第65図 北淡路の弥生時代遺跡分布図.....	99
第62図 北淡路高地性集落の土器(1).....	96	第66図 津名郡における弥生時代の遺跡 (伊藤宏幸氏作成)	102

表 目 次

第1表 遺跡地名表	8
第2表 北淡路の弥生時代遺跡地名表	101

写 真 図 版 目 次

卷首図版 1 上 本州から淡路島を望む(北上空 から)平成 6年 3月 2日撮影	卷首図版 7 上 尼ヶ岡遺跡全景(西上空から) 平成 3年 7月 19日撮影
下 北淡路西部(南西上空から) 平成 5年 2月 25日撮影	下 尼ヶ岡遺跡近景(北上空から) 平成 3年 7月 19日撮影
卷首図版 2 上 北淡路東部(南西上空から) 平成 3年 12月 19日撮影	卷首図版 8 ①両遺跡遠景(南東から) ②両遺跡遠景(南西から) ③両遺跡遠景(南から) ④禿山遺跡調査前全景(南から) ⑤禿山遺跡調査前近景(北から) ⑥禿山遺跡調査前近景(北から) ⑦禿山遺跡調査前近景(北東から) ⑧禿山遺跡調査前近景(南東から)
下 淡路島北東端(北上空から) 平成 6年 3月 2日撮影	
卷首図版 3 上 北淡路北東端(南上空から) 平成 5年 1月 27日撮影	卷首図版 9 ①尼ヶ岡遺跡調査前全景(西から) ②尼ヶ岡遺跡調査前近景(南から) ③尼ヶ岡遺跡調査前近景(V区) (南西から)
下 淡路島北東端(南東上空から) 平成 5年 7月 22日撮影	
禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡	
卷首図版 4 遺跡周辺(国土地理院 空中写真) 昭和49年撮影	④尼ヶ岡遺跡調査中全景(南西から) ⑤禿山遺跡調査中近景(南西から) ⑥禿山遺跡機械掘削状況(東から) ⑦尼ヶ岡遺跡調査状況(S H-6) (北西から)
卷首図版 5 上 両遺跡遠景(東上空から) 平成 3年 7月 19日撮影	⑧尼ヶ岡遺跡調査状況(S H-6) (北から)
下 両遺跡全景(南上空から) 平成 3年 7月 19日撮影	
卷首図版 6 上 禿山遺跡全景(南上空から) 平成 3年 7月 19日撮影	
下 禿山遺跡全景(北上空から) 平成 3年 7月 19日撮影	

禿山遺跡

卷首図版10 上 SH-1 (西から)
下 谷部土器出土状況(西から)

尼ヶ岡遺跡

卷首図版11 上 SH-1 ~ 3 (南西から)
下 SH-4 (西から)

卷首図版12 上 SH-6 (南から)
下 SH-6 遺物出土状況(南から)

卷首図版13 上 SD-1 土器群検出状況
(南から)
下 Ⅲ区テラス土器群出土状況
(南から)

塙壹東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡

卷首図版14 遺跡周辺(国土地理院 空中写真)
昭和49年撮影

卷首図版15 ①塙壹東遺跡調査前全景
(北東から)
②塙壹東遺跡調査前全景(北西から)
③高尾遺跡調査前全景(東から)
④岩屋台遺跡調査後全景(東から)
⑤塙壹東遺跡全景(南西から)

高尾遺跡

卷首図版16 上 調査後全景(東から)
下 遠景(北東から)

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡

卷首図版17 上 禿山遺跡谷部出土土器
下 尼ヶ岡遺跡SD-1出土土器

卷首図版18 上 尼ヶ岡遺跡住居跡出土土器
下 尼ヶ岡遺跡Ⅲ区土器群出土土器

禿山遺跡

図版1 ① SH-1 (西から)
② SH-1 周溝内土器出土状況
(南西から)
③ SH-1 周溝内土器出土状況
(南西から)
④ SH-1 中央土壇断面(東から)
⑤ SH-1 調査状況(北から)

図版2 上 SX-1 (南から)

図版2 下 SX-2 (南東から)

図版3 上 SX-3 ~ 4, SH-2 (南から)
下 SH-2 (西から)

図版4 上 SD-1 (南から)
下 谷部全景(南から)

図版5 上 谷部土層断面(北半, 西から)
下 谷部土層断面(南半, 西から)

図版6 上 谷部土層断面(西部, 南から)
下 谷部土器出土状況(南から)

尼ヶ岡遺跡

図版7 上 SH-1 ~ 3 (南西から)
下 SH-1 ~ 3 (南から)

図版8 ① SH-1 北側周溝内土器出土状況
(南から)
② SH-2 土層断面(南から)
③ SH-3 東側周溝内土器出土状況
(西から)

④ SH-3 石礫出土状況(南西から)
⑤ SH-4 (西から)

図版9 上 SH-4 土層断面(南から)
下 SH-4 土層断面(東から)

図版10 ① SH-4 中央土壇土層断面(東から)
② SH-4 堀土土器出土状況(南から)
③ SH-4 堀土土器出土状況(南から)
④ SH-4 堀土土器出土状況(南から)
⑤ SH-4 周溝内石製投弾出土状況
(南から)

図版11 上 SD-1 土器群検出状況(西から)
下 SD-1 土器群検出状況(北から)

図版12 上 SD-1 土器群検出状況(東から)
下 SD-1 土器群西部(南から)

図版13 ① SD-1 土器群中央部(南から)
② SD-1 土器群細部
(中央部東寄り, 北から)
③ SD-1 土器群細部
(中央部西寄り, 北から)
④ SD-1 土器群細部
(西端部, 北から)

図版13 ⑥ 上器取り上げ作業状況(南から)

図版14 上 S H - 6 全景(南から)

下 S H - 6 炭・焼土検出状況(南から)

図版15 上 S H - 6 土層断面(東から)

下 S H - 6 土層断面(南東から)

図版16 上 S H - 6 東端遺物出土状況(西から)

下 S H - 6 北西部土器出土状況
(南東から)

図版17 ① S H - 6 北東部

炭・焼土検出状況(南西から)

② S H - 6 中央部

炭・焼土検出状況(南から)

③ S H - 6 南西部

紡錘車出土状況(東から)

④ S H - 6 西側周壁溝土層断面
(南から)

⑤ S H - 6 中央溝中央部土層断面
(南から)

⑥ S H - 6 中央溝南部土層断面
(南から)

⑦ S D - 2 ・ 3 上面土器出土状況
(南から)

⑧ S D - 4 土層断面(北東から)

図版18 上 S H - 7 (西から)

下 Ⅲ区テラス土器群出土状況
(下面, 南から)

図版19 ① S H - 7 土層断面(東から)

② S H - 7 埋土土器出土状況(西から)

③ Ⅲ区テラス土器群出土状況
(上面, 南から)

④ Ⅲ区テラス土器群出土状況
(中面, 南東から)

⑤ 挖削状遺構(南から)

塩壺東遺跡

図版20 上 調査後全景(南西から)

下 中央部(北から)

高尾遺跡

図版21 ① 調査後全景(東から)

② 近景(東北東から)

③ 調査前全景(東から)

④ 伐開後全景(東から)

⑤ 遺跡から南東方向を望む

図版22 ① 調査状況(隙間より北方明石海峡を
望む)

② 土器出土状況(東から)

③ 調査区東端平坦面(東から)

④ 調査区南壁土層断面(北東から)

岩屋台遺跡

⑤ 調査前遠景(東から)

⑥ 調査後遠景(東から)

⑦ 調査区全景(南東から)

⑧ 調査区南側壁土層断面(北から)

禿山遺跡

図版23 S H - 1 ・ S K - 1 ・ 谷部下層

出土土器

図版24 谷部下層・中層出土土器

図版25 谷部中層出土土器

図版26 谷部上層・谷肩部・旧河道ほか

出土土器

図版27 禿山遺跡 谷部旧河道・包含層出土土器,
高尾遺跡出土土器

尼ヶ岡遺跡

図版28 V・VI区包含層, S H - 4 出土土器

図版29 S D - 1 出土土器(1)

図版30 S D - 1 出土土器(2)

図版31 S D - 1 出土土器(3)・S H - 6 出土土器

図版32 S H - 6 ・ IV区包含層出土土器

図版33 S H - 7 , II・III区間斜面土器群,
Ⅲ区テラス土器群出土土器

図版34 Ⅲ区テラス土器群出土土器(2)

図版35 禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡・塩壺東遺跡
出土石器

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と体制

1. 調査にいたる経過

本州と四国を結ぶ本州四国連絡道路のうち、最も東側にある神戸～鳴門ルートは、神戸から鳴門間の約81kmであり、阪神間と四国を結ぶ最短距離の自動車道である。

このうち、淡路島中央部と四国を結ぶ津名一宮～鳴門間の約45kmについては、昭和62年に供用開始となったが、津名一宮～神戸間の建設計画については、明石海峡大橋とともに凍結となっていた。

しかし、景気の回復とともに工事再開が決定され、途中、平成7年1月17日の兵庫県南部地震も経験したが、平成10年4月5日の供用開始が決定されている。

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財については、淡路考古学研究会により昭和47～48年に分布調査が実施された。兵庫県教育委員会はその結果をもとに、本州四国連絡橋公団と協議を行い、現状保存できない箇所については調査を実施することとなり、津名一宮～鳴門間の埋蔵文化財発掘調査は、昭和53年～平成元年度に実施した。

一方、今回報告する、淡路島中部の津名一宮以北の淡路島陸上部における本線部分の埋蔵文化財については、当初の分布調査時点からかなり期間が経過しており、事業地付近に新たな遺跡の発見があったこと、および、埋蔵文化財保護の立場から、遺跡に対する認識の変化も生じており、当初の遺跡数および範囲に変化が生じている可能性が高かったため、改めて詳細に分布調査を実施することとなった。

分布調査は昭和62年3月に一宮町から実施し、昭和62年11月に北淡町と東浦町の一部、昭和63年4月には東浦町と淡路町について実施した。これらの分布調査の結果、一宮町・北淡町・東浦町・淡路町の4町にわたって99地点の遺跡および遺跡推定地が確認された。数多くの遺跡が存在することによる煩雑を避けるため、遺跡名は町単位で通し番号で整理することとし、一宮町については「津」、北淡町は「北」、東浦町は「東」、淡路町は「淡」とそれぞれ頭文字を冠し、番号をふった。

この結果をもとに、兵庫県教育委員会は本州四国連絡橋公団と協議を行い、その結果、確認調査を実施することとなった。調査は、兵庫県教育委員会により実施し、分布調査で判明していた遺跡のうち、石造品等を除いた分について、平成元年度および平成2年度に実施した。

2. 発掘調査の経過と体制

今回報告する禿山・尼ヶ岡・塙塙東・高尾・岩屋台の各遺跡は淡路島の北部、淡路町と東浦町に所在する。全面調査は塙塙東遺跡が平成4年度、その他は平成3年度に実施した。各遺跡の所在地と担当者は以下の通りであり、発掘調査はすべて本州四国連絡橋公団の委託により兵庫県教育委員会が実施し、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が現地調査を行った。

禿山遺跡 津名郡東浦町白山599ほか

全面調査(平成3年度)担当者 吉田 畏・深井明比古・岸本一宏・山本 誠・深江英憲・所崎明雄
尼ヶ岡遺跡 津名郡東浦町白山599ほか

全面調査(平成3年度)担当者 吉田 畏・深井明比古・岸本一宏・山本 誠・深江英憲・所崎明雄

塩壺東遺跡 津名郡淡路町岩屋3035ほか

全面調査(平成4年度)担当者 吉田 昇・三原慎吾

高尾遺跡 津名郡淡路町岩屋3117ほか

全面調査(平成3年度)担当者 吉田 昇・岸本一宏・所崎明雄

岩屋台遺跡 津名郡淡路町岩屋3441

全面調査(平成3年度)担当者 吉田 昇・岸本一宏・所崎明雄

以下、遺跡ごとに発掘調査の経過を述べる。

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡

禿山遺跡は分布調査段階では東-3地点と呼称し、平成元年度に確認調査を実施した。坪は5箇所設定し、掘削した結果、坪3で中世の遺物を含む黒色の粘質土の下位に土壇状の落ち込みを検出し、坪4からも遺構状の落ち込みを検出し、中世から近世の遺物が出土した。

尼ヶ岡遺跡は、東-4地点として9ヶ所の坪を設定して確認調査を実施した結果、柱穴・落ち込み等を検出し、同時に弥生時代後期の土器も出土し、同時期の集落跡であることが判明した。

確認調査の結果をうけて、全面調査は両遺跡を同時に実施することとなった。調査面積は禿山遺跡が2,114m²、尼ヶ岡遺跡が1,440m²である。調査は平成3年5月から開始し、担当者は埋蔵文化財調査事務所調査第1課の6名であったが、禿山遺跡は主として深井明比古・山本 誠・所崎明雄が、尼ヶ岡遺跡は吉田 昇・岸本一宏・深江英憲が主として調査にあたった。しかし、6月20日をもって深江が、山本は24日、深井も25日と3名が引き上げることとなり、残りの3名で約1ヶ月間調査しなければならなくなってしまった。したがって、以後の調査はやや精緻さを欠く調査とせざるを得なくなってしまった。禿山遺跡は所崎が主担当、尼ヶ岡遺跡は岸本が主担当となり、吉田は両遺跡を担当することとなったが、実態は吉田は経験が浅い所崎と禿山遺跡に常駐することがほとんどであった。このような状況のなかで、7月19日にはヘリコプターによる空中写真撮影を行い、7月30日、台風9号接近の強風にあおられながらの尼ヶ岡遺跡SD-1の実測と土器取り上げを終了し、埋蔵文化財調査事務所への引き上げを完了した。

塩壺東遺跡

本遺跡は平成2年度の確認調査開始段階では淡-7地点と呼称しており、12箇所の坪を設定して調査した結果、古墳時代前期土器を含む包含層が確認された。全面調査は平成4年度に実施し、面積は218m²である。調査は5月11日に開始し、5月30日に終了した。

高尾遺跡

高尾遺跡の確認調査は平成2年度に実施し、当時淡-14地点と呼称し、7ヶ所にトレンチを設定し調査した結果、東斜面に設定したトレンチで弥生時代の土器がまとまって出土した。遺構は認められなかったものの、2ヶ所の遺物包含層が確認されたため、258m²について全面調査が必要となった。

全面調査は平成3年9月下旬から実施したが、遺跡が山頂部に存在するため、重機・コンベアなどは使えずすべて人力で掘削し、10月21日に調査を終了した。

岩屋台遺跡

平成元年度に付近の確認調査を実施した際に、遺物包含層と思われる土層が認められ、周辺に古墳時代初頭の土器片が採集されたため、全面調査が必要と判断された。調査は平成3年8月21日から実施し、機械掘削の結果、遺物包含層と考えられた土層は盛土であり、深さ約4m掘削したが地山まで達せず、遺構・遺物ともに検出できる見込みがないとして、9月には調査を打ち切った。

第2節 整理作業の経過と体制

本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳに所収する遺跡は、前述のように、禿山遺跡、尼ヶ岡遺跡、塩壺東遺跡、高尾遺跡、岩屋台遺跡の5遺跡である。

各報告書作成およびそれに伴う出土品整理作業については、本州四国連絡橋公団と協議の結果、兵庫県教育委員会が受託し、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施することとなり、遺跡別の整理作業実施年度は以下の通りである。

禿山遺跡	平成4年度・平成5年度・平成8年度・平成9年度
尼ヶ岡遺跡	平成4年度・平成5年度・平成8年度・平成9年度
塩壺東遺跡	平成6年度～平成9年度
高尾遺跡	平成6年度～平成9年度
岩屋台遺跡	平成6年度～平成9年度

また、本報告Ⅳに収められた各遺跡についての出土品整理の実施内容は以下の通りである。

平成4年度(禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡)ネーミング、接合・補強

平成5年度(禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡)実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理

平成6年度(塩壺東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡)ネーミング

平成7年度(塩壺東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡)

接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理

平成8年度(禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡・塩壺東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡)造構図補正、トレース

平成9年度(禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡・塩壺東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡)レイアウト、報告書印刷

本四報告Ⅳ関係遺跡のうち、禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡については遺物量が多かったため、平成4年度から出土品整理作業を実施しており、平成5年度には写真撮影まで実施し、大半の作業は終了した。一方、塩壺東遺跡・高尾遺跡・岩屋台遺跡出土品については、禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡同様、発掘調査実施年度中に出土品の水洗い作業は終了していたものの、その後の作業は平成6年度以降に実施した。

それらの遺跡の出土品整理作業のうち、平成4・6年度はネーミング作業を実施した。ネーミング作業は出土した遺物1点ずつに番号を記入してゆく作業であり、当事務所では遺跡調査番号とそれに続く番号を記入するのであるが、遺跡調査番号は遺跡の名称および調査実施年月、調査担当者などを特定できるもので、台帳を作成し、対照できるようにしている。また、それに続く番号も、出土層位・出土遺構・出土年月日などを記入したカードを入れた袋ごとに、それらを記入した台帳を作成し、その際に付した番号であり、番号により出土層位などが特定できるものである。記入には基本的にポスターカラーを使って面相筆で細かい字で記入している。

平成4年度は禿山・尼ヶ岡遺跡の接合・補強、平成5年度は周遺跡の実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理、平成7年度は塩壺東・高尾・岩屋台遺跡の接合・補強、実測・拓本、復元、写真撮影、写真整理の各作業を実施した。接合・補強はバラバラの状態で出土した同じ個体の土器片を接着剤で接合し、次の実測作業に耐える強度にするため、一部分を石膏などで補強する作業である。実測・拓本は、出土遺物の形・大きさ・紋様・製作手法などの特徴を観察して、方眼紙などの上に図化し、記録する作業で、整理作業中で最も遺物を深く観察する重要な作業である。また、紋様などの特徴を拓本で表現することもある。復元作業は実測まで終了した遺物のなかから、完全な形に近いものや特徴的なものを選んで、

不足した部分を石膏などで補填して、元の状態に復元する作業であり、次の写真撮影の関係などから補填した部分を着色する。写真撮影は遺物を横位置や真上から撮影し、形・質・特徴などを視覚として伝達するための作業であり、当事務所では専門業者に委託して実施している。また、出来上がった写真を公開・活用するために、ネガとプリントの一枚ごとに番号を付けて撮影内容を記した台帳を作成するのが写真整理である。

平成8年度は禿山・尼ヶ岡・塙壺東・高尾・岩屋台の5遺跡について、遺構図補正、トレース作業を実施した。遺構図補正是、発掘調査時に作成した図面を整合性を持つように補正したり、現地で分制作成した図面をつなぎ合わせ、トレース下図を作成する作業であり、トレースは補正した遺構図や遺物実測図などを製図用ペンを使ってトレーシングペーパーに浴写する作業である。報告書の製版下に使用するため、仕上がり寸法に注意してペンの太さを使い分ける必要がある。

平成9年度は5遺跡のレイアウト作業を行った。報告書印刷・刊行を行った。レイアウト作業は報告書刊行にあたって、調査の内容などの文章原稿とトレースした図面や写真を見やすく配列したり、製版下を作成し、印刷する上での細かな指示を記入するなどの作業である。印刷は専門業者に発注し印刷・製本する。出来上がった報告書は、発掘調査の成果を紹介し、また、学術資料として活用するために、各図書館や各都道府県教育委員会や各市町教育委員会などに配付する。

出土品整理作業については、平成4年度～平成9年度の6年間実施し、各年度ごとに本州四国連絡橋公団と契約を行い、以下の体制で実施した。

出土品整理	主体(契 約)	兵庫県教育委員会		
出土品整理	担当(実施事務)	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所		
	担当者(作 業)	職 員	調査専門員	吉田 昇
			主 査	岸本 一宏
	嘱託員	主任技術員	伴 悅子	松本 路
			小川 美奈	森本 貴子
				尾崎比佐子
	企画技術員	岡崎 輝子	横山 麻子	
	図化技術員	木村 淑子	中田 明美	西野 淳子
		佐伯 純子	藏 幾子	鈴木まき子
		島村 順子	中西 瞳子	茅原加寿代
		萩原 啓美	水谷 幸子	木場 裕美
	日々雇用職員	名田 純子	三浦由紀子	森實 直子
		藤池 亜希	森田 泉	

第3節 遺跡の環境

瀬戸内海の東端に位置する淡路島は、大阪湾と播磨灘を分け、北は明石海峡により播磨、南西は鳴門海峡により阿波、南東は紀淡海峡により紀伊と境しており、南は太平洋と接している。

淡路島の地形は、北部と南部は山地、中央部は丘陵地、南部は平野に大きく区分できる。南端は600mの諭鶴羽山をピークにした山地、中央部は50~150m級の丘陵地、南部は南西部の三原平野と南東部の洲本平野であり、淡路中央部東側の志筑付近は僅かな平野である。北部の山地は津名郡淡路町・東浦町・北淡町の全域と津名町・宮町の一部に行政区画され、標高500m級の妙見山・常隆寺山などをピークに、150~250m級の丘陵がとりまっている。平野は僅かであるが、丘陵地に水田が広がっており、花崗岩風化土という軟質地質と地下水位の高さが耕地化を促したものと思われる。

淡路島北部の山地では花崗岩が広く存在し、それらをとりまくように大阪層群が認められる。また、岩屋累層と呼ばれる海成の持戸層群が北部山地などに分布している。以下、『兵庫の地質』をもとに北部淡路の地質を述べる。

淡路島北部の花崗岩類は、遜い岩類を捕獲岩体として保有しており、岩相、分布地域および貫入關係から3期11の岩体に区分されている。また、淡路北部の花崗岩類の中には、泥質および砂質の黒雲母片麻岩、片岩などの変成岩類が小規模な岩体として取り込まれていることがある。これらの変成岩の分布域が領家帯とよばれている。変成岩の多くの縞状チャートと泥質岩を原岩とし、珪線石-きん青石-白雲母-黒雲母-石英の組み合わせからなる。

また、淡路島にはモザイク状に大阪層群が分布しており、淡路島北部の大坂層群下部亜層群は富島累層と仮屋累層に区分されている。富島累層は、全体として疊層優勢なシルト・粘土層、砂層、疊層の互層からなる。疊層には中-大標準サイズの円錐-亜角疊層で、疊種は砂岩、酸性岩類(流紋岩、溶結凝灰岩など)、石英斑岩、チャート、花崗岩を主とし、他に少量の結晶片岩類や安山岩等がある。仮屋累層は、下位の富島累層の疊がちの地層の上に重なるシルト・粘土層と砂層の互層および砂礫層からなり、上部では砂層あるいは疊層が発達している。仮屋累層下部は粘土・砂層が主体である。

岩屋累層は淡路島北部の脊梁山地上や東西両海岸側の断層沿いに点々と分布しており、主として泥岩・砂岩および疊岩から構成され、上位は海成の泥岩および砂岩である。

北部淡路の遺跡のうち、旧石器時代末-縄文時代初頭のまるやま遺跡は本州四国連絡道路および国道28号線岩屋バイパス建設に伴って発掘調査が実施され、本州四国連絡道路に伴う調査^[1]では、有舌尖頭器などの石器が多く出土しており、国道バイパスに伴う調査^[2]では結晶片岩製の垂飾が出土している。また、有舌尖頭器は岩屋の丘陵上や舟木遺跡^[3]などでも出土している。

縄文時代の遺跡としては、北端海岸の低地には、前期末・中期初頭・後期後半-晩期の土器が出土した淡路町岩屋のナキリ遺跡、後・晩期の土器が採集された給田遺跡があり、丘陵上には淡路町岩屋の砂連尾遺跡や岡山(砂連尾)遺跡がある。岡山遺跡では、宅地造成に伴う平成5年度の発掘調査で、土壤と後期後半の縄文土器が出土しており、隣の砂連尾遺跡でも平成7年度の調査で土壤と縄文時代後期後半の上器と石器が出土している。なお、縄文時代の岡山遺跡については、砂連尾遺跡と呼称すべきと考えられている。晩期土器は海岸の大谷川遺跡でも出土している。西海岸では、標高13mの台地上の育波堂の前遺跡が中学校校地造成の際に発見され、縄文時代早期-弥生時代後期の土器が出土している。

縄文時代の遺跡で特筆すべきは、本州四国連絡道路建設に伴って発掘調査を実施した佃遺跡^[4]である。

土器では縄文時代前期末・中期・後期・晩期、弥生時代前期～後期、古墳時代前期、奈良時代～中世のものが出土しているが、遺跡の中心をなすのは縄文時代後期～晩期である。竪穴住居跡・貯蔵穴・土器棺・土壙・溝などの遺構が検出され、注口土器をはじめ多量の土器と石棒・土偶・耳栓等も出土している。

弥生時代の淡路北部では、先述の育波堂の前遺跡や東浦町今出川遺跡で前期の土器が少量採集されているにすぎず、中期前半でも同様の状況である。しかし、中期末から津名町城で遺跡が増加しはじめ、後期にいたっては100遺跡以上と爆発的に増大する。しかもそれらは低地に存在するものは数例にすぎず、丘陵上に存在する高地性集落が大半である。これらの遺跡は主として探査品により知られていた⁽⁵⁾のであるが、近年、大規模開発に伴い遺跡の発掘調査が実施され、本報告所収遺跡をはじめ、多くの遺跡の状況が明らかになってきている。

北端の淡路町では、高尾遺跡が標高129mの山頂に存在し、遺構は検出されなかったが、後期前半の土器が出土した。淡路町北西部の標高45～65mの丘陵上の塙壠西遺跡は本州四国連絡道路建設に伴って発掘調査が実施され、後期後半の土器とともに住居跡が検出されている⁽⁶⁾。塙壠東遺跡では遺構は検出されなかっただが、後期の土器が出土している。塙壠遺跡では、国道バイパス建設に伴う調査⁽⁷⁾で、弥生時代後期の住居跡が検出され、活断層による住居床面のずれも検出されている。塙壠遺跡・塙壠西遺跡・塙壠東遺跡は近接して存在しており、まるやま遺跡も含めて一連の遺跡であると考えられる。なお、東浦町北端に近い楠木下林遺跡では、後期前半の土壙と後期末の住居跡が調査⁽⁸⁾された。

津名山地閣の北淡町域では、広大な範囲の舟木遺跡⁽⁹⁾が標高160～200mに存在し、圓場整備などにより発掘調査が実施され、後期前半～庄内併行期の住居跡・土壙・溝などが検出され、環濠状の溝も検出されている。舟木遺跡の南西には久野々遺跡、おぎわら遺跡、金坪遺跡、雨堤遺跡などがあり、パイロット事業により発掘調査されたおぎわら遺跡⁽¹⁰⁾では後期中頃、圓場整備等により調査された久野々遺跡⁽¹¹⁾では後期後半の住居跡などが検出された。これらの遺跡も一連と考えられ、標高250～300mに存在する。

津名山地閣の東浦町域では、今回報告の禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡の南側谷部に、昭和55年に発掘調査が実施された白山真土遺跡⁽¹²⁾がある。住居跡の一部が調査され、後期前半と考えられる土器が出土している。

これら以外にも発掘調査により土器が出土した遺跡は存在するが、明確な遺構は検出されていない。

古墳時代の集落跡では、初頭には高地性集落が一部残存していたようであるが、急に姿を消し、低地では製塙を主とした遺跡が出現する。北淡町の貴船神社遺跡では石窯・製塙炉が多数調査⁽¹³⁾され、東浦町久留麻の引野遺跡では古墳時代前期の製塙土器が多く出土⁽¹⁴⁾した。また、北淡町浜田遺跡では古墳時代後期～奈良時代の製塙土器が多く出土⁽¹⁵⁾している。淡路島北部では大規模な集落遺跡は存在しないようである。これを裏付けるかのように古墳もほとんど認められず、淡路町岩屋の石の寝屋古墳2基や東浦町の丸山古墳がわずかに認められるにすぎず、前・中期古墳は存在しない。

奈良～平安時代の遺跡も佃遺跡以外には調査例が少なく、東浦町の藤ノ木遺跡⁽¹⁶⁾が平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡で、佃遺跡と同時期であり、中世末の北淡町井ノ谷遺跡⁽¹⁷⁾や外町遺跡⁽¹⁸⁾で掘立柱建物跡が検出されている程度である。なお、池田輝政築城の岩屋城跡⁽¹⁹⁾の調査も一部実施されている。

〔参考文献〕 兵庫県土木地質図編纂委員会編『兵庫の地質』 兵庫県土木部 1996年

兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 考古資料編』 兵庫県 1992年

村川行弘編『兵庫県の考古学』 地域考古学叢書 吉川弘文館 1996年

石野博信著『縄文時代の兵庫』 兵庫考古研究会 1979年

東浦町教育委員会『東浦町遺跡分布図』 1995年



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡(1/50,000)

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	番号	遺跡名	所在地	種類	時代
1	まないた山遺跡	淡路町岩屋	生産地		61	今出川遺跡	東浦町久留麻	集落跡	弥生
2	池の谷遺跡	淡路町岩屋	散布地	弥生	62	久留麻上居館	東浦町久留麻	城跡	中後
3	大谷川遺跡	淡路町岩屋	集落跡	縄文	63	大歳遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世
4	石の森塚1号墳	淡路町岩屋	古墳	古墳	64	水木遺跡	東浦町久留麻	集落跡	弥生(後期)
5	石の森塚2号墳	淡路町岩屋	古墳	古墳	65	大坂遺跡	東浦町久留麻	集落跡	弥生(後期)
6	サヤブ遺跡	淡路町岩屋	散布地	弥生	66	行免形遺跡	東浦町久留麻	集落跡	弥生(後期)
7	土穴遺跡	淡路町岩屋	散布地	弥生	67	千木遺跡	東浦町久留麻	集落跡	弥生(後期)
8	方谷遺跡	淡路町岩屋	散布地	中世	68	岡田館	東浦町内	城館跡	中世
9	船田遺跡	淡路町岩屋	集落跡	縄文	69	河内遺跡	東浦町内	散布地	弥生(後期)
10	ナキリ遺跡	淡路町岩屋	集落跡	縄文	70	百田遺跡	東浦町内	散布地	弥生
11	砂利尾遺跡	淡路町岩屋	集落跡	縄文	71	白山真土遺跡	東浦町白山	集落跡	弥生、中世
12	同山遺跡	淡路町岩屋	散布地	弥生	72	白山同遺跡	東浦町白山	散布地	弥生
13	巖層台遺跡	淡路町岩屋	散布地		73	尼ヶ岡遺跡	東浦町白山	集落跡	弥生(後期)
14	高尾尾遺跡	淡路町岩屋	集落跡	弥生(後期)	74	千山遺跡	東浦町白山	集落跡	弥生(後期)
15	岩屋城跡	淡路町岩屋	城跡	後世	75	黒瀬遺跡	東浦町谷	散布地	中世
16	まるやま遺跡	淡路町岩屋	集落跡	縄文	76	谷瀬遺跡	東浦町谷	散布地	中世
17	延喜西遺跡	淡路町岩屋	集落跡	弥生(後期)	77	城ノ腰城	東浦町谷	城館跡	中世
18	塙塙東遺跡	淡路町岩屋	散布地	弥生(後期)	78	下田遺跡	東浦町下田	散布地	中世
19	崖寺遺跡	淡路町岩屋	集落跡	弥生(後期)	79	津田遺跡	東浦町金口	散布地	中世
20	田代遺跡	淡路町岩屋	散布地		80	上ノ岡遺跡	北淡町仁井	散布地	弥生(後期)
21	田の代南遺跡	淡路町岩屋	散布地	弥生	81	仁井遺跡	北淡町仁井	城館跡	中世
22	クロンボ遺跡	淡路町岩屋	散布地	弥生	82	井ノ谷遺跡	北淡町小田	集落跡	中世
23	楠本下林遺跡	東浦町楠本	集落跡	縄文	83	小田遺跡	北淡町小田	城館跡	中世
24	片山遺跡	東浦町楠本	集落跡	中世	84	寺監遺跡	北淡町小田	集落跡	弥生、中世
25	丸山古墳	東浦町楠本	古墳	古墳	85	尾花遺跡	北淡町小田	散布地	弥生(後期)
26	竹の下遺跡	東浦町楠本	散布地	奈良	86	鳶ヶ葉遺跡	北淡町仁井	散布地	中世
27	南所遺跡	東浦町楠本	散布地	弥生	87	舟木遺跡	北淡町舟木	集落跡	弥生(後期)
28	深山遺跡	東浦町楠本	散布地	弥生	88	北沢遺跡	北淡町舟木	散布地	弥生
29	岩口遺跡	東浦町楠本	散布地	弥生	89	石出北遺跡	北淡町石出	散布地	弥生、中世
30	楠本塙入遺跡	北浦町楠本	製塙跡	古墳	90	石田南遺跡	北淡町石田	散布地	中世
31	飛谷遺跡	東浦町楠本	散布地	弥生	91	角田遺跡	北淡町石田	散布地	奈良
32	平林遺跡	東浦町楠本	散布地	弥生	92	机遺跡	北淡町富島	散布地	弥生
33	山川遺跡	東浦町楠本	散布地	中世	93	机浜遺跡	北淡町富島	散布地	弥生
34	荪ノ下遺跡	東浦町浦	散布地	中世	94	中井遺跡	北淡町茂野南	散布地	奈良
35	井上遺跡	東浦町井上	製塙跡	古墳	95	富島阿那遺跡	北淡町富島	散布地	中世
36	糸ノ木遺跡	東浦町浦	集落跡	中世	96	富嶋B遺跡	北淡町富島	散布地	中世
37	平松遺跡	東浦町浦	集落跡	中世	97	富嶋西遺跡	北淡町富島	散布地	弥生
38	猪ノ尻遺跡	東浦町浦	集落跡	平安	98	高嶋A遺跡	北淡町富島	散布地	中世
39	平松遺跡	東浦町浦	製塙跡	古墳	99	庵ノ嶺遺跡	北淡町野島	散布地	中世
40	堂野遺跡	東浦町浦	製塙跡	古墳	100	矢ヶ崎遺跡	北淡町野島	散布地	奈良
41	古茂尻遺跡	東浦町浦	散布地	古墳、中世	101	蓼原城跡	北淡町野島	城跡	中世
42	小浦遺跡	東浦町浦	散布地	奈良	102	野嶋遺跡	北淡町野島	散布地	中世
43	白岡遺跡	東浦町浦	散布地	弥生	103	官ノ前遺跡	北淡町野島	散布地	中世
44	但遺跡	東浦町浦	集落跡	中世	104	野鳥小代呂遺跡	北淡町野島	散布地	中世
45	向殿館	東浦町浦	城館跡	中世	105	小代弓遺跡	北淡町野島	生垣地	古墳、中世
46	小田遺跡	東浦町浦	集落跡	中世	106	大石遺跡	北淡町野島	散布地	中世
47	正井遺跡	東浦町浦	城館跡	中世	107	動谷遺跡	北淡町野島	散布地	中世
48	岸田遺跡	東浦町浦	散布地	弥生	108	野鳥森遺跡	北淡町野島	散布地	中世
49	奥遺跡	東浦町浦	散布地	奈良	109	大持遺跡	北淡町野島	散布地	中世
50	菅松原遺跡	東浦町白山	中世	110	廣水遺跡	北淡町野島	散布地	中世	
51	塙浜遺跡	東浦町白山	散布地	中世	111	大川遺跡	北淡町野島	散布地	中世
52	宮ノ本遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世	112	寅船神社遺跡	北淡町野島	生産地	弥生～奈良
53	砂田遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世	113	平林大坪遺跡	北淡町野島	散布地	中世
54	一本松遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世	114	向遺跡	北淡町野島	散布地	縄文、中世
55	下坪遺跡	東浦町久留麻	集落跡	古墳	115	北畠遺跡	北淡町野島	散布地	中世
56	内町遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世	116	ヶヶ田遺跡	北淡町野島	散布地	中世
57	並松遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世	117	乾取遺跡	北淡町野島	散布地	中世
58	大田遺跡	東浦町久留麻	集落跡	弥生、平安地	118	雄崎川遺跡	北淡町野島	散布地	弥生、中世
59	引野遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世	119	中原遺跡	北淡町野島	散布地	弥生
60	城原遺跡	東浦町久留麻	散布地	中世	120	小磯遺跡	北淡町野島	散布地	中世

第1表 遺跡地名表

第2章 遺跡の調査

第1節 禿山遺跡

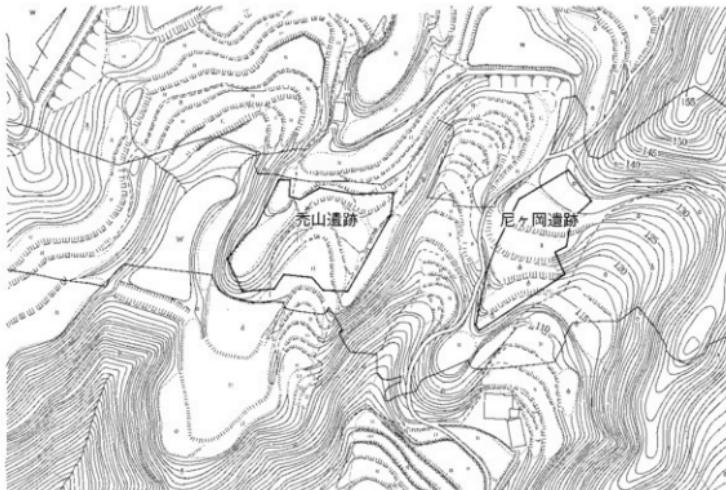
1. 位置と環境

禿山遺跡は津名郡東浦町白山に所在し、現在の海岸線からは約2.5km西側に入った位置にある。周囲の地形は、白山から河内にかけての盆地状地形となっており、中央部には浦川が流れている。盆地の標高は約50mであるが、遺跡が立地するのは盆地に向かって北から南に延びる小尾根の突端付近にあり、標高は120m前後である。盆地底との比高差は約70mである。盆地の東側は50~90m級の丘陵があり、西側は標高150m以上の山地である。遺跡からは南東から東にかけての眺望が良く、天気の良い日には大阪府泉州地域も視界に入る。しかし、東海岸からは手前の丘陵に遮られて遺跡は見えず、奥まった所にあるため、海からは非常に見えにくくものと思われる。

禿山遺跡の東隣、最短距離で約40mの小尾根上には尼ヶ岡遺跡が所在する。両遺跡の間は比高差約10mの谷となっており、谷水田が經營されている。この谷には道路があり、これを利用すれば津名丘陵の最も低い位置を通って淡路島西側の海岸に出ることができる。

調査前の遺跡の地目は大半が棚田状の水田で、谷上部の溜池から水が供給できるようになっていた。

調査対象地区となったのは、小尾根がさらに二つに分かれる部分であり、中央南側がもっとも低い水田であった。調査の結果から推定される遺跡の範囲は、北側へはほぼ確実に拡がることが判明したが、南側にも延びる可能性がある。東および西側については、谷で区切られるため、遺跡は拡がらないものと考えられる。



第2図 禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡 調査区の位置(1/2,000)

2. 調査の方法

発掘調査は、表土から包含層上面までバックホーで掘削を行い、包含層が認められない箇所では、遺構直上まで機械で掘削した。山林部分については、伐採を実施したのち掘削を行った。

調査区中央部南端のもっとも低い部分では、深い谷状地形となっており、遺物が全く認められなかつたため、調査対象地区から除外し、掘削土置き場とした。排水管を埋設し、水路改良を行った。また、板柵を設置し、土砂や濁水の流出を防いだ。

遺物包含層以下については入力で掘削したが、出土遺物については、調査面積が $2,114\text{m}^2$ と広いため、第3図のように、調査区内の11面の棚田に1区から11区までの地区割りを設定して取り上げを行った。遺構精査や遺構掘削も入力で行った。

1区では、耕土・床上を掘削した段階で黄灰色の砂質土層を検出し、その直下の層が青灰色に変色していたため、池を埋め立てた田であったことが判明し、遺物も出土しなかつた。このため、機械掘削は黄灰色の砂質土層までにとどめ、工事検査を受けたのち、1区を排水置き場とした。

3. 調査の結果

遺構(第11図)

前述のように、1区では遺構・遺物ともに検出しなかつたが、2区では方形状の遺構の一角2基(S H-2, S X-4)と、一辺1基(S X-3)が検出された。しかし、いずれも柱穴は検出されていない。

4区では円形住居跡(S H-1)が検出された。壁はほとんど残っていなかつた。この西側、4区中央部の谷中央部では弥生時代後期の土器が多く検出された。

7区ではやや歪な方形状の遺構(S X-2)が検出され、土器も出土している。

9区でも同様の遺構(S X-1)が検出されているが、柱穴はなく遺構の大半が残っていない。

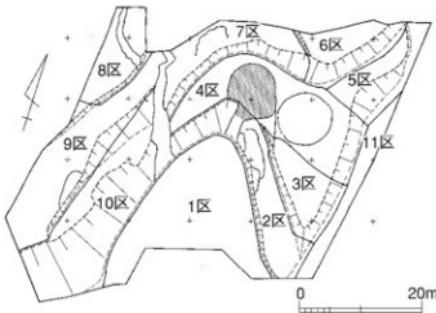
8区では溝(S D-1)が検出されている。

その他では、3・5・6・8区で僅かにピットを検出したにすぎない。

以下、検出遺構について詳述する。

S H-1(第12図)

直径8.8mの円形住居跡で、幅約30cmの周壁溝がめぐっているが、南西部では長さ約3mにわたって途切れている。これは後世の削平などによるものと思われ、住居の壁は最も高く残っている北側で約15cmしかない。床面はほぼ全体に遺存しており、柱穴が17と中央土壇が検出された。深くて大きめの柱穴をひろってゆくと、主柱穴は六角形を呈することがわかり、中央ラインで左右相似形に近い。また、周壁溝内側上縁から柱芯まで約90cmで、周壁溝に沿うかたちになっている。柱穴の間隔は2.4~3.6mで、3m程度が最も多い。残りの11の柱穴のうち、南端主柱穴脇の穴は深さ3cm程度で、柱穴としては



第3図 穴山遺跡 調査区割り設定図

成り立たないと思われる。また、南端周壁溝ぎわの2本の柱穴は入り口の施設に伴うものと考えられる。これらの柱穴と北端主柱穴隣のものを除外すると、南端部以外では、六角形の主柱穴列を取り囲むように同心円状に並んでいることが判明する。これらは周壁溝から約40cmの間隔で住居跡の形に沿っている。この列は入り口を除外すると、七角形になるが、入り口東側に柱があったものと仮定すると、内側の主柱穴を完全に囲むようになる。

内側柱列と外側柱列のとらえ方では2通りが考えられる。1つは、それぞれが別のものと考え、立て替えたものとする考え方である。もう一つは内側と外側が関連して屋根を構成していたとする考え方である。後者の場合、屋根の角度が途中で変わる可能性が高い。前者の考え方の場合は、建て替えの痕跡を探し出す必要がある。しかし、周壁溝が1条であることと入り口の柱穴が1ヶ所分しかないことおよび、外側柱列が周壁溝から近すぎる点から、否定的にならざるをえない。住居規模拡大あるいは縮小の場合、現周壁溝の外側に周壁溝が存在すべきであるが、それが認められない。これらの理由から、後者の考え方で捉えておきたい。ただし、具体的な上屋構造を考えるには至っていない。

中央土塁は周囲が浅く中央が深い、二段の振り込みとなっている。外側で1.6m×1.3mの楕円形、中央部は約60cmの円形である。中央部の下層土塁は黒褐色で施肥混じりであった。

西部周壁溝内で鉢、北東部で鉢2点などが出土(第14図)した。

なお、住居跡埋土中から土製紡錘車と製塙土器と思われる脚部などが出土している。

S X - 1 (第13図)

9区で検出したもので、形状としては段状遺構に近い。全景はうかがえず、長さ7.1m、最大幅2.0mで、三角形状に遺存していた。深さは最深部で30cm、壁下には浅い溝状のくぼみがあり、幅32cm、長さ5.2mにわたって検出した。遺構の底は緩傾斜となっていることと、溝が浅いこと、柱穴が認められることなどから竪穴住居跡と判断するには躊躇するものである。段状遺構の範疇でとらえられるものと思われる。

なお、肩部より小型鉢が出土している。

S X - 2 (第13図)

7区の斜面、谷部北西で検出したもので、底が平坦で、水平に近く、周壁溝も認められることから、竪穴住居跡の可能性が考えられ、谷部土器群の供給源の可能性もある。しかし、柱穴が検出されなかつたことから、竪穴住居跡と判断するには至っていない。

平面「コ」字形を呈し、大半は流失している。遺存する長辺は約5.0m、短辺は約2.4mである。深さは約36cmで、壁下の溝は6cmと浅く、幅は約40cmである。遺構埋土から壺・甌などの破片が出土した。

また、この遺構から南方向にのびる幅40cm程度の溝が存在し、一連のものと考えられるが、性格は不明である。

S X - 3 (第13図)

S H - 1 南西側斜面の2区で検出した段状遺構状のもので、S X - 4・S H - 2と重複している。

本遺構は一辺の全体が窺えるが、遺存幅は少ない。遺構の規模は一辺約8.4mで、壁は遺存していないが、溝を巡らせていることにより規模が判断できる。溝の幅は約35cm、深さ8cmである。底面は周囲の斜面と同様の傾斜であるため、竪穴住居跡とは考えられない。

S X - 4 (第13図)

S X - 3 の北西斜面下側に存在する、段状遺構状のものであるが、規模は小さく、長辺約3.2m、短

辺は約80cmである。壁は高さ約16cmとわずかで、壁下に沿って幅28cm、深さ3cmの溝が巡っている。底面は周囲の斜面と同様の径斜面となっている。遺物は出土していない。

S H - 2 (第13図)

S X - 3 の南西側に存在する、段状遺構状のものである。三角形状に遺存し、壁は高さ39cmで、この遺構のなかでは最も深い。壁に沿って「L」字形に溝があり、幅20cm、深さ4cmである。溝の長辺は長さ3.8mで、短辺は1.4m遺存している。調査時点では、竪穴住居跡と考え、S Hという呼称を用いたが、底面が周囲の径斜面よりも緩いが、傾斜していることと、柱穴が認められないことから、竪穴住居跡の可能性は低いと判断される。遺物は弥生時代後期の土器片が出土している。

S D - 1 (第14図)

調査区内でもっとも高い位置にある、8区で検出した溝状遺構である。溝は尾根筋から4区の谷方向へ回り込むように延びているが、北側調査区外へも続いている。溝幅は約0.8~1.4m、深さ約50cmで、約10mにわたって検出した。溝の断面形状は「V」字形に近く、溝幅に対する深さも深いものである。

溝埋土から弥生時代後期土器片が出土したこと、4区谷部の土器出土状況や出土量からみて、遺跡はさらに北側の斜面上側に拡がっていることが判断される。

谷部(第14図)

調査区中央部北寄りの最も標高が低い部分—谷部には南北約9m、東西約8m、深さ約0.4mの溝入部があり、そこから斜面下方へは幅約2mの溝で続いている。

この谷部の埋土中から多量の弥生時代後期土器が検出された。それらは出土層位から、大きく上層・中層・下層に分けることができる。上層出土土器は第14図第8層に含まれていたものを中心とし、その上下からも土器が少量出土しており、それらも含んでいる。中層では最も多くの土器が出土し、土器群とも称するものがこれにあたる。層位的には第13層の上半部にあたり、その上下から出土したものも若干含む。第17層から出土したものを下層出土土器とし、これも量的には多い。ここでも上下から出土したものも若干混入しており、第15・19層出土のものも含んでいる。なお、谷肩部や周辺からも土器が出土している。

上・中・下層と呼称する土層はそれぞれ間層を挟んでおり、若干の混入は認められるものの、出土土器は下層→中層→上層と型式変化が認められる。また、壺・甕・高杯・器台・鉢などほぼ全ての器種が出土しているため、弥生後期土器編年の細分が可能であると考えられた。したがって、第3章で行ったように、下層出土土器をⅠ期、中層出土土器をⅡ期、上層出土土器をⅢ期として、後述する尼ヶ岡遺跡の一括資料と考えられるものも援用して、禿山・尼ヶ岡両遺跡の土器編年を行った。その結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期までを、禿山・尼ヶ岡Ⅰ期～禿山・尼ヶ岡Ⅳ期の5期に分けることができた。以下、本文で示す時期および器種分類については、第3章第2節によるものである。また、土器の技法・法量・色調などは土器観察表によられたい。

遺物

S H - 1 出土土器(第30図1~8)

周壁溝から鉢2Aが2点(1・2)と鉢1が1点(3)出土している。鉢2Aは体部がやや内湾するが浅く、外面は叩き仕上げ、内面には刷毛が認められる。鉢1もやや内湾する体部で、外面は叩き仕上げである。中央土壌から出土した短頸壺口縁部(5)は、外上方にやや長くのびるものである。埋土出土の器台D(6)は、いわゆる「淡路型器台」の範疇に含まれるものと思われる。鉢2B(4)は小形のものである。(7)の脚台は製塙土器の可能性がある。また、土製紡錘車も1点出土している。

出土土器の特徴から、禿山・尼ヶ岡Ⅲ期に属するものと思われる。

S X - 1 出土土器(第30図9・10)

やや大形の脚部をもつ器台(9)と鉢2Bのやや異なった形態のもの(10)がある。

S X - 2 出土土器(第30図11~14)

広口壺B d(11)の口縁部は下方に拡張しており、断面三角形を呈する。端面には上下に退化四線を各1条施し、その間に複合鋸歯紋と竹管円形浮紋を施している。器台A d(12)も端面上下に退化四線を巡らしているようであり、上下に拡張している。(13・14)は壺の底部と思われ、外面は叩き仕上げである。

壺や器台口縁部の特徴から、禿山・尼ヶ岡Ⅲ期の可能性が高い。

S D - 1 出土土器(第30図15)

壺と思われる底部が1点のみである。外面は叩き仕上げ。

谷部下層出土土器(第31~33図16~48)

禿山・尼ヶ岡Ⅰ期の基準資料となった土器群である。表面の遺存状況が悪く、調整不明なものが多い。広口壺はA b, B a, B b, B dがある。広口壺A b・B a(16・17・18)は中層出土のものに比べて口縁部が長い。また、球形に近い体部であるが、体部最大径は上位にある。口縁端部を上下に拡張するB b(21~24)は、屈曲部から端部までが長い。端面には波状紋を施すものや退化四線を施すもの、それに竹管円形浮紋を加えるものがある。(24)では、大きな浮文を貼り付けたため、端部が波状を呈している。端部を下方にのみ拡張するB d(19・20)も屈曲部から口縁端部までが長く、波状紋に竹管円形浮紋を加えるものと退化四線のみで端部を飾るものがある。

壺(25・26)は内面が縱方向の刷毛もしくは若干斜め方向である。外面は叩きのち縱方向の刷毛を体部の大半に密に施し、体部最大径は上位にある。口縁部の破片(27~31)では、外面叩きのみで内面横刷毛、口縁部が長いもの(29)も認められ、中層に近いもの(29~31)も存在している。下層の壺1 A・Bでは、口縁部はあまり長く伸びず、端部は面をなすものが多い。口縁端面に叩き原体による刻み目状の紋様?を施すもの(25・29・30)が認められる。なお、(28)は端部付近でやや屈折した口縁部となっている。大型の壺は1点(33)図示した。口縁部は体部から屈折して短くのび、体部上半は丸い。

鉢は1 Bが1点(32)出土している。体部は丸みを持っており、口縁部は長くのび、内面の調整は箇所で、丁寧なつくりとなっている。

高杯A a(42・43)は杯部のみであるが、口縁部は短く、外反度は少ない。(42)はほぼ直立したのち若干外反する。外面上下に退化四線状のものが認められる。内外面とも丁寧な箇所磨き調整である。椀形の高杯C(44)は杯部に丸みがあり、外面口縁下に退化四線を4条巡らす。

器台A b(45)は口縁端部上下に退化四線を各1条巡らし、その間に波状紋で加飾する。中層出土の壺や器台に特徴的な装飾である。大型の器台脚部と中型の器台脚部があり、中形では据はあまり聞かない。そのほかに、転用土製紡錘車が1点(48)出土している。

谷部中層出土土器(第33~36図49~77)

Ⅱ期の基準資料となった土器群である。これらも表面の遺存状況が悪く、調整不明なものが多い。

広口壺は口縁部の破片のみであるが、(50)では、下層出土の壺にくらべて口縁部が短くなっている。(52)の紋様は中層出土の器台にも認められる。(49)の細頸壺は体部扁球形で、口縁部はや外反する。

壺は、1 A, 1 Bとともに口縁部が長くのび、外反している。内面は横あるいは横に近い斜め方向の刷毛で、外面上半は叩き仕上げとなっている。端部に面を持ち、端部に刻み目状叩きを施すものもある。

鉢1 C (58)は、口径に対する器高はやや深いが、体部が直線的になっている。内面は刷毛、外面は叩きのち刷毛調整であり、下層出土のものと調整が異なっている。また、(61)のように受け口状の口縁部で、外面に退化凹線を施すものもある。(63)は口縁部を下方に拡張し、波状紋を描き、下端に刻み目、肩部に刺突文を施す。形態的には特異である。大形の鉢(64)も体部は直線的で、外面は叩きである。

高杯は小型のA bが1点(65)あり、口縁部は長くのび、脚部は大きく外反する。

器台は有段口縁のものが(66・67)の2点認められる。口縁部では下方に拡張するもの(69)の垂下部は断面三角形に近い。端面の紋様は、(68・69)ともに同じで、(68)は円形浮文を加飾する。高杯や器台の脚部(70~73)では、下層出土のものより裾が大きく開く。

底部(74~77)では、外面下半部に刷毛を施すものが多い。

谷部上層出土土器(第36図78~95)

Ⅲ期の基準資料となった土器群である。これらも表面の遺存状況が悪く、調整不明なものが多い。

(78)の縦頸壺は型式的にはもっと古いもので、混入と思われる。壺では広口壺と二重口縁壺が存在する。中層のような退化四線と波状紋の組み合わせは認められない。

壺1 (83)は体部最大径が中央部にあり、最大径部分が長い。外面は叩き仕上げ、内面はナデ仕上げである。壺2 (84・85)も壺1に似た形態であるが、内面刷毛である点や、体部の特徴は古い傾向を残す。

鉢(86・87)は口径に対する器高が浅くなり、口縁部も長くのびて外反する。器壁も薄い。

(88)の器台Bは粗製の「淡路型器台」であろう。器台A c (89)の口縁部は中層と同じものである。

谷部その他出土土器(第37図96~117)

谷肩部から出土したものには、(96~108)の壺・壺・器台・鉢・底部がある。壺・器台・鉢では、Ⅱ~Ⅲ期の特徴を示すものが多い。

肩部が不明のもの(109~111)には、(109)の浅い鉢1 Aがあり、口縁部外面に刺突文を加えた、大形の「S」字状浮文を貼り付けた広口壺B bなどがある。

谷部南側の旧河道出土土器(112~117)には中層と同じ紋様の広口壺(112)や器台(113)などがある。

包含層出土土器(第38図118~134)

(118・128・129)の器台は口縁端面に退化凹線と複合鋸歯紋を描くが、谷部出土の良好な類例が認められないため、この紋様の所属時期は不明である。(123)の壺はⅡ期に近いⅠ期と思われる。(119)の二重口縁壺はもも所属時期が不明である。

石器(第48図S1・S2・S5~S8)

削器(S 1)は横長削片素材で、削片末端部に二次調整を施している。石鏨(S 2)は平基で、長さ2cmである。いずれもサスカイト製である。叩き石3点(S 5~S 7)は砂岩製で、両端部に叩き潰れが認められる。砥石(S 8)も砂岩製で、小口面以外をすべて使用している。

4. 小結

今回の禿山遺跡の全面調査の結果、性格が明確な造構は円形住居跡1棟のみであったが、谷部の堆積土中に含まれていた土器から、編年細分を考えることができた。それによれば、禿山遺跡は弥生時代後期後半には集落が営まれるようになり、後期末には廃絶しているものと思われる。なお、SH-1出土土器はⅢ期に属するものであり、谷部出土土器のⅠ・Ⅱ期の供給源である住居等が、SX-2も含め、北側調査区外に存在していることが推定される。

第2節 尼ヶ岡遺跡

1. 位置と環境

尼ヶ岡遺跡は禿山遺跡の東約40mの小尾根上に所在する。この尾根の東側は谷となっており、旧谷田が存在していたようであるが、調査時点では畠および果樹園となっていた。周辺の地形等については第1節禿山遺跡で記述した通りである。

尼ヶ岡遺跡の調査前の状況(第2図)は、みかん畠と水田で、調査対象地区となったのは、6段の棚畠状になった部分で、最上段は雜木林であった。調査後の標高(第15図)は最上段が約132mで、上から2段目が約127.5m、3段目は約124m、4段目は約120m、5段目が約116m、最下段の6段目が約114mであり、最上段から5段目までは約4mの比高差を持った段で、5段目と6段目の比高差は約2mである。最上段から最下段までの比高差は約18mであった。旧地形は最上段から最下段までの傾斜地であったものが、田畠の開墾により棚畠状に改変されたものであり、検出遺構が段の法面で途切れていたことにより証明できる。なお、後述するが、遺跡は北西にさらに拡がっていることはほぼ確実で、西・南および北東側へ拡がっている可能性は低い。東側についても可能性は低いと思われる。

2. 調査の方法

発掘調査は、表土から包含層上面までバックホーで掘削を行い、包含層が認められない箇所では、遺構面直上まで機械で掘削した。雜木林部分については、伐採を実施したち掘削を行った。

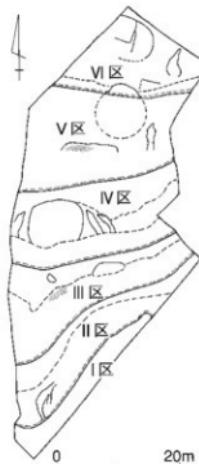
遺物包含層以下については人力で掘削したが、検出遺構や出土遺物が多いことと、各段の法面で遺構が途切れていること、調査面積が1,440m²と広いことなどにより、第4図のように、調査区内の6段の棚畠に最下段から最上段までI区～VI区の区割りを設定して調査を進め、遺物の取り上げもその区割りで行った。また、平坦面の遺構および遺物は法面にも存在していることから、平坦面から法面下端までを各地区の範囲とした。

なお、掘削については、遺構面精査や遺構掘削も人力で行い、機械および入力掘削の排土については、西側の谷部に集積した。また、板柵を設置し、土砂や湯水の流出を防いだ。

調査区北西部については、全面調査段階の道路用地の範囲よりも第2図の方が拡がっている。VI区SH-1の西側が遺存しているにもかかわらず、調査を実施していないことを付記しておく。

3. 調査の結果

調査区の土層は、VI区などでは、表土(耕土)の下は黄褐色系の土層で、その下層は暗褐色系の砂質土であり、この層が遺物包含層となっている。遺構のベースとなる土(地山)は黄褐色および茶褐色土である。地山は部分的に後世の開墾により遺構ベース下まで掘削され、V区などのように、表土直下で橙色の軟質岩盤が露出している箇所があった。



第4図 尼ヶ岡遺跡

調査区割設定図

遺構(第15図)

検出した遺構は、VI区では方形竪穴住居跡2棟(SH-1・3)と円形竪穴住居跡1棟(SH-2)が重複しながら存在しており、SH-2に伴うと考えられる溝(SD-5)も認められた(第5図)。これらの住居跡は埋土の状況から、SH-2→SH-3→SH-1の順に構築されたことが判明している。なお、調査段階では、SH-1北側周壁溝の南隣の周壁溝やSH-1西部の小溝を別の住居跡の周壁溝ととらえ、もう1棟の住居の存在を考えていたが、柱穴などが存在しないため、最終的に判断するにはいたっていない。したがって、SH-5が欠番となっている。

一方、VI区南東部では住居跡らしき段落ちと柱穴2本を検出した。これも住居跡と考え、SH-8と呼称する。

なお、VI区北端の包含層から鉢と器台脚部が出土している。

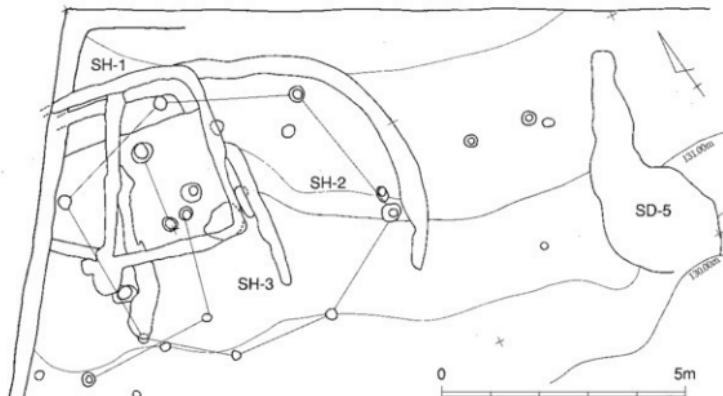
V区では北端のみに壁と床の遺存が認められた円形住居跡(SH-4)とそれに伴うと考えられる溝(SD-6)、甕や鉢などの土器が列状に遺存していた東西方向の溝状遺構(SD-1)および、西方部分で少数の柱穴を検出した。SH-4の床面はほとんど遺存していなかったが、北壁は崩落部の復元も含め、1.2m以上も遺存していた。

IV区の遺構は隅丸方形の竪穴住居跡(SH-6)と溝(SD-2~4)3条があり、SH-6は焼失住居と考えられる。また、調査区西端と東端の包含層中より多くの土器片が出土した。

III区では方形と思われる小規模な竪穴住居跡(SH-7)を1棟検出し、その西方のテラスから斜面への変換部のやや窪んだ箇所で多量の土器を検出した。また、SH-7の下方斜面でも多量の土器が包含層中より検出された。なお、平坦部西部で土壠を1基検出している。

II区平坦部では遺構は検出されなかつたが、西端のI区への斜面部で地山土と岩盤を溝状に掘り窪めた掘削状の遺構を検出した。また、I区でも遺構は検出されなかつた。

以上検出した遺構のうち、住居跡の大半から土器が出土しており、弥生時代後期~古墳時代初頭に属するものであり、その他の遺構についても遺構内出土土器が示す特徴から同時期に含まれるものと思われる。



第5図 SH-1~3 遺構配図

以下、各遺構別に詳細を述べる。

S H - 1 (第16図)

VI地区検出の住居跡のうち、最も新しいものである。S H - 2 および S H - 3 の周壁溝を切り込んでつくられ、S H - 2 の床面よりも30cm以上深く掘り込んでおり、S H - 3 の床面とはほぼ同一である。

南北・東西方向にはほぼ合致する方形住居跡で、南北の規模は約3.9m、東西は約4.0mまで検出できたが、西端は調査区外にのびている。壁は最も残存状況がよい北側部分で約40cm、南側部分では住居跡外側と床面が同じ高さになっているが、床面が傾斜していることから、若干の削平を受けているものとも考えられる。周壁溝は全周するようであるが、西端が調査区外にあることから、検出できなかった。西南部は周溝が検出できず、途切れたようになっており、その北側の溝は周壁溝かどうかは不明であり、本住居跡に伴うものかも不明である。

住居内側には屋内高床部が幅90cm、高さ9cmで存在している。ただし、上面が一度数cm崖んでおり、本来のものか表面が土壤化したためかは不明である。この高床部は褐色の極細粒砂で盛ったものであり、上面には焼土が認められた。排水溝と考えられる中央溝は、住居を横切る形で、やや方向を振って南屋外にのびている。中央部でやや膨らんだ形になっているが、中央土壇と判断するには至らない。溝幅は25cm、深さは18cmであり、屋内高床部を横切って存在しており、おそらく暗渠状になっていたものと想像される。この住居跡に伴うと考えられる柱穴は東側の2本のみ検出できたが、西側は検出できず、調査区外に存在するのかもしれない。

なお、北側周溝に併行して直ぐ南で周溝状溝を検出したが、建て替えもしくは別の住居と考えるのは判断に至っていない。

遺物は北側周溝埋土中より壺の肩部が出土した以外は網片である。

S H - 3 (第18図)

S H - 1 の南に重複するかたちで存在し、ほぼ同一方向の方形堅穴住居跡である。周溝と中央溝、柱穴を検出したが、周溝は東側のみである。北側は直角に曲がりはじめているため、北端と判断できるが、南側は途中で途切れている。現存長は約3.2mである。本住居跡の東西の規模についても、周溝が検出されていないため不明であるが、中央溝が住居の中央に存在しているとすれば、推定5.5mとなる。壁は北東端でかろうじて高さ31cm遺存していた。

中央溝はS H - 1 よりもやや東に振っているが、住居の辺と平行でない点では同様である。中央溝の幅は21~50cmと均一でなく、深さは10cmである。

柱穴は、その位置がやや疑問を感じるが、3箇所認められる。

遺物は東側周壁溝埋土から壺口縁部と底部が出土しており、それらの特徴から、禿山・尼ヶ岡IV期の可能性が高い。また、東端埋土からは石鎚が1点出土している。

S H - 2 (第17図)

S H - 1・3 構築前に存在していた円形住居跡である。北東側壁は高さが約45cm残っており、床面も残っていたが、南西側の大半は周壁溝も削平および流失している。主柱穴は7本であったと推定され、柱間は1.90~3.17mである。また、本住居跡の推定径は約8.4mである。

中央土壇とその横に葉巻形の細長い土壇を検出したが、遺存状況が悪く、深さは僅かに15cmであった。中央土壇の現径は83cm、隣の土壇は長さ68cmである。住居跡の埋土は、S H - 1・3 と違い黄褐色系の色を呈し、より地山の色調に近い。また、円形であることからも、他の住居よりも古いことが窺えるで

あろう。

なお、本住居跡埋土から土器が出土しているが、細片のため時期の確定は難しい。しかし、弥生時代後期後半である点は異論のないところであろう。

SD-5(第17図)

SD-5はSH-2の東辺とほぼ平行方向に存在する溝で、北端部は46cmと幅が狭く、深さも22cmと浅い。中央南寄りで25cmから40cmへと急に深くなり、この部分が最も幅広く、2.10mである。南端は徐々に深さを減じ、自然消滅している。底の形状は漸して平坦であり、特に中央部が深くなっている状況は認められない。

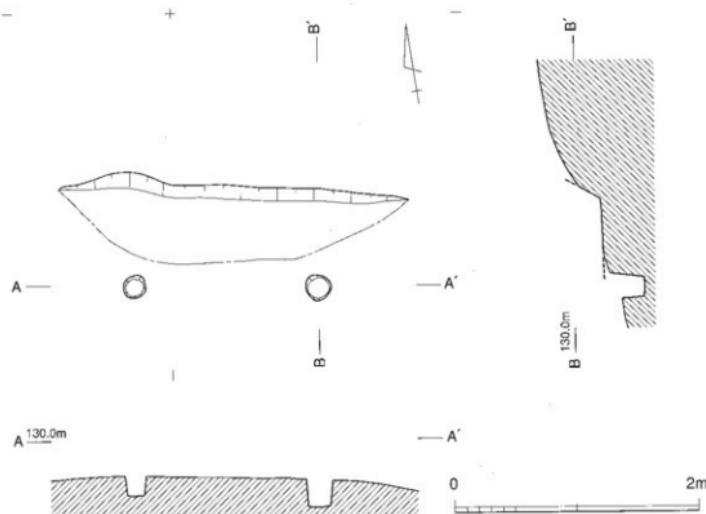
SD-5はその位置と方向から、後述するSH-4とSD-6や、SH-6とSD-2~4の関係と同様、住居の山側からの流水を遮けるためのものであり、住居の山側を半円形に取り巻いていたものと推定される。

SH-8(第6図)

VI区の南端中央部東寄りで検出した方形と考えられる聚穴住居跡で、復元するとSH-4と重複するが、前後関係は不明である。長さ2.9m、高さ17cmの直線的な段落ちと柱穴2本を検出した。床面と考えられる平坦部は、この段落ち付近にのみ認められる。周壁溝は認められなかった。南部は後世に流失および削り取られてしまっているようである。検出した柱穴は2本で、柱間は1.50mであり、もともと2本柱であったのか、4本柱であったのかは不明である。埋土中から土器は出土しなかった。

SH-4(第19図)

VI区南端法面からV区にかけて存在する円形豊穴住居跡である。北端部以外の大半が床面下20cmまで削半を受けていたが、柱穴と中央土壤・溝は遺存していた。推定径は8.4mである。柱について建て



第6図 SH-8

替えと考えて、6本柱と7本柱が考えられるが、禿山遺跡SH-1同様、同時に存在していたとも考えられる。中央土壇は長径90cm、短径70cmで、底は丸く擂鉢状を呈し、深さ26cm遺存していた。埋土には炭や灰を含んでいたが、土壤獄に焼けた痕跡は認められなかつた。中央土壇からのびる溝は、排水あるいは送風のためと考えられ、幅20cm、深さ10cmで、住居外にのび、斜面にすりつくように自然消滅している。中央土壇付近の溝底の高さと南端底の高さの差は10cmである。溝内から石製投弾が2点出土した。

住居跡の北端壁は遺存状況が非常に良く、壁の上端部は崩落が認められるものの、1.3m近い高さがあった。ただし、周堤部は検出できなかった。埋土からは土器が出土したが、大きく3層に分けて取り上げを行つた。下層からは鉢と壺が、中層からは高杯と小型壺が出土した。

北端では住居床面および周壁溝が検出でき、周壁溝西端からは石製投弾が2点出土した。周壁溝の幅は約20cm、深さは約10cmである。

なお、柱穴から高杯C(台付鉢)が出土したが、SD-1出土の破片と接合した。また、SD-1出土土器は禿山・尼ヶ岡V期に属するものである。一方、SH-4埋土中出土の土器は禿山・尼ヶ岡I期と思われ、埋土出土土器の方が時期が古く、流入したものと思われ、二次堆積の上器であろう。

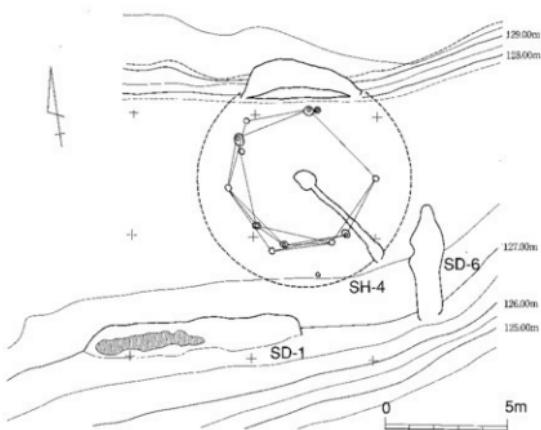
SD-6(第19図)

SD-6はSH-4の南東部、住居推定ラインから一定距離をおいて存在している。北端は幅狭く浅いが、途中で幅広くなり、南端は自然消滅している。溝幅約1.0m、深さ約20cmで、底の形状は平坦に近く、SD-5に類似している。また、位置と方向についてもSD-5に類似しており、機能的にも同様の、斜面上側から住居への流水をかわすためのものであると考えられる。溝の長さは4.6m遺存していた。なお、西側にも同様の溝が存在していたことが類推されるのであるが、検出できなかつた。

SD-1(第20・21図)

SH-4の南西に位置する、長さ約8.9m、幅約1.4m、深さ約0.2mの段落ち状の遺構で、底面は南および東に少し傾斜している。南部は流失しているため、本来の形状は不明である。この遺構の西半部分には多量の土器が遺存していた。

総数42個体以上で、数量的には鉢が最も多く、台付鉢の4Aが15点、高杯4Cが7点、その他鉢が5点、壺は図示したもので13点である。壺は正立した状態で1列に並べて置かれていたもよう、高杯と台付鉢は土器群西半では壺列の北側に平行して置かれ、東半では壺を取り巻くように置かれていたよう



第7図 SH-4・SD-1・SD-6 遺構配図

である。このような出土状況を示すのは、単なる廃棄ではなく、祭祀をはじめ特別な機能を考えざるをえないが、土器以外に出土遺物が認められない状況であるため、類推することはできない。祭祀としての可能性が考えられるが、それとも内容は不明である。類例を待って検討を加えたい。

なお、SD-1出土土器はすべて禿山・尼ヶ岡Ⅳ期に属し、古墳時代初頭～前期と考えられる。

SH-6(第22~24図)

IV区で検出した隅丸方形の堅穴住居跡で、南端のみ流失していたが、ほぼ全体を検出することができた。住居の方向は東西南北方向にほぼ合っており、東西約8.8m、南北約7.6mと規模が大きい。壁はもっとも良好な北側で約90cmの高さがあり、SH-4同様、壁の上方は崩落・流失して角度が緩やかになっている。

周壁溝は南側を除き3方向に認められるが、西側は壁よりも約1.5m内側に存在し、深さも他のものより浅く、西壁下にも浅い周壁溝が存在する。この点を住居の拡張と考えることもできるが、この周壁溝間の床面は住居跡床面よりも若干高いこと、土壠断面では盛土状に認められることから、ここでは屋内高床部としてとらえておくこととするが、確証があるわけではない。なお、調査では、盛土部分は埋土と考えたため、底まで一気に掘削してしまっている。

住居跡のほぼ中央にはほぼ南北方向の溝が存在し、北側周壁溝から住居跡南端までのびている。中央土壠は認められない。この溝はSH-1・3と同様に、住居の主軸ラインとはやや方向を異にしているが、のびる方向が異なっている。しかし、等高線と直交方向にのびる点では一致している。溝幅は、28cm~64cmとあまり一定しない。深さは10cm程度であり、底のレベル差では北端が南端に比べて48cm高い。

主柱は4本で、柱間は3.1~3.9mを測る。柱穴の深さでは南東隅柱が最も深く76cm、北東隅柱が最も浅くて56cmである。南西隅の主柱穴は2個あり、いずれか決し難いが、住居拡張の結果かもしれない。

一方、住居跡の床面上約16cmあたりから床面まで焼土・炭化材を検出している。炭化材が放射状に存在し、垂木と考えられるため、焼失住居と判断される。また、そのことを傍証するかのように住居跡北東隅の床面で白石が周壁溝に落ち込むかたちで出土しており、その隣には完形の甕がほぼ正立して壁にもたれるような状態で出土した。また、甕の北隣の床面から周壁溝にかけて手彫形土器が押しつぶされた状態で出土し、付近から鉢も出土した。調理場の可能性が高い。一方、南西部壁際床面からは土製鋤鍤車が1点出土しており、作業場であった可能性が考えられる。

出土した土器の特徴から、本住居跡は禿山・尼ヶ岡Ⅳ期と考えられる。

SD-2~4(第22・23図)

溝はSH-6の東側で2条、西側で1条検出した。いずれも住居跡からは50cm以上の間隔を置いており、住居跡の山側コーナー部付近から「ハ」の字状に開くかたちで、住居跡を半円形に取り巻いているような状況である。北側上方については削平のため方向等は不明であるが、おそらく山側からの流水が住居の壁を浸食しないように、また、流水が住居に入らないようにするための溝であると考えられ、SH-2・4でも認められる状況である。

住居の東側にはSD-2とSD-3が1.0mの間隔をおいてほぼ併行に存在している。住居北側では1条であったものが2条に分かれているのか、時期差があるのかは不明である。出土土器からは時期差は認められない。SD-2は途中で2条に分流した状態になっている。SD-2の溝幅は1.0m程度、SD-3は0.6m程度である。いずれも斜面山側は自然消滅しており、さらに続いている可能性が高い。

住居の西側に存在するSD-4も途中で2条に分流しており、最大幅は約1.2mである。西端は確認

できず、さらに西端にもう1条存在するのかについても削平のため不明である。

S H - 7 (第25図)

III区平坦面南端で検出したものである。南部は流失しているが、内部には柱穴が3本並んでおり、北側壁に沿って周壁溝が認められた。形態的には住居跡に近いが、南側の斜面が急であり、東西方向と同じ長さを確保するには無理があると思われる。したがって、東西に細長い長方形になるものと思われ、倉庫的性格を与えるのが妥当と考えられる。長辺は約4.4mで、南北残存長は2.4m、検出面からの深さは30cmである。埋土中より土器片が出土しており、器台・壺・紡錘車がある。

なお、S H - 7 の西約5mの平坦面から斜面への変換点(III区テラス)と、S H - 7すぐ下の南斜面(II・III区間斜面)で弥生時代後期後半の土器が多量に出土している。これらはS H - 7出土土器と同様の時期の特徴を示しており、禿山・尼ヶ岡I～II期に属するものである。

掘割状遺構(第25図)

II区南端斜面で検出したもので、上端幅1.3m、下端幅0.3m、深さ0.9mの掘割状遺構で、長さ6mにわたって認められた。岩盤および地山土を掘削している。また、途中で枝分かれになっている。遺物が全く出土せず、時期は不明である。ただし、本遺跡で検出した遺構はすべて弥生時代後期後半～古墳時代初頭であり、本遺構も当該時期の可能性が高い。

本遺構の性格としては、通路、流路などが推定されるが、位置・形状・方向などから通路の可能性が高いと考えられる。

遺物

S H - 2 出土土器(第39図135・136)

埋土中出土の2点を図示した。有孔鉢3は底部が突出するもので、もう1点は鉢または壺の可能性が高い。これらの底部は突出しない。

S H - 3 出土遺物(第39図137～139)

東側周壁溝から出土した3点を図示できた。(137)の二重口縁壺は屈曲があまく、口縁部外面に紋様風の沈線を施すが、粘土紐のつなぎ目かもしれない。口縁端面には刻み目を施す。(138)の壺と思われる底部は尖底で、禿山・尼ヶ岡IV期の可能性が高い。

石錐(第48図S 3)は、この住居跡の東壁付近から出土した。長さ3cmの有茎錐で、淡路産または四国産のサヌカイトを利用している。重さは2.0gである。

S H - 1 出土土器(第39図140)

S H - 1から出土した土器のうち図示できたものは、大型壺の肩部1点のみである。頸部凸帯の上下を刺突する、ほかに類例をみない装飾を施すものである。

VI区包含層出土土器(第39図141・142)

鉢1B(141)と器台脚部(142)が図示できた。鉢は内外面とも範磨き調整で、叩き成形である。器台脚部は楕円形の透し孔を3方向に穿っている。

S H - 4 出土遺物(第39図143～147)

S H - 4 埋土中出土土器のうち、下層から出土した鉢1D(143)は、体部が丸みを持ち、深いもので、外面は範磨き調整を施している。壺3(145)も丁寧な作りで、特に口縁部が面を持つように丁寧に仕上げている。内面は継刷毛調整。中層から出土した高杯A a(146)は、口縁部が長いが直立に近く外反度が少ない。脚部は中空である。完形の小型長頸壺(144)も中層から出土している。埋土中出土土器は

その特徴から禿山・尼ヶ岡Ⅰ期に属するものと考えられる。

S H - 4 柱穴およびS D - 1 接合の高杯C (147)は、台付鉢の形態と同様である。S D - 1 出土土器が禿山・尼ヶ岡Ⅳ期であることから、(147)もその特徴により同時期とすることができる。したがって、S H - 4 も禿山・尼ヶ岡Ⅳ期の住居跡と考えられる。したがって、住居跡への流入土(埋土)は古い時代の土器を包含する土であったことが窺える。

石製投弾(第49図 S 9 ~ S 17)と思われるものは、V区を中心として出土した。花崗岩質や石英質の円礫を素材としている。長さは6~10cm、重さ112~326gの範囲に収まる。

V区包含層出土土器(第39図148~150)

S D - 1 付近の包含層から出土したのは鉢1 C (148)と脚部(150)である。鉢は突出する底部側面を鎧削りしている。外面は叩き、内面は刷毛調整で、口径に比して器高が浅くなっている。

S D - 1 出土土器(第40~42図151~192)

壺・高杯・鉢・壺を図示した。

壺(151~163)は底部の突出度が少なく、概して丸い球形の体部であり、特に底部内面にその特徴が表れている。外面はすべて叩き仕上げ、内面は横方向の板ナゲが大半である。鎧削りと同様の技法と思われる。体部と口縁部境の屈曲部では鋸く程をもつ1 B (156)と鈍い1 A (151~155)がある。鈍いものでは口縁部に面を持つものが多い。また、体部最大径を下半部にもつ長胴系のもの(155)が存在する。鉢に近い形態の壺3は底部が突出し内面刷毛調整であるが、肩部が張らず、体部は球形に近い。

なお、壺の体部下端、成形第1段階は(151・153・154・158・161)が同じ形態で、外面のラインが重なり、(162・163)もほぼ重なることから、型作りの可能性がある。

高杯A c (164~170)は台付鉢のような形態で、口縁部が屈曲して外反する点が異なる。(164~169)はほぼ同じ形態であるが、脚部に透し孔を穿つものとそうでないものがある。また、刷毛仕上げと鎧磨き仕上げの二者があり、透し孔と鎧磨きがセットになる傾向が窺える。

鉢4 A (172~186)は高杯と同様、脚部に透し孔を穿つものと持たないもの、刷毛仕上げと鎧磨き仕上げの両者が認められるが、透し孔と鎧磨きのセットの傾向は認められない。全体に相似形で、杯部の口径は11.3~16.8cmである。鉢1 C (187)は内面にのみ体部と口縁部の境が認められる。外面は叩き、内面は刷毛仕上げである。底部はほとんど丸底である。鉢1 D (188)では、底部は平じて平底であるが、口縁部は明確に外反しているとは言い難い。内面は鎧磨き調整である。鉢2 (189~191)は口径が小さく、平底である。外面に叩き痕は認められない。

壺(192)は体部のみの破片である。外面は鎧磨き調整で、内面は横刷毛である。

S D - 1 出土土器は、内面鎧削りと同様の技法、体部の球形化という特徴から、禿山・尼ヶ岡Ⅳ期であり、古墳時代初頭に位置づけられるであろう。

S H - 6 出土遺物(第43図193~201)

壺1 B b (193)はほぼ完成品で、底部は尖底に近い。体部は球形に近く、外面は叩き仕上げ、内面は刷毛のちナデ仕上げである。この壺は禿山・尼ヶ岡Ⅳ期に編年される。柱穴から出土した高杯C (194)は、椀形の杯部で、口縁部はあまり内湾しない。口縁部外面に退化凹線を施す。鉢2 A (195)は口径に比して器高が低く、外面は叩き仕上げである。手焙(198)の覆部罐は若干肥厚し、外反するのみであり、裝飾性はほとんど認められない。接合部も屈曲するのみで凸帶は設けない。底部は丸底に近い。高杯脚部(199)は中実の脚柱部で、裾部は大きく開く。脚部は全体に低い。土製紡錘車(200・201)は2点出土

している。1点(200)は住居跡壁際、もう1点(201)は埋土中出土である。いずれも焼成後の穿孔で、転用品である。

台石(第50図S18)は花崗岩製で、長さ54cm、厚さ10cm、重さ20.5kgである。表裏には研磨痕跡や浅い窪みが認められ、石皿としても使用されていたようである。

M区包含層出土土器(第43図202~215)

VI区の東部で出土した土器が大半である。二重口縁壺・短頸壺・鉢・器台などがある。

短頸壺(203)は口縁部が短くのびるものである。鉢1C(204)の底部は突出し、体部は丸く口縁部は鋭く屈折して端部に面を持つ。内面は丁寧な荒磨きである。器台B(208)は、外面叩きで仕上げた単純な形態のものである。脚部(207)は製塙上器の可能性がある。

S H - 7 出土土器(第44図216~222)

埋土中から器台・壺・土製鉢輪車などが出土している。

器台A a(216・217)は口縁端部を上下に拡張し、端面に退化凹線と竹管円形浮紋を加飾する。(216)の口縁端部下面には指頭圧痕が規則正しく並んでおり、罐部上端には刻み目を施している。(219)の二重口縁壺片は外面に波状紋と竹管円形浮紋、その上部に退化凹線を施す。

禿山・尼ヶ岡I期に属するものと考えられる。

II・III区间斜面土器群出土土器(第44図223~246)

壺・甕・鉢・高杯などがある。

広口壺A b(223・224)は、口縁端部を肥厚させないもので、頭部から屈曲した口縁部が長くのびる。長頸壺(225)の口縁部は長くのび、端部は若干外傾する。外面は荒磨き調整。大型の甕4 A(229)は体部外面叩きのち刷毛調整で、内面は継刷毛である。口縁部はあまり広がらずやや内湾する。鉢1(230・231)は体部が深く、丁寧な作りである。鉢2 A(232)も口径に比して体部が深い。高杯A a(233)の口縁部は短く、直立したのち外反する。器台脚部(236)では据はあまり広がらない。これらの土器群は禿山・尼ヶ岡I~II期の特徴を示している。

III区テラス土器群出土土器(第45・46図247~280)

壺・甕・鉢・器台等多量にあり、これらの土器群は禿山・尼ヶ岡I~II期の特徴を示している。

広口壺A b(247)は体部最大径が中位にあり、頭部から外反した口縁部はやや短い。広口壺B c(248)では、下方に拡張した部分の断面は薄く、外面には退化凹線のみを施す。

甕1 A bのうち(252)は、長胴で、体部最大径は中位でも上方にある。体部外面は叩きのち刷毛をほぼ全面に施している。口縁端面には叩き原体による刻み目状の叩きを施している。(253)は体部最大径が上方にあり、肩が張るものである。(252)と同様、外面は叩きのち刷毛を外面全体に程している。内面は継方向の刷毛である。口縁端面には叩きを施す。甕2(259)は小型の甕であるが、体部最大径は上方にあり、肩が張るものである。外面は叩きのち刷毛を施している。甕A d(256)の体部最大径は中位でも上方にあるが、外面の刷毛は下部のみに施し、内面は斜め方向の刷毛である。口縁部が屈折し、棱が鋭い甕1 B a(254・255)の体部はなで肩であり、外面上半には叩きのちの刷毛は認められない。口縁端面には叩きを施す。甕3(257)は体部の肩が張るもので、口縁部内面に横刷毛、端面には叩きを施す。体部外面上半には刷毛は認められない。

鉢1 A(264)の口縁部は鋭く屈折し、罐部に面をもつ。外面は細かい刷毛である。鉢1 C(265・266)の体部は丸く、深いものである。(265)では外面叩きのち刷毛を施している。鉢4 B(267・268)は特異

な形態で、(267)の口縁端部は内側に若干折り曲げている。(269)も鉢4Bの可能性が高い。(268)は内外面とも丁寧な箝磨きである。

器台口縁部では、端部を下方に拡張するもので、垂下部の厚みが薄いもの(272)と断面三角形を呈するもの(273)がある。(272)の端部外面には波状紋と竹管円形浮紋を貼り付け、内面には波状紋を描き、内側に刷毛を装飾的に施している。器台脚部(271)は外面刷毛のち箝磨きで、裾部はあまり開かない。

壺と思われる底部(260・261・275・277~279)では、いずれもしっかりした底部で、外面に叩きのち刷毛を施すものや縱方向の刷毛等を施すものが認められる。

有孔鉢3(280)はSH-2埋土出土の鉢(135)と形態・調整が似ている。

Ⅲ区包含層出土土器(第47図281~283)

SH-7付近の包含層から出土したもので、壺4A(281)はⅡ・Ⅲ区間斜面土器群出土土器の(229)と口縁部が類似するが、体部は(281)が張るようである。広口壺Aa(282)は口縁部が長くのび、端部を若干拡張している。内外面とも細かい刷毛仕上げである。

4. 小結

尼ヶ岡遺跡の全面調査の結果、倉庫的な機能も含めた堅穴住居跡は合計7棟検出した。内訳は円形が2棟、方形が2棟、隅丸方形が1棟、方形に近いものが1棟、方形と推定されるものが1棟である。また、山側からの流水をかわすためと考えられる溝を住居の山側に推定半円形に掘削しているものが3棟存在した。斜面地の住居を守るために施設として注目される。

各住居跡の時期については、禿山・尼ヶ岡Ⅰ~Ⅱ期に属するものはSH-7、Ⅲ期に属するものは認められないが、Ⅳ期のものはSH-6、Ⅴ期はSH-4である。SH-3についてはⅣ期の可能性が高い。SH-1についてはSH-3よりも新しいことから、Ⅴ期の可能性が考えられるが、その位置からみてⅣ期に近いと考えるほうがよいのかもしれない。

一方、住居跡の近くに土器群が存在していたものが2例ある。SH-7とⅢ区テラス土器群、SH-4とSD-1土器群である。いずれも住居と同時期の土器が出土しているものと考えられる。特に、SH-4柱穴出土土器とSD-1出土土器の接合関係はその結びつきを如実に物語るものであろう。また、SH-7下方斜面の土器群(Ⅱ・Ⅲ区間斜面土器群)はSH-7内にあったものが流出したものと考えられる。そうすると、SH-4の埋土中出土土器の流入源は、位置的にみてSH-2の可能性が高い。SH-2埋土出土の有孔鉢がⅡ・Ⅲ区間斜面土器群出土のものと同形態であることから、禿山・尼ヶ岡Ⅰ期に属するものであり、SH-4埋土出土土器と時期的にも合致する。したがって、SH-2の時期は禿山・尼ヶ岡Ⅰ期とすることができるよう。

以上のことから、尼ヶ岡遺跡では、SH-2(Ⅰ期)・SH-7(Ⅰ~Ⅱ期)→SH-3・6(Ⅳ期)→SH-1(Ⅳ~Ⅴ期)→SH-4(Ⅴ期)の変化がたどれる。Ⅲ期には断続しているものの、同時に存在している住居は1~2棟で、弥生時代後期後半から古墳時代初頭まで続いた集落であることが判明した。また、禿山遺跡の住居がⅢ期であることから、両遺跡は密接につながった集落であることも推定される。

第3節 塩壺東遺跡

1. 位置と環境(第8図)

塩壺東遺跡は津名郡淡路町岩屋3035ほかに所在し、海岸線からの直線距離は約250m西側に入った位置である。周囲の地形は、津名丘陵の北端部から大阪湾に向かってほぼ西方にのびる小尾根が数多く認められ、本遺跡もそのうちの細い尾根斜面に立地している。本遺跡が位置するのは尾根の北側斜面で、明石海峡から大阪湾まで見渡せる好位置である。本遺跡が存在する位置での尾根稜線の標高は約50mであるが、調査後の遺跡の標高は26~31mである。遺跡の北側谷底には小河川が西流しており、南側の谷には溜池が存在する。

本遺跡の南西側には塩壺西遺跡、東側には塩壺遺跡が存在し、全面調査が行われている。これらの遺跡は、かつて、遺跡所在地の字名から、「塩坪遺跡」という名称で一括されていたものが、調査時期、事業者等により行政上分割されて各個別名称が与えられたものである。

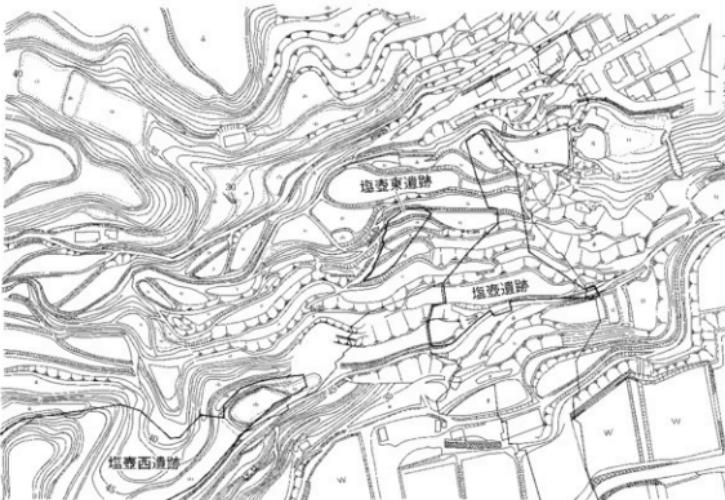
本遺跡は確認調査段階では淡一7地点と呼称し、平成2年度の確認調査の結果、遺物包含層が確認された。平成4年度には本州四国連絡橋公団の委託を受け、218m²について全面調査を実施した。

2. 調査の方法

調査前の遺跡の地目は棚田状の水田で、北側谷奥部の溜池から水が供給できるようになっていた。調査対象地区となったのは、小尾根が北側にやや張り出した部分で、北側がもっとも高い水田であった。調査前の水田の標高は26~31mである。

調査にあたっては、確認調査の結果から、遺構密度が希薄であることが予想されたため、遺物包含層に主眼をおいて調査にあたった。

発掘調査は、表土(耕土)から遺物包含層上面までバックホウによる機械掘削を行った。のこる遺物包



第8図 塩壺東遺跡 調査区位置図(1/2,000)

含層は人力によって掘削し、遺物を検出した。排土は調査区東側に集積した。また、必要に応じてセクションを残し、写真撮影・実測を行い、記録とした。

3. 調査の結果

調査の結果、遺跡の旧地形は南から北に向かって下るゆるやかな斜面で、水田の開墾に伴う掘削を受け、斜面下方では段状を呈していた。遺物包含層は暗褐色系の砂層・砂質土で、土器と石器が出土した。また、遺構面からは柱穴状の遺構を検出した。

遺構(第26図)

調査の結果、調査区中央部南寄りで柱穴状の遺構を5基検出した。それらは直径20~30cmであり、集中して存在していた。内部から遺物が出土していないため、時期などは不明であるが、弥生時代後期の可能性が高い。柱穴状遺構は、集中して存在していることから建物の痕跡ではなく、別の何らかの施設と考えるべきであり、現時点では不明であるが、集落の縁辺部の状況の一端を示すものと思われる。

遺物(第47図284~286、第48図S4・第50図S19)

調査区内の4段の水田のうち、上方1・2段目に残存する暗褐色の砂層より弥生土器底部などが出土した。また、石器と剝片3点が出土した。

(284・285)は甕と思われる底部で、外面は叩き仕上げである。いずれも平底で、(285)の底部は突出する。弥生時代後期でも後半と考えられる。

(286)は大型の管状土錘で、出土層位は不明である。直径は6cm程度であるが、半分以上が欠損している。時期は不明であるが、弥生時代後期以降の可能性が高い。

石器(S4)は、長さ3cm以上の有茎鎌で、素材にはやや良質のサヌカイトが用いられている。叩き石(S19)は花崗岩質の円盤を素材としている。両端部に叩き潰れの痕跡が認められる。

4. 小結

今回の塩壺東遺跡の全面調査の結果、明確な遺構は柱穴状遺構のみであったが、弥生時代後期後半の土器が包含層から出土し、集落縁辺部に存在する施設の一端を窺うことができた。

弥生時代後期後半では、塩壺西遺跡があり、塩壺遺跡もほぼ同時期のようである。塩壺西遺跡では弥生時代後期後半の住居跡が4棟以上検出され、それらは尾根稜線付近に存在していた。塩壺遺跡でも尾根稜線付近に2棟以上の住居跡が検出された。両遺跡で検出された住居跡はいずれも尾根稜線付近で、塩壺西遺跡西部で検出された住居跡は稜線中央よりも南側に存在し、東部で検出された住居跡は稜線中央よりも北側に存在していた。また、東部の塩壺遺跡でも尾根稜線中央よりも北側で住居跡が検出されている。塩壺東遺跡において住居跡などの遺構が検出されなかったのは、尾根稜線からかなり下った位置であることによると思われる。

塩壺西遺跡西部の住居跡が存在する位置はかなり奥まっており、山に遮られており、南東から北方向しか望めない。一方、塩壺西遺跡東部所在の住居跡や塩壺遺跡の住居所在地からは、南から北西まで見渡すことができる位置である。このことは、西側の住居が奥まった場所であることも加味すれば、高地性集落内でも住居の位置によって、見張りのための要素と通常居住のための要素に分割できるものと思われる。なお、塩壺西遺跡東部から塩壺遺跡にかけての本尾根の南側斜面は、北側にくらべて傾斜がかなりきついことを付記しておく。

なお、かつて「塩坪遺跡」と呼称されていたように、3遺跡の立地場所・時期的状況からも同一の遺跡としてとらえるべき様相を示している。

第4節 高尾遺跡

1. 位置と環境(第27図)

高尾遺跡は津名郡淡路町岩屋に所在し、現在の海岸線からは約900m西側に入った、標高129.4mの三角点が所在する山頂付近に位置する。周囲の地形は、津名丘陵の北端にあたり、小さな尾根が多数北東の海岸方向に向かって延びており、本遺跡の所在地もそのひとつの突端山頂である。遺跡からは眼下に明石海峡を見下ろすことができ、北西から南方向までの海を見渡せる絶好の眺望地である。また同時に、この山には三角点が設置されていることで分かるように、周囲から確認しやすい位置である。特に岩屋港や明石海峡を隔てた対岸から見た場合、西から続く丘陵が途切れるあたりの1段高い山として見ることができる。このことは遺跡の性格を考える上で非常に参考となる。

確認調査は「淡-14地点」の名称で平成2年度に実施し、遺構は認められなかったものの、斜面の2箇所で遺物包含層が認められた。全面調査は本州四国連絡橋公団の委託を受け、平成3年度に実施した。

調査区は、三角点が所在する山頂から東側の斜面で、調査前は雑木林となっていた。確認調査は東側の丘陵尾根上も実施したが、遺構・遺物ともに確認できなかった。なお、全面調査面積は258m²である。

2. 調査の方法

山頂の調査区へ至る山道の幅員が極めて狭く、距離も長いため、掘削機械の搬入が困難であった。したがって、調査地区的伐開、表土から遺物包含層の掘削・堆土除去作業等すべて人力によった。堆土は調査区の東側に集積し、流出防止のため板橋の設置も行った。

3. 調査の結果

遺構(第28図)

調査区の西部と東部で暗黄褐色の遺物包含層が認められ、東部では弥生時代後期前半と考えられる土器が集中して認められた。この状況から、遺跡の本体は調査区西側の山頂部にあったものと思われるが、確認調査でも遺構・遺物は検出されなかった。また、調査区を拡張して、斜面下方まで掘削した結果、急傾斜の地山を切り込んだ平坦面を検出した。この平坦面には幅10~15cm、深さ2~3cm、長さ3mと2mの「L」字形の溝も存在した。埋土に糞食土も存在し、近~現代の小屋状のもの可能性がある。

遺物(第47図287~294、第50図S20~S22)

調査区南東部包含層の土器集中部から出土したものが大半である。甕(287)は口縁部が短く、やや屈曲する。体部最大径は上位にあり、外面は叩き、内面は縱方向の鋸割りである。高杯B(290)はあまり類例を見ないが、洲本市下内膳遺跡で出土している。鉢1C(291)は体部が丸く、口縁端部に面を持ち、内外面は磨き仕上げている。壺1Bは口縁端部に刻み目を施すもの(288)と凹面を呈するもの(289)がある。砥石(S22)は砂岩製で、表面とも中央部が窪む。また、叩き石(S20・S21)も2点出土した。

4. 小結

高尾遺跡の発掘調査の結果、弥生時代後期前半と考えられる土器が出土した。土器の出土状況から、山頂付近に住居跡などが存在していた可能性は高いが、確認調査でも山頂には遺構は検出されなかったことから、すでに流失したものと思われる。また、土器の出土量が少ないとため、多くの遺構が存在していた可能性は低く、住居跡であればせいぜい1棟と思われる。

また、周囲の眺望が良く、周囲からも確認しやすい位置であること、すぐ近くに可耕地が存在しないことは、見張り台やのろし台といった機能を考えられる。

第5節 岩屋台遺跡

1. 位置と環境(第10図)

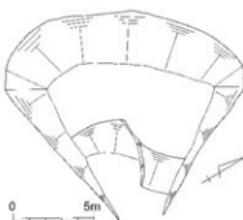
岩屋台遺跡は津名郡淡路町岩屋に所在し、現在の海岸線からは約500m南西に入った位置にある。周囲の地形は、高尾遺跡でみたように、小尾根が多数派生している。本遺跡もその尾根稜線のやや下がった位置にあり、本遺跡の西側尾根上には弥生後期の岡山遺跡が存在している。本遺跡の標高は74~78mで、岡山遺跡は標高104m前後である。

2. 調査の方法および結果

遺物包含層と思われる灰褐色の土層が水路の断面に認められ、周辺の山道から弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が採集されている。調査は、表土から遺物包含層とみられた土層の上面まで重機で掘削したが、遺物が検出されなかったため、さらに下層まで機械掘削を行った。しかし、遺構・遺物とともに認められず、盛土であるとの判断に至った。この時点での掘削深度は表土から約4mであったが、地山までは到達しておらず、これ以上掘り進んでも遺構・遺物ともに検出できる見込みがないと判断し、掘削を打ち切り、調査を終了した。

3. 小結

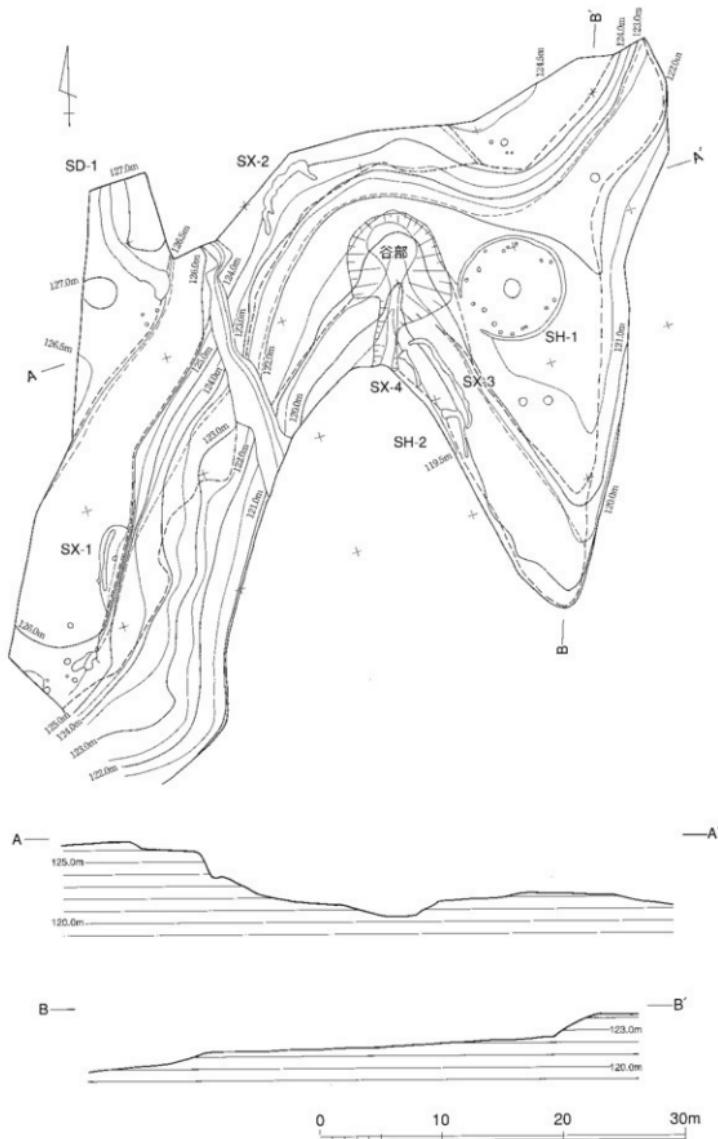
今回の岩屋台遺跡の調査では遺構・遺物は検出されず、調査区外で採集された土器は岡山遺跡から出土したものとも考えられる。このことから、岡山遺跡の範囲外でも土器が出土する箇所が存在する可能性が高いことが考えられる。



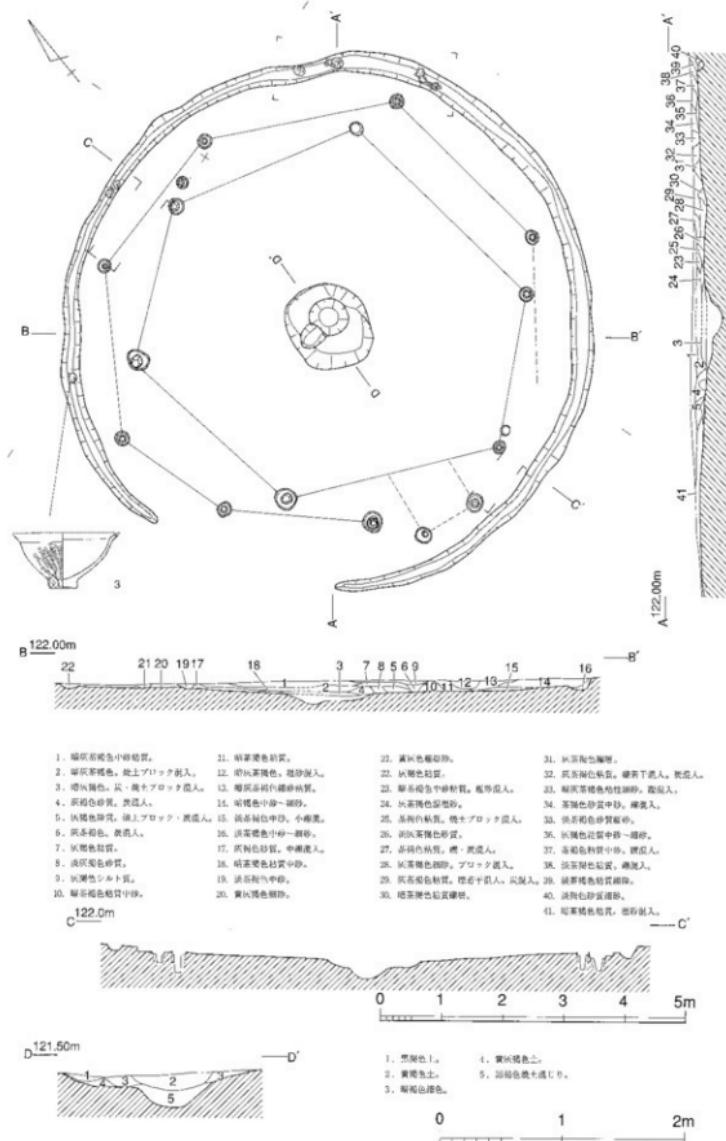
第9図 岩屋台遺跡 調査区全体図



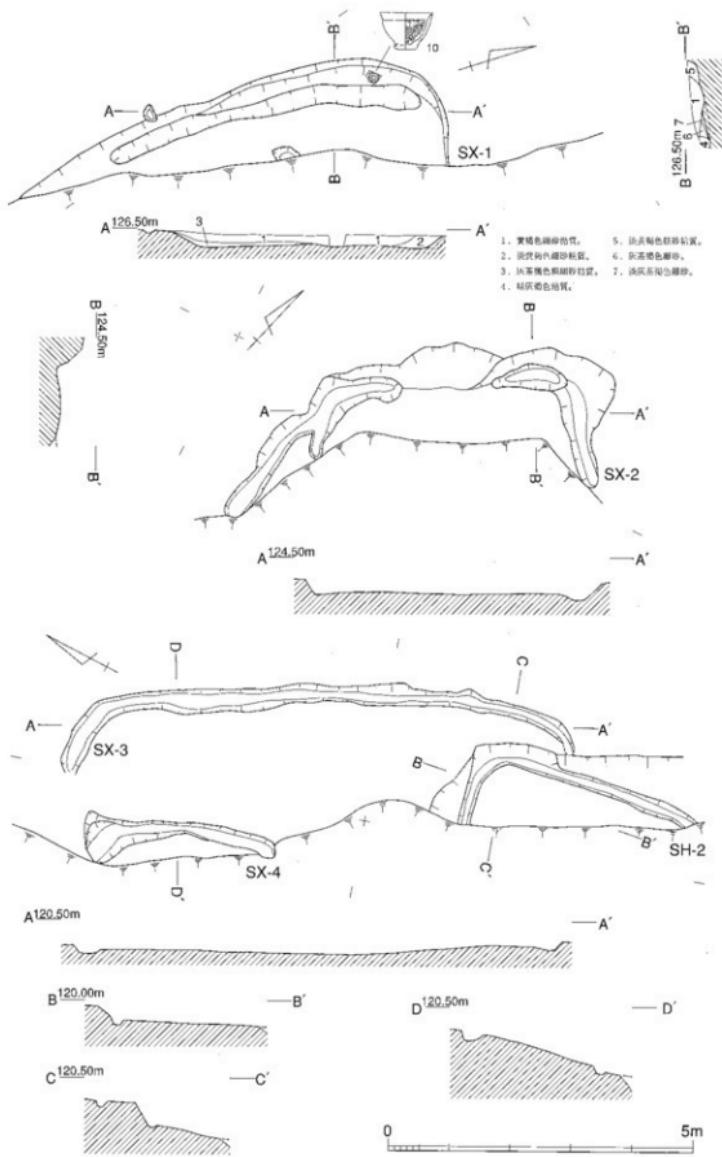
第10図 岩屋台遺跡 調査区位置図(1:2,000)



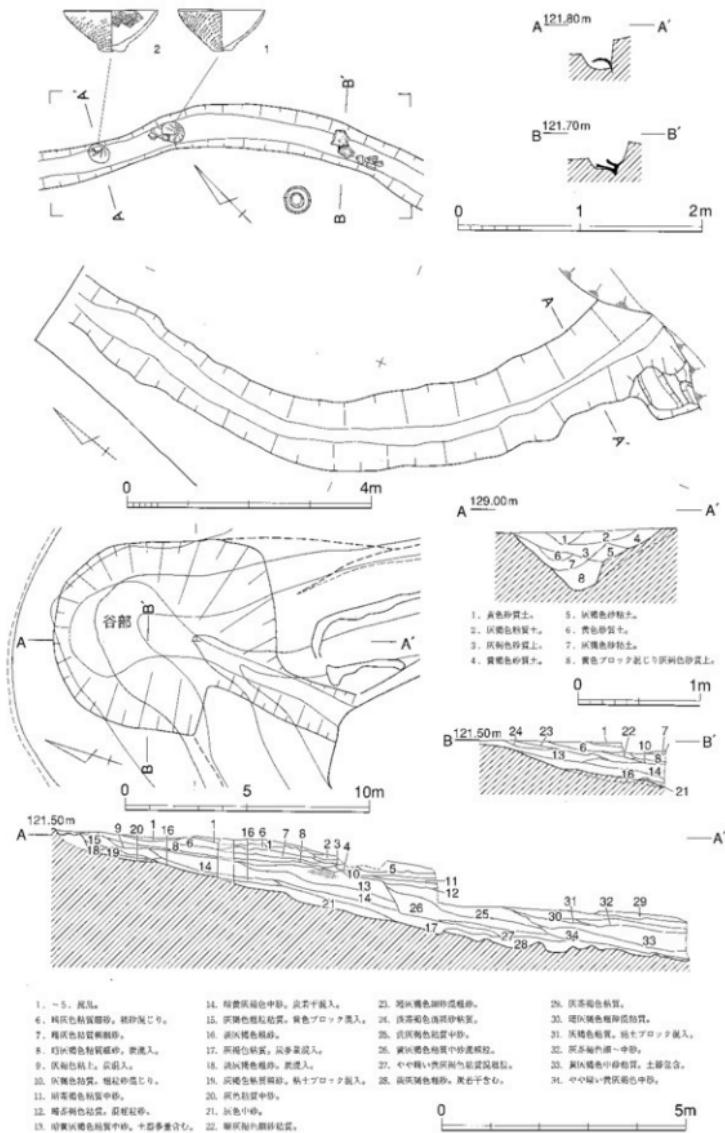
第11図 禿山遺跡 遺構全体図



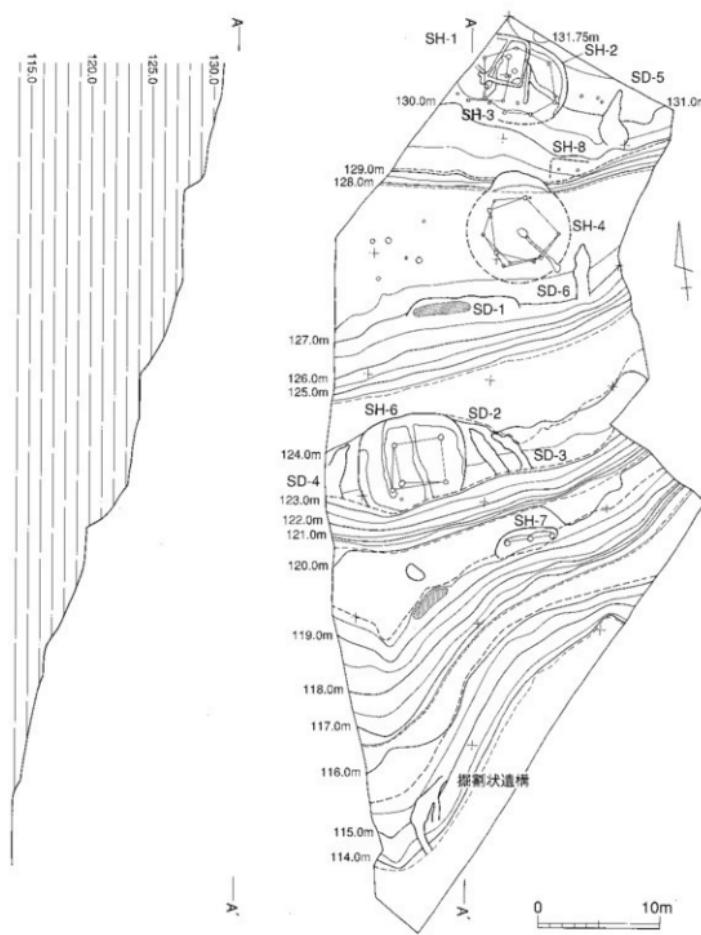
第12図 烈山遺跡 SH-1



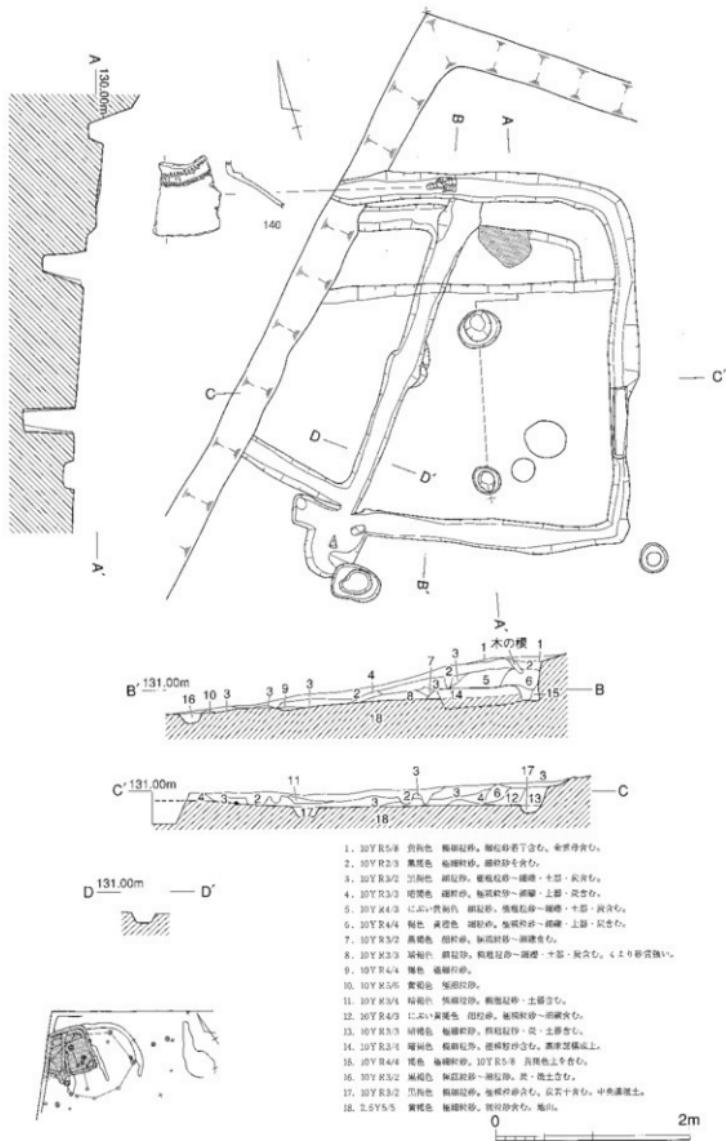
第13図 烈山遺跡 SH-2・SX-1～4



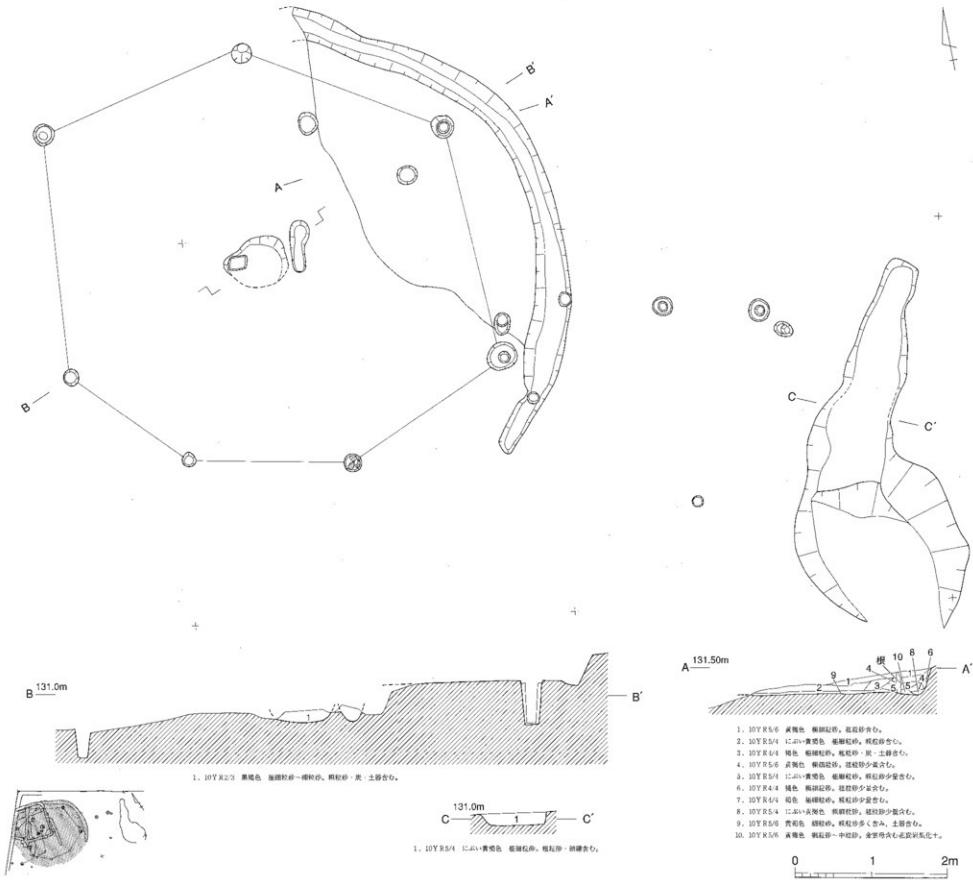
第14図 禿山遺跡 SH-2・SD-1・谷部



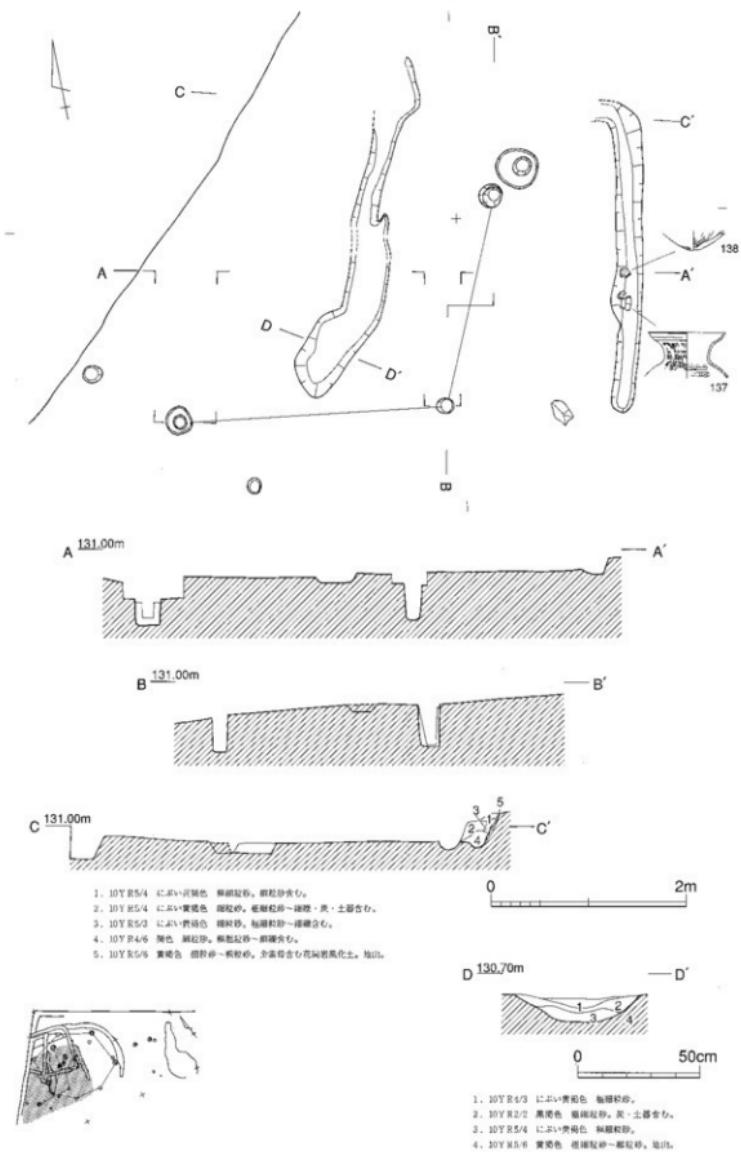
第15図 尼ヶ岡遺跡 遺構全体図



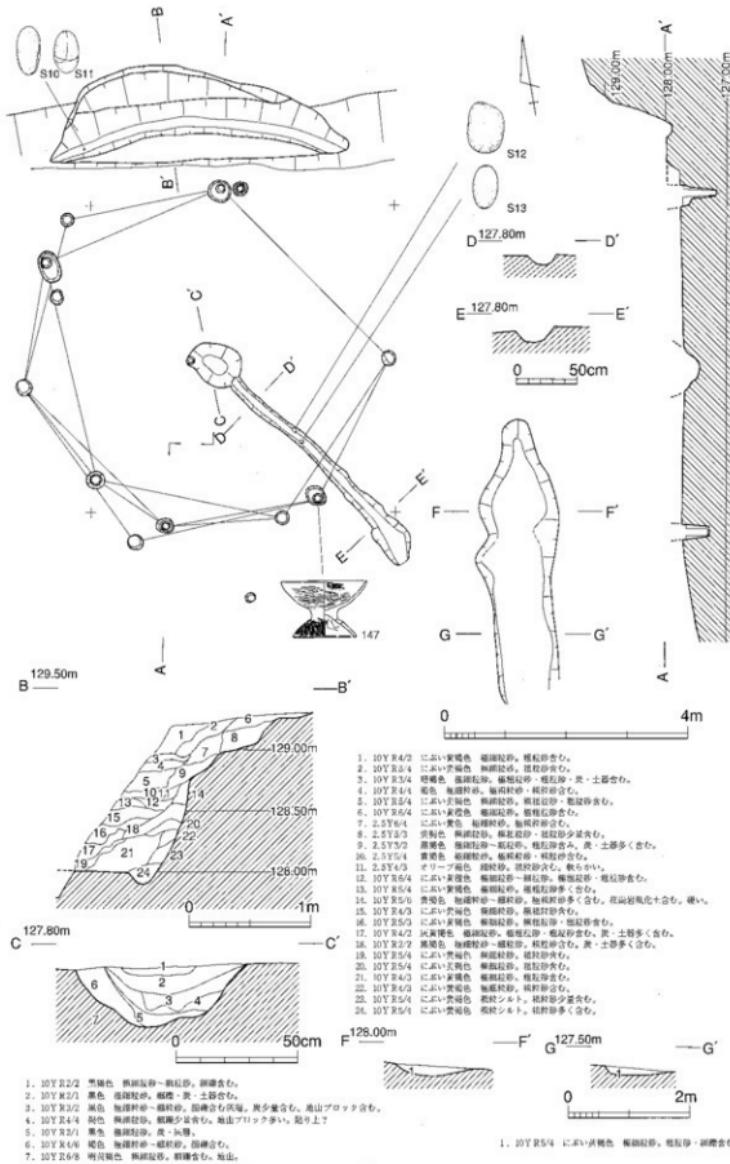
第16図 尼ヶ岡遺跡 SH-1



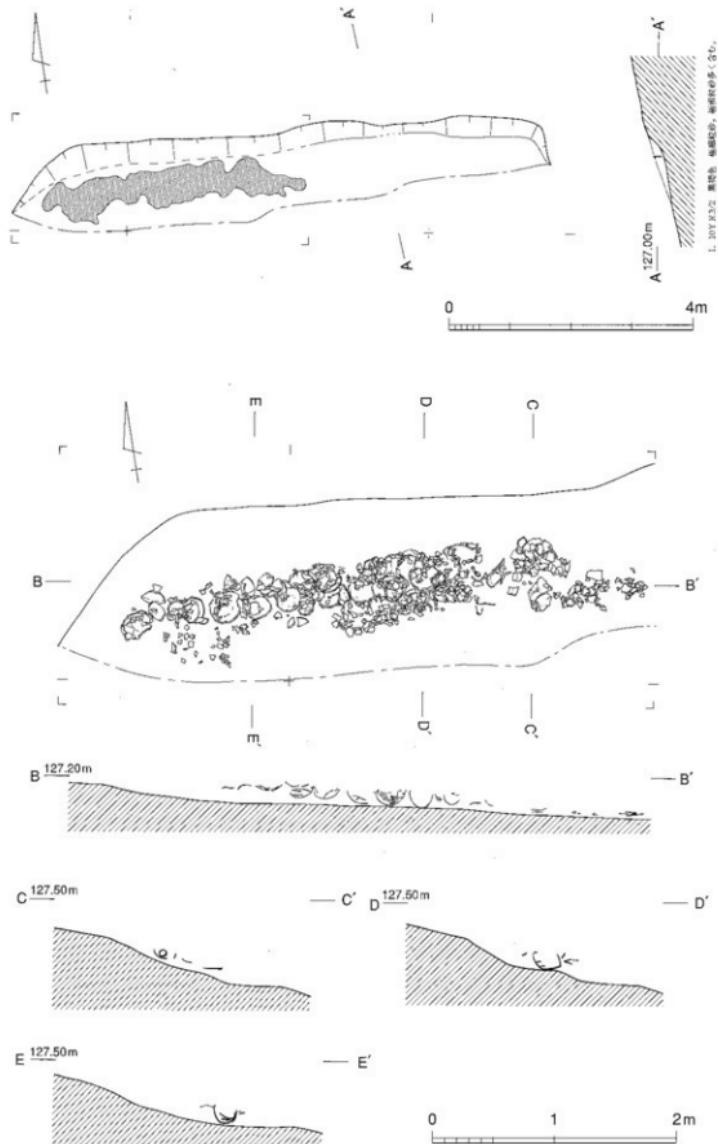
第17図 尼ヶ岡遺跡 SH-2



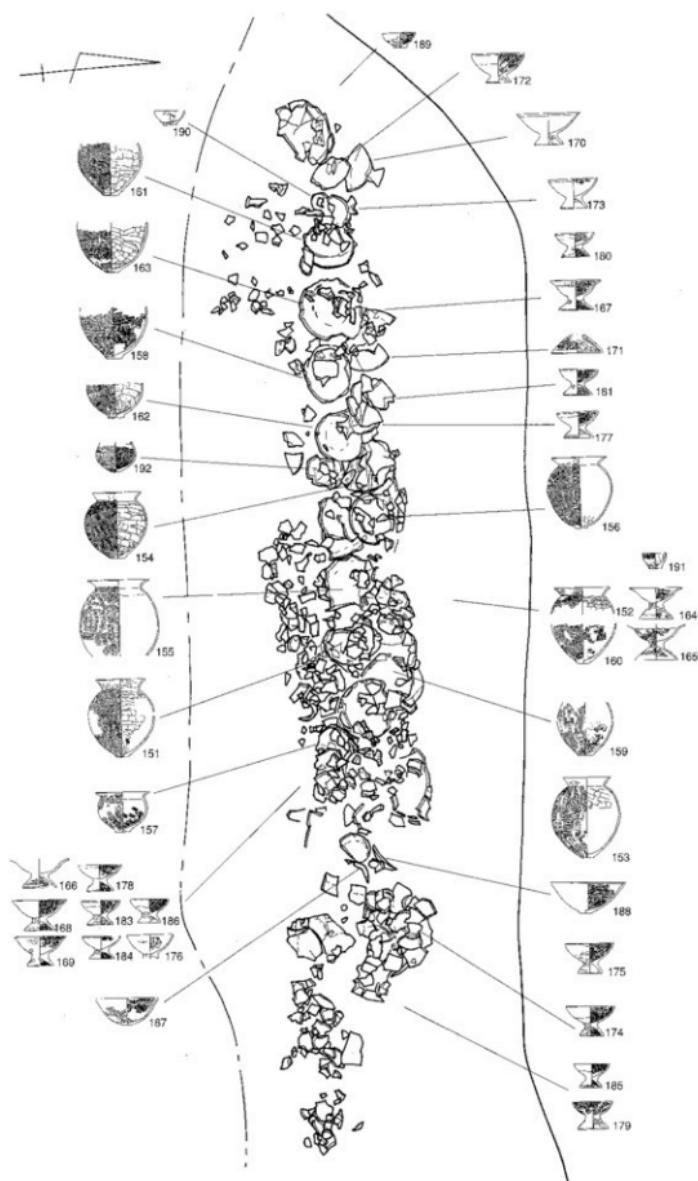
第18図 尼ヶ岡遺跡 SH-3



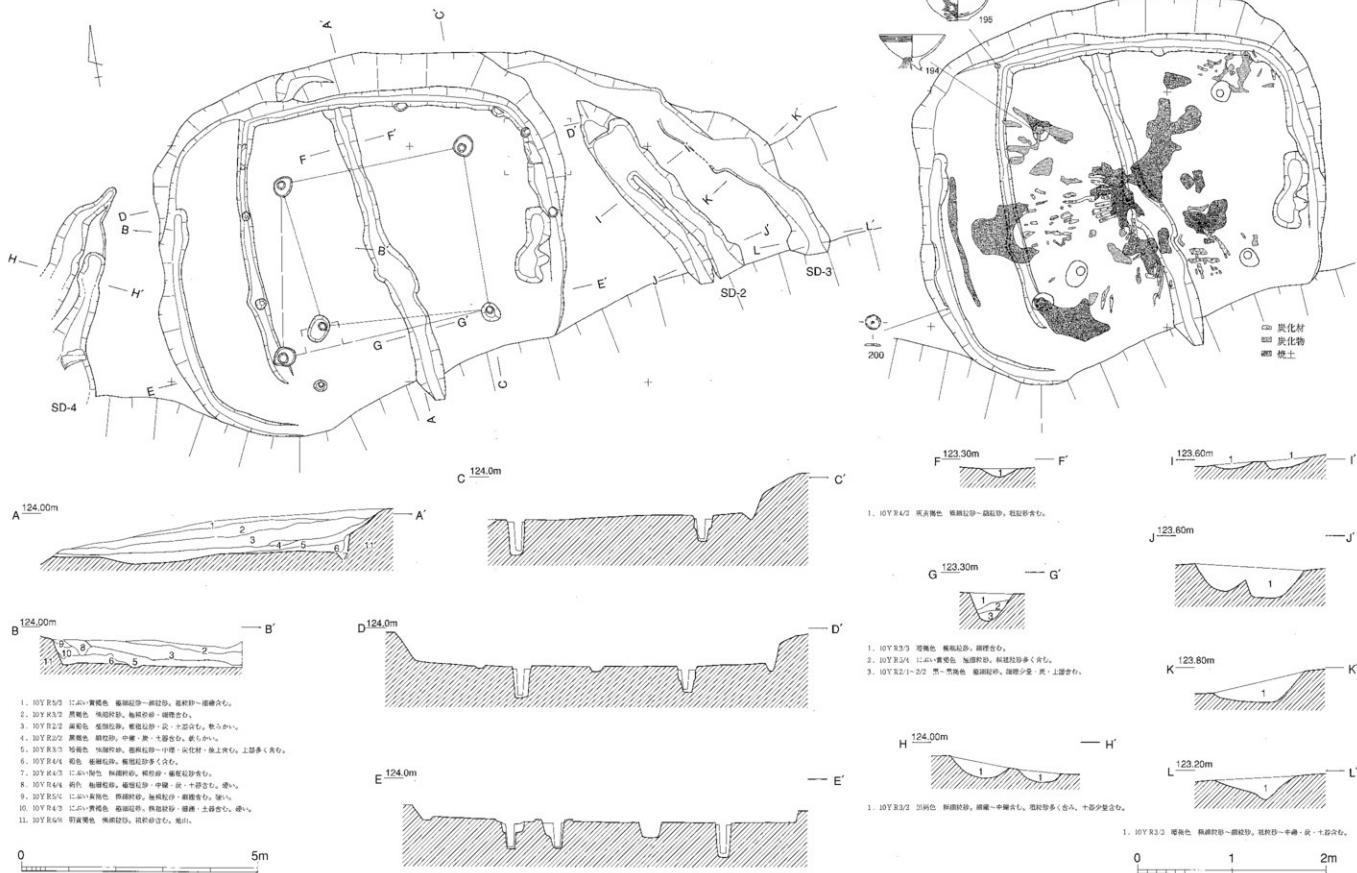
第19図 尼ヶ岡遺跡 SH-4 · SD-6



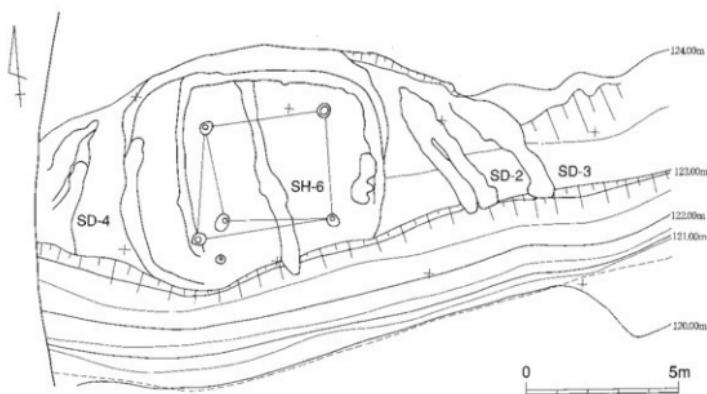
第20図 尼ヶ岡遺跡 S D-1



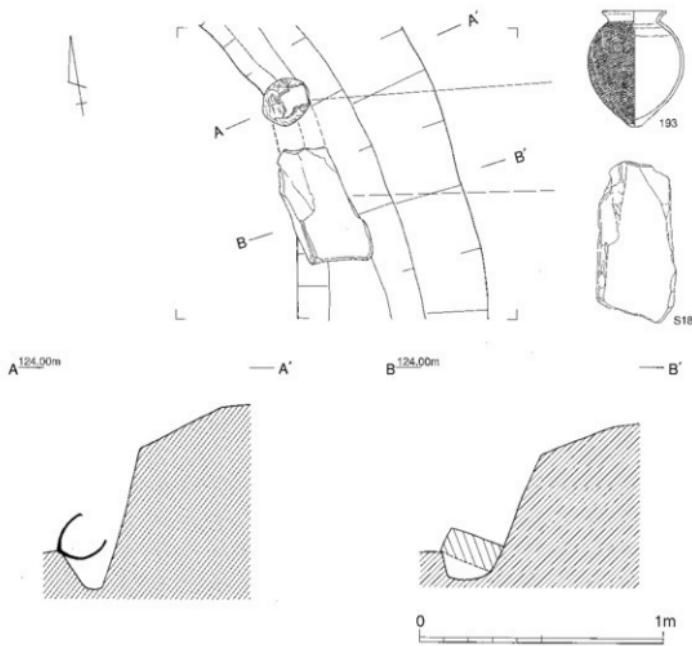
第21図 尼ヶ岡遺跡 SD-1 土器出土位置図



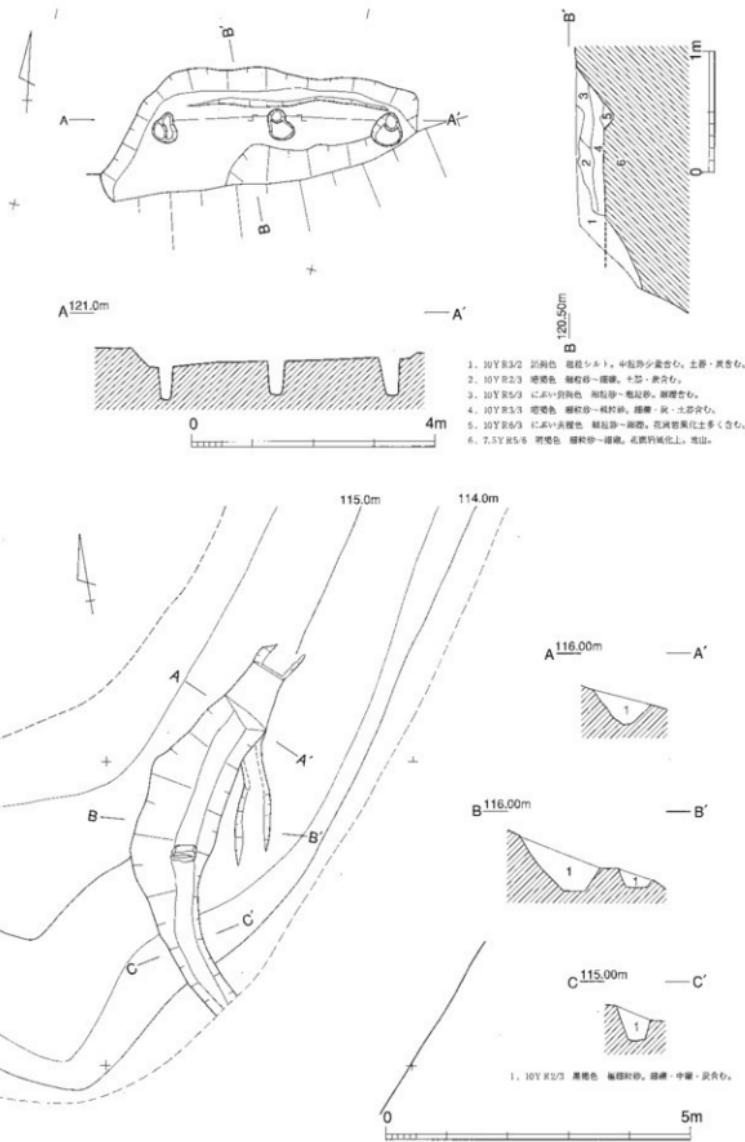
第22図 尼ヶ岡遺跡 SH-6・SD-2~4



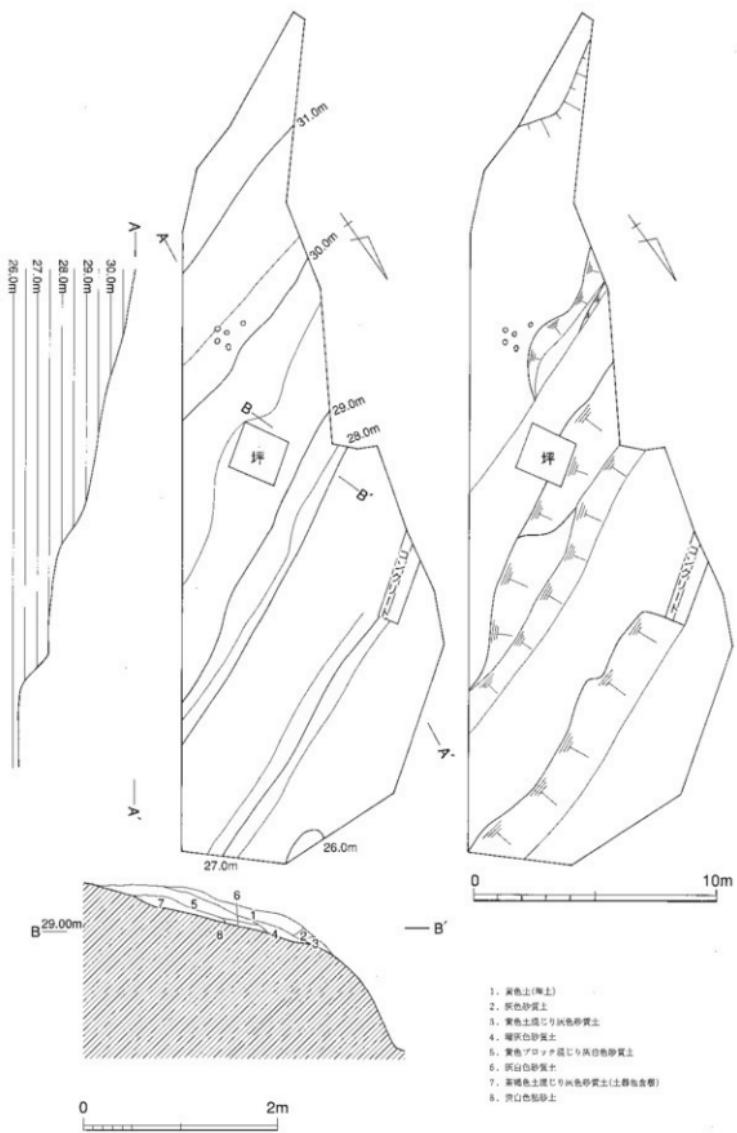
第23図 尼ヶ岡遺跡 SH-6・SD-2～4配置図



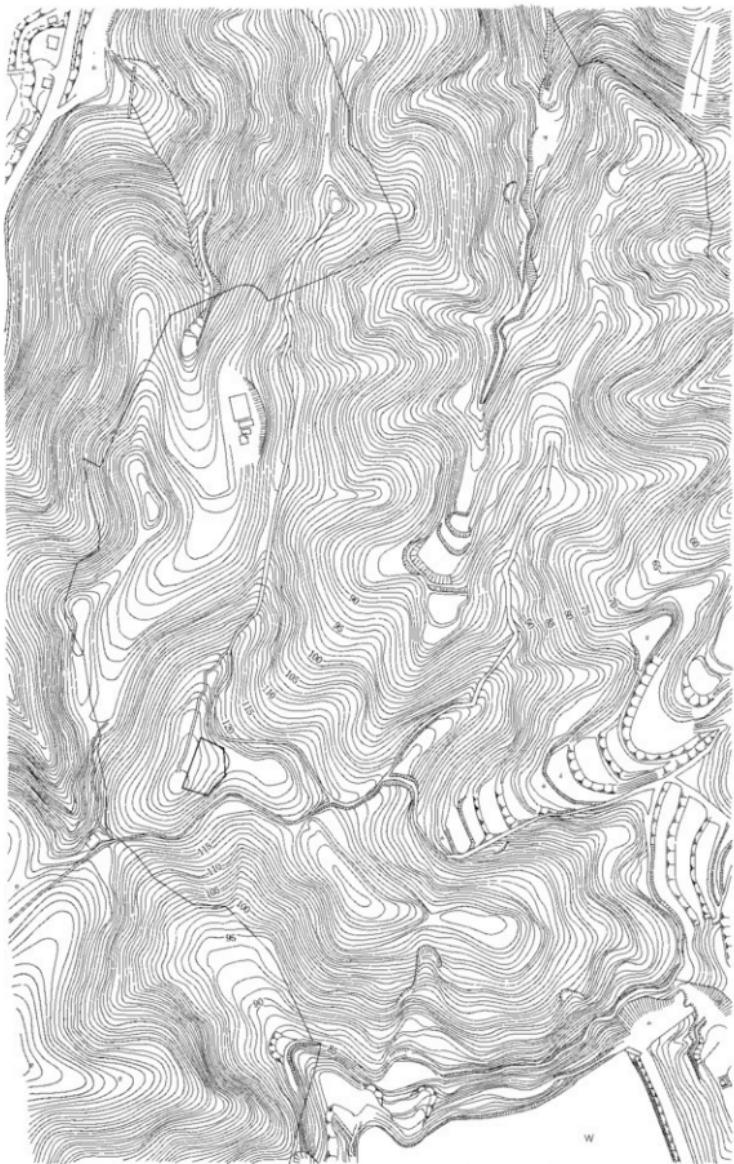
第24図 尼ヶ岡遺跡 SH-6 北東部遺物出土状況



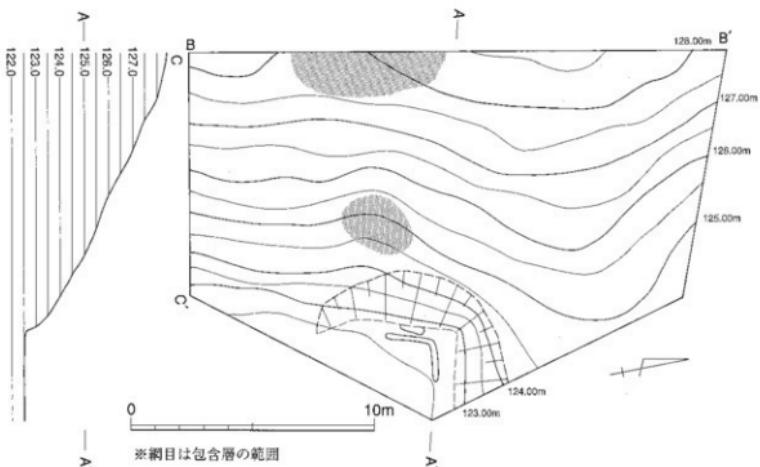
第25図 尼ヶ岡遺跡 SH-7・掘削状遺構



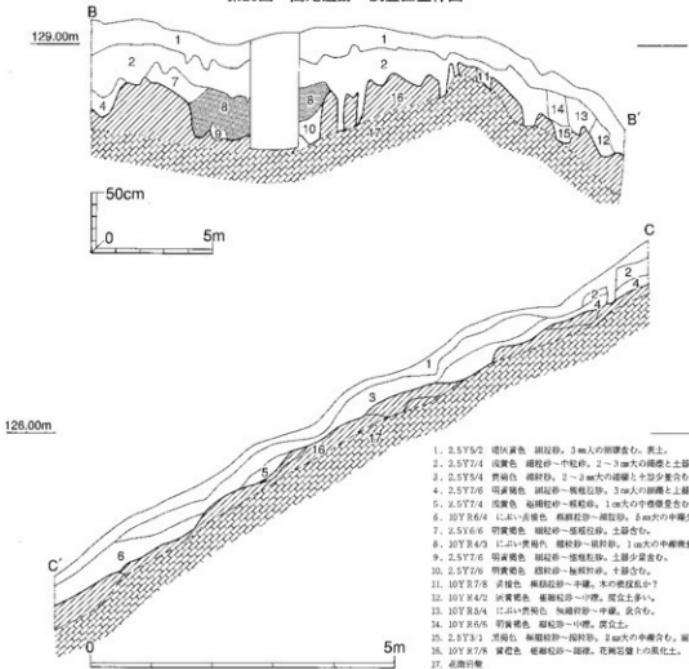
第26図 塩壺東遺跡 遺構全体図



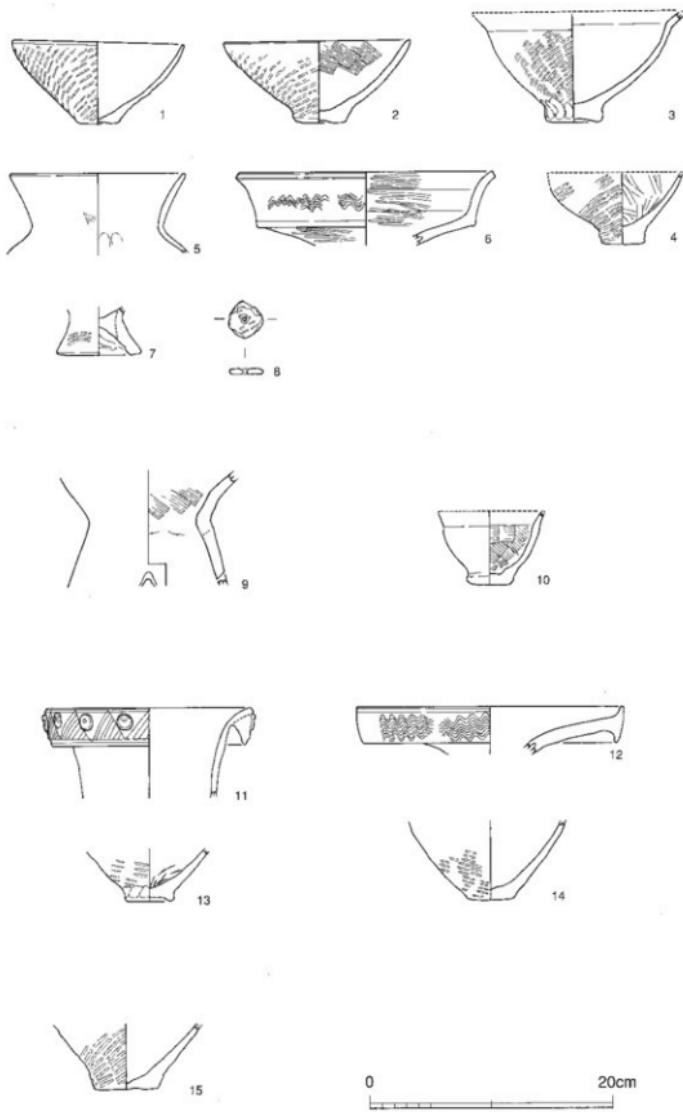
第27図 高尾遺跡 調査区位置図(1/2,000)



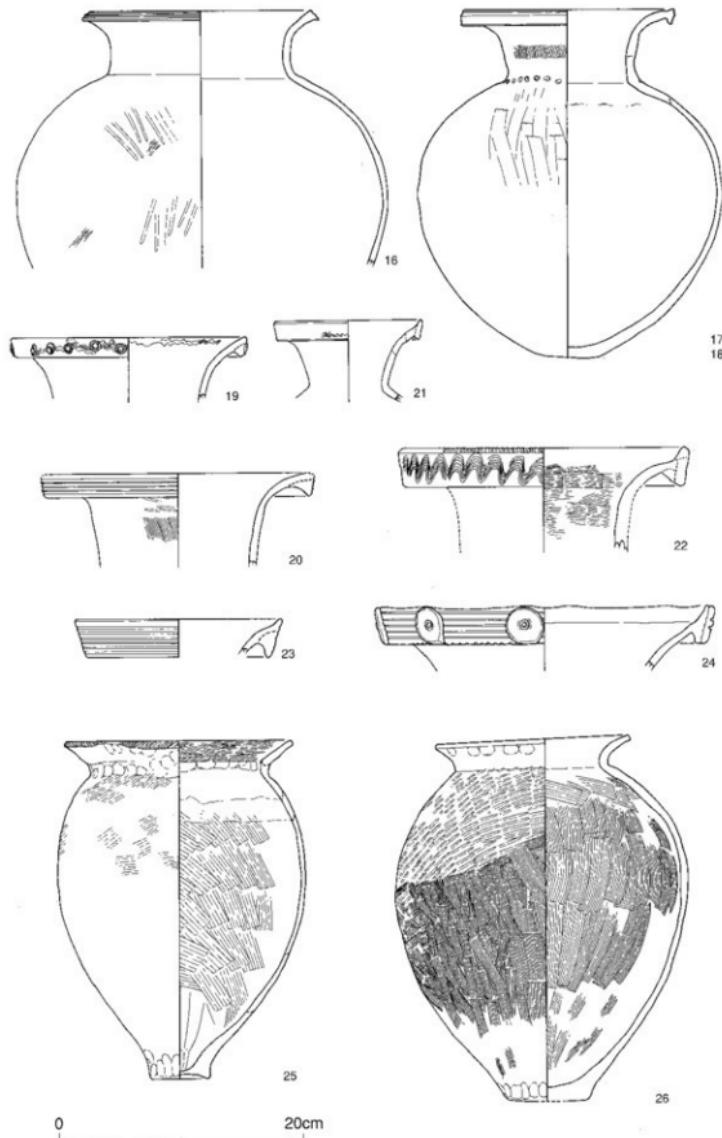
第28図 高尾遺跡 調査区全体図



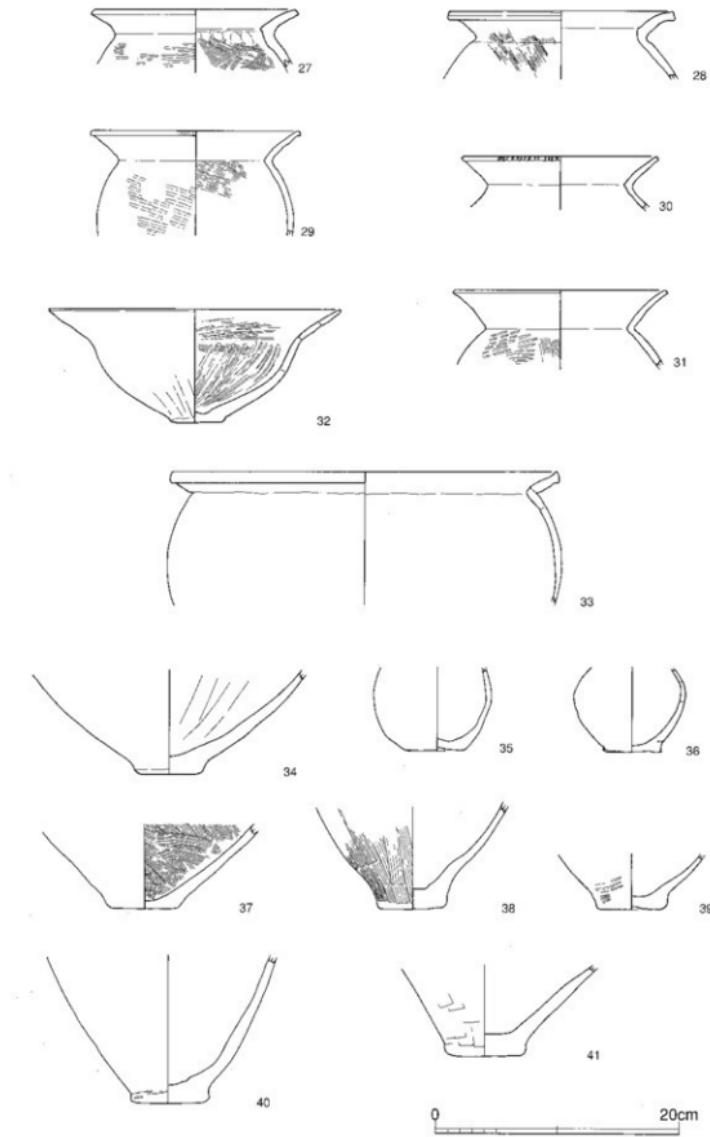
第29図 高尾遺跡 土層断面図



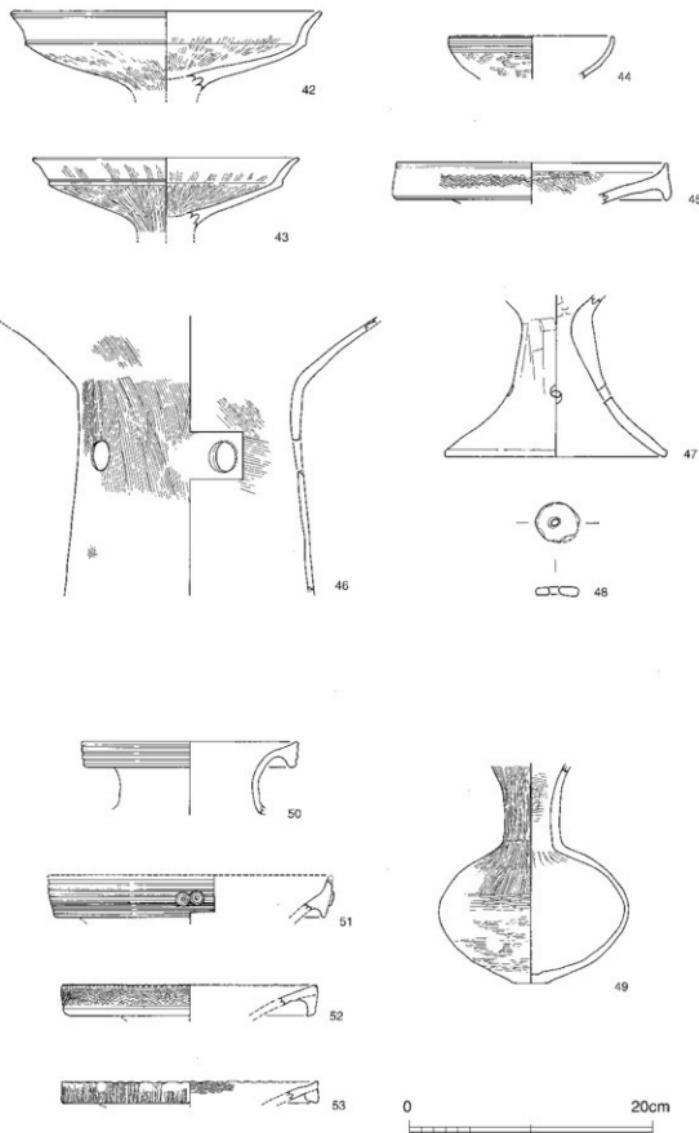
第30図 積山遺跡 遺構出土土器



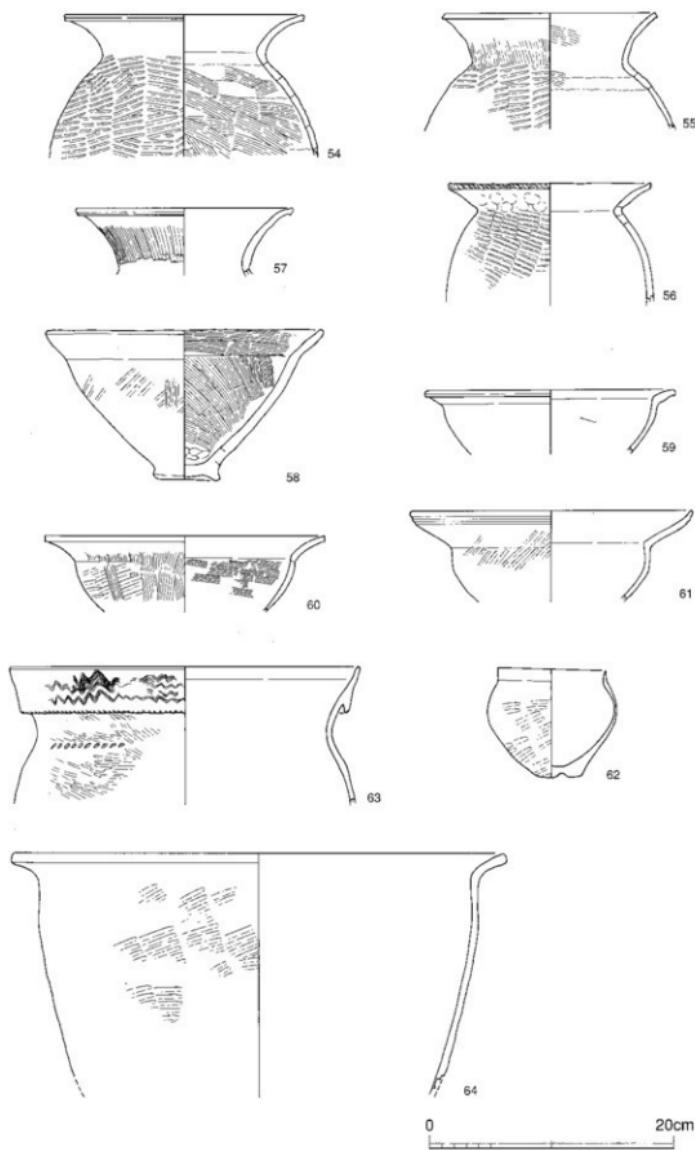
第31図 穂山遺跡 谷部出土土器(1) 下層



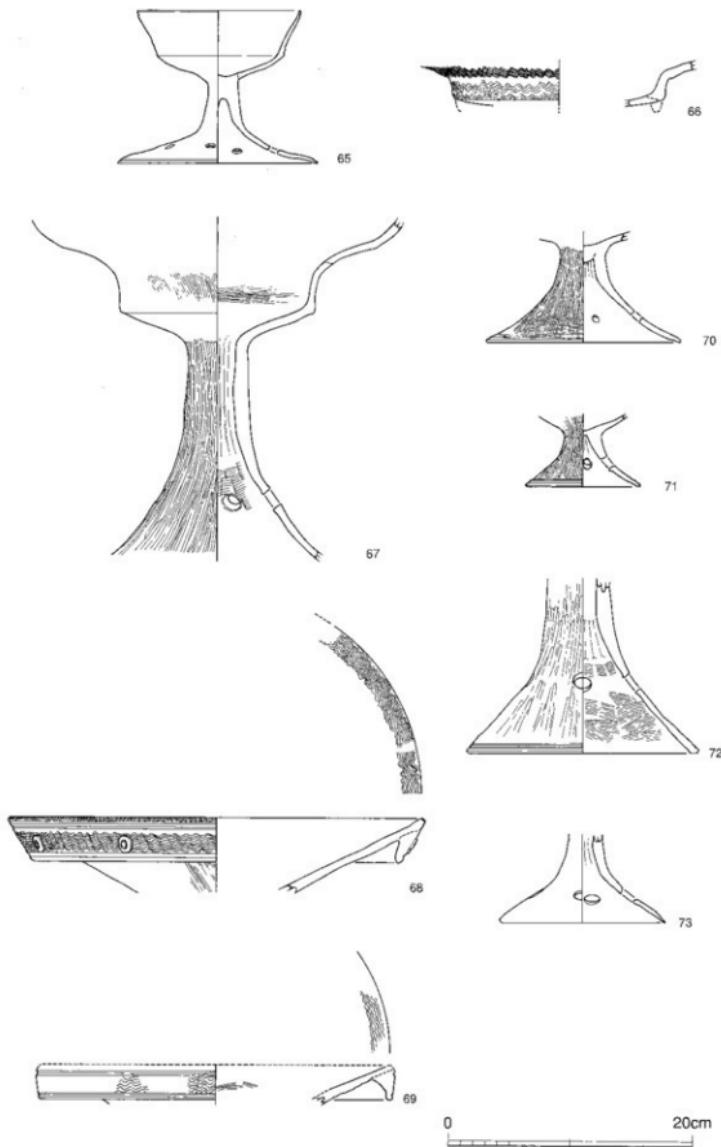
第32図 穂山遺跡 谷部出土土器(2) 下層



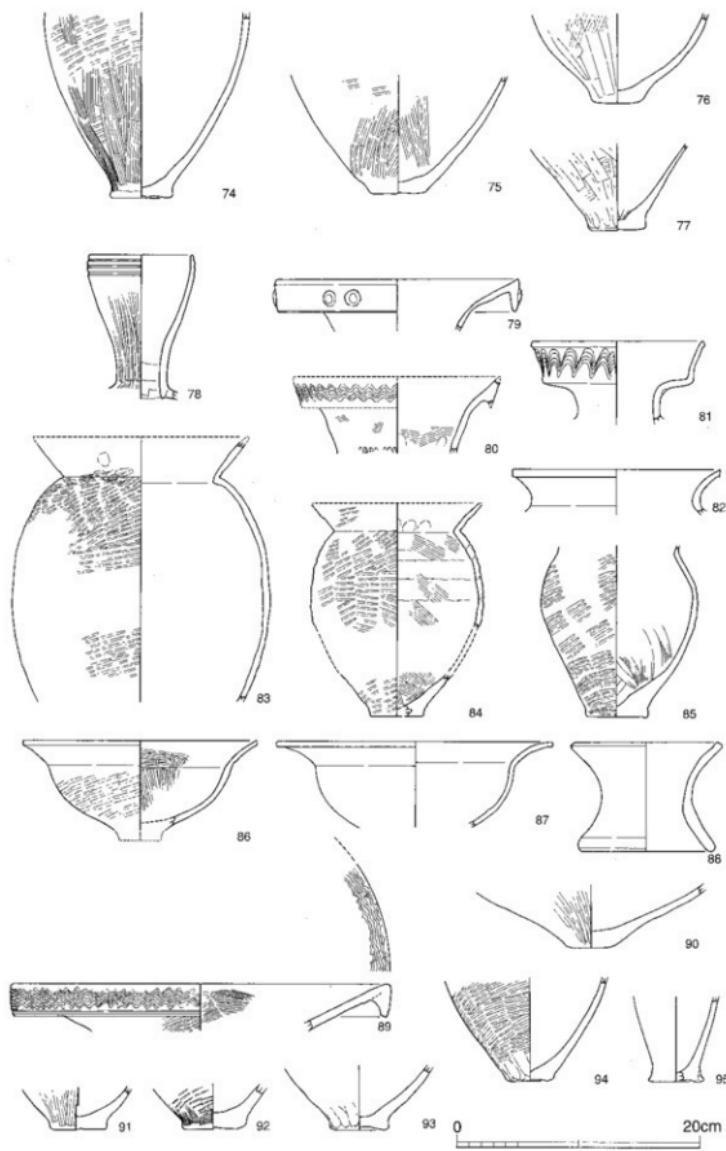
第33図 穂山遺跡 谷部出土土器(3) 下層・中層



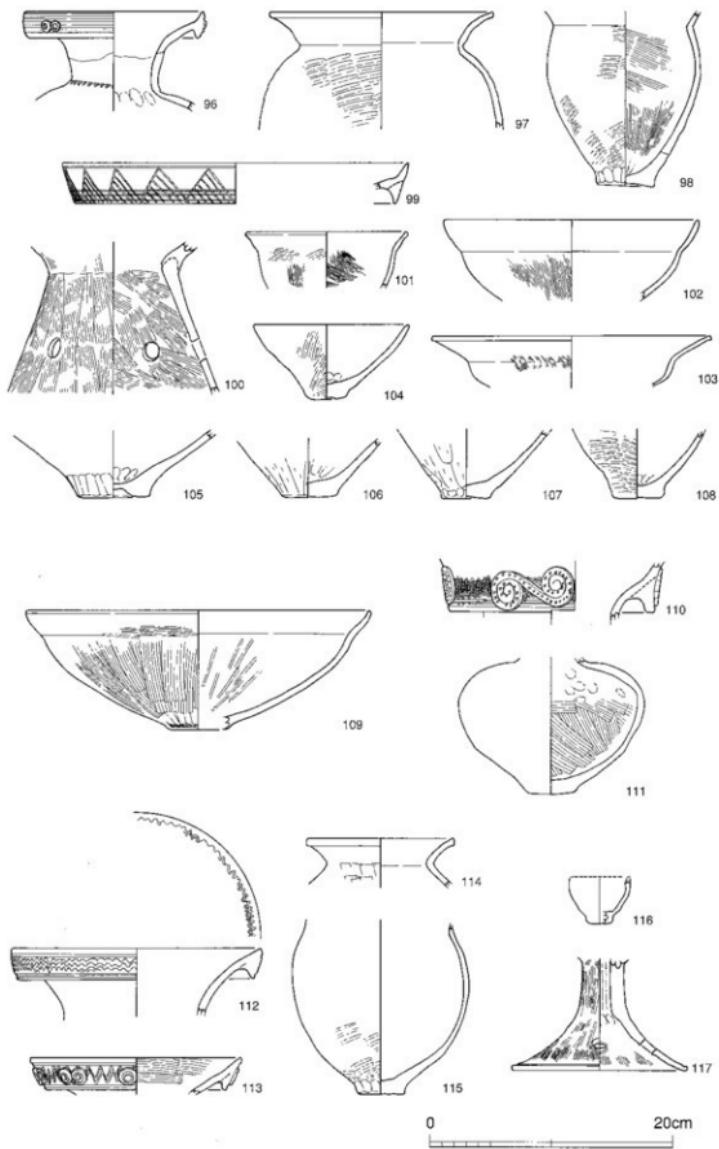
第34図 禿山遺跡 谷部出土土器(4) 中層



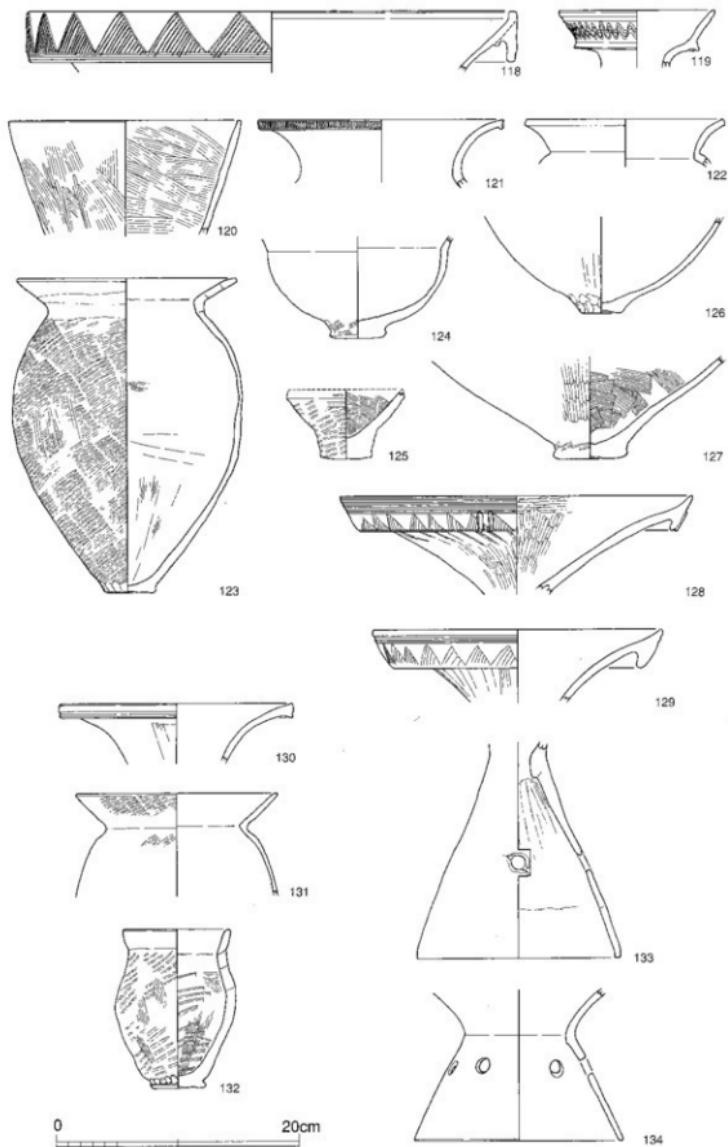
第35図 禿山遺跡 谷部出土土器(s) 中層



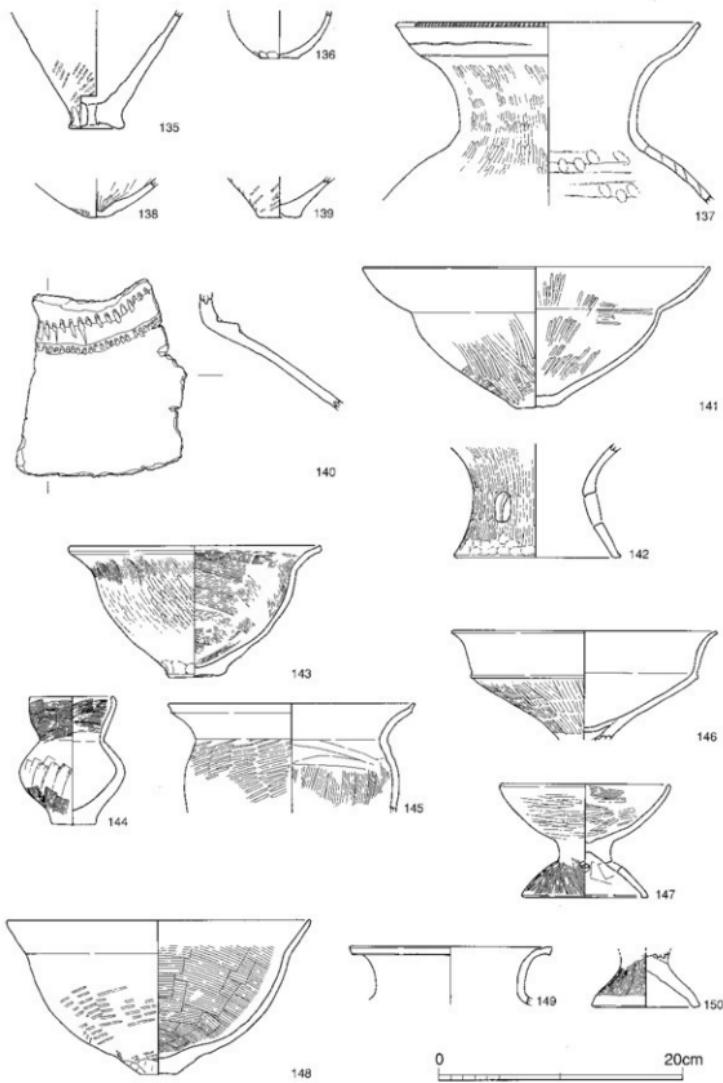
第36図 穂山遺跡 谷部出土土器(6) 中層・上層



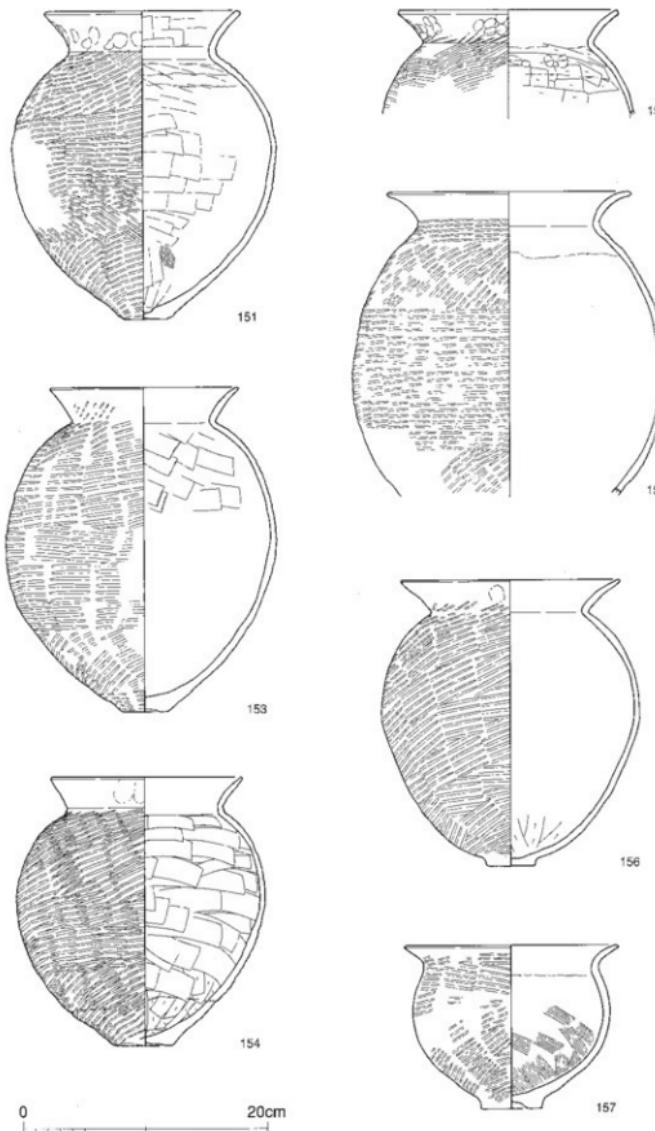
第37図 穂山遺跡 谷部出土土器(7) 肩部・その他



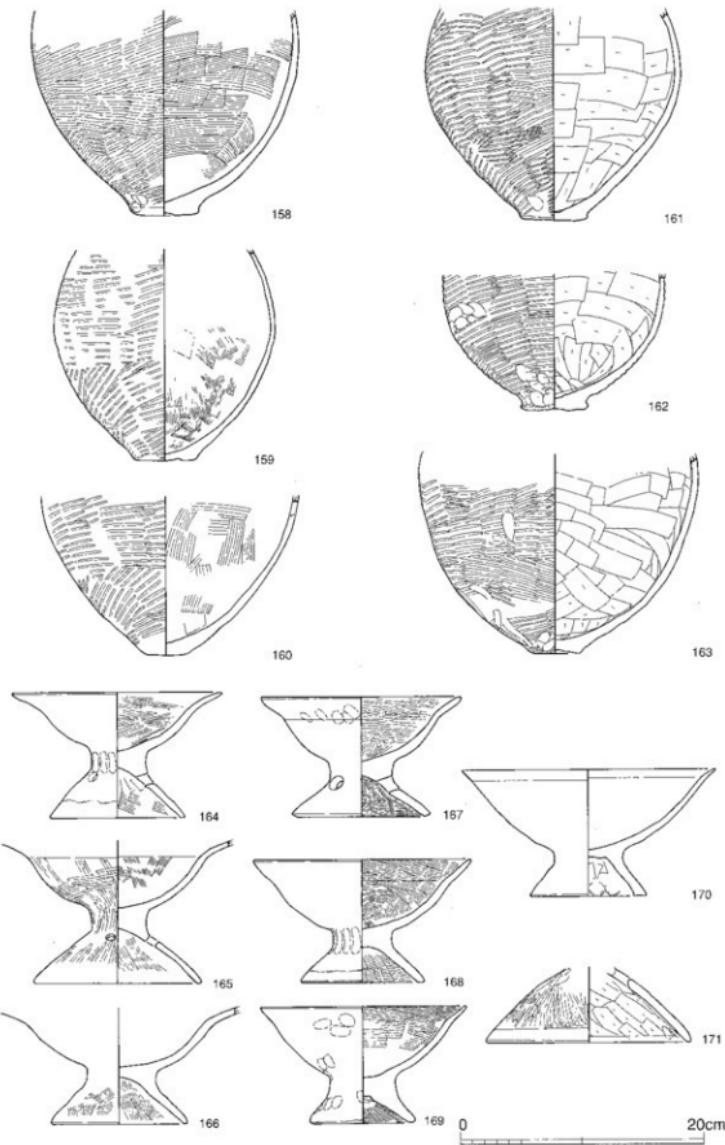
第38図 禿山遺跡 包含層出土土器



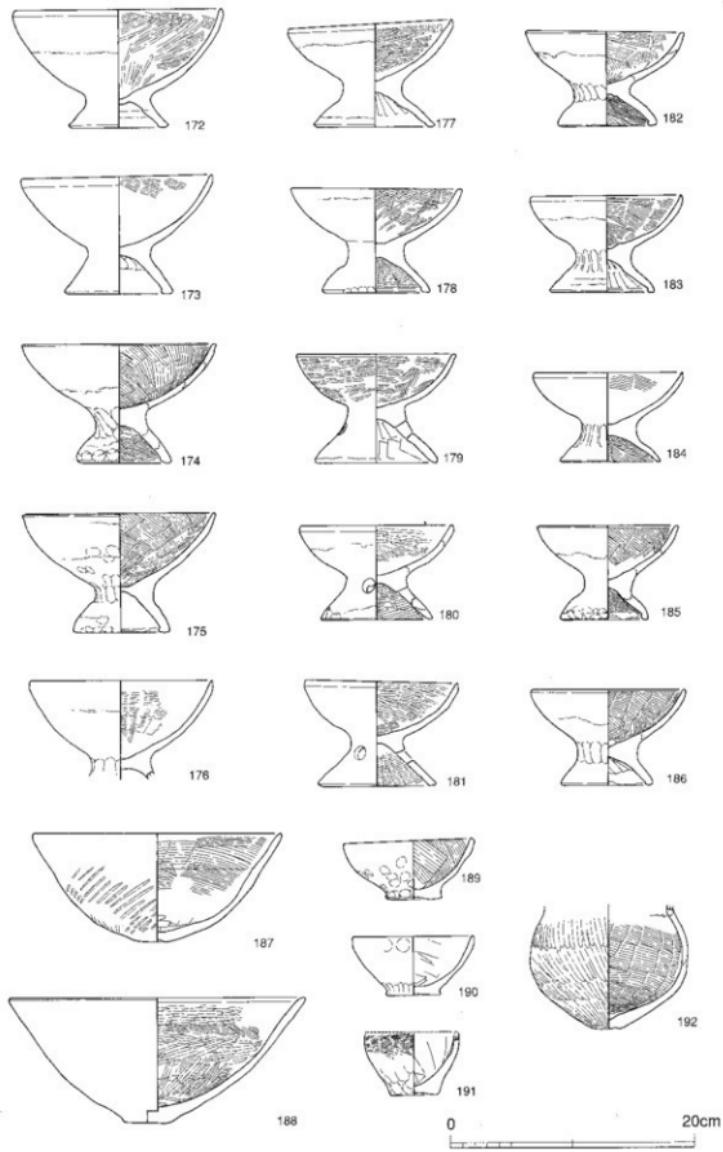
第39図 尼ヶ岡遺跡 V・VI区出土土器



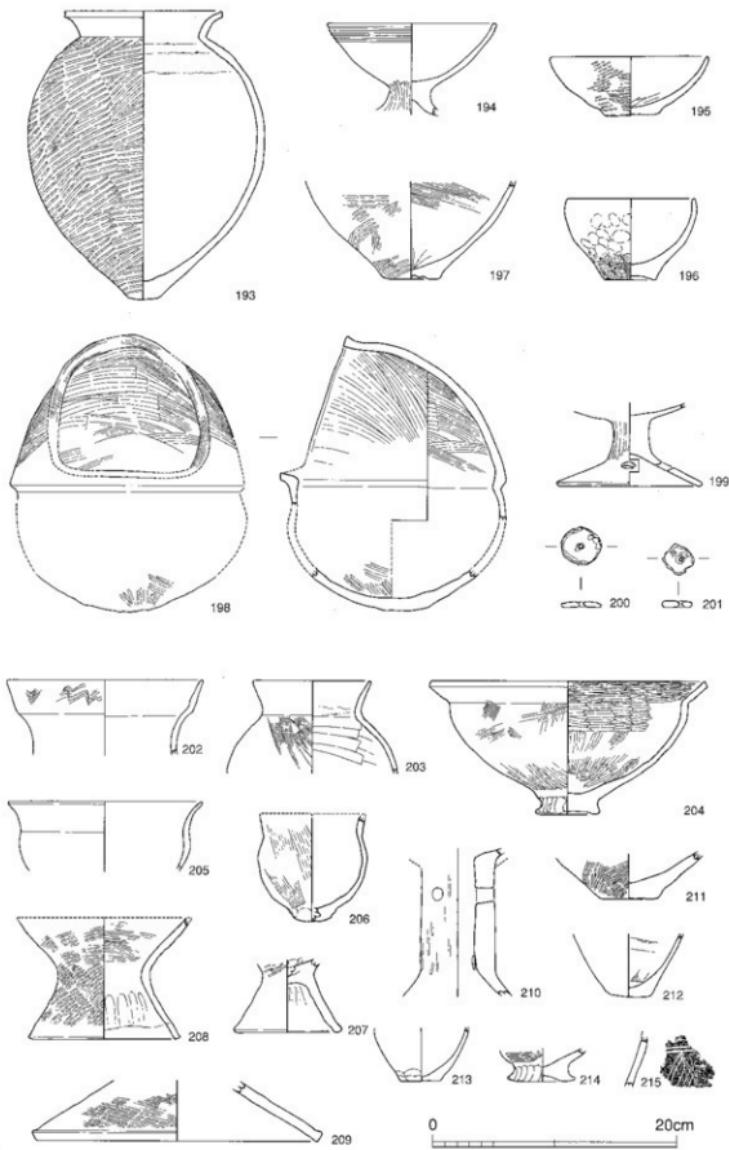
第40図 尼ヶ岡遺跡 SD-1 出土土器(1)



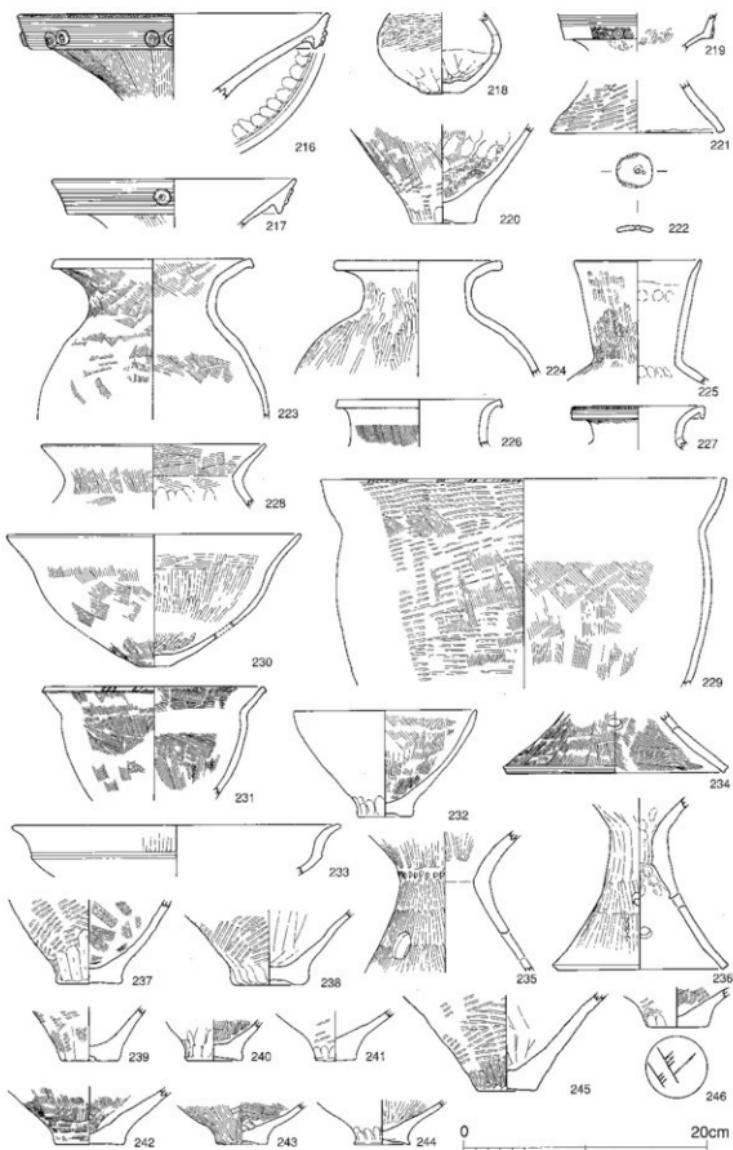
第41図 尼ヶ岡遺跡 SD-1 出土土器(2)



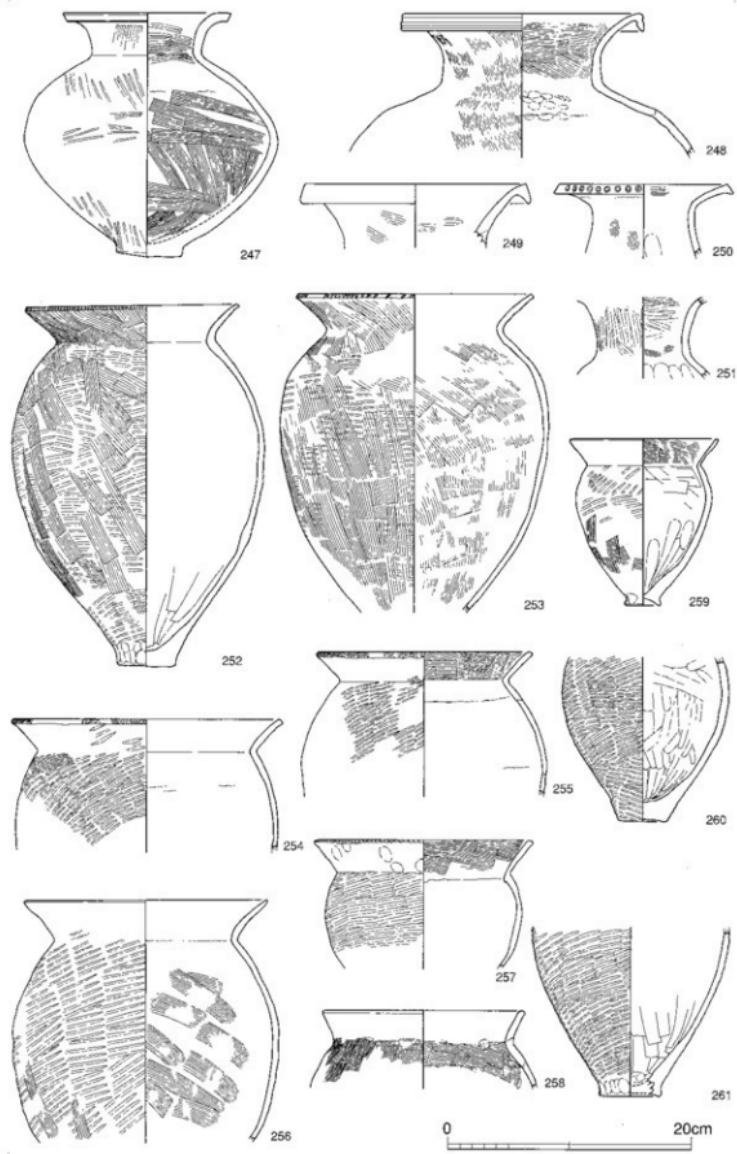
第42図 尼ヶ岡遺跡 SD-1 出土土器(3)



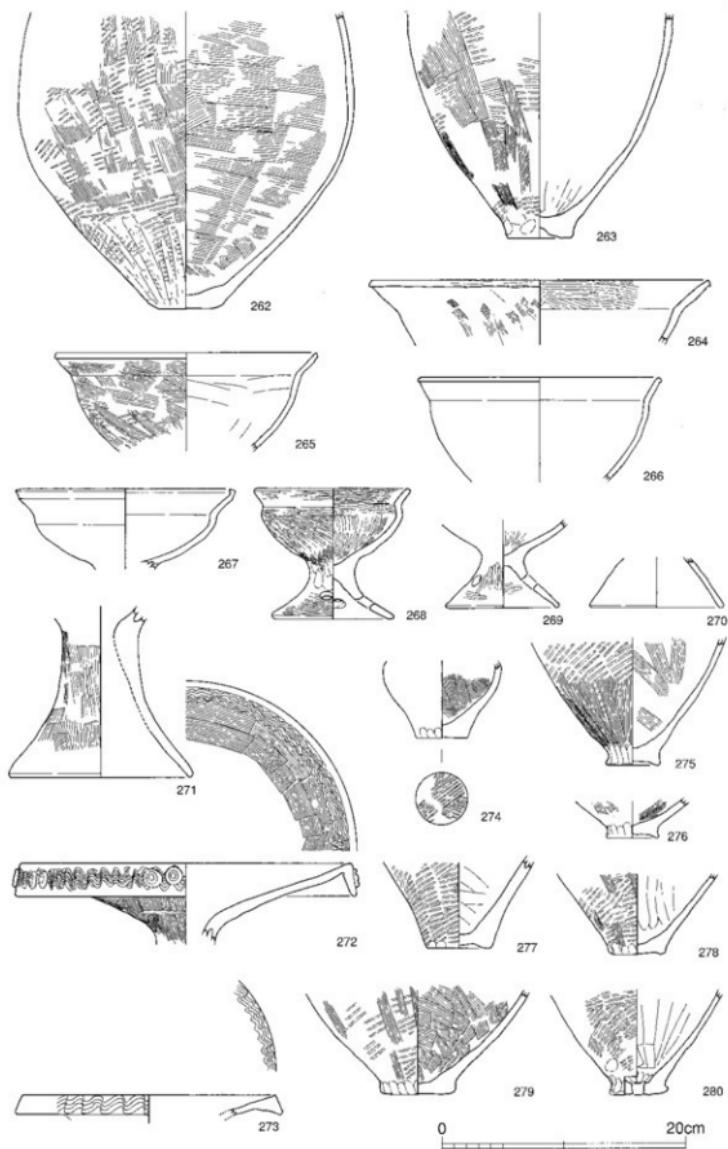
第43図 尼ヶ岡遺跡 SH-6・VI区包含層出土土器



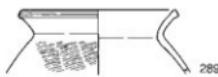
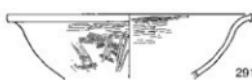
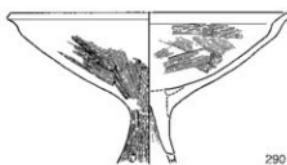
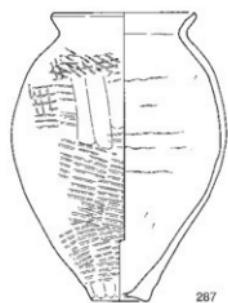
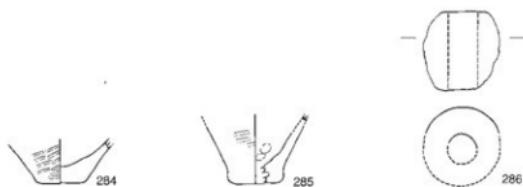
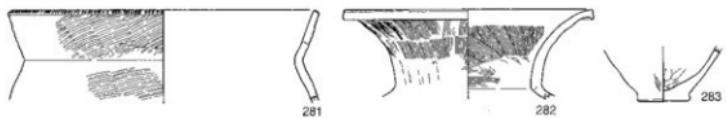
第44図 尼ヶ岡遺跡 SH-7, II・III区間斜面出土土器



第45図 尼ヶ岡遺跡 Ⅲ区テラス土器群出土土器(1)

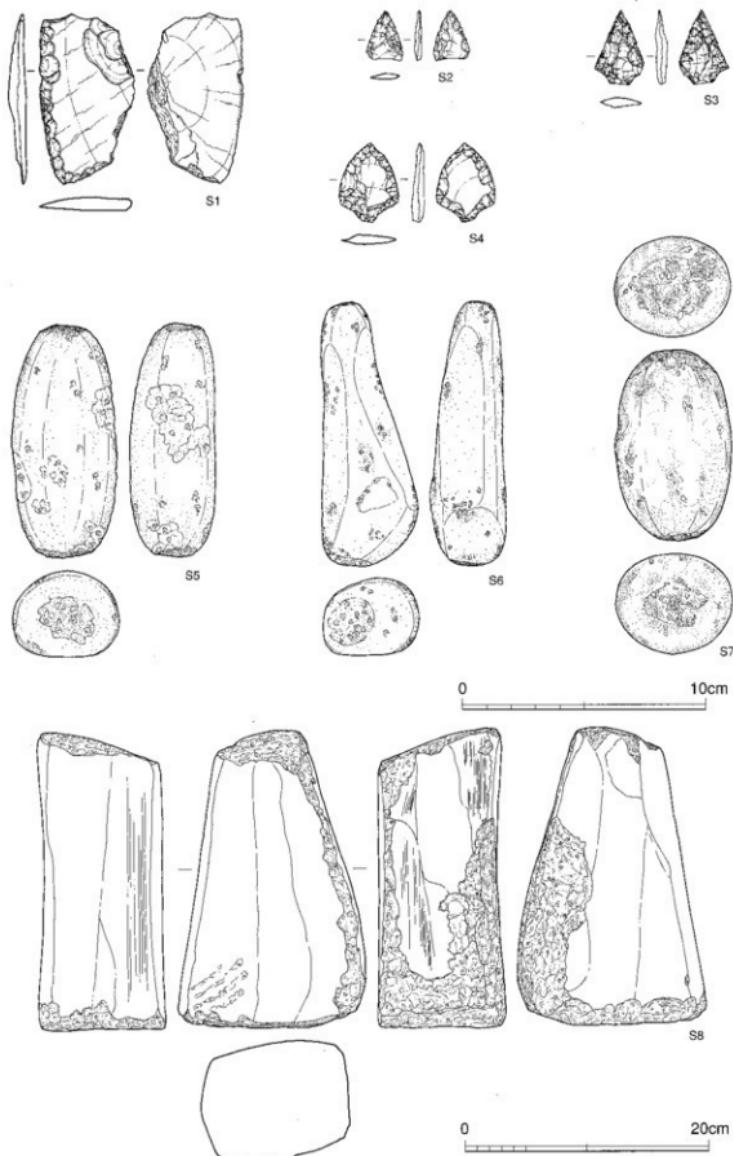


第46図 尼ヶ岡遺跡 Ⅲ区テラス土器群出土土器(2)

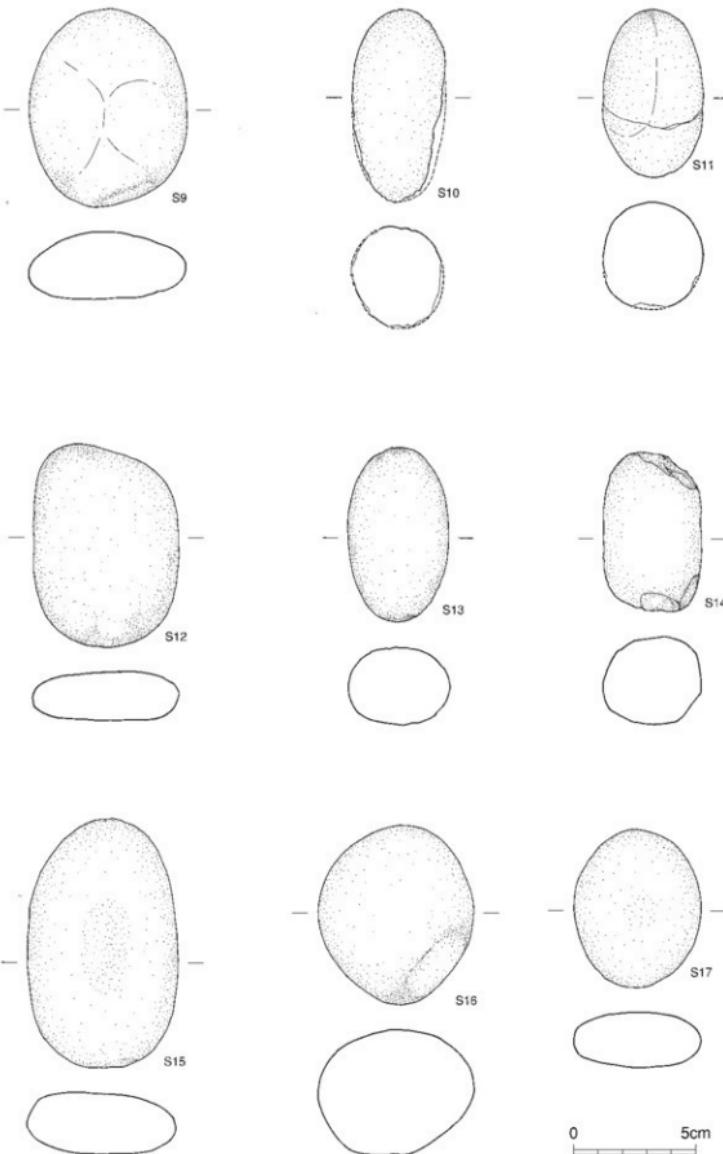


0 20cm

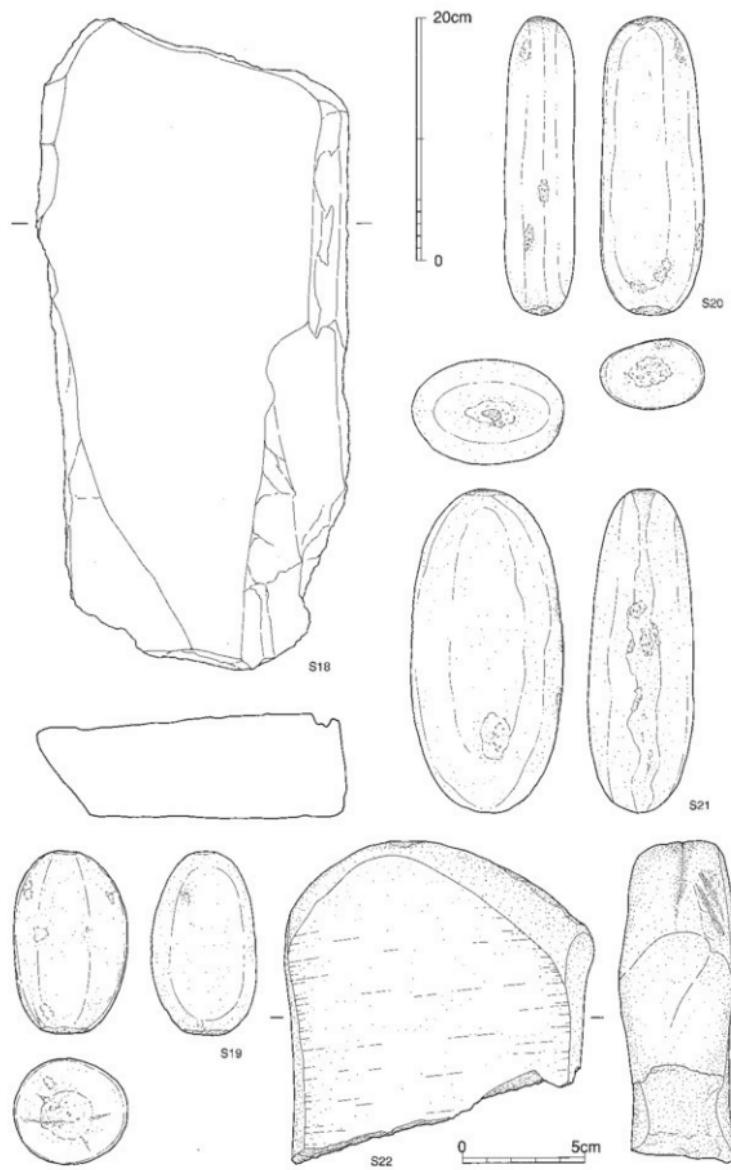
第47図 尼ヶ岡遺跡Ⅲ区・塩壺東遺跡・高尾遺跡 包含層出土土器



第48図 翁山遺跡・尼ヶ岡遺跡・塙臺東遺跡 出土石器



第49図 尼ヶ岡遺跡出土 石製投弾



第50図 尼ヶ岡遺跡・塩壺東遺跡・高尾遺跡 出土石器

第3章 まとめと考察

第1節 遺跡のまとめ

1. 禿山・尼ヶ岡遺跡の時期的変遷

禿山遺跡は標高120m前後の丘陵上に存在し、尼ヶ岡遺跡もほぼ同様である。また、平地との比高差は約70mあり、高地性集落の範疇に含めてよいであろう。

今回、両遺跡を調査した結果、多数の住居跡と多量の土器を検出した。また、それらの土器は後述するように弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてのもので、I期からV期に細分できた。

以下、その成果にもとづいて、両遺跡の消長および関係を探ることとする。

禿山遺跡で検出した住居跡はSH-1の1棟のみであるが、SX-2も住居跡である可能性が高い。また、禿山遺跡谷部出土土器は禿山・尼ヶ岡I～III期に細分できたが、SH-1はIII期に属し、SX-2はII期の可能性が高い。I期に属する遺構は今回の調査では検出されなかったが、多量の土器が出土していることから、住居跡の存在は間違いない、北側調査区外に存在するものと思われる。

一方、尼ヶ岡遺跡では住居跡を7棟検出したが、I期に属するものはSH-2、I～II期ではSH-7がある。III期の住居跡は認められず、上器も出土していないことから、III期には断絶があるようである。IV期にはSH-3と6の2棟があり、SH-1はIV～V期、V期にはSH-4がある。

両遺跡出土土器のうち、図示したものでは、禿山遺跡134点、尼ヶ岡遺跡149点である。集落を全握したわけではないため、遺跡の土器総量とは言がたく、危険を伴うが、住居跡の数と土器数を単純計算すると次のようになる。尼ヶ岡遺跡では住居跡を7棟検出しているが、うち、SH-8はやや不安を残すものである。したがって、図示した土器数を6棟で割ると、1棟あたり約25点となる。この数量を禿山遺跡のSH-1で考えてみると、III期のSH-1が供給源と考えられる谷部上層出土土器(III期)のうち図示したものは17点、住居跡出土の図示土器が8点であり、合計25点となり、うまく合致する。禿山遺跡の図示土器の総数である134点を25点で割ると、住居の総数は約5棟となる。谷部中層(II期)出土の図示土器は29点、SX-2は4点で、合計33点で、1棟よりも多い数となる。下層(I期)出土土器についても32点で、1棟よりも多い。これを、I期1棟、I～II期1棟、II期1棟(SX-2)、III期1棟(SH-1)とすると合計4棟となる。ほかに、谷肩部や旧河道出土土器があり、これらにはII期に属するものが多いことから、II期の住居をもう1棟増やすと合計5棟となる。きわめて大雑把な判断であるが、目安としてとらえていただきたい。

以上のことから、両遺跡内の住居の時期的変遷を推定すると次のようになる。

I期は禿山・尼ヶ岡両遺跡で各1棟、I～II期でも各1棟、II期のみでは禿山遺跡で2棟、III期は尼ヶ岡遺跡では認められず、禿山遺跡で1棟、IV期以降禿山遺跡は廃絶しており、IV期の尼ヶ岡遺跡で2棟、IV～V期のものは1棟、V期も尼ヶ岡遺跡で1棟である。

両遺跡を通じて、I期より前の土器は僅かな例以外には出土していないことから、I期に禿山・尼ヶ岡両遺跡で居住が開始されている。I期は両遺跡各1棟で、I～II期両遺跡で建て替えが行われ、II期では禿山遺跡で2棟に増え、III期には1棟に収束する。尼ヶ岡遺跡ではIII期の住居が存在しないこと、禿山遺跡の2棟が1棟に減少し、IV期以降禿山遺跡が廃絶することを併せると、III期からIV期にかけて、

両集落にとって何らかの変革があったものと推測される。IV期以降は尼ヶ岡遺跡でIV期・IV～V期・V期各1棟となり、V期の住居ではSD-1に示されるように祭祀的なものが行われ、尼ヶ岡遺跡も廃絶する。土器の編年位置づけから、III～IV期は弥生時代後期末～庄内併行期にあたり、畿内の高地性集落集落が終息する時期である³⁹。V期は古墳時代初頭であるが、淡路の高地性集落が終息する時期である。これらの時期とその背景を考えるとき、集落の消長から社会の変化を読み取れるのではないかと考えられる。

一方、今回多くの住居跡が検出され、他にも住居の存在が推定できたが、ある時点での住居の数はそれぞれの遺跡で1棟あるいは2棟となり、小規模な集落であることが判明した。このことと高地性集落であることを加味すれば、母集落が近くに存在していることが推察される。母集落はやはり可耕地が豊富で近い場所に存在するものと思われ、禿山・尼ヶ岡遺跡の場合、母集落はその規模から白山真土遺跡である可能性が考えられる。白山真土遺跡は1棟の住居跡が調査されたのみであるが、後述するように、禿山・尼ヶ岡I期よりも前に遡る時期である。また、第65図に示したように遺跡範囲が広いことも推定根据であり、この集落を核として見張り的機能を持つ禿山・尼ヶ岡が衛星的に営まれたものと推測しておきたい。

2. 高尾遺跡からみた高地性集落の選地要件

高尾遺跡は、後期前半のある時点の短期間に営まれ、規模も非常に小さい遺跡である。このような短期間の極小規模の遺跡は、本例のようにすぐ近くには可耕地の推定すらできない場所ばかりで、立地も、非常に見晴らしのよい場所に存在していることが多い。淡路町域ではサセブ遺跡・土穴遺跡・岡山遺跡がある。いずれも明石海峡を望む標高100m前後の丘陵上に所在し、小規模の遺跡である。また、これらの遺跡が所在する場所は周囲から容易に確認できるため、見張り台やのろし台といったような機能が考えられるであろう。

一方、塩瀬西遺跡では、このような立地の住居がある一方で、周囲からは見えにくい場所に所在する住居もある。さらに、周囲から見えにくい住居の近くには、水田經營が可能と考えられる谷が存在している。一方、禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡では、1箇所でこれらの要件を備えた場所を選んでいるようである。すなわち、住居からの眺望がよいが、周囲からは見えにくく、すぐ近くに水田經營可能な谷が所在する場所である。ただし、ここでも母集落は白山真土遺跡と推定され、周囲を見渡すことができにくい場所である。

すなわち、古い段階では不便な場所に見張り台・のろし台を設けていたが、しだいに、通常の生活ができる場所で、なおかつすぐ近くに眺望が良い所をもった場所を選んで集落が営まれている。また、後者には小規模・大規模の集落が認められるようである。

しかし、横本下林遺跡が後期前半の段階で周囲からは見えにくく、遺跡からの眺望にやや恵まれておらず、可耕地がすぐ近くに考えられる位置に存在していることから、このことが時期を追って変化していくとは言い難いが、生活上、これらの要素を兼ね備えた場所が高地性集落の意味からはレベル的に高次にあると思われ、眺望が良く周囲からは見えにくいといった矛盾した要素をより高次元に求め、なおかつ生活上便利で生産性の高い耕地も求めたものと思われる。さらに、選地にあたっては集落の規模も考慮しなくてはならない要件であったことも推定できるのである。

第2節 出土土器のまとめ

1. 出土土器の型式分類

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡・高尾遺跡で出土した土器は弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての限られた時期のものであるが、出土量が多い。また、禿山遺跡の谷部出土土器が3層に分かれて出土しており、それらに器形変化が認められることなどから、縦年に数段階に細分が可能である。

したがって、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器編年細分をするための前提として、記述の煩雑を避けるために 出土土器の型式分類を行うこととする。

土器の器種については、壺形土器、高杯形土器、器台形土器、壺形土器、鉢形土器などが出土しているが、以下、これらの器種名のうち、「形土器」を省略して記述してゆく。

なお、第2章本文中の土器型式名は本分類によるものである。

壺(第51図)

壺は広口壺、細頸壺、長頸壺、短頸壺、二重口縁壺が出土している。

壺についてはこれを第1次分類とし、広口壺については出土量が多く、型式差が大きいため、第2次分類を行った。ただし、完形品がほとんどないため、口縁部形状の特徴によって細分した。

広口壺

A : 口縁部が外反し、罐部に面を持つが、端部を拡張しないものである。

A a : 肩部から外反するだけの単純な口縁部をもつもの。

A b : 肩部からほぼ直立した頸部をもち、頸部から外反するもの。

B : 口縁部が外反し、罐部を拡張するものである。

B a : 端部の拡張が少ないもの。

B b : 端部を下方に大きく拡張するもので、端面を退化凹線・波状紋などで飾る。

B c : 端部を下方に拡張するが、下垂部の器壁が薄く、断面「L」字形を呈し、端面を退化凹線・波状紋などで飾る。

B d : 端部を下方に拡張し、断面三角形状を呈するもので、罐面を退化凹線・波状紋などで飾る。

肩部からそのまま外反するものと、頸部が直立したのち外反するものがある。

細頸壺：外傾気味に直立したのち端部付近で内湾する口縁部をもつ細い頸部の壺である。

長頸壺：外傾気味に直立した長い口縁部をもつもので、体部の1/2程度の長さのものも含む。

短頸壺：外傾気味に直立した短い口縁部をもつものである。

二重口縁壺：ほぼ直立した頸部から大きく外反したのち、屈曲して上方にのびる口縁部をもつもので、端部外面を紋様で飾るものが多い。

高杯(第51図)

高杯も完形品がほとんどないため、杯部の形状によって細分した。

A : 杯底部から屈曲して上方にのびる口縁部をもつもので、大きさなどから3つに細分した。

A a : 大型の杯部をもつもので、口縁端部は外反する。

A b : 小型の杯部をもつもので、口縁部が長く、直線的にのびる。脚部は大きく外反し、広がる。

A c^⑨ : 小型のもので、口縁部が緩やかに外反するもので、杯底部は椀形に近く、脚部は小さく短い。

B : 杯底部はやや深めで内湾し、口縁部は屈曲して短くのびる。

C : 内湾する深めの杯底部で、口縁部外面に退化凹線を施すものと施さないものがある。

器台(第52図)

器台も完形品がほとんどないため、口縁部の形状によって細分した。

A : 脚部からほぼ直線的に外上方にのびる口縁部をもつもので、端部を拡張し、施紋する。端部の形状から3つに細分した。

A a : 口縁端部は上下に大きく拡張するが、端面は内傾し、一見、下方のみ拡張したように見えるもの。端面の紋様には3種の組み合わせがある。

A b : 口縁端部を上下に大きく拡張し、端面が垂直に近いもの。

A c : 口縁端部を下方にのみ拡張し、端面に施紋するもの。垂下部の器厚は薄いものと厚いものがある。

B : 中央部がくびれるだけの単純な器台で、口縁端部の拡張も行わない。いわゆる粗製の「淡路型器台」である。外面に叩きを残すものが多い。

C : いわゆる有段口縁の器台である。上部屈曲部が棱をもつものとゆるやかなものがある。

D : 口縁部が屈折して外上方に外反しながらのびる、高壇状の杯部をもつもの。いわゆる精製の「淡路型器台」の範疇に属すると思われるものである。

E : 大形の器台であるが、口縁部が遺存しているものはない。

甕(第53図)

出土土器のうち最も量が多いものである。小形・中形・大形があり、中形のものを甕1、小形のものを甕2、大形のものを甕4とし、中形で浅いものを甕3とした。

1 : 中形の甕であり、体部と口縁部の境の屈曲部の形状により、A、Bの2種に分類した。

1 A : 体部と口縁部の境の屈曲部内面が明確な棱をなさず、ゆるやかなものである。口縁部の形状により、さらに4種に分類した。

A a : 口縁部が直線的に短くのびるもの。口縁端面に叩き原体による刻み目状の紋様を施すものがある。

A b : 口縁部が直線的に長くのびるもの。端部は尖り気味のもので、長胴のものが多い。肩がやや張るものなどで肩のものがある。体部外面は叩きのち刷毛調整で、内面は継刷毛のものや横刷毛のもの、外面が叩きのみで、内面が横方向の板ナデのものがある。口縁端面叩き原体刻み目状紋様を施すものがある。

A c : 口縁部が外反し、短くのびるもの。端部は面をもつ。体部外面は叩きのち刷毛調整、内面は継方向の刷毛である。

A d : 口縁部が外反し、長くのびるもので、端部に面をもつものとそうでないものがある。なで肩のものが多い。口縁端面叩きによる刻み目状紋様を施すものがある。

1 B : 体部と口縁部の境の屈折部内面が明確な棱をなし、鋭いものである。口縁部の形状により、さらに3種に分類した。

B a : 口縁部が直線的に長くのびるもので、端部に内傾する面をもつものが多い。端部付近でやや屈曲するものがある。

B b : 外反する短い口縁部をもつもので、端部は垂直あるいはやや内傾する面をもつ。上部に若

千つまみあげるものもある。

B c：直線的に短くのびる口縁部で、端部には広い面をもち、断面三角形状を呈する。口縁端面叩き原体刻み目状紋様を施すものがある。

2：小形の甕で、口縁部は直線的に外上方にのび、屈曲部内面はやや鋸い。

3：中形で器高が低いものである。口縁部は外反しながらのびるものと直線的のものがある。外反するものは屈曲部内面はゆるやかで、口縁部が直線的なものは屈曲部内面が鋸い。口縁端部に面を持ち、上方に引きのばすもの、面をもつだけのもの、尖り気味に丸くおさめるものがある。

4：口縁部が屈曲する大形の甕で、口縁部および体部の形状から、さらに2つに分類した。

4 A：内湾しながら外上方に開く体部から、屈曲して内湾する口縁部をもつもの。端部は面をもつ。鉢に近い形状を呈する。

4 B：内湾して一旦すぼまった体部から、屈折して直線的に短くのびる口縁部をもつもの。端部には面をもつ。

鉢(第54図)

鉢は大きく5つに分類した。口縁部が外反するものと外反しないもの、有孔のもの、脚付のもの、大形のものがある。

1：体部は内湾し、口縁部が外反するもので、口径と口縁部の形状により、さらにA～Dの4つに分類した。

1 A：口径が大きいもので、器高は比較的浅いものである。口縁部は内湾気味となっている。

1 B：体部と口縁部の境の屈曲はゆるやかで、口縁部は長くのびるもの。

1 C：体部と口縁部の境の屈曲は鋭く、口縁部は短く、内湾気味のもの。

1 D：体部と口縁部の境の屈曲は鋸いが、口縁部が外反し、長くのびるもの。

2：体部は内湾気味にのびて、そのまま口縁部となる単純なもの。口径により大形と小形の2種があり、口縁部が若干外反する深いものも鉢2に含めた。

2 A：鉢2のうち大形のもので、深いものと浅いものの2種がある。

2 B：鉢2のうち小形のもの。

2 C：深い形のもので、口縁部が短く外反する。

3：有孔の鉢である。完形品はない。

4：短い脚台が付く鉢で、口縁部の形状により、さらに2種に分類した。

4 A：浅い楕形の鉢部に短い脚台が付く。脚には透かし孔を穿つものとそうでないものがある。高杯Cとの分離が難しいものである。

4 B：やや深い楕形の鉢部に、屈曲して外上方にのびる短い口縁部をもつもの。

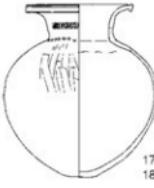
5：大形の鉢である。口縁部の形状により、さらに2種に分類した。

5 A：口縁部が外反するもので、外面には叩き痕を残すもの。鉢に近い形状のもの。

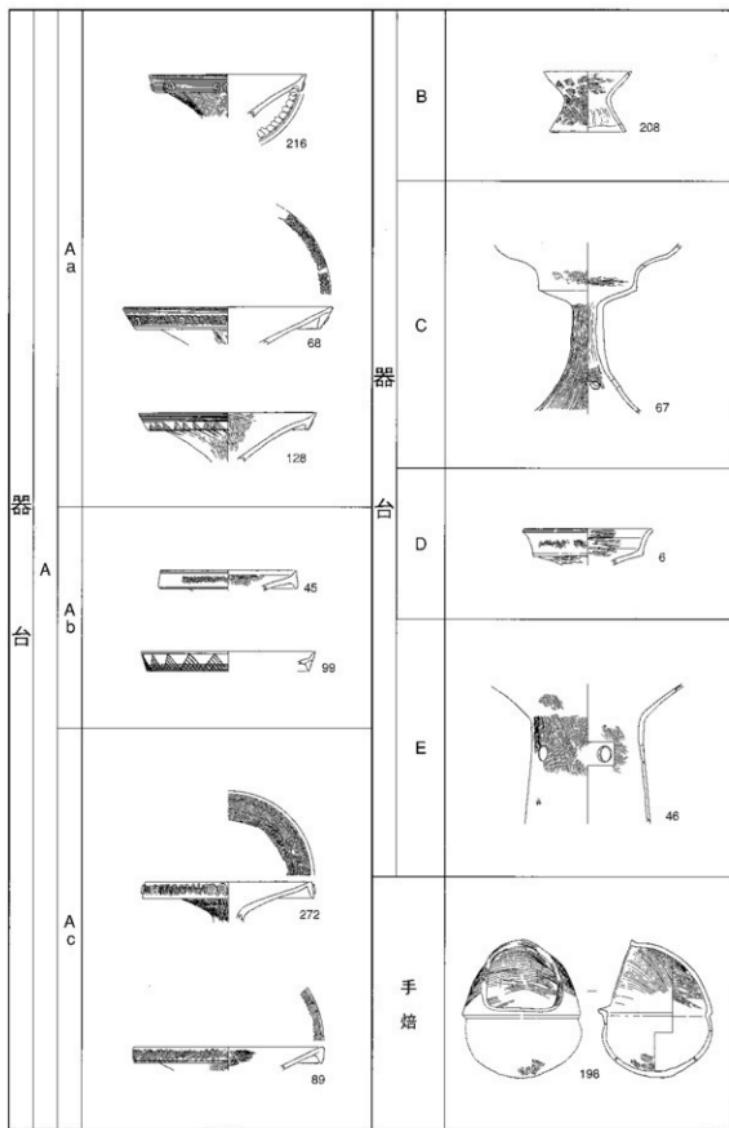
5 B：体部は内湾してすぼまったのち、外反してのびる口縁部をもつもので、口縁部は下方に拡張し、施紋する。

手焙(第52図)

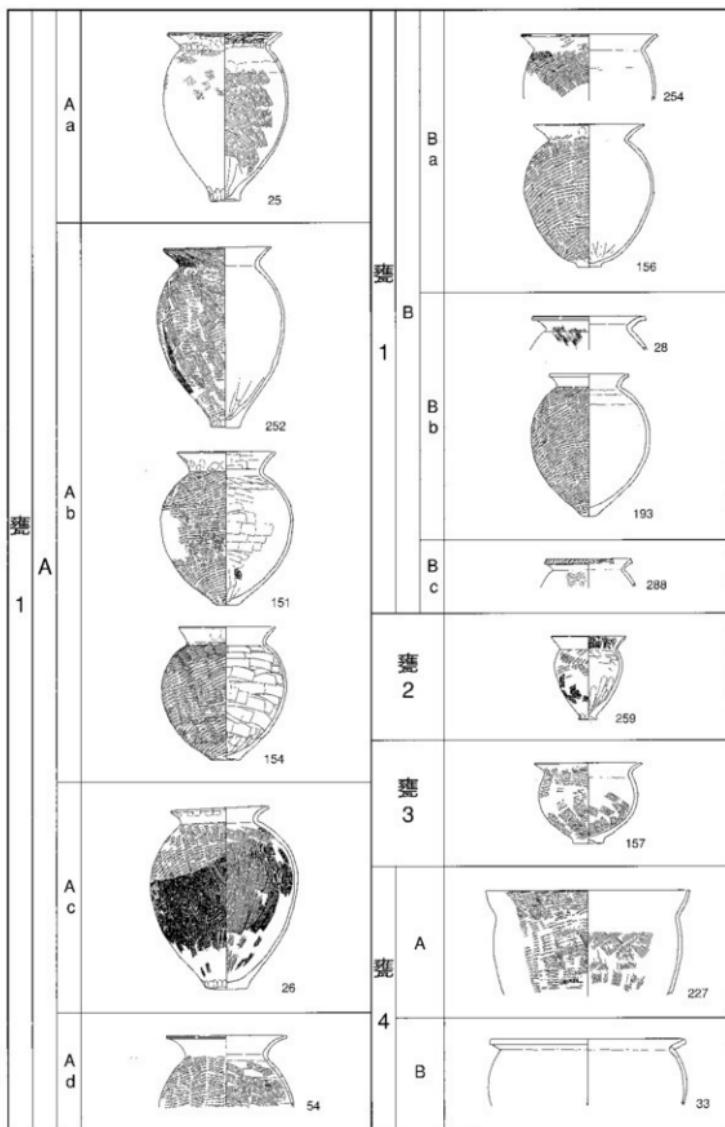
覆部は口縁部に接合し、接合部は屈曲するのみである。覆端部は若干肥厚し、外反する。底部はほぼ丸底のもので、口縁は外反する。

			細 頸 壺	 282
A	Aa	 247	長 頸 壺	 78  225  144
A	Ab	 247	短 頸 壺	 203
B	Ba	 17 18	二重 口 縁 壺	 81
廣			Aa	 42
口	Bb	 23  22	Ab	 65
甌	B	 248  52	Ac	 167
高	Bc		杯	 290
杯	Bd	 20  112	B	 194

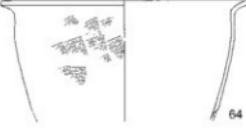
第51図 出土土器の型式分類(1)



第52図 出土土器の型式分類(2)



第53図 出土土器の型式分類(3)

	A		鉢	3	
鉢	B				
1	C		鉢	A	
D			鉢	4	
	A			B	
鉢			鉢	A	
2	B		鉢	5	
	C		B		

第54図 出土土器の型式分類(4)

2. 禿山・尼ヶ岡遺跡出土土器の編年(第55・56図)

現在、淡路地域の弥生後期土器編年は確立していない。ただし、最近、淡路東南部の洲本市下内膳遺跡の報告書²⁴において、造構面の分離により下内膳遺跡の後期を1~4の4期に細分している。

前述したように、禿山遺跡の谷部出土土器が上・中・下の3層に分かれて出土しており、それらに器形変化が認められる。また、尼ヶ岡遺跡ではV区SD-1やIV区SH-6をはじめ、III区テラス土器群やII・III区間斜面土器群など一括資料あるいは一括に近い資料が多く認められる。この項では、禿山・尼ヶ岡遺跡の出土資料をもとに、出土土器編年の細分を考えてみる。また、同時に淡路島内遺跡出土の良好な資料についても検討を加え、他地域との併行関係も探ってゆきたい。

なお、本作業の成果にもとづき、北淡路地域の高地性集落について、採集土器から時期的変遷を推定し、立地ともからみあわせてそれらの動向を探ってゆきたい。ただし、諸般の事情により、今回は予察にとどめ、稿をあらためて検討することとする。

禿山・尼ヶ岡遺跡出土土器については、その出土造構の単位および土器群相の諸特徴により、I~Vの5期に分離することができる。以下、時期別に各器種の特徴を述べる。

禿山・尼ヶ岡 I期

禿山遺跡谷部下層出土土器群を標識とし、尼ヶ岡遺跡III区テラス土器群出土土器の一部とII・III区間斜面土器群出土土器も本期に属する。また、尼ヶ岡遺跡V区SH-4埋土出土土器も本期であろう。

壺1のうち、本期のものは罐部に面を持ち、外面は叩きの上に体部のはば全体に刷毛調整を重ねる。刷毛は口縁部外面におよぶものもある。内面は肩付近まで縱方向の刷毛調整を行う。体部最大径は中位でも上方にある。この特徴は尼ヶ岡遺跡III区テラス土器群出土壺のいくつかでも同様であり、同土器群出土土器の一部が同時期であることが確認できる。壺2も肩部最大径が上位にあり、外面のはば全体に刷毛を施している。壺3は内面縱刷毛調整で、口縁端部は上方につまみあげたようになっており、端面はしっかりした凹面を呈する。壺3は尼ヶ岡遺跡V区SH-4埋土出土であるが、後述する鉢の特徴からI期に属すると考えられる。

壺のうち広口壺では、総じてII期のものに比べて口縁部が長くのびるもので、口縁端部の紋様は退化した凹線もしくは波状紋のいずれかで、竹管円形浮紋を付するものもある。広口壺A aは大きく開く口縁部で、広口壺B aと同様に口縁端部を下方に少し拡張する。広口壺A bは頸部から外反する口縁部が外上方に長くのび、口縁端部を若干肥厚させる。広口壺B aは頸部から大きく外反した口縁部が長くのび、端部を下方に拡張する。体部は最大径がやや上位にあり、底部は丸底気味の平底である。広口壺B bでは縫部を上下に拡張するが、上方への拡張部と口縁部との境がII期のものに比べて明瞭である。広口壺B cは折り曲げたような口縁端部であるが、垂下部の器壁が薄く、幅が狭い。広口壺B dもII期に比して口縁端部の幅が狭い。長頸壺は口縁部のみである。口縁部はやや長く、罐部付近で若干外傾する。短頸壺はIII期の例に比べて口縁部が短い。二重口縁壺は細片で、本期に属するかどうか不明である。

器台では、器台Aが口縁端部を上下あるいは下に拡張し、端面に紋様を施すもので、広口壺と同様、I期のものは退化した凹線または波状紋のみで施紋し、竹管円形浮紋を貼りつけるものである。それに對し、II期の紋様は広口壺と同様で、凹線紋+波状紋の組み合わせで施紋している。器台A aは広口壺B bと同一の口縁部形態で、器台A cも広口壺B cと同様である。特に、器台A cについては、垂下部の厚みが薄い点もI期の広口壺B cの特徴と共通している。粗製の「淡路型器台」は尼ヶ岡遺跡SH-7埋土から脚部の破片が出土しており、同形態のものが尼ヶ岡遺跡IV区包含層から出土している。外面全

体に叩きを残し、脚裾部はやや内傾し、端部に面を持つものである。

高杯では、本期に属するものでは高杯A aと高杯Cがある。高杯A aは屈折してのびる口縁部の外反度が弱く、やや短いものである。脚部を欠失するが、杯底部は箆磨き調整である。高杯Cでは、楕形の杯部の口縁部外面に退化凹線紋を施すが、上部に限られる。

鉢については、禿山遺跡谷部下層出土土器では例が少ないとより、中層・上層への形式変化からの推定および、壺での位置づけなどから、尼ヶ岡遺跡Ⅲ区テラス土器群出土土器の一部を抽出し、尼ヶ岡遺跡Ⅱ・Ⅲ区間斜面土器群出土土器、SH-4埋土出土土器も加えた。鉢1は内外面とも刷毛や箆磨き調整で、丁寧なつくりとなっている。全形を窺えるものでは、口径に比して器高が深く、丸みをもつ体部となっている。また、鉢1 A・1 C・1 Dでは口縁端部に面をもつ。鉢2も口径に比べて深い体部となっている。

禿山・尼ヶ岡 Ⅱ期

禿山遺跡谷部中層出土土器群を標識とし、尼ヶ岡遺跡Ⅲ区テラス土器群出土土器の一部もⅡ期に属するものである。

壺1は外面叩きで、外面の刷毛は下半部に限られており、内面は斜めもしくは横方向の刷毛である。体部最大径はⅠ期に比べてやや下方にあり、口縁端部に面をもつものが多い。また、壺2については、形態的特徴などから禿山遺跡谷部肩出土壺が本期に属すると考えられる。

壺では、Ⅱ期の資料としては、広口壺と細頸壺のみ存在し、長頸壺は本期からは認められない。広口壺の口縁部はⅠ期に比べて口縁部が短くなる。また、口縁端部を拡張させるものでは、端部の紋様は退化した凹線紋と波状紋を組み合わせたもの、すなわち、口縁端部の上下端に退化した凹線を施し、その間に波状紋で加飾するものが認められるようになる。この傾向は器台の口縁部でも同様である。また、口縁端拡張部の幅が広くなる。広口壺A aはⅠ期に比べて口径が小さくなり、口縁端部も丸みをもち、下方に若干拡張させるのみとなる。広口壺A bはⅠ期に比べて口縁部が短くなり、体部は算盤玉状を呈する。広口壺B c・B dは垂下口縁部の器壁がⅠ期に比べて厚くなる。細頸壺は体部偏球形で、口縁部はやや外反する。端部は残っていないため不明である。

Ⅱ期の器台は先述のように、口縁端面に退化凹線+波状紋の加飾を行うものである。器台A aは形態的にはⅠ期と変わらないが、器台A cは垂下部の厚みが増す。なお、退化凹線+波状紋の組み合わせ施文の口縁部が谷部上層から出土しているが、Ⅱ期に含めるかⅢ期とするかは躊躇するものである。また、2段屈曲の器台Cが存在する。高杯ではA bが1点出土しているのみである。

鉢は外面調整に刷毛を加えるが、叩きを多く残す。内面は刷毛で、箆磨きは認められない。体部は深いが、丸みが少なくなっている。口縁端部が内済し、退化凹線を施す鉢1 Bの変形(61)も存在する。

禿山・尼ヶ岡 Ⅲ期

禿山遺跡谷部上層出土土器群の特徴で代表させるが、資料数が少ない。しかし、他遺跡の類例から、Ⅱ期と分離することが可能であるため、Ⅲ期とした。なお、禿山遺跡SH-1出土土器も本期に含む。

壺1は体部外面は叩きのみとなり、内面の調整は刷毛もしくはナデ、体部の最大径は中位にあるが、最大径の部分が長くなっている。壺2も同様の特徴を示す。

広口壺の口径は以前に比べてやや小さくなり、退化凹線紋+波状紋の組み合わせは消滅し、退化凹線紋のみのものも認められなくなり、波状紋のみや竹管円形浮紋のみの装飾となる。短頸壺は口縁部がやや長くなる。二重口縁壺は器壁が薄く屈曲が大きい。細頸壺の(78)は時期的にもっと古いものであり、

恐らく混入品と思われる。

鉢2 Aでは、谷部セクション出土の(109)、鉢1 Cや鉢2では禿山遺跡SH-1出土の(1~4)が本期に属するものであろう。鉢2では小ぶりで底部が突出する鉢2 Bが存在する。(109)は外面の調整が刷毛であるが、その他は外面叩きのみで仕上げており、内面は刷毛調整である。全体にやや小ぶりになり、口径に比べて器高が浅い傾向にある。

禿山・尼ヶ岡 IV期

IV期についてはIII期にまして資料が少ないが、尼ヶ岡遺跡SH-6出土土器を基準としている。

壺1では底部は尖底に近い平底で、庄内式土器の影響のもとに変化した土器であろう。外面は連続ラセンタキを意識した叩き、内面は刷毛のちナデ調整で、体部は底部を除き球胴に近い。口縁端部を若干下つまみあげるような技法も庄内式土器の影響と思われる。後述のように、III期の段階の後半には、一部地域は庄内式の段階に入っているのであるが、本遺跡においては、IV期からが庄内併行期ととらえることができる。

出土資料が限られているため、壺・器台は、本期に属するものが認められなかった。

高杯では尼ヶ岡遺跡SH-4柱穴出土の高杯Cが1点認められるのみである。口縁部はかなり開き、外面の退化凹線も幅広く施している。

鉢も資料が少なく、尼ヶ岡遺跡SH-6出土土器では鉢2しか存在しない。尼ヶ岡遺跡出土の(148)を本期の鉢1の資料としてあげておくが、体部から口縁部への屈曲がゆるやかで、底部側面を箝削りし、尖底に近い。位置づけにはやや不安が残る。IV期とIII期の鉢2を比較すると、鉢2 Aは口径に対する器高が低くなり、鉢2 Bは口径は小さくなるが、器高は深くなり、底径も比較的大きいものである。

禿山・尼ヶ岡 V期

尼ヶ岡遺跡SD-1出土土器を基準としてV期を設定した。禿山・尼ヶ岡遺跡の最終段階である。

壺1は球胴化が著しく、底部内面も丸くなるものがほとんどである。ただし、底部は平底である。外面は叩き、内面は板ナデ調整が出現し、基本的には箝削りの技法と共通すると考えられる。庄内併行期の後半に位置づけされるものである。壺3では底部外面が平底で、深さも浅い。本期の資料は尼ヶ岡遺跡SD-1出土の壺・鉢類であり、器種が限られていることから、資料的にはかなり偏ったものである。

本遺跡出土資料中の壺・器台では本期に属するものは認められない。

高杯Cは尼ヶ岡遺跡SH-4柱穴出土とSD-1出土の接合資料がある。IV期のものの杯部をやや浅くしたような形態である。台付鉢との区別が困難なものである。他に類例の好例が認められない。また、高杯A cとしたものは台付鉢とすべきかもしれない。特異な器形であり、類例が認められない。

鉢では、鉢1は丸底あるいは丸底に近い平底で、叩き成形で口縁部は屈曲しない。鉢2はIV期に比べ口径はさらに小さくなるが、器高はあまり変わらず、III期からIV期に同様の変化がさらに増している。鉢2 Bはコップに近い形となる。なお、鉢4の台付鉢が存在するが、系譜等は不明である。

禿山・尼ヶ岡遺跡土器編年試案(1)

	壺						高杯					器台						
	広口壺					長頸壺	短頸壺	二重口壺	Aa	Ab	Ac	B	C	Aa	Ab	Ac	B	D
	Aa	Ab	Ba	Bb	Bc	Bd												
I															290			
I															43			
I															42			
I															44			
II															113			
II															68			
III															88			
IV															194			
V															167			
V															170			
V															147			

	甕								鉢								
	1				2		3		4		1		2		4		
	Aa	Ab	Ac	Ad	Ba	Bb	Bc		A	B	C	D	A	B	A		
I																	
	267								288				291				
II																	
	256		54	254	122	97	255		98	257	265	58					
III																	
	83		82						109		86	1	4				
IV																	
			193							148		195	196				
V																	
	151		155	156					157		187	188	189	190	191	174	161

3. 淡路地域での同時資料

I期

北淡路の北淡町おぎわら遺跡堅穴住居 S H03⁽⁹⁾(第57図1～3)では、禿山・尼ヶ岡Ⅰ期の壺1と同様、外面叩きのちほば全体に刷毛調整を施し、内面は縦方向の刷毛を施すものや鉢1Aの類例(第57図4)も出土している。ただし、壺では口縁端部が丸いなどやや新しい傾向が窺える。また、一括資料ではないが、淡路町塩西遺跡⁽¹⁰⁾S H10出土の壺(第57図16)も同じ特徴を示す。北淡町久野々遺跡2次調査S H01出土の長頸壺口縁部(第57図6)もこの時期に相当するようである。

洲本地域では、下内膳遺跡⁽¹¹⁾2区第5面S D29出土鉢(第57図8)が鉢1Aに類似し、(第57図9)についても、鉢1Bの類似例としてとらえられる。下内膳遺跡S D29出土土器は後期2に位置づけられている。

なお、未発表資料であるが、北淡町舟木遺跡2次調査⁽¹²⁾B地区S D-04出土土器があり、上層出土の壺ではI～II期の過渡的様相を示す。同下層出土の広口壺はI期との変化に乏しく、I期として含めてもよいような資料であるが、口縁部が長いことからI期以前の可能性もある。高杯A aは同遺構の上下両層から出土しているが、下層出土のものはI期もしくはI期直前に近い様相を呈する。上層出土高杯はI～II期の特徴をよく示している。

II期

本期に併行するものとして、北淡町久野々遺跡第1次調査No15調査区段状遺構^(10a)出土土器(第57図10～15)があげられる。同遺構からは壺のほか、小型の器台や高杯C・鉢2も出土している。高杯は椀形の杯部を呈し、口縁部外面に退化凹線を幅広く施し、脚部は脚柱部から屈折して大きく開くものである。また、第2次調査S H-01^(10b)でも小型の器台(第57図7)が出土している。北淡路では本期以降器台が小型化してゆく可能性が高い。

久野々遺跡に近い北淡町おぎわら遺跡のS H03出土土器⁽⁹⁾(第57図5)が本期と思われる。壺口縁端部の紋様は退化凹線+波状紋で、II期の広口壺B cの特徴を示し、垂下部もやや厚い。しかし、口縁部が長い点はI期の特徴である。体部の形態は算盤玉状に近く、広口壺A bの体部と類似する。同遺構出土土器にはI期と考えられるものもあり、I期からII期への過渡的様相を示している。

淡路町の塩西遺跡⁽¹³⁾出土土器の一部に本期に属するもの(第57図16～19)がある。壺・器台・高杯などがある。高杯はA aで、口縁部の外反度はI期より大きく、脚部も大きく開くものである。また、同遺跡で鉢2とされている浅い鉢(第57図20)も本期に含まれるものであろう。

舟木遺跡では、未公表の2次調査⁽¹⁴⁾C地区S H-3出土土器がII期に属するものであるが、壺ではI～II期への過渡的特徴を示し、鉢もやや大ぶりで、古い傾向と思われる。また、高杯A aは杯部口縁が小さくなると同時に口縁部も短いものであり、II期に近い様相を呈する。

舟木遺跡では、これも未公表資料であるが、10次調査⁽¹⁵⁾S H-01出土土器も本期と思われ、壺・器台・高杯C・鉢1A・鉢1Dが出土しており、同時に粗製の「淡路型器台」も出土している。

洲本地域では、下内膳遺跡⁽¹¹⁾3区第3面土器群出土土器の大半(第58図21～23)が本期の特徴を示している。特に壺1については、淡路地域において、この時期以降III期まで、口縁部・脚部とともに長いものが存在しているのが特徴的である。また、I期同様、口縁端面に叩き原体による刻み目状叩き痕が多く認められることも淡路地域の特徴として挙げられる。鉢も下内膳遺跡の同遺構から出土しており、本期のものと類似している。同遺構出土土器は下内膳遺跡後期3に位置づけられている。また、同遺跡4・5区S H04出土高杯(第58図24)も本期の特徴を示し、下内膳後期2に位置づけられている。前述の様に、

下内膳後期2は基本的には禿山・尼ヶ岡Ⅰ期と併行関係にあるが、下内膳遺跡SH04で伴出している鉢(第58図25)の形態をみれば、Ⅰ期の様相も残すが、むしろⅡ期に含めて考えるべき形態である。したがって、禿山・尼ヶ岡Ⅱ期は後期2を一部含む後期3と併行関係としてとらえられるであろう。

Ⅲ期

東浦町楠本下林遺跡³⁸⁾SH2001出土土器(第58図26~28)があり、壺や鉢の底部が尖底に近くなるなどⅣ期への過渡的特徴を示す。

なお、禿山・尼ヶ岡遺跡出土の器台では、器台A c以外には器台Bおよび器台Dが出土しているにすぎない。器台Bは屈曲部があまくなり、小型化しており、楕部は内傾せず、端部も丸くなっている。器台Dは「淡路型器台」と思われるが、口縁部があまり外反せず、外面に波状紋を描くものである。この器台は舟木遺跡1次調査³⁹⁾E-2住居跡出土土器に典型的な「淡路型器台」が存在する(第58図47)が、舟木遺跡例は口縁部の外反が強くなっている。後述のようにV期に編年できることから、口縁部の形態変化としてとらえることができるであろう。

洲本地域では寺中遺跡⁴⁰⁾住居跡B-2出土土器(第58図29~36)がⅢ期のものである。壺1・2ともに本期の特徴を示し、鉢も類似する。高杯Cでは口縁部がやや外側に開いている。寺中遺跡出土土器については、検討の結果、庄内式併行までは下らない後期末に位置づけたが、一部庄内的な様相を示す鉢も存在している。しかし、壺をみれば古い様相を残しており、前検討同様、弥生時代後期末に位置づけておきたい。したがって、禿山・尼ヶ岡Ⅲ期についても同様となる。なお、器台Bが寺中遺跡東溝から出土している(第58図37)が、この例も後期末を前後する時期と考えられ、本期を弥生後期末に位置づけることと矛盾しない。

なお、現段階では壺の類似資料は認められない。

Ⅳ期

本期の類例はほとんど認められるのであるが、わずかに、壺については、三原郡西淡町志知川沖田南遺跡⁴¹⁾旧河道出土土器の一部(第58図38~40)に認められる。

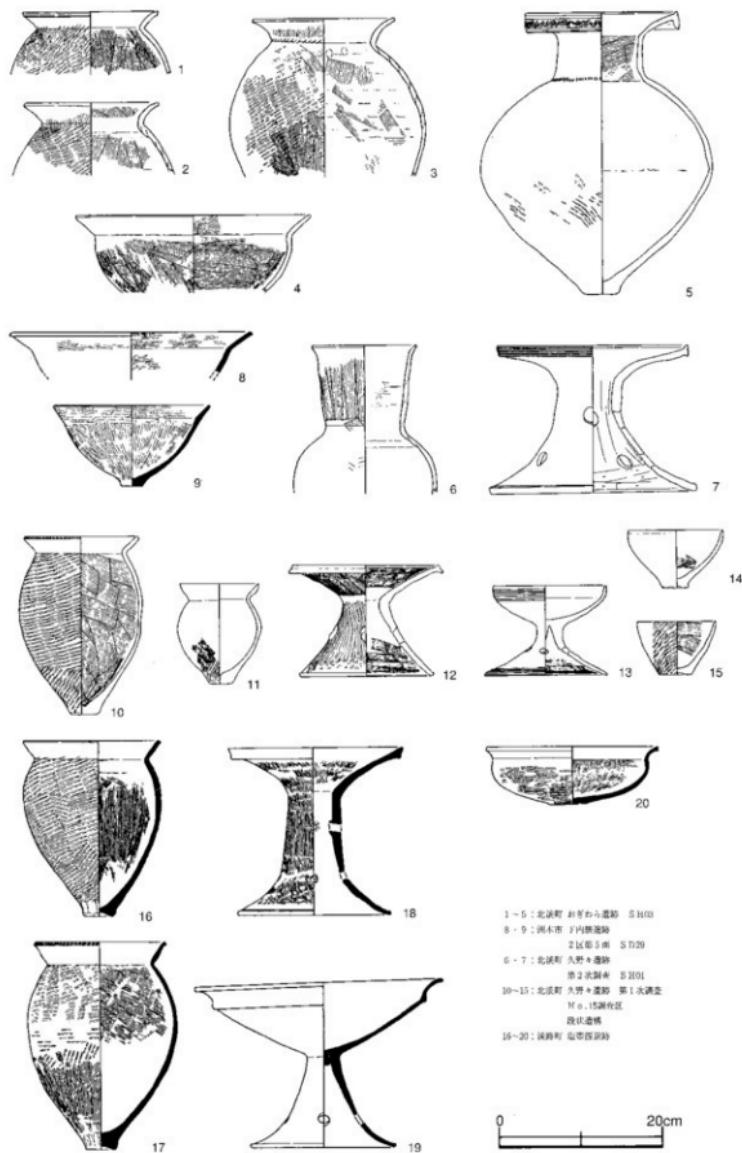
なお、壺・器台・高杯・鉢については、淡路地域では好例は認められない。

Ⅴ期

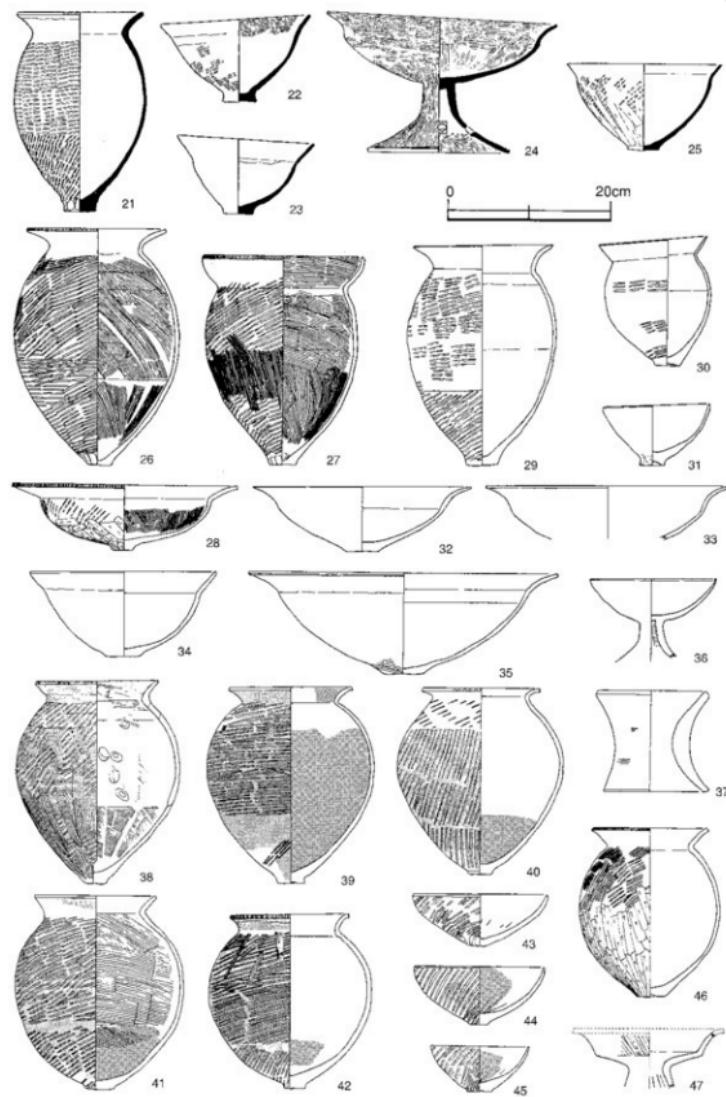
淡路地域での本期壺の類例は舟木遺跡第1次調査⁴²⁾E-2グリッド堅穴住居跡出土壺(第58図46)があり、外面下半が窓削りであるが、底部内面が丸みを持つことから、この期と考えられる。他には志知川沖田南遺跡⁴³⁾旧河道出土土器の一部(第58図41~45)に同様の特徴を示す壺および鉢1や鉢2 Aの類例が認められる。

現段階では、北淡路の高地性集落出土土器では最も新しいものであり、後述するように、出土遺跡も限られている。また、この時期以降の遺跡は低地に少数認められるのみであり、IV~V期段階で北淡路の高地性集落は急速に消滅してゆくのである。それと同時に、忽然と姿をなくし、低地の遺跡も少数で、低地に降りた痕跡も少數である。いわば忽然と姿を消したという表現があつてはまる状況を示すのである。

また、北淡路出土土器と洲本地域出土土器とは、下内膳遺跡や寺中遺跡出土土器にみたように、細部の違いはあるが、基本的には類似していることも判明した。



第57図 淡路地域の弥生後期土器



21~23: 河本町内斎藤地蔵 3区第3段下部
24~25: 河本町内斎藤地蔵 4~5区 S304
26~28: 素波町穂木下林遺跡 5丁目201
29~36: 河本町寺中斎藤地蔵社 2、37: 寺中斎藤地蔵
38~45: 西脇町志賀田神田斎藤地蔵
46~47: 北須町寺水遺跡 5~2号穴供物

第58図 淡路地域の弥生後期～古墳前期土器

4. 他地域との併行関係

禿山・尼ヶ岡Ⅰ期

I期の土器群と類似した特徴を示すものには、兵庫県伊丹市口酒井遺跡³⁰住居址1出土土器がある。壺(第59図48)は口縁端部に面を持ち、体部外面叩きのちはほぼ全面に刷毛調整を加え、内面縱刷毛調整の点は同じであるが、体部の形態に差が認められる。長頸壺(第59図49)も形態的に近い。大阪府高槻市安満遺跡9地区³¹A 5-2方彌周溝墓周溝内出土土器では、壺(第59図50-52)の体部形態が本期に最も近いが、内面の調整が横方向の刷毛で、外側に刷毛を施すものが少ないと異なり、禿山・尼ヶ岡遺跡においてはむしろⅡ期の調整に近い。壺(第59図53)では体部の形態が最も近く、高杯A a(第59図54-56)も類似している。しかし、鉢(第59図57)では本期よりもむしろⅡ期に近いものである。なお、高杯では高槻市芝生遺跡大溝上層³²出土例(第59図60)も類似する。兵庫県尼崎市田能遺跡³³1A調査区大溝出土土器中の壺(第59図61-62)は安満遺跡と同様の傾向であり、鉢(第59図63)はI期に近い形態であるが、田能遺跡例はむしろ兵庫県芦屋市会下山遺跡住居址床面出土土器³⁴(第59図64)により近い形態である。

摂津地域の編年のうち、森田克行氏の編年³⁵では、口酒井遺跡住居址1出土土器および芝生遺跡大溝上層出土土器、会下山遺跡住居址床面出土土器は摂津V-3様式、安満遺跡A 5-2方彌周溝墓出土土器および田能遺跡大溝出土土器は摂津VI-0様式である。したがって、禿山・尼ヶ岡Ⅰ期は摂津VI-0様式と併行する時期としてとらえておき、古い様相を残したものと考えておく。

一方、田能遺跡³⁶6 Y調査区第2溝出土土器のうち、壺(第59図65-66)については、I期のものとは口縁部の特徴、体部外面の調整、内面の調整が同じで、しかも形態的にも非常に似ているものが認められる。鉢(第59図67-68)も近い形態であるが、I期の鉢は、体部に丸みがあり深いという、会下山遺跡住居址床面出土土鉢の要素も残している。

田能遺跡第2溝は摂津森田編年ではVI-1様式に編年されており、先に壺の出土層位と特徴からみた禿山・尼ヶ岡遺跡の編年とは順序が逆転してしまうことになる。したがって、森田編年にしたがえば、摂津VI-1様式とすべきであるが、他の器種も含めた特徴から、摂津VI-1様式を含む摂津VI-0様式併行ととらえておく。

一方、森岡秀人氏の編年³⁷では、田能遺跡第2溝出土土器は後期後半Ⅰ期であり、森岡氏は後期前半Ⅱ期の会下山遺跡住居址床面出土土器直後に位置づけている。ただし、会下山遺跡例は禿山・尼ヶ岡Ⅰ期土器群の様相とはかなり異なっている。

いずれにしても、禿山・尼ヶ岡Ⅰ期は後期後半の早い段階であり、摂津森田編年では摂津VI-0様式から摂津VI-1様式併行と考えられる。

また、奈良県橿原市四分遺跡³⁸S D666上層出土の長頸壺(第60図69)に類例があり、同中層出土高杯(第60図70-71)にも類似している。四分遺跡S D666上層出土土器は豊岡卓之氏の編年³⁹ではV-5、同中層出土土器はV-4とされている。また、寺澤薫氏の編年⁴⁰では禿山・尼ヶ岡Ⅰ期は様式4の土器に最も類似し、様式3とも類似する。

播磨では、兵庫県播磨町大中遺跡⁴¹の広口壺(第60図74)に類例がある。口縁部が長くのびるという点では大中Ⅰ式と併行関係になる。しかし、器台では、器台A aが大中Ⅱ式(新)(第60図75-76)、器台A cが大中Ⅱ式(古)(第60図77)に編年されるものである。なお、器台A aやA bのような口縁部をもつ器台は管見では摂津地域では認められない。また、高杯では、大中Ⅰ式(第60図78)と併行のものと思

われる。鉢でも大中Ⅰ式に最も近いもの(第60図79)が存在する。

禿山・尼ヶ岡Ⅱ期

Ⅱ期の壺1と同様の特徴を示す類例としては、兵庫県尼崎市中ノ田遺跡⁹⁰第1溝出土壺(第60図80・81)が最も近く、細頭壺(第60図82)も類似している。また、先述の田能遺跡大溝(第60図83)や第2溝出土(第60図84)の壺体部が本期のものに近い。また、田能遺跡第2溝出土の細頭壺(第60図85)や鉢(第60図86・87)も類似しており、高杯(第60図88・89)も本期に併行するものと考えられる。壺は高槻市紅葉山遺跡8号住居跡出土上器⁹¹(第60図90)にも類似している。高杯では、四分遺跡S D666上層(第60図73)やS E760出土(第60図72)のものが田能遺跡第2溝出土例と類似している。なお、鉢1Aとした舟木遺跡10次S H-01出土例は、安満遺跡A 5-2方形刷溝墓出土土器(第59図57)に形態的に最も近い。器台のうち、久野々遺跡1次調査段状構造出土のもの(第57図12)は、安満遺跡A 5-2方形刷溝墓出土土器(第59図58)や紅葉山遺跡3号住居跡出土土器⁹²(第60図91)に類例があり、塩瀬西遺跡出土器台(第59図18)は安満遺跡A 5-2方形周溝墓出土土器(第59図59)に近い。

中ノ田遺跡第1溝出土土器は浜津森編年ではVI-2様式、田能遺跡大溝出土土器はVI-0様式、田能遺跡第2溝はVI-1様式、紅葉山遺跡3号・8号住居跡出土土器はVI-2様式、安満遺跡A 5-2方形周溝墓出土土器はVI-0様式にそれぞれ編年されている。かなりばらつきがあるが、ここでは、壺の類似例を重視し、中ノ田遺跡例と併行、すなわち浜津VI-2様式併行ととらえておきたい。また、森岡編年では田能遺跡第2溝は後期後半Ⅰ期、中ノ田遺跡溝は後期後半Ⅱ期である。なお、寺澤編年では様式5に相当する。豊岡編年では、四分遺跡の例からV-5~6にあたる。

一方、播磨では大中遺跡の壺(第60図92)と形態的に類似し、退化凹線+波状紋の紋様構成からも大中Ⅱ(古)が最も近い。しかし、器台(第60図75・76)では同じ紋様をもつものが大中Ⅱ(新)であり、壺と器台で同じ紋様が同時に存在する本遺跡の様相とは異なっている。高杯(第60図93)や鉢(第60図94)では大中Ⅱ式が近い。

禿山・尼ヶ岡Ⅲ期

本期の壺については各地域での変化が大きいようで、同様の形態のものは他地域では認められない。特徴における共通性はないが、浜津VI-3様式段階として位置づけておく。播磨地域の大中遺跡の編年でも、同様の特徴を示す一群が見当たらないのであるが、編年表に示された大中Ⅱ式(新)と大中Ⅲ式の土器の一部に最も近い例(第61図95・96)が認められる。鉢でも他地域での好類例は認められず、併行関係は明らかではないが、先程の寺中遺跡出土土器が後期の最終末に位置づけでき、本期との併行関係でとらえることができる。播磨地域でも鉢1の好類例は認められない。

なお、Ⅲ期を弥生時代後期末に位置づけたが、庄内段階に入る地域が認められる時期である。

禿山・尼ヶ岡Ⅳ期

鉢2Bの類例では、大中Ⅲ式のもの(第61図98)が好例ではないが、形態的に近いものである。資料的に限られているため、他に好例は認められない。壺も類例は認められず、推測の域を出ないが、寺澤編年⁹³庄内2式前後ととらえておくことにする。また、本期については類例も少なく、単一の期としてとらえるには資料が少なく、むしろ、V期の古い相として位置づけておく方がよいのかもしれない。

禿山・尼ヶ岡Ⅴ期

本期の壺もIV期同様、共通する資料が少ないため、推測の域を出ないが、寺澤編年庄内3式前後と思われる。鉢でも良好な類例は認められないが、播磨地域大中遺跡の編年では、前後の器形の変化から、

「+」とされた時期にあてはまると考えられる。編年的には、寺澤氏の編年によれば、好例が認められないが、台付鉢4は布留0式に編年されているものがある。ただし、鉢1や2は同様の形態が布留0式には存在しない。四国では香川県森広遺跡Ⅲ次S H01出土土器⁹⁴中に鉢4の近似例(第61図99)が存在し、下川津IV式とV式の間に位置づけられている。

I期に先行する土器

高尾遺跡出土の土器については、これまでみてきた禿山・尼ヶ岡遺跡出土土器とは異なった様相を示し、諸特徴からこれらに先行する土器と考えられる。

高尾遺跡出土壺1aは内面が鉗削りであることや、形態的側面から、禿山・尼ヶ岡I期に先行する土器である。包含層出土土器ではあるが、同時に出土した壺1cや鉢、高杯とともに古い特徴を示す。

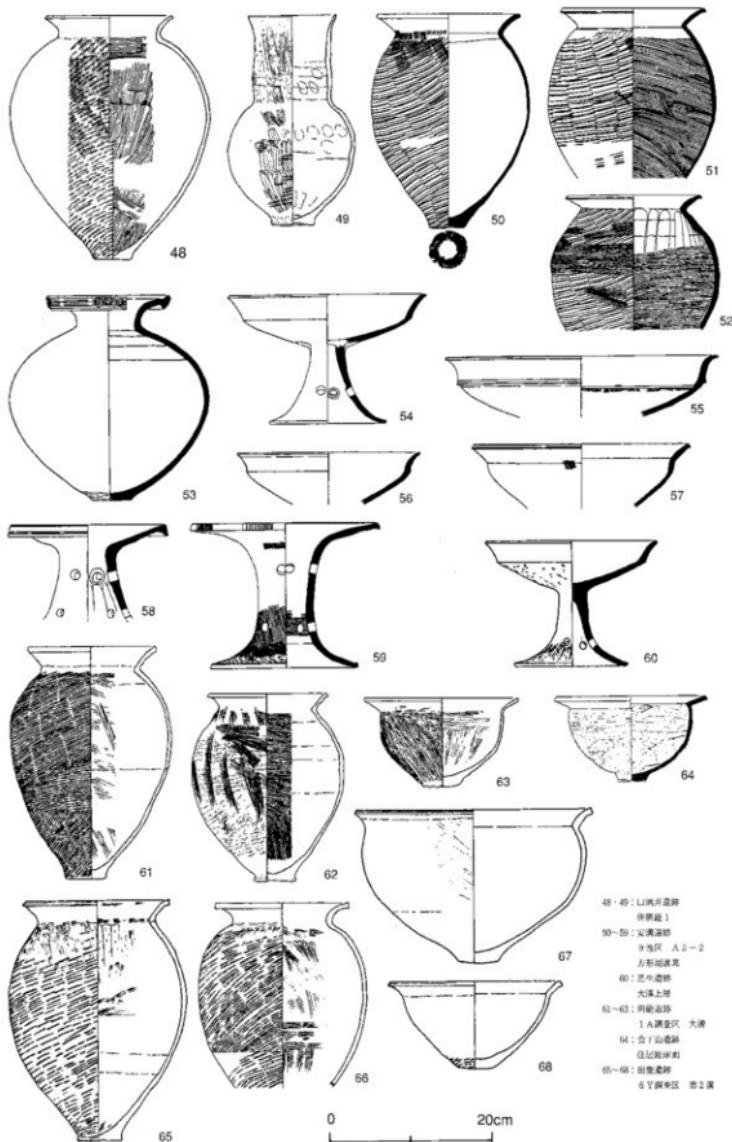
高杯は下内膳遺跡で同じもの(第61図100)が出土しており、同遺跡では層位的に後期Iに編年されるものである。この高杯については、近畿地方では類例が認められず、徳島市矢野遺跡S K2010⁹⁵で出土しているもの(第61図101)や徳島県板野郡板野町黒谷川郡頭遺跡溝1⁹⁶出土のもの(第61図102)が類例として認められる。ただし、後期後半(黒谷川I期)に比定されており、本高杯が器形変化したものとしてとらえられる。讃岐では、香川県高松市上天神遺跡⁹⁷などで出土している後期初頭の高杯(第61図103・104)が器形変化したものと考えられ、東四国ではよくみられる器形である。

また、鉢については、口縁端部が水平近くまで外反すること、端部に面を持ち、丁寧なつくりであることから、この鉢もI期に先行するものととらえることができよう。(288)の壺1Bcについても、系譜は追えないものの、口縁部が短く、幅広い面をもつことから、I期に先行するものと考えられる。なお、後期段階での壺口縁端面の刻み目状叩きは、紀伊以外ではほとんど認められないようであるが、紀伊の例は後期後半でも末に近い時期⁹⁸からであり、淡路地域が最も先行するようである。

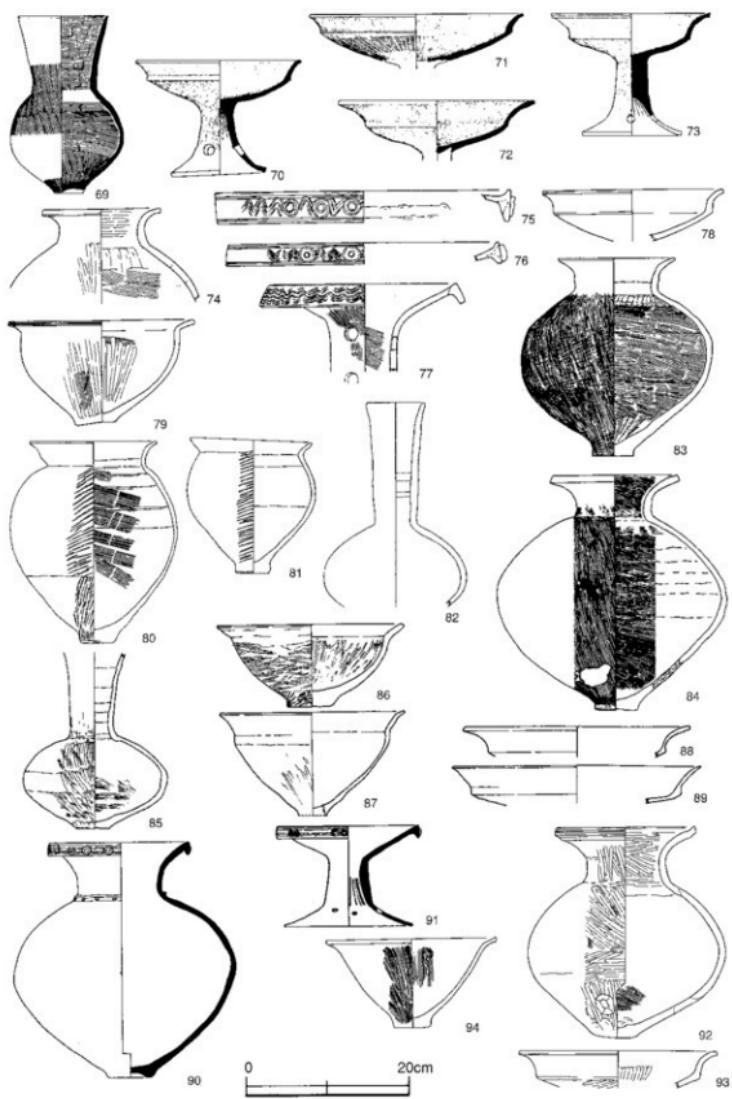
淡路でこの類例を求めるならば、先述の下内膳遺跡のほかには、楠本下林遺跡土坑S K-201出土壺(第61図105)が挙げられるにすぎない。ただし、下内膳遺跡・楠本下林遺跡ともに、他に共伴土器が存在していないことから、詳細な位置づけができる状況である。また、未発表資料であるが、舟木遺跡10次調査S X-02出土土器群もI期に先行するものと思われるが、これらの壺とも違った様相を呈する。これらの土器群をどの時期に位置づけるか、すなわち、I期直前か、1~2型式おいた前に位置づけるのかは、現段階では資料量的に制約があり、今後の課題としておきたい。

次に、第61図に掲げた神戸市垂水区所在の舞子・東石ヶ谷遺跡⁹⁹の出土土器を見てみると、口縁端部を垂下させる壺や、端部の上下に退化凹線紋とその間に波状紋を施した壺とされる口縁部、翫頭壺、口縁端部が内湾し外面に退化凹線を施した鉢など、禿山・尼ヶ岡II期および北淡路の併行資料の器種構成と諸特徴がまったく同じである。舞子・東石ヶ谷遺跡は播磨地域の東端、淡路島からは明石海峡を隔てた対岸にあたり、これらの出土土器をみると、淡路地域との緊密な関係が窺えるのである。

以上、禿山・尼ヶ岡遺跡出土土器について、周辺の資料をもとに併行関係を推察してきた。ここで注意されることは、北淡路の土器は、特に壺などに見られるように、叩きを残すなど畿内特に揖津地域の土器と基本的に似た¹⁰⁰傾向であり、しかも、その変化の方向が似ているという点である。また、播磨地域についても、器台の紋様や一部の壺、高杯の一部が共通する点もある。しかし、生活に密着した壺については基本的に揖津地域と形態および変化が類似しており、北淡路の高地性集落は揖津地域と密接な関係にあったものと思われる。一方、播磨地域の玉津田中遺跡¹⁰¹や大中遺跡出土土器では壺や鉢の型式変化もやや異なる様相を示している。ただし、庄内併行期頃には似た様相となっているようである。

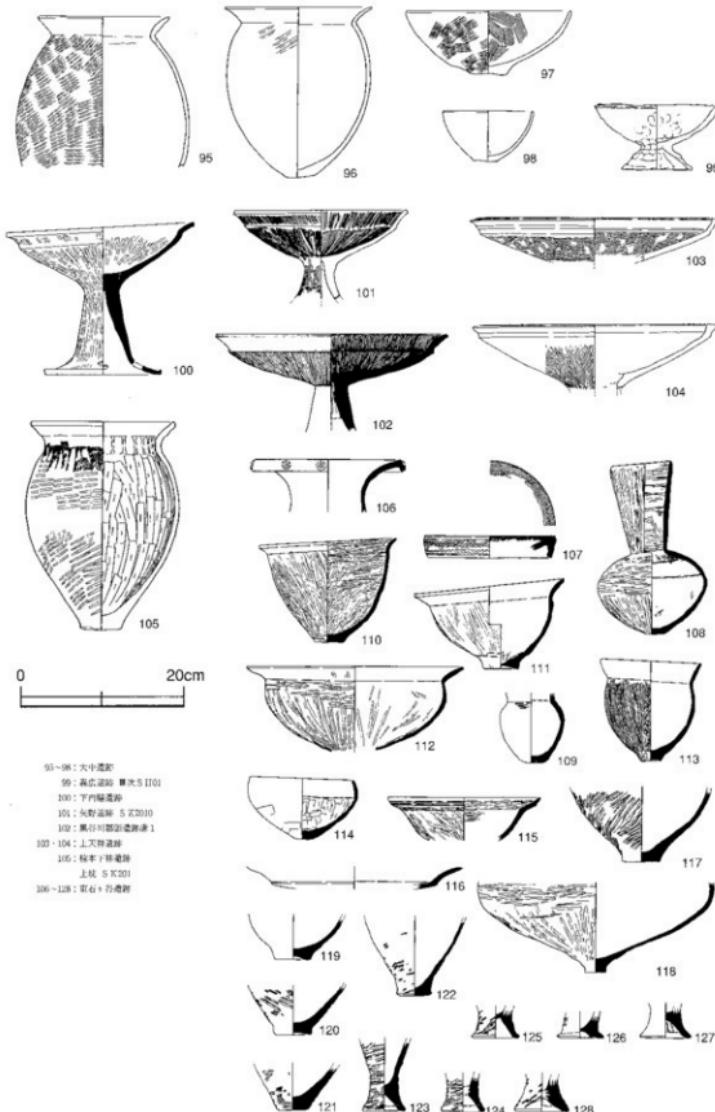


第59図 穂山・尼ヶ岡遺跡との併行関係土器(1)



69~73：区分遺跡 SD666上層。70~71：区分遺跡 SD666中層。72：区分遺跡 SE790。74~79, 92~94：大中遺跡。80~82：中ノ川遺跡1。83：伊勢若大河。84~89：田邊遺跡第2層。90：新宮山遺跡A 佐世御跡。91：村山川遺跡3号若若跡。

第60図 穴山・尼ヶ岡遺跡との併行関係土器(2)



第61図 穂山・尼ヶ岡遺跡との併行関係土器(3), 高尾遺跡類似資料

第3節 淡路の弥生集落の動態(予察)

淡路地域の北部、津名山地と呼ばれる地域を中心にして数多くの高地性集落が存在していることは、これまでから採集資料などにより注意⁽³⁾されており、近年では一部発掘調査が実施されている。

また、淡路地域の南部、洲本・三原平野を中心とした地域の弥生集落についても、近年発掘調査が実施され、その様相がしだいに明らかになってきている。

ここでは、それらの成果を受け、出土土器を中心に、今回の縄年案などをもとに淡路地域の弥生集落の動態について述べてゆきたい。しかし、諸般の事情により、概略を予察的に述べることとし、詳細については他日に期することにしたい。

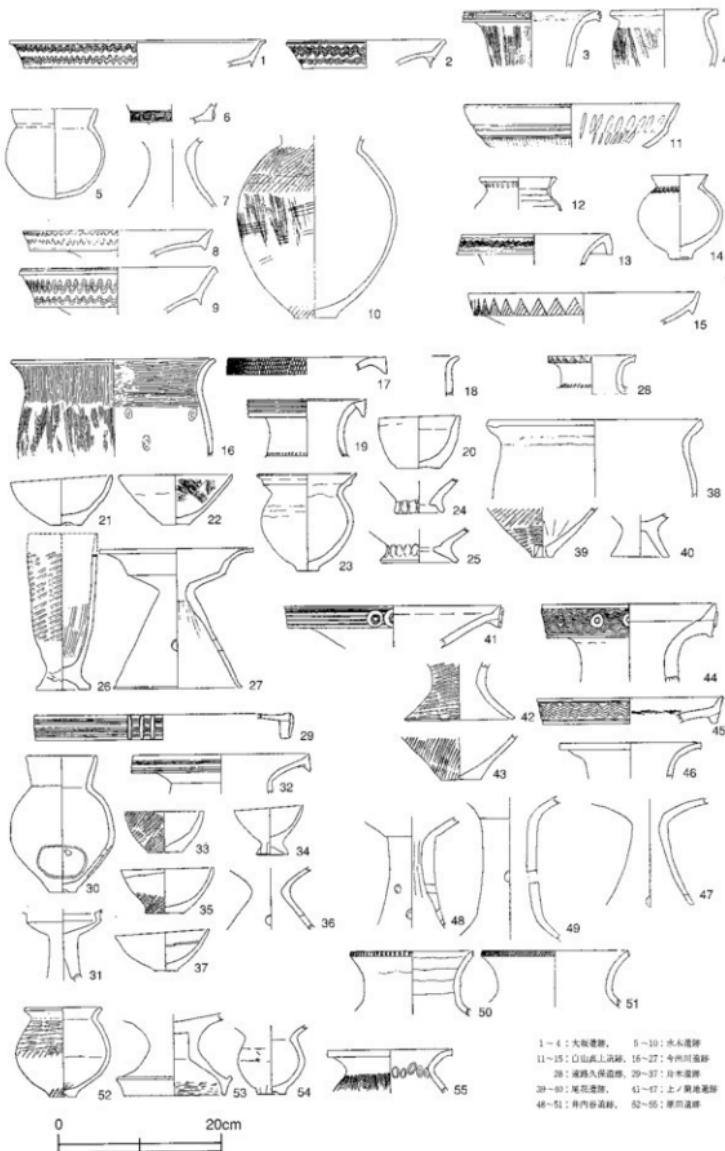
淡路地域の弥生時代前期の遺跡のうち、洲本市安乎間所遺跡⁽⁴⁾では弥生前期新段階の土器がV字溝から多く出土している。この溝は環濠と推定されており、縄文晩期土器も多量に出土している。他⁽⁵⁾には洲本市武山遺跡、同市生石遺跡、同市空の谷遺跡、同市下内膳遺跡、西淡町志知川沖田南遺跡や同町次郎谷遺跡、東浦町今出川遺跡、北淡町育波堂ノ前遺跡で弥生前期土器が出土しており、それらのほとんどは洲本・三原平野地域に存在している。下内膳遺跡では前期の溝が検出されており、その上層からは中期の土器も出土している。中期前半(Ⅱ～Ⅲ様式期)の土器では和泉地域の特徴を示す土器や紀伊地域からの搬入品と考えられる土器が多く認められるようである。また、中期後半(Ⅲ～Ⅳ様式期)に至っては、下内膳遺跡で土坑・溝のほか、方形周溝墓も6基築造されている⁽⁶⁾。一方、この時期には森遺跡⁽⁷⁾や寺中遺跡といった地形的にやや奥まった所や台地上に集落が営まれるようになる。下内膳遺跡や森遺跡から出土した土器は、基本的には畿内の土器の特徴を示すが、紀伊の影響を受けたものや瀬戸内東部の影響を受けたものもかなり認められる。しかし、Ⅳ様式期の寺中遺跡住居址出土土器では、畿内的な様相のみのようである。

三原平野の南東部、南淡町福良に所在する岩谷遺跡⁽⁸⁾は福良湾に面した低地の遺跡であり、包含層から中期末(Ⅳ様式期末)の上器が出土している。それらの土器は東四国の特徴を示す土器がほとんどで、特に甕では徳島県板野郡土成町北原遺跡⁽⁹⁾出土甕とほとんど同じ型式分類があつてはまる。岩谷遺跡は地理的にも阿波地帯と近く、土器様相からは阿波である。ただし、三原地域で同時期の他の資料が見当たらないため、この様相の時期的および地域的広がりは不明である。

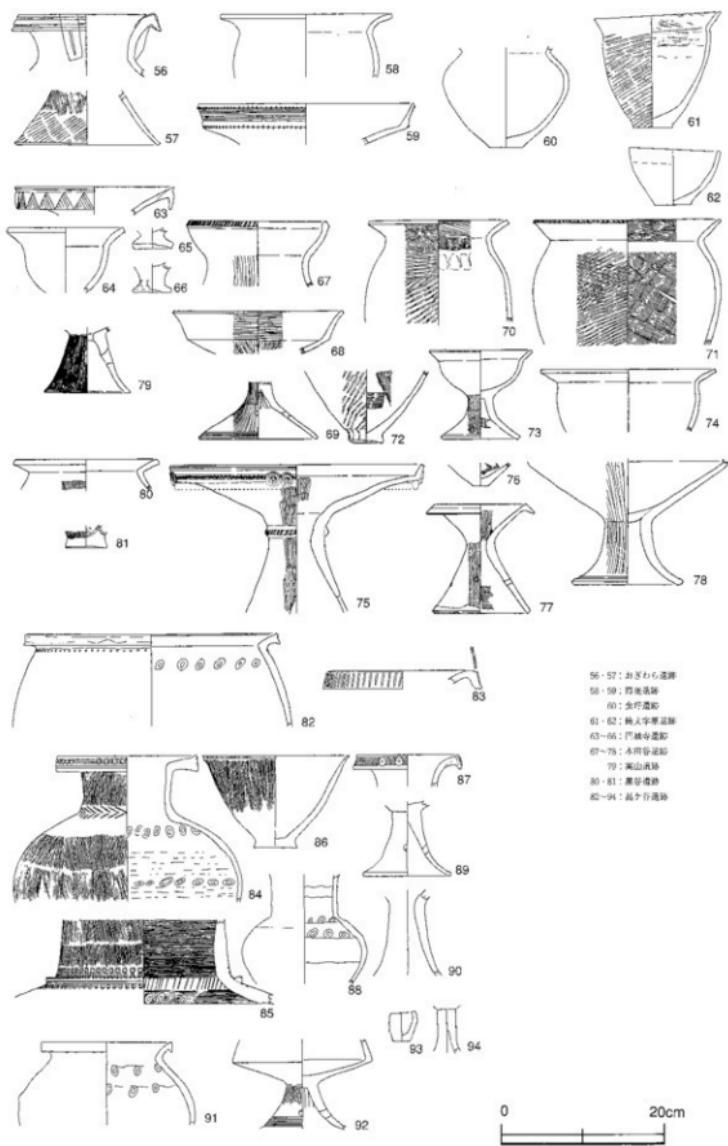
洲本地域では中期末～後期初頭に、7棟の竪穴住居跡が検出されている、大森谷遺跡⁽¹⁰⁾が出現する。この遺跡は下内膳遺跡の西側丘陵斜面に位置し、標高は約40～60mで、10m前後の下内膳遺跡よりかなり高所に位置している。高地性集落と考えられる遺跡である。ここで高地性集落と呼ぶのは、かつて岡本稔氏⁽¹¹⁾が谷間地あるいは山間地遺跡と呼んだもののや、高地性遺跡と呼んだものの両者を含んでいる。

大森谷遺跡出土土器はⅠ地区1号住居址→Ⅱ地区周辺部下部包含層→Ⅱ地区大形土壇→Ⅰ地区下部包含層の各出土土器とその変化がたどれると思われるが、Ⅰ地区1号住居址出土の高杯が紀伊地域と同様の形態を示す以外は、甕をはじめとして各機種のほとんどが東四国の土器と非常に類似している。特に甕は、香川県高松市上天神遺跡⁽¹²⁾の型式分類があつてはまる。大森谷遺跡は少なくとも後期中頃までに一度廃絶しているようであるが、下内膳遺跡が後期初頭頃の土器が出土していないことと考え合わせると興味深い。

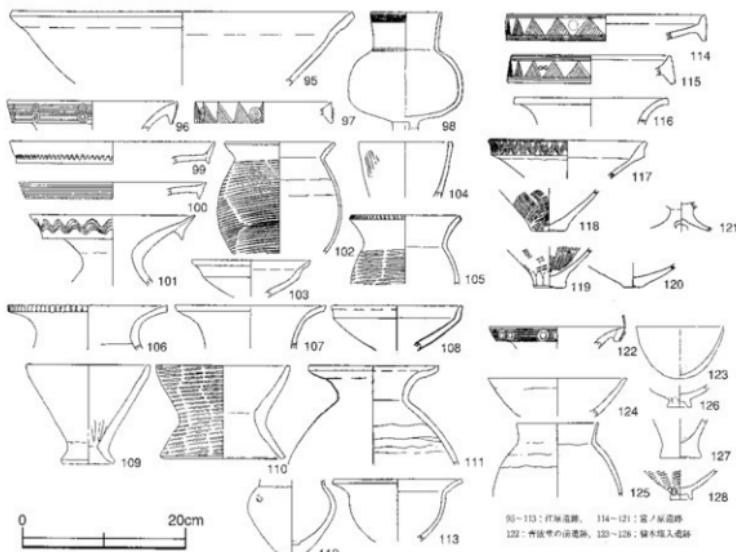
淡路地域の弥生集落のうち、中期末頃に始まり、後期の終わり頃に一齊に消滅する集落が存在していることや、それらが平野から遠く離れた山の上や、山間地、丘陵上に遺跡が出現し、三原平野部には少



第62図 北淡路高地性集落の土器(1)



第63図 北淡路高地性集落の土器(2)

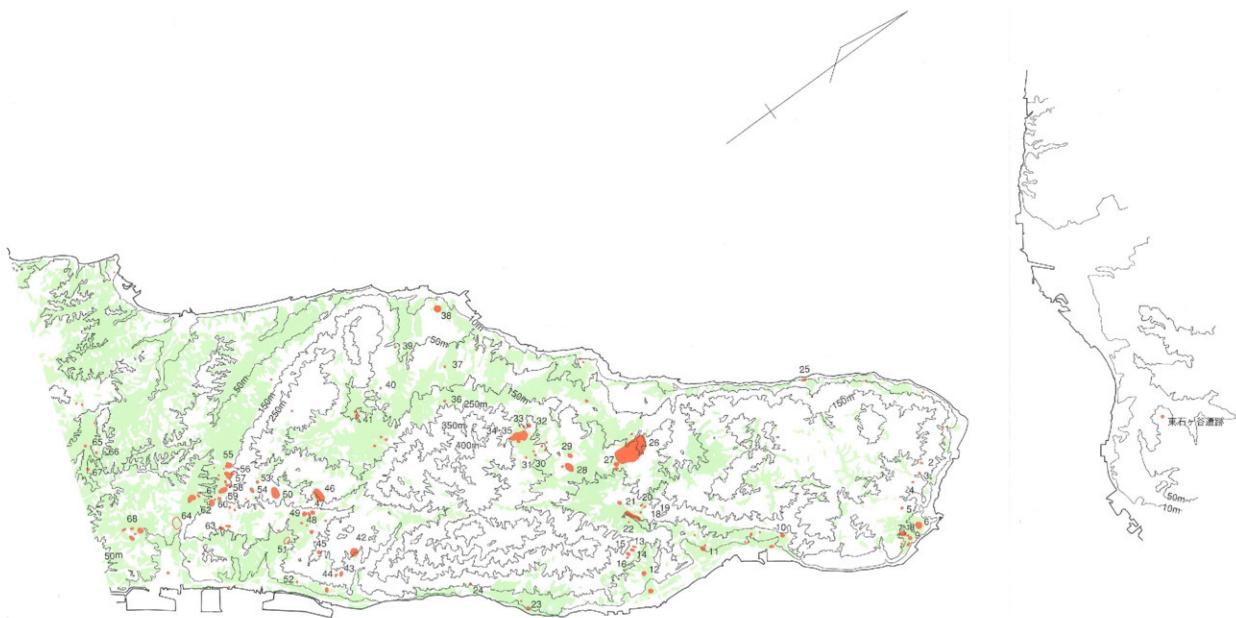


第64図 北淡路高地性集落の土器(3)

ないことが波毛康宏・浦上雅史両氏により指摘³⁹されている。それらは特に淡路の北半部、津名郡域に目立ち、100遺跡以上存在しているようであるが、大森谷遺跡が中期末から後期前半、禿山・尼ヶ岡遺跡が後期後半から古墳時代初頭といったように、すべての遺跡が中期末から後期末の金期間存続するわけではないようである。以下、北淡路の高地性集落を中心に、出土土器・採集土器が公表されているもの⁴⁰について、禿山・尼ヶ岡遺跡の編年表をもとに時期的位置づけおよび動態を探ってゆくことにする。

なお、土器の実例図は第62~64図に示し、各遺跡の分布図⁴¹は第65・66図⁴²に示した。また、各遺跡の所属時期は第2表にゆずることとする。

中期末~後期初頭の遺跡のうち、品ヶ谷遺跡の壺(第63図84・85)は東四国の中器に非常に類似する。また、第66図の分布図の飛谷遺跡⁴³堅穴住居跡3出土土器も後期初頭に近い時期で、壺・甕・高杯とも東部瀬戸内の様相を示している。また、禿山・尼ヶ岡Ⅰ期以前とした大坂遺跡の壺(第62図3)や白山真土遺跡の高杯(第62図11)も東四国の様相に近い。また、低地に位置する遺跡は非常に少なく、時期も極めて限られるようであり、中期の遺跡では津名町天神遺跡がわずかに認められる程度で、しかも低地に近い位置に所在する。第65・66図をあわせて各遺跡の分布状況を観察すると、いくつかの遺跡のまとまりが見える。それらは、大坂遺跡、水木遺跡、今出川遺跡など柿原地区と仮称する地区で、大坂遺跡を嚆矢とする。白山真土遺跡を嚆矢とし、規模の上からも核となる白山地区は、禿山遺跡、尼ヶ岡遺跡、岡遺跡を含み、河内遺跡や原遺跡も含まれるであろう。舟木地区は舟木遺跡を嚆矢、核とし、尾花遺跡などが含まれる。上ノ開地遺跡、井内遺跡などを含む仁井地区。原田遺跡を嚆矢とし、ほか5遺跡を含む原田地区と久野々遺跡を核とし、おぎわら遺跡、雨堤遺跡、金坪遺跡を含む久野々地区は両地区をあわせて久野々地区と呼べるかもしれない。鎧文字原遺跡を核とし、色目遺跡を含む生田地区、また、



第65図 北淡路の弥生時代遺跡分布図(1/100,000)

	遺跡名	所在地	時期(允・尼編年)		遺跡名	所在地	時期(允・尼編年)
1	湯の谷遺跡	淡路町岩屋	後期	35	久野々遺跡	北淡町久野々	I・II
2	サセブ遺跡	淡路町岩屋	後期	36	妙神谷遺跡	北淡町黒谷	後期
3	土穴遺跡	淡路町岩屋	後期	37	長守遺跡	北淡町黒谷	後期
4	砂崩尾廻跡	淡路町岩屋	後期	38	宵波塗の前遺跡	北淡町宵波	後期
5	高尾遺跡	淡路町岩屋	I以前	39	宝津土井遺跡	北淡町宝津	後期
6	まるやま遺跡	淡路町岩屋	後期	40	錦文字原遺跡	北淡町生田	II
7	塩壺西遺跡	淡路町岩屋	I・II	41	色目遺跡	北淡町生田	後期
8	塩壺東遺跡	淡路町岩屋	後期	42	円城寺遺跡	津名町佐野	I?
9	塩壺遺跡	淡路町岩屋	後期	43	桑ノ戸遺跡	津名町佐野	後期
10	橋本下林遺跡	東浦町橋本	I以前・III	44	上殿遺跡	津名町佐野	後期
11	佃遺跡	東浦町浦	IV以降	45	本田谷遺跡	津名町佐野	II~III
12	今出川遺跡	東浦町久留麻	II~III	46	高山遺跡	津名町野田尾	I以前~II
13	千本遺跡	東浦町久留麻	後期	47	勢戸遺跡	津名町野田尾	後期
14	行免形遺跡	東浦町久留麻	後期	48	才川原遺跡	津名町野田尾	後期
15	大坂遺跡	東浦町久留麻	I以前?	49	延命寺遺跡	津名町野田尾	後期
16	水木遺跡	東浦町久留麻	II?	50	黒谷遺跡	津名町生穂	I以前
17	白山真上遺跡	東浦町白山	I以前・II	51	林瀧遺跡	津名町生穂	中期末
18	白山岡遺跡	東浦町白山	後期	52	駐ヶ内遺跡	津名町佐野	後期
19	尼ヶ岡遺跡	東浦町白山	I~V	53	長谷川大池遺跡	津名町生穂	後期
20	禿山遺跡	東浦町白山	I~II	54	長谷A遺跡	津名町生穂	後期
21	原遺跡	東浦町白山	後期	55	流松遺跡	津名町池ノ内	後期
22	河内遺跡	東浦町白山	後期	56	官ノ原遺跡	津名町池ノ内	II~III
23	船頭ヶ内遺跡	東浦町笠口	後期	57	丸坂遺跡	津名町池ノ内	後期
24	流路久保遺跡	東浦町益門	II?	58	百田遺跡	津名町池ノ内	後期
25	貴新神社遺跡	北淡町野島	II~III	59	江原遺跡	津名町王子	II~III
26	舟木遺跡	北淡町舟木	I以前・II・IV・V	60	矢坪遺跡	津名町王子	後期
27	尾花遺跡	北淡町小出	後期	61	かじやくば遺跡	津名町王子	後期
28	上ノ開地遺跡	北淡町仁井	II?	62	油宿手遺跡	津名町王子	後期
29	井内谷遺跡	北淡町仁井	II頃	63	品ヶ谷遺跡	津名町大谷	中期末~後期初頭
30	原田遺跡	北淡町仁井	I以前	64	天神遺跡	津名町志筑	中期
31	穴郷遺跡	北淡町久野々	後期	65	馬場遺跡	津名町大町下	後期
32	おぎわら遺跡	北淡町久野々	I・II	66	奈良原遺跡	津名町大町堀	後期
33	金坪遺跡	北淡町久野々	後期	67	火打角遺跡	津名町人町堀	後期
34	南堤遺跡	北淡町久野々	I?	68	古城江A遺跡	津名町中田	後期

第2表 北淡路の弥生時代遺跡地名表



遺跡名	時期	備考	遺跡名	時期	備考	遺跡名	時期	備考
1 菅原遺跡	V		10 おがわら遺跡	V		19 若ノ内遺跡	N	続文後期あり
2 境寺西古跡	V		11 久野ヶ遺跡	V		20 穴打古道跡	V	
3 亂毛塚	I ~ VI	純文から後続	12 宮の前遺跡	I	純文から後続	21 大向遺跡	N	
4 今山川遺跡	I ~ VI	Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ	13 円城寺遺跡	V		22 みのこし遺跡	V	
5 大坂遺跡	V		14 本田谷遺跡	V		23 富山遺跡	V	
6 白山真土遺跡	V		15 尾か寺遺跡	V		24 香住遺跡	V	
7 兔山遺跡	V		16 滝ヶ谷遺跡	VI ~ V		25 桜ヶ谷遺跡	N	
8 尾ノ岡遺跡	V		17 江底遺跡	V		26 外ヶ島遺跡	N	続文後期あり
9 井木遺跡	V ~ VI		18 天神遺跡	N				

第66図 津名郡における弥生時代の遺跡(伊藤宏幸氏作成)

円城寺遺跡、桑ノ戸遺跡、上殿遺跡を含む佐野地区も設定できるかもしれない。野川尾地区は黒谷遺跡、高山遺跡を嘴矢とし、林遺跡、延命寺遺跡、才川原遺跡、勢戸遺跡ほかを含む。品ヶ谷遺跡を嘴矢とする王子・池ノ内地区は江原遺跡、宮ノ原遺跡、油留手遺跡、かじやくば遺跡、矢坪遺跡、百田遺跡、丸塚遺跡、遠松遺跡ほかを含む。ほかに、馬場遺跡を初現とし、奈良原遺跡、火打角遺跡などを含む大町地区、古城江A遺跡ほか4遺跡を含む中田地区があげられる。五色町では、中期末の大向遺跡を嘴矢とする仮称大宮・吉田地区がみのこし遺跡、宮山遺跡ほかを含むようであり、仮称広石地区では、外ヶ鼻遺跡、飛谷遺跡、喜住遺跡ほかを含む。これらの地区は遺跡群として、集落のまとまりとしてとらえることができ、核となる集落は同地区内の集落も含み、各地区は一つの集落として考えると、各地区=集落が継続して存在しているものが多くなる。そして、核以外の集落はその出先の性格が考えられ、地区からはずれた集落もいざれかの地区に属する出先ととらえてよいものと考えられる。その性格としてはやはり防御のための見張りを考えたい。

各地区的立地場所を第65・66図から観察すると、海からは直接見えにくい場所、丘陵で囲まれた盆地のような場所にあたり、いわゆる隠れ里のような位置にあり、しかも、集落からは海が見える場所であり、特に舟木遺跡では播磨灘のみならず大阪湾も見える位置である。また、現在の土地利用と重ね合わせると、いずれも水田地帯(第65図の緑色)である。久野々地区は標高300m近いにも関わらず、水田経営がなされているのは、地下水位が高いことと、造成一耕地面化しやすい花崗岩風化土という地質条件に恵まれているからと考えられ、弥生時代においても、谷水田の經營が可能であったものと推察される。

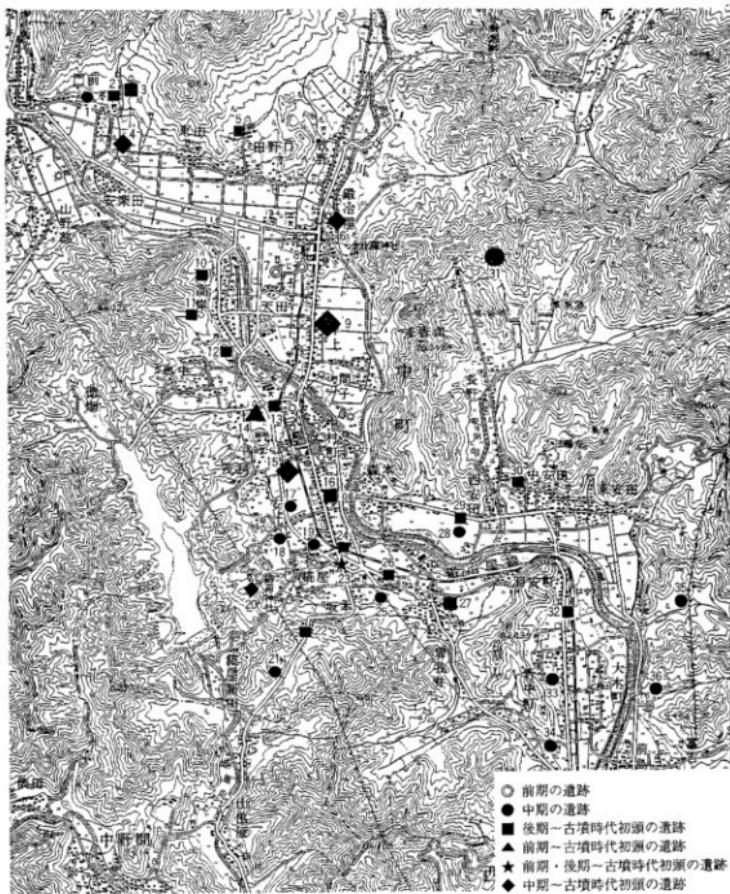
なお、集落の隠れ里的立地は他地域にも認められる。第67図⁶⁴は播磨北部、西脇市と多可郡中町であるが、中期末(IV様式期)の大木遺跡(35)や西安田長野遺跡K・L地点(31)は入り口を丘陵で狹められた盆地状地形に立地し、中期末の短い期間のみ存続する集落である。

このような集落は高地に存在する集落と同様、防御のための集落と考えられ、これまでの高地・低地という高低のみではなく、周りを丘陵で囲まれ、周囲から非常に見えにくい立地も防御の範囲でとらえるべきであり、また、不便な場所という点や時期的に短期で消滅するということも考慮すべきものであろう。

北淡路地域では、それまで大きな集落が認められないにも関わらず、中期末～後期初頭に突然集落が数多く現れ、後期末～古墳時代初頭には消滅し、しかも、低地に降りた形跡も少ない。これらの集落は、政治的混亂・社会不安などの要因による防衛的集落と考えられ、しかも水田經營可能で、外からは見えにくく、集落から周りが見やすい位置を選んでいるのである。

なお、北淡路における出現段階の中期末～後期初頭の高地性集落では、これまでの土器様相が一転して東部瀬戸内(東四国)の様相を示し、低地の集落が途切れる。しかし、後期後半には畿内の土器様相になり、壺では畿内と同様の型式変化を辿る。このことは、東部瀬戸内(東四国)の人々が移住してきたか、畿内の影響により変化したものか、畿内の人々にとてかわったかのいざれかが考えられる。現段階では、河内の出土品が認められることから、前者を考えたいが、この点については、今後、各集落のそれぞれの動態(継続または断絶)を検討する必要がある。また、東部瀬戸内(東四国)の人々の移動が能動的か受動的かについても今後の課題である。

淡路地域出土土器みると、中期後半までは各地域との平和的交流であったものが、中期末～後期初頭において一変するのである。なお、後期末以降の三原地域南部の谷町筋遺跡⁶⁵では出土土器の大半が東四国の様相を呈するが、洲本地域や北淡路では畿内的な様相のようである。



生野1：50000

- | | | | |
|---------------|----------------|------------------|---------------|
| 1. 門前・上山遺跡 | 2. 門前八幡神社山遺跡 | 3. 安室東・女来若道跡 | 4. 貝賀原遺跡 |
| 5. 東山古墳群 | 6. 犬野・大口遺跡 | 7. 多賀寺遺跡 | 8. 鎌治原・下川遺跡 |
| 9. 惣い沢遺跡 | 10. 山谷・ツブラン山遺跡 | 11. 高峰・火伴塚跡 | 12. 駒室の遺跡 |
| 13. 駒室遺跡 | 14. 駒室・三内塚跡 | 15. 安坂・鏡ヶ池遺跡 | 16. 長本・上鳥原遺跡 |
| 17. 安坂・辻ふら遺跡 | 18. 安原・門田遺跡 | 19. 鏡屋・北丸子遺跡 | 20. 長坂・上池遺跡 |
| 21. 長木・駒室遺跡 | 22. 駒室遺跡 | 23. 長尾・牛井遺跡 | 24. 駒屋・並の山遺跡 |
| 25. 長本・下田遺跡 | 26. 長我津・下田遺跡 | 27. 長我津・井ノ入遺跡 | 28. 西安田・引ノ井遺跡 |
| 29. 西安田・山陽港跡 | 30. 西安田東野遺跡A地点 | 31. 西安田長野遺跡K・L地点 | 32. 寺中・前遺跡 |
| 33. 寺中・ハゼノ木道跡 | 34. 大木・豊折田遺跡 | 35. 大木遺跡 | 36. 萩島遺跡 |

第67図 杉原川中流域における弥生時代遺跡

[註・参考文献]

- (1) 三原慎吾ほか『まるやま遺跡－本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V－』 兵庫県文化財調査報告 第178冊 兵庫県教育委員会 1998年
- (2) 『丸山遺跡現地説明会資料』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1994年
- (3) 『舟木遺跡』 北淡町教育委員会 1994年
- (4) 深井明比古ほか『佐渡跡－本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－』 兵庫県文化財調査報告 第176冊 兵庫県教育委員会 1998年
- (5) 間本 稔・廣岡俊二・松下 勝「北淡路の遺物」『兵庫考古』第9号 兵庫考古研究会 1980年
- (6) 松岡千海ほか『佐渡西遺跡－本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ－』 兵庫県文化財調査報告 第160冊 兵庫県教育委員会 1997年
- (7) 『塩塚遺跡現地説明会資料』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1995年
- (8) 伊藤宏幸ほか『楠本下林遺跡－町道刈畑線改良工事に伴う発掘調査報告書－』 東浦町埋蔵文化財調査報告書第1集 東浦町教育委員会 1997年
- (9) 甲斐昭光「おぎわら遺跡の調査」『北淡町久野々遺跡－一般農道整備事業(仁井Ⅱ期地区)に伴う発掘調査報告書－』 兵庫県文化財調査報告 第167冊 兵庫県教育委員会 1997年
- (10a) 伊藤宏幸「久野々遺跡第1次調査」『北淡町久野々遺跡』 前出(9)文献
- (10b) 川吉知子「久野々遺跡第2次調査」『北淡町久野々遺跡』 前出(9)文献
- (11) 波木麻宏「白山真土遺跡」「季刊 談路の文化」第3巻第4号 1981年
- (12) 「貴船神社遺跡現地説明会資料」 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1995年
- (13) 平成9年度に東浦町教育委員会により発掘調査が実施された。
- (14) 渡辺 畏「浜田遺跡」「製塩遺跡I(津名郡)」 兵庫県生産遺跡調査報告 第2冊 兵庫県教育委員会 1993年
- (15) 吉田 畏・岸本 宏ほか『藤木遺跡』『中原遺跡他発掘調査報告書－本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告I－』 兵庫県文化財調査報告 第157冊 兵庫県教育委員会 1997年
- (16) 岸本一宏ほか『井ノ谷遺跡』『中原遺跡他発掘調査報告書』 前出(15)文献
- (17) 吉田 畏・岸本一宏ほか『外河遺跡』『中原遺跡他発掘調査報告書』 前出(15)文献
- (18) 平成5年度に淡路町教育委員会により発掘調査が実施された。
- (19) 森岡秀人「辯生時代抗争の東方波及－高地性集落の動態を中心に－」『考古学研究』第43巻第3号 1996年
- (20) 高杯A cは、本来別分類とすべきであるが、限られた資料であるため、暫定的に高杯Aに含めて分類しておく。
今後、資料の増加によって、別分類、あるいは台付鉢などの別器種として分類すべきであろう。
- (21) 前出(5)文献。なお、「北淡路」の呼称範囲については本文獻と基本的には同じであるが、本書では津名山地部分を北淡路と呼ぶ場合もある。
- (22) 山田清朗「出土遺物のまとめ」『洲本市下内膳遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第155冊 兵庫県教育委員会 1996年
- (23) 山田清朗ほか『洲本市下内膳遺跡』 前出(22)文献
- (24) 津名郡町村会 伊藤宏幸氏の御教示。
- (25) 伊藤宏幸「舟木遺跡(第1次)」「製塩遺跡I(津名郡)」 前出(14)文献
- (26) 古賀雅仁・岸本一宏ほか『寺中遺跡－淡路櫻賀道関係埋蔵文化財調査報告書IV－』 兵庫県文化財調査報告 第64冊 1988年
- (27) 松下 勝・別寄洋二ほか『淡路・志知川津南遺跡』 兵庫県文化財調査報告 第40冊 兵庫県教育委員会 1987年
- (28) 南 博史ほか『口酒井遺跡－第11次発掘調査報告書－』 伊丹市教育委員会・歴古代学協会 1988年
- (29) 齐山克行・橋本久和『安満遺跡発掘調査報告書－9地区的調査－』 高槻市文化財調査報告 第10冊 高槻市教育委員会 1977年
- (30) 齐山克行「各地域の土器編年」 沢津地域」「仰牛上器の様式と編年」近畿編II 木耳社 1990年
- (31) 福井英治ほか『田能遺跡発掘調査報告書』 尼崎市文化財調査報告 第15冊 尼崎市教育委員会 1982年
- (32) 森岡秀人「会下山遺跡出土土器特論」「新修芦屋市史」資料編I 芦屋市役所 1976年
- (33) 森岡秀人「畿内第V様式の編年順位と大邱山遺跡出土土器の占める位置」「河内長野大師山」 関西人文学部考古学研究 第5冊 関西大学 1977年。なお、筆者は塩塚西遺跡出土土器を糞山・尼ヶ戸I～II期併行とし、後期後半の前業に位置づけたが、森岡氏による塩塚西遺跡出土土器の編年の位置づけ(森岡秀人「年代論と邪馬台国論争」「古代史の論点4 検力と国家と戦争」小学校 1998年)と一致することを付記しておく。
- (34) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』 奈良国立文化財研究所学報 第37回 1980年

- (35) 豊岡卓之「『畿内』第V様式層年代の試み(上)・(下)」『古代学研究』108・109 1985年
- (36) 寺澤 売「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と一・三の問題」『奈良市六条山遺跡』 奈良県文化財調査報告書 第34集 奈良県教育委員会 1980年
- (37) 山本三郎はか「播磨大中遺跡の研究」 播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館 1990年
- (38) 勇 正広・藤岡 弘・橋爪康至ほか「中ノ田遺跡」 兵庫県文化財調査報告書 第2冊 兵庫県教育委員会 1971年、
同田 勇ほか「尼崎市中ノ田遺跡Ⅲ」 尼崎市文化財調査報告 第22集 尼崎市教育委員会 1991年
- (39) 吉澤 遼「各地域の併行開闢・解説」「弥生土器の様式と羅牛」近畿編 I 木耳社 1989年、森間秀人「各地域の併行開闢・解説」「弥生土器の様式と羅牛」近畿編 II 木耳社 1990年
- (40) 寺澤 売「畿内古式土器の編年と二、三の問題」「矢部遺跡」 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第49冊 奈良県教育委員会 1980年
- (41) 大久保微也「下川津遺跡における弥生時代後期から占領時代前半の土器について」「下川津遺跡 濱戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅷ」 香川県教育委員会・JR香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団 1990年
- (42) 「久野遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター報 vol.1.4 1992年度』 徳島県埋蔵文化財センター 1993年
- (43) 菅原康夫「黒谷川郡遺跡Ⅰ」昭和59年度発掘調査概報 穂鳥県教育委員会 1986年
- (44) 朝香川県埋蔵文化財調査センター編「上天神遺跡」高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 1995年
- (45) 上井孝之「紀伊地城」「弥生土器の様式と羅牛」近畿編 I 木耳社 1989年
- (46) 丸山 譲・松林実生「舞子・東石ケ谷遺跡Ⅱ」 神戸市教育委員会 1990年
- (47) 深澤芳樹氏も指摘している。深澤芳樹「弥生時代の近畿」「岩成講座 日本書古学」5文化と地域性 岩波書店 1986年
- (48) 多賀茂治「弥生時代後期～古墳時代前期の土器」「神戸市西区 玉津田中遺跡－第6分冊(総括編)－」一田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－兵庫県文化財調査報告 第135～6冊 兵庫県教育委員会 1996年
- (49) 浦上雅史「安乎廻所跡発掘調査概報」 洲本市文化財調査報告 第4集 洲本市教育委員会 1985年
- (50) 以下、各遺跡の概要については、波毛廉宏・浦上雅史「淡路島・弥生文化」「兵庫県の考古学」 村川弘編 地域考古叢書 吉川弘文館 1996年による。また、全般的な様相については、洲本市立淡路文化史料館編「図説・駆馬台団の時代と淡路島」 1987年による。
- (51) 「下内膳遺跡発掘調査Ⅴ 咸暦3」 洲本市教育委員会 1991年
- (52) 古賀智仁はか「森遺跡－淡路島縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」 兵庫県文化財調査報告書 第55冊 兵庫県教育委員会 1988年
- (53) 板口弘貢・宍宗佳重ほか「若谷遺跡発掘調査報告書」 南淡町文化財調査報告書 第2集 南淡町教育委員会 1995年
- (54) 「土成町北原遺跡」－内陸工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－ 徳島県教育委員会 1988年、「北原～大法寺遺跡」－「楽寺遺跡・椎ヶ丸～芝牛遺跡」－四国縱貫自転車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告6－ 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第6集 『徳島県埋蔵文化財センター編』 1994年
- (55) 刈谷洋二・土井博幸・市橋重喜ほか「大森谷遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－」 兵庫県文化財調査報告 第27冊 兵庫県教育委員会 1985年
- (56) 同本 稔「淡路の弥生式時代の考察－洲本川流域の遺跡を中心として－」『淡路考古学研究会誌』第2号 淡路考古学研究会 1974年
- (57) 第62・64回に示した実測図のうち、白山真土遺跡については、前出(11)文献、本田谷遺跡・高山遺跡・黒谷遺跡・宮ノ原遺跡については、伊藤宏幸「津名町遺跡分布図・町内遺跡詳細分布調査報告書－」 津名町埋蔵文化財調査報告書 第1集 津名町教育委員会 1997年に、その他の遺跡は前出(5)文献によった。
- (58) 遺跡の分布図作成にあたっては、津名郡町村会 伊藤宏幸氏、北淡町教育委員会 川吉知子利氏の御教示・御協力を得た。記して謝意を表す。
- (59) 第66図の出典は、前出(9)・(10)文献である。
- (60) 現地説明会資料による。津名郡町村会 伊藤宏幸氏の御教示を得た。
- (61) 第67図の出典は、宮原文隆「柿屋・土井の後遺跡I－ウエルマート建設に係る文化財発掘調査－」 中町文化財報告14 中町教育委員会 1997年 である。
- (62) 古賀智仁・西口圭介ほか「谷町悠遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－」 兵庫県文化財調査報告 第73冊 兵庫県教育委員会 1990年

土器觀察表
兜山遺跡

No.	器種	出土位置	法量(cm)	残存状	形態・技法の特徴		色・調	備考
					内	外		
1	鉢 2 A	S II - 1 周縁部	口径 13.9 底高 6.9	ほぼ完形	中央がやや凹んだ船型から内湾型に外方にのびる。口縁部はやや丸める。外縁は引き(2.8cm)。内面はハケと壓れる。口縁部内面はヨコナリ。		外: 淡(2.5YR 6/6), 内: 淡(2.5YR 2/1), にぶい青緑(10YR 7/3), にぶい青(10YR 7/4)	全表面彫り合む。
2	鉢 2 A	S II - 1 周縁部	口径 15.2 底高 6.9 底径 4.4	ほぼ完形	中央がやや凹んだ船型から内湾型に外方にのびる。口縁部はやや丸める。外縁は引き(3名. cm)。内面は引削(1.7cm)。口縁部はヨコナリ。		外: 淡(2.5YR 6/6), 明赤褐(5YR 5/6), 裡(2.5YR 6/6), 赤褐(10YR 6/6), 褐(7.5YR 7/6)	
3	鉢 1CかD	S II - 1 周縁部	縦高 6.9 底径 4.6	ほぼ完形	突出した腹部で底部中央がやや凹む。底部は内湾しながら外方にのびる。口縁部は引削し、外方に広くのびる。外縁は引削(3名. cm)。底部内面は稍削ぎ。		外: 淡黄(10YR 7/6), 柔黄(10YR 8/3), 淡黄(2.5YR 8/2), にぶい青(7.5YR 7/4)	大粒(3~5mm) 石突多く含む。
4	鉢 2 B	S II - 1 周縁部	口径 9.8 底高 5.5 底径 3.5	底高湯舟形 作成手	中央をした船型から外方に内湾しながらのびる。底部は丸形。外縁は引き(3名. cm)で、底部側面を削る。内面は引削。		外: 淡(10R 5/5), 明赤褐(2.5YR 5/6), 裡(5YR 6/5, 7.5YR 6/6)	外側に黒斑。
5	盆	S II - 1 中央部	口径 14.1 底高 6.5	鉢形 1/2	体部から前後して外方に直線的にのびる口跡部。端部は丸める。外縁は毛刷毛。		外: 海青褐(7.5YR 8/4) 内: 淡褐(7.5YR 7/8)	
6	器身 D	S II - 1 周縁部	口径 20.6 底高 6.5	荷物形	端部の各底部筋から弧状して内湾しながらのびる口跡部。端部は丸める。外縁は引き(3名. cm)で、底部側面を削る。内面は引削。		外: 明赤褐(2.5YR 5/8), にぶい赤(5YR 4/4), 裡(5YR 4/3)	全表面合む。
7	陶器	S II - 1 底高 4.0	約1/4		「ハ」の字に開く深く狭い調査。深部は薄を持ち、内側に引削し返して外側に。外縁は引き(3名. cm)のちナラ。内面は引削。		外: 淡(10R 6/6), 暗赤(5YR 6/6) 内: にぶい青(5YR 5/2)	銀斑苔跡。
8	鉢縁帯	S II - 1	底径 3.0 厚さ 0.5 底径 0.3	完形	裏の各部を再利用して製作されたもの。上面に引き目が残る。		外: 暗(5YR 6/8) 内: 淡(10R 5/6), 明赤(7.5YR 5/6)	
9	器身	S K - 1	底高 14.9 底高 9.4		「く」の字に屈曲する体部中央部。上半部は外反する。内面は引削して外反する。外縁は引削。		外-内: にぶい青(7.5YR 7/4), 灰白(7.5YR 6/8) 内: にぶい青(5YR 5/2)	全表面合む。
10	鉢 2 B'	S K - 1 周縁部	口径 8.6 底高 6.1 底径 3.8	底高湯舟形 作成手	平底から高さをなじませた後、引削する口跡部。内面は引削。外縁は毛刷毛。底部内面はヨコナリ。		外: 淡(10R 6/6), 暗赤(5YR 6/6) 内: にぶい青(7.5YR 6/4)	外側黒斑あり。
11	広口器 日付	S X - 2	口径 16.7 底高 7.6	口縁 3/4	外上方に直線的にのびたもので外反する口跡部。内面は引削。底部は下方に延び、端部は下端で凹陷し、各1名の腰に横縫合線を残す。底部内面は引削。		外: 淡(2.5YR 6/6, 7.5YR 6/6), 淡黄(2.5Y 7/4) 内: 海青褐(10YR 7/6), 柔黄(7.5YR 5/6)	
12	器身 A b	S X - 2	口径 21.6	口縁 1/4	外に引削し大きめのくぼみで、端部は上部に拡張する。端部に引削し、底部に引削し、底部内面は引削。		外-内: 明赤褐(2.5YR 5/6)	全表面彫り合む。
13	底部	S X - 2	底径 4.1 底高 4.3	両端のみ	上部底部から外上部に開く体部。外縁は引き。内面は引削。底部内面は引削。		外: 暗(5YR 6/6) 内: にぶい青(7.5YR 5/6)	
14	底部	S X - 2	底径 3.8 底高 6.5	基盤のみ	平底から高さをなじませた後、引削する口跡部。内面は引削。底部内面は引削。		外: 明赤褐(10YR 7/6) 内: にぶい青(2.5YR 5/6)	全表面彫り合む。
15	底部	S D - 1	外高 5.2 底高 5.4		平底から上方に直線的にのびる作成部。外縁は引き(2名. cm)で内面は引削。		外: 暗(5YR 6/6), 明赤褐(5YR 5/6) 内: にぶい青(7.5YR 5/4)	
16	広口器 A b	II区 2層	口径 18.0 底高 30.4 底径 21.0	口縁 7/2 底高 1/6	外一歩作成で直線的で底部は凹入する。底部は上部に拡張する。外縫部は引削。底部内面は引削。		外: 淡(2.5YR 7/1), 淡黄(2.5YR 6/3) 内: 柔黄(10R 6/6), にぶい青(5YR 7/3)	全表面合む。
17	広口器 B a	II区 1層 谷筋下層	口径 17.1 底高 28.5 底径 25.4 底高 4.3	口縁 1/4 作成 1/4	外一歩作成で底部は底部へと接する。端部は引削から外縫部へと直し、口縫部は引き。底部は上部に拡張する。外縫部は引削。底部内面は引削。		外: 淡(2.5YR 6/6), 淡黄(2.5YR 6/2), 淡黄 7/5, 淡青(5YR 7/4), 淡黄(5.5YR 1/1), 淡黄(5.5YR 1/1), 淡黄(5.5YR 8/4)	外-内: 外側下半に 黒斑あり。
18	広口器 B d	IV区 谷筋下層	口径 19.2 底高 5.4	口縁 1/6	外引削する口跡部で、端部は下方に拡張する。通縫部に底部状状を残す。外縫部毛刷毛。底部内面は引削。		外-内: 淡黄(7.5YR 8/3)	全表面彫り合む。
19	広口器 B d	IV区 谷筋下層	口径 19.2 底高 5.4	口縁 1/6	外引削する口跡部で、端部は下方に拡張する。通縫部に底部状状を残す。外縫部毛刷毛。底部内面は引削。		外-内: 淡黄(7.5YR 8/3)	全表面彫り合む。
20	広口器 B d	IV区 谷筋下層	口径 21.1 底高 7.7	口縁 3/8	直立気味の底部から大きめに外反する口跡部。通縫部は下方に引削し、4条の通縫部を残す。外縫部毛刷毛。		外: にぶい青(7.5YR 6/3-5/3), 内: 底部(20YR 8/2)	引き成形。 金糸丹沙彫合む。
21	広口器 B d	IV区 谷筋下層	口径 12.0 底高 6.7	口縁 3/4	直立する底部からややおさげ少し外反して口縫部となる。底部は上部に拡張する。外縫部は引削。底部内面は引削。		外-内: にぶい青(2.5YR 6/4)	
22	広口器 B d	IV区 谷筋下層	口径 13.0 底高 8.6	口縁 3/4	直立する底部からややおさげ少し外反して口縫部となる。底部は上部に拡張する。外縫部は引削。底部内面は引削。		外: 明赤褐(5YR 6/6), 暗赤(7.5YR 4/3) 内: 柔黄(7.5YR 4/3)	石斑、長苔目立 ち。全表面合む。
23	広口器 B d	IV区 谷筋下層	口径 16.8 底高 3.1	口縁 1/5	外引削する口跡部で、端部は下方に大きく外反し、6条の内縫部を残す。		外-内: にぶい青(5YR 6/4)	全表面彫り合む。
24	広口器 B d	IV区 谷筋下層	口径 26.7 底高 5.3	口縁 1/5	外引削する口跡部で、端部は下方に大きく外反し、縫縫部に5条の内縫部を残す。底部は下方に底部状状を残す。内縫部に引削目を残す。ナラ削痕。		外-内: にぶい青(5YR 6/4)	全表面少含む。 底合の可塑性あり。
25	甕 1 A a	2区 谷筋下層	口径 27.8 底高 20.3 底径 5.0	口縁 1/2 作成 1/2 底高 5.0	やや丸い底部から屈曲して外方に広くのびる口跡部。端部は引削。底部は引削。外縫部は引削。内縫部は引削。底部内面は引削。		外: 底白(10YR 8/2), 淡青(2.5YR 8/3), 底 7/3 内: にぶい青(10YR 7/4), 淡黄(2.5YR 3/3), 底灰(2.5YR 6/1)	底部外面に黒斑 あり。
26	甕 1 A c	4区 谷筋下層	口径 15.6 底高 30.1 底径 21.0 底高 7.2	口縁 1/3 作成手 干次	やや丸い底部から屈曲して外方に広くのびる口跡部。端部は引削。底部は引削。外縫部は引削。内縫部は引削。底部内面は引削。		外: 淡青(2.5YR 8/3) 内: 壁灰(N/3)	全表面の底合含む。 底合地域。
27	甕 1 B b	4区 谷筋下層	口径 16.5 底高 30.1 底径 21.0 底高 7.2	口縁 1/3	「く」の字に開く深く狭い調査。外反気味で、端部は引削。内縫部は引削。		外: 淡青(2.5YR 8/3) 内: 壁灰(N/3)	
28	甕 1 B b	2区 谷筋下層	口径 18.2 底高 5.6	口縁 1/4	直立からやくの字に大きく外反してのびる口跡部。端部は引削。内縫部は引削。		外-内: にぶい青(5YR 7/4, 7.5YR 7/4)	
29	甕 1 B a	4区 谷筋下層	口径 16.5 底高 8.6	口縁 1/4	直立からやくの字に開く直線的なびのび口跡部。内縫部は引削。内縫部は引削。		外: 明赤(7.5YR 5/6) 内: にぶい青(10YR 8/3)	全表面彫り合む。

No	若木	生長年・樹形	法線(cm)	既存率	基原・社法の特徴	色調	備考
30	葉 1B a	4区 谷筋下層	口徑(16.8) 厚さ4.4	口徑 1/4	体部からくちに直して直立するのびのび口輪葉。内部の葉は薄く、縫葉は大きくなり割れ目状を示す。体部外側は削毛なし。口輪部はヨコナズ。	外) 黄白(3YR 8/2) 内) 黄白(3YR 7/1)	
31	葉 1B a	4区 谷筋下層	口徑(17.2) 厚さ6.5	口徑 1/4	体部からくちに直して外反曲形で外側に多くのがる口輪葉。内側の根は細く、瓣部は山字なす。体部外側は可憐な細毛。内側はナダネ。口輪部はヨコナズ。	外・内) にい梗(7.5YR 6/3)	
32	葉 1B	4区 谷筋下層	口徑(20.3) 厚さ9.3 底座4.2	口徑 1/2 底座 1/2	舌状から圓柱して立ち上り立った体部から外反して直立的につくのびる口輪葉。瓣部は尖り葉質。体部内面は被毛のち横方向の凹度。口輪部はヨコナズ。	外) にい梗(7.5YR 4/4) 内) にい梗(7.5YR 7/1), にい梗(2.5YR 5/4)	全葉母少葉む。
33	葉 4B	4区 谷筋下層	口徑(31.5) 厚さ(32.4) 底座11.6	口徑 1/2	舌状から圓柱して立ち上り立った体部から外反して直立的につくのびる口輪葉。瓣部は尖り葉質。体部内面は被毛のち横方向の凹度。口輪部はヨコナズ。	外・内) 黄白(7.5YR 8/2)	
34	底部	2区 谷筋下層	底径5.5 厚さ8.6	底部全体	大型の葉。丸い体部から倒披して直立的につくのびる口輪葉。瓣部は尖り葉質。体部内面は直角削り。内面は厚めか?	外) 黄黄褐(10YR 6/2), にい青(10YR 8/2) 内) 黑	
35	底部	4区 谷筋下層	底径5.8 厚さ9.8 底座6.8	4.8 底部定形	小形豊かな4辺は底部に見られ。中央がやや凹む底部から直立折して上方にのびややえり葉質。基葉剝離のため葉脈不明。	外) にい梗(7.5YR 6/4), 海灰(30YR 4/1) 内) にい梗(5YR 6/4)	
36	底部	2区 谷筋下層	底径5.9 厚さ8.6 底座6.9	底部全体	小形の底葉と見られ。火まきの平底から内溝しながらのびやえり葉質をつくる。	外) 黃(7.5YR 7/1), 淡黃褐(7.5YR 8/3) 内) にい梗(7.5YR 7/4)	底部外側に葉錐。
37	底部	4区 谷筋下層	底径5.9 厚さ7.0	5.5 底部芯	平底から直立的に外方にのびる。内面は削毛(7mm/cm)。調整部は被毛のため葉質不鮮明。直立感と思われる。	外) 黑褐(10YR 3/1) 内) 淡黃褐(10YR 8/3)	
38	底部	4区 谷筋下層	底径5.5 厚さ8.4	5.5 底部芯	やや突出する平底から外方にのびた内溝しながらのびる葉質。外側削毛。内面も削毛。	外) にい梗(10YR 6/3) 内) 海灰(10YR 6/1)	全葉含む。
39	底部	2区 谷筋下層	底径5.4 厚さ7.0 底座4.6	底部芯形	やや突出する平底から内側削毛で外方にのびる葉質。底部外側にはやや凹む。外葉は厚め(3mm/cm)ち削毛ナダネ。内葉は削毛ナダネ。葉裏部は思われる。	外) 黄黄(2.5Y 8/4), 海灰(10YR 6/2) 内) 黑(5Y 1/1)	全葉母含む。
40	底部	4区 谷筋下層	底径6.4 厚さ12.1	5.5 底部芯	やや突出する平底から内側削毛で外方にのびる葉質。削毛は斜面直線にて。葉裏部は削毛。内葉はナダネ。	外) 黄黄(2.5Y 7/2) 内) 黄黄(2.5Y 4/2)	
41	底部	2区 谷筋下層	底径6.5 厚さ7.5	底部芯形	やや突出する平底から外方にのびる葉質。外葉は削毛。内葉はナダネ。内葉はナダ。	外) にい梗(30YR 7/2), 淡灰(10YR 6/1) 内) 黄白(10YR 8/2)	
42	高杯 A a	4区 谷筋下層	口徑(25.2) 厚さ6.0	口徑 1/4	やや内側へながらがる4辺は底部から倒披して外側しながらのびる口輪葉。口輪部は丸く、口輪部はヨコナズ。	外・内) にい梗(10YR 7/2)	全葉母少葉む。
43	高杯 A a	4区 谷筋下層	口徑(21.6) 厚さ6.1	口徑 1/6 1/2	吸収的にのびる柄葉から広げて外方に直立感に併せ、のびる口輪葉。瓣部は斜面直線にて。口輪部は削毛。内葉はナダネ。	外) にい梗(10YR 7/4) 内) にい梗(10YR 6/4)	
44	高杯 C	4区 谷筋下層	口徑(13.4) 厚さ3.5	杯形 1/3	吸収の高杯形葉。内側ながら外方にのびる口輪葉。瓣部から、上葉外側面上に柔軟な葉質を施す。外葉は直立感と思われる葉脈はナダネである。	外) にい梗(10YR 6/4) 内) にい梗(5Y 7/4)	
45	高台 A b	4区 谷筋下層	口徑(22.1) 厚さ3.3	口徑 1/10	直立的に上方へのびる高台口輪葉。瓣部は上方に直立感し、瓣部上面に1条筋を施す。その側を横張り状態でやわらめ。口輪部のみヨコナズ調整。その他のは削毛。	外) 内) 黄(2.5Y 5/1)	全葉母含む。
46	御台	2 - 4区 谷筋下層	底径22.8	脚部 1/2	やや内側へ上方へのびるのびのび葉質して上方に直立感に併せ、のびる口輪葉。瓣部は丸く、口輪部は削毛。内葉は削毛。	外) 黄(7.5YR 6/4) 内) 墓(7.5YR 7/6)	金葉母含む。 118と同一個体か?
47	晋台	2区 谷筋下層	瓣径(18.0) 厚さ13.3	脚部 1/2	「ハハ」形葉基からくちに直して上方に直立感して上方へのびる口輪葉。瓣部は丸く中央部に凹溝をもつ。瓣部外側は削毛。内葉は削毛。	外) にい梗(10YR 7/2) 内) 黄白(10YR 8/2)	金葉母含む。
48	拂拂草	2区 谷筋下層	底径3.7 厚さ0.8 孔径0.7	1/2	半ば内側へ上方へのびるのびのび葉質して上方に直立感に併せ、のびる口輪葉。瓣部は丸く、口輪部は削毛。内葉は削毛。	外) にい梗(10YR 7/3) 内) 黄(2.5Y 7/2)	全葉母含む。
49	晋斯世	4区 谷筋下層	底径15.5 厚さ2.9 底座17.9	体部底形 1/2	平底で葉基五角形の平底な葉質。瓣部は幅(2.4mm)の山形葉基から出る葉質。瓣部から斜上に山形葉基(10YR 6/2)。内葉は削毛。瓣部は削毛。内葉は削毛。	外) にい梗(7.5YR 4/4), 海灰(10YR 6/2), にい梗(5YR 6/4) 内) 海(7.5YR 4/4), にい梗(10YR 6/4)	
50	広口庭 B d	4区 谷筋中層	口徑(17.4) 厚さ6.0	口徑 1/4	瓣部からくちのまきつき(外側)して外方にのびる口輪葉。瓣部は上方に直立感し、瓣部上面には縦筋を施す。瓣部外側はヨコナズ調整。その他のは削毛。	外) 明小梗(2.5YR 5/6) 内) にい梗(5YR 6/3)	全葉母微量含む。
51	広口庭 B b	4区 谷筋中層	口徑(21.1) 厚さ3.3	口徑 1/6	瓣部上面を上に斜張する口輪葉。瓣部には7mmの葉基をもつ。2側一対の斜張円錐形葉基をもとめる。ヨコナズ調整。	外・内) 灰黒(10YR 5/2)	砂粒目立つ。
52	広口庭 B c	4区 谷筋中層	口徑(20.5) 厚さ2.5	口徑 1/6	瓣部上面を上に斜張する口輪葉。瓣部上面には縦筋を施す。瓣部外側は削毛。	外・内) にい梗(7.5YR 6/4)	器台の可動作あり。
53	晋台 A c	4区 谷筋中層	口徑(19.8) 厚さ1.6	口徑 1/6	瓣部下面を下に放張する口輪葉。瓣部に凹みで施すたと思われる筋があり。瓣部蝶形可能がある。瓣部上面には縦筋の目立つ削毛。	外・内) 黄(7.5YR 4/6)	全葉母微量含む。
54	葉 1A d	4区 谷筋中層	口徑(19.4) 厚さ11.7	口徑 1/4 厚さ5.6	瓣部上面を上に斜張する口輪葉。瓣部には7mmの葉基をもつ。2側一対の斜張円錐形葉基をもとめる。ヨコナズ調整。	外) にい梗(7.5YR 6/6) 内) にい梗(5YR 6/6)	
55	葉 1A d	4区 谷筋中層	口徑(17.2) 厚さ9.6	口徑 1/2 厚さ2.2	とても瓣部から大きさ(周長)して外反する長い口輪葉。瓣部は削毛。内葉は削毛(4mm/cm)。口輪部はヨコナズ調整。	外) 黑褐(5YR 4/6) 内) 明赤(5YR 5/6)	全葉母含む。
56	葉 1B b	4区 谷筋中層	口徑(16.9) 厚さ10.0	口徑 1/4 厚さ2.2	瓣部から倒披形して外反曲形でくちのびる口輪葉。瓣部は削毛。内葉は削毛(4mm/cm)。口輪部は削毛。	外) にい梗(7.5YR 4/4)	全葉母含む。
57	広口庭 A a	4区 谷筋中層	口徑(17.6) 厚さ5.6	口徑 1/2	外反しながら外方にのびる口輪葉。瓣部からくち下がったところを下方に斜張することより、瓣部は直線を施したようになっている。外葉は削毛調整。瓣部外側と内葉はヨコナズ。	外) 黄(10YR 5/1), 黄白(10YR 8/2) 内) 黄(2.5Y 5/1), 黄(2.5Y 6/2)	全葉母小葉含む。
58	鉢 1C	4区 谷筋中層	口徑(22.5) 厚さ12.4 底座5.5	ほほ光輪	外葉が側輪する瓣部から内側削毛(5mm)に外方にのびる体部。瓣部は削毛なし。瓣部はヨコナズ調整。内葉は削毛。外葉内面には横削毛。外葉は削毛。	外) 黄(10YR 5/1), 黄白(10YR 8/2) 内) 黄(2.5Y 5/1), 黄(2.5Y 6/2)	全葉母小葉含む。

No	層級	当社側X番号	法線(cm)	残存率	部 繊・ 残 遺 の 看 法	色 調	備 考	
59	体	2区上中層 J C	口徑(26.0) シルバーブラ 横断面	5.3	口徑 1/6 内面する体部から削除して外方に近く傾くのびる口縫部。 縫合は丸目。縫合部はコナタ。体部内面はナガ。内面は ダマ。	外) 売(7.5YR 6/6) 内) にぶい緑(7.5YR 6/4)	企画含む。	
60	筋	4区 T D	口徑(22.0) 谷筋中層	6.2	口徑 5/6 内面する体部から削除してやや外反しながら傾くのびる口縫部。 縫合は丸目。縫合部はナガ。内面はナガ。内面は ダマ。	外) 売赤緑(5YR 6/6) 内) 希薄(5YR 6/4)	企画含む。	
61	筋	1区 谷筋中層	口徑(22.0) 横筋	7.5	口徑 1/6 内面する体部から削除してやや外反しながら傾くのびる口縫部。 縫合は丸目。縫合部はナガ。内面はナガ。内面は ダマ。	外) にぶい緑(5YR 7/3) 内) 黄黄(10YR 8/3)		
62	筋	4区 谷筋中層	口徑 8.8 横筋 横筋 横筋	9.0 10.4 3.7	ほほ完形 中央部が円弧や弓状に出すえど部から、外方にのびたのち 内面して上方方にのびる筋部から、逆反して上方に傾くの びる口縫部。縫合部はやや丸目。縫合は丸目である。 体部外壁は凹形、内面はナガ。	外) 内) にぶい緑(7.5YR 7/3), 売赤(7.5YR 5/4)		
63	筋	4区 谷筋中層	口徑(28.5) 横筋	11.4	大筋の体部。筋内に凹凸した体部から削除してやや外反しながら傾く のびる口縫部。縫合部はナガで内面する。縫合部外端は上方に拉 張り、縫合部横筋と筋部下端に切欠き部を残す。筋部に筋 糸留めを設置。体部内筋は開き、その部はナガ。綱縄。	外) にぶい緑(5YR 5/3) 内) にぶい緑(5YR 6/3)	企画母御含む。	
64	筋	2区 谷筋中層	口徑(40.0) 横筋	19.9	口徑 1/5 筋内に凹凸した筋から上方方にのびる筋部から削除してから 左側に引抜き。右側は直角で内面する。縫合部外端は上方に拉 張り、縫合部横筋と筋部下端に切欠き部を残す。筋部に筋 糸留めを設置。体部内筋は開き、その部はナガ。綱縄。	外) にぶい緑(7.5YR 6/4) 内) にぶい緑(7.5YR 6/4), 希薄(10YR 5/1)	企画母含む。	
65	筋	A b	4区 谷筋中層	口徑(13.3) 筋部	12.5	小筋の高筋。筋端部はやや内側。筋筒へ向外方にのびる筋部から削 除して上方に引抜き。筋筒は直角で内面する。縫合部外端は上方に拉 張り、縫合部横筋と筋部下端に切欠き部を残す。筋部に筋 糸留めを設置。筋部内筋は開き、その部はナガ。綱縄。	外) 内) 緑(5YR 6/6)	
66	筋	C	4区 谷筋中層	口徑(36.4)	2筋角の体部。筋筒はやや内側。筋筒へ向外方にのびる筋部から削 除して上方に引抜き。筋筒は直角で内面する。縫合部外端は上方に拉 張り、縫合部横筋と筋部下端に切欠き部を残す。筋部に筋 糸留めを設置。筋部内筋は開き、その部はナガ。綱縄。	外) 内) 明緑(2.5Y 2/6)	企画母含む。	
67	筋	C	4区 谷筋中層	横筋 29.2	2筋角のみ 筋筒の筋部。筋筒はやや内側。筋筒へ向外方にのびる筋部から削 除して上方に引抜き。筋筒は直角で内面する。縫合部外端は上方に拉 張り、縫合部横筋と筋部下端に切欠き部を残す。筋部に筋 糸留めを設置。筋部内筋は開き、その部はナガ。綱縄。	外) にぶい黄緑(10YR 5/3) 内) 墓黄(2.5Y 5/2)	企画母御含む。	
68	筋	A a	4区谷筋中層 4区筋部横筋 2区筋部横筋	口徑 33.6 横筋 6.2	2筋角の体部。筋筒はやや内側。下段の筋部外端 と筋部底部に斜め引き抜き部を残す。下筋部横筋と筋 部底部で斜め引き抜き部を残す。ナガ開きと見られる。	外) 内) にぶい黄緑(10YR 7/3), 墓赤(1N 3/)	企画母御含む。 開閉あり。	
69	筋	A c	4区筋部横筋 4区筋部中層	口徑(28.6) 横筋 3.1	筋筒的にのびる口縫部。高筋は下方に延び、筋筒下端に 引抜き部を残す。その房と縫合部内筋に横筋横筋状を残す。 縫合部横筋と竹筋平行筋で統合する。縫合部上端には筋目 内筋筒に筋部横筋を内側から斜め引き抜き部を残す。	外) にぶい黄緑(10YR 7/3, 7.5YR 6/4) 内) にぶい黄緑(10YR 7/3)		
70	筋	4区 谷筋中層	脚筋 15.7 脚部光脚	横筋 9.1	外気孔部。開く穴の筋筒。筋筒上部に凹縫を1.先後らす。 筋筒底を2.5方向に引抜く。外筋は挽き筋。内筋はナガ。	外) 希緑(5YR 4/6) 内) にぶい黄緑(5YR 4/4)	企画母含む。	
71	筋	4区 谷筋中層	脚筋 9.5 脚部完形	横筋 6.0	「ハ」字形の外筋としながら開く穴の筋筒。筋筒上部に凹 縫を2.5方向に引抜く。筋筒底を2.5方向に引抜く。外筋は 挽き筋で、内筋はナガ。筋筒内筋は開き、内筋ナガ。	外) 内) にぶい緑(7.5YR 5/4)	企画母含む。	
72	筋	4区 谷筋中層	脚筋 18.7 筋部	横筋 14.4	「ハ」字形の外筋としながら開く穴の筋筒。筋筒上部に凹縫 を2.5方向に引抜く。筋筒底を2.5方向に引抜く。外筋は 挽き筋で、内筋はナガ。	外) 希緑(5YR 6/6) 内) にぶい黄緑(5YR 5/4)		
73	筋	4区 谷筋中層	脚筋 13.4 横筋	横筋 7.2	筋筒からやや屈曲して細く縮む。筋筒部は口筋ナガ。筋筒 部底を1.3cmの筋筒が2.5方向に引抜く。筋筒はコナダ開き。	外) 内) にぶい緑(5YR 7/4) - 墓白(10YR 8/2)		
74	筋	4区 谷筋中層	筋筋 5.1 筋部	筋筋 25.3	やや突出する上筋から斜めしながら上方にのびる口縫部。筋部 内筋は口筋の筋筒部。内筋は口筋ナガ。筋部内筋は開 き、筋部外筋は思われる。	外) 希緑(5YR 2/2), 墓白(5YR 8/2) 内) にぶい緑(7.5YR 6/4)		
75	筋	4区 谷筋中層	筋筋 4.5 筋部完形	筋筋 9.7	中筋部の筋筒部に外筋部にのびる口縫部。筋部は開きの ナガ。内筋部は開き。筋部外筋は思われる。	外) 希緑(5YR 6/6) 内) にぶい緑(7.5YR 6/4)		
76	筋	4区 谷筋中層	筋筋 4.0 筋部	筋筋 7.4	外筋部の筋筒部から内筋部への筋筒部。筋部は開きの ナガ。内筋部は開き。筋部外筋は思われる。	外) 希緑(5YR 6/6) 内) にぶい緑(7.5YR 6/4)		
77	筋	4区 谷筋中層	筋筋 4.7 筋部完形	筋筋 7.1	やや突出する上筋から斜めしながら上方にのびる口縫部。筋部 内筋部は開き。内筋部ナガ。筋部内筋は開き。	外) 内) にぶい黄緑(10YR 7/3)	筋筒に黒筋あり。	
78	筋	4区 谷筋中層	筋筋 8.3 筋筋白色質 筋筋周辺	筋筋 11.8	やや外筋から上方にのびる口縫部。筋部外筋は丸目。筋部内筋 部は開き。内筋部ナガ。1.先後らす。内筋部は開き。	外) 内) 希緑(10YR 4/4)		
79	筋	B c	2区谷筋 中・下・筋筋	口徑(19.6) 横筋 4.2	外筋から内筋から上方に大きく撇く口縫部。筋筒部下方に試 せん。縫合部は2.5倒ての竹筋形引抜き部を4方向に拉 張る。縫合部に筋筒状模様を残す。縫合部と内筋部は 内筋部は開き。筋部外筋は思われる。	外) 逸貴青(10YR 8/4), 緑(2.5YR 6/8), 逸青(7.5YR 7/8) 内) 希薄(10YR 8/4)		
80	筋	谷筋上層	口徑(16.8) 筋筋 6.3	外筋部底から内筋部に引抜く口縫部。縫合部は丸目。筋部内筋 部は開き。筋部外筋は思われる。	外) 細(5YR 6/8) 内) 緑(7.5YR 7/6)			
81	筋	4区谷筋 筋筋	口徑(14.0) 筋筋	口筋から内筋から削除して外方にのびる口縫部。 筋部は丸目。筋部内筋は開き。筋部外筋は思われる。	外) 希薄(2.5YR 5/6) 内) にぶい黄緑(10YR 7/3)			
82	筋	T B b	4区 谷筋中層	口徑(17.0) 筋筋	外筋する筋部。筋筒部は直角の筋部をもつ。上下に若干厚 するナガ開き。	外) 希薄青(7.5YR 8/3, 8/4) 内) 緑(7.5YR 7/4)		
83	筋	1B a	4区 谷筋上層	口徑(17.5) 筋筋 筋筋白色質 筋筋周辺	内面する筋部から削除して外方に直角的にのびる口縫部。 筋部は丸目で中筋部に開きがある。内筋部は開き(3cm), 内筋部 は筋筋の内筋部。	外) にぶい黄緑(10YR 6/3), 緑(7.5YR 5/1), 希薄(5YR 2/4)	筋筒と体部下半 筋部あり。	
84	筋	2	4区 谷筋上層	口徑(17.5) 筋筋 筋筋白色質	やや筋筋部から削除して外方にのびる口縫部。体部 内筋部は開き。筋部は丸目。筋部内筋は開き。内筋部は 筋筋部。	外) 研磨青(10YR 6/6) 内) 明緑(7.5YR 6/8)	企画母御含む。	
85	筋	2	4区谷筋 中・下・筋筋	口徑 12.8 筋筋 4区筋部完形	外気孔部の筋筒部から削除して外方にのびる口縫部。 内筋部は丸目。筋部は丸目。筋部内筋は開き。	外) 希緑(5YR 5/2), 淡黄(2.5YB 8/4), 墓(7. 5YR 6/4) 内) にぶい黄緑(10YR 7/3), 淡黄(2.5Y 5/3)	筋筒と体部下半 筋筋部あり。	

No.	器種	生息地・棲息	法則(cm)	雄成虫	形態・特徴の特異	色調	備考
86	鉢	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	L往(19.0) L移 7.4	L往 1/6	此前灰褐色。内寄する体部からそのまま外反して伸びる白脚部。 体部は黒で、足は白い。	外-内)に赤い斑模様(5YR4/3)	
87	鉢	1D 谷筋上層 暗褐色粘質	L往(22.4) 現高 7.1	L往 1/5	内寄する体部から屈折して外反し、長く伸びる白脚部。暗部 は黒い。体部外端は黒毛着生、内寄は黒斑不明。L脚は3 コナデ。	外-内) 淡(5YR6/6), に赤い斑模様(10YR 6/3)	全寄母少量含む。
88	器台 B	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	L往 11.6 西高 9.0 既往 10.7	3/4	無文の暗褐色の習合。口器複葉足を持ち、兩側は口角部に 比べて薄く、暗部はえみ。器表附着のため病害不明。	外-内) 明赤褐色(2.3YR5/8, 5YR6/8)	
89	器台 A c	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	口往(30.7) 現高 3.9	口往 1/8	直線的に上方外方に伸びる白脚部。暗部は上方に伸張する。前面 の下部に凹窓を1個持つ。その上部に前側内方に複葉足を 持つ。外脚印跡(2mm/側), 内脚印跡毛(6mm/側)。	外) 暗赤(7.5YR8/2), 微(7.5YR6/6) 内) 黒褐色(10YR3/1)	全寄母少量含む。
90	底部	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	底高 4.1 既往 5.2	底部完毛	突出する足の先端から内寄方に外方に伸びる。外表面は 黒毛、内寄はナメである。	外-内) に赤い斑模様(10YR5/3), 黑褐色(10YR 3/1)	全寄母少量含む。
91	底部	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	底高 4.2 既往 3.5	底部底毛	突出する平底から内寄しながらのびる体部。外表面は黒毛、 内寄はナメのようである。	外) に赤い斑模様(5YR4/4), に赤い斑模様(10Y R7/2) 内) 黑褐色(10YR6/2)	
92	底部	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	既往 4.8 現高 3.7	底部完形	やや突出する平底から外方に直線的に伸びる体部。外表面 は叩き(2.3cm)のち黒毛、内寄はナメ。底部底毛と思われる。	外) に赤い斑模様(7.5YR5/4), 黑褐色(10YR3/1) 内) に赤い斑模様(10YR5/4)	黒斑あり。
93	底部	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	底高 4.5 既往 5.3	底部完形	突出する上げ平底から内寄外方に伸びる形態。内寄は 脚間に叩きされが認められる以外は黒斑不明。	外) に赤い斑模様(2.5YR 4/ 4) 内) 黑褐色(10YR 4/ 1), に赤い斑模様(10YR 6/ 4)	
94	底部	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	底高 4.8 既往 8.4	底部完形	平底から内寄外方に上方に伸びる体部。内寄は叩き、直 線的に斜面にナメ付。体部内側は被覆せず、直線的に斜面 に露出する。底部底毛と思われる。	外) に赤い斑模様(7.5YR6/3, 5/4/4), 黑褐色(17.5Y R6/2), 黑(7.5YR7/1) 内) 明赤褐色(5YR5/6), に赤い斑模様(10YR7/3)	黒斑あり。
95	底部	4区 谷筋上層 暗褐色粘質	底高 (4.3) 既往 7.0	底部底毛	平底から内寄外方に伸びる体部。内寄はナメ。二次沈底 を受けており、製造土壌の可能性がある。	外) に赤い斑模様(2.5YR 5/6) 内) 黑褐色(7.5YR8/4)	
96	広口型 B b	2区 谷筋現高	口往 14.4 既往 8.2	口往完形	体部から屈曲して外方に伸びるが、下方に凹窓を有する。 兩側にはナメの跡と側縫合部と側縫合部に凹窓を有する。 脚間に叩きがある。	外) に赤い斑模様(10YR7/3), 暗赤(7.5YR 6/2) 内) に赤い斑模様(10YR7/3), 暗赤(10YR 5/1)	
97	箇	1 A d 谷筋現高	口往(18.2) 既往 9.6	口往 1/4	やや開いた黒毛が2箇所に現出し、外側を含めか外方に伸びるが、口 縫合部はナメで、内寄は叩き(2.8cm), L脚印跡毛(2.8cm)。ナメの他の部位不規則。	外) 黑褐色(10YR6/2) 内) 暗赤褐色(10YR4/1), に赤い斑模様(10YR 7/3)	外面に保育母。
98	箇	2区 谷筋現高 既往 14.3	假鍵(12.5) 底部底毛	底部完形	小形の穴、次第に大きくなる大きな凹窓から内寄、なか なかもう1つ、さらに内寄して2つ目となる。内寄は叩き (2~3cm, cm), 内寄は黒毛(7mm, cm)。内寄底毛は黒。	外) に赤い斑模様(10YR7/2), 暗赤(10YR 6/2) 内) 黑褐色(2.5YR8/2), 暗赤(2.5YR4/1)	
99	器台 A b	2区 谷筋現高	口往(28.3) 既往 3.4	口往 1/4	谷筋現高。體部は上方に張り出し、暗部は外側する。後脚上端 に1条、下端に3条の沈底跡。右下がりの複合脚跡が発見する。	外-内) に赤い斑模様(7.5YR6/4)	
100	器台	2区 谷筋現高	底高 12.6 既往 3.5	背部脚部	背部脚部。「ナ」字形に内寄する脚。脚部は凹窓して 黒く。内寄は凹窓をして、脚部を含めて凹窓を多く方に認める。	外-内) に赤い斑模様(7.5YR5/8)	
101	箇 2 B	2区 谷筋現高	口往 4.4 既往 4.6	口往 1/4	内寄外方に上方に伸びる体部から曲面で内寄する口脚部。 内寄は黒毛(7mm, cm)。内寄は叩き(2.8cm, cm)。内寄 は内寄脚跡の細いL脚印跡。	外) に赤い斑模様(7.5YR2/3), 暗赤(7.5YR 6/2) 内) 暗褐色(7.5YR6/4)	
102	体 1 B	2区 谷筋現高	口往(20.6) 既往 6.7	口往 1/4	内寄する形態から外側で内寄する口脚部。暗部は丸 い。体部外端は黒毛(7mm, cm)。	外) 黑褐色(5YR7/2), 暗(5YR6/6) 内) 黑(2.5YR7/2), 暗(2.5YR4/1)	
103	体 1 D ?	2区 谷筋現高	口往(22.6) 既往 4.2	L往 1/10	内寄する形態から外側で内寄する口脚部。暗 部は黒毛(7mm, cm)。内寄は叩き(2.8cm, cm)。	外) に赤い斑模様(10YR7/4) 内) 暗赤褐色(10YR3/3)	
104	体 3 A	2区 谷筋現高	口往(12.6) 既往 6.2	口往 1/4	中央が叩き、やや突出する。平底から内寄、内寄から外方に 伸びるが、底部底毛、溝部は丸い。外表面は叩き(2.8cm, cm)。内寄 はナメ。	外) に赤い斑模様(10YR7/3), 黑褐色(10YR 6/2) 内) 明褐色(7.5YR7/2)	
105	底部	2区 谷筋現高	底高 6.0 既往 3.5	底部底毛	中央が丸やや山字状の大形な凹窓から内寄外方に伸びるが、 体部底毛は外側でナメナリ。腹部底毛はナメナリ。腹部の底 部は叩き(2.8cm, cm)。内寄はナメ。	外) 黑褐色(7.5YR6/6), に赤い斑模様(5YR5/3) 内) に赤い斑模様(10YR7/2), 黑(10YR 5/2)	
106	底部	2区 谷筋現高	底高 4.5 既往 3.5	底部完形	平底から外方に張り出しつつ外方に伸びるが、體部は腹 部底毛で外側でナメナリ。腹部底毛はナメナリ。	外-内) に赤い斑模様(10YR7/3)~暗赤(10Y R5/1)	底部外端に黒斑。
107	底部	2区 谷筋現高	底高 4.1 既往 3.5	底部完形	中央から凹窓が出現する領域の内寄から内寄外方に伸びるが、 體部底毛で外側でナメナリ。腹部底毛はナメナリ。	外) 暗褐色(NV), 明褐色(7.5YR7/2) 内) ナイーブ系(5YR3/1)	
108	底部	2区 谷筋現高	底高 4.5 既往 3.5	底部完形	突出する平底から内寄、ながら下方方に伸びる体部。外表面 は叩き(2.8cm, cm)。内寄はナメ。	外) に赤い斑模様(10YR5/3), 黑褐色(10YR3/1) 内) 明褐色(7.5YR7/2)	体部に黒斑あり。
109	体 1 A	4区 谷筋 セシション中	口往(28.0) 既往 9.8 既往 10.0	口往 1/4	やや開いた平底から内寄しながらのびる(後)脚部。 脚部は体部から離れて外反して下方に内寄して、方 向下部底毛。	外) に赤い斑模様(2.5YR3/4), に赤い斑 (2.5YR7/2)	全寄母含む。
110	広口型 B b	4区 谷筋 セシション中	既往 5.3	口往 1/2 溝部底毛	外反したの内寄してのびるL脚部。溝部は下方に黒毛, L脚は叩きされ、ナメ。	外-内) に赤い斑模様(7.5YR4/4)	全寄母少量含む。
111	網網?	4区 谷筋 セシション中	雄往(15.2) 既往 3.8 既往 11.2	口往 1/2 既往 3.8 既往 11.2	雄往がL脚部。溝部は下方に張り出しして外側する。溝部上 部は叩き(2.8cm, cm)。内寄はナメ。	外) に赤い斑模様(7.5YR7/3), 暗赤(10YR5/1) 内) 暗赤褐色(10YR3/1)	
112	広口型 B d	4区 谷筋 セシション中	口往 20.5 既往 5.6	口往完形	外反したの内寄してのびるL脚部。溝部は下方に張り出しして外側する。 溝部上部は叩き(2.8cm, cm)。内寄はナメ。	外-内) に赤い斑模様(7.5YR4/6)	全寄母少量含む。
113	器台 A x	4区 谷筋 セシション中	口往(17.3) 既往 3.0	L往 1/3	大きく開いたL脚部。溝部は下方に張り出しして外側する。溝部上 部は叩き(2.8cm, cm)。内寄はナメ。	外-内) 黑褐色(10YR4/2)	
114	体 1 B b	4区 谷筋 セシション中	口往(12.0) 既往 4.0	口往 1/4	器台から「く」字形に開くL脚部。内寄の程はやや浅い。溝 部は上方に新しく張り出し、裏筋と腹筋脱臼を複数持つ。 L脚はコナデ。体部底毛。	外-内) に赤い斑模様(5YR4/4)	
115	底部	4区 谷筋 セシション中	既往 14.6 既往 3.9 既往 14.3	口往完形	突出した平底から内寄しながら上方に伸びる体部。外表面 は叩き。内寄はナメ。	外-内) に赤い斑模様(7.5YR7/3)	

No	部種	山地部・平地	法度(cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
116	体 2B	4区谷部 (山腹)	口径 (4.7) 底径 (3.6) 高さ (2.0)	底部 1/2 底面	突出した平底から内側しながら上方にのびるミニチュアの外縫合。口縫合は無くないと思われる。内面はナメ仕上げ。	外) 赤褐色(5YR4/1) 内) 黄褐色	
117	脚部	4区谷部 脚部 (田舎道)	脚径 (14.2) 脚部定形 高さ	脚部 1/2 脚部定形 高さ	外見しながら開く半空の舞脚。輪端上面に凹縫合、直径1.5 cmの凹形窓をもつて右角に斜め。外縫合部の毛は刷毛状、内面は刷毛。	外) 内) にいし縫(10YR7/4)	金糸多く含む。
118	脚台	7区 笠合	口径 (40.1) 底径 5.0	口径1/2 底面	脚部を上に伏せる山脚部。通常に背骨側縫合と下唇に直縫合を施す。底部下端は丁度は持つ。ヨコカーブ脚部。	外) 内) にいし縫(7.5YR7/3, 6/4)	46と同一脚体か。
119	二重脚	7区 笠合	口径 32.5 脚部 高さ	口径定形 脚部 高さ	脚部から外見へつの脚部。外反足筋に外上方にのびる外縫合筋。脛部は丸く筒状の内側は下に垂れる。口縫合部外縫合は端部を1巻き。その下に直縫合を埋む。ヒナ脚脚。	外) 明赤褐色(2.5YR5/6), 橙(7.5YR6/6), 黒 (7.5YR2/2) 内) 茶褐色(2.5YR5/6)	
120	型?	9区 暗紅褐色土 下唇	口径 18.8 脚部 高さ	口径 2/3 脚部 高さ	脚部向外上方にのびる山脚部。脚部は毛を神す。外縫合部を施す。内面剛毛あき。外側剛毛(5cm)。器台脚部の可能性あり。	外) 内) 黄褐色(10YR2/6)	
121	広尾帶 Aa	2区	口径 (20.0) 脚部 高さ	口径1/2 脚部 高さ	大きく外張する山脚部。輪端は毛を持ち、若干上下に張詰する。内面剛毛の可能性。	外) 内) 柔和(2.5YR4/6)	
122	愛 1Bb	2区	口径 (16.0) 脚部 高さ	口径 1/4 脚部 高さ	脚部からくびれて外反する口脚部。内面の脚は細く。輪端は直角で毛を持たず。内面剛毛の可能性。	外) 内) 柔(7.5YR6/6)	
123	愛 1Aa	7区 笠合	口径 17.6 脚部 脚部 高さ	口径 2/3 脚部 脚部 高さ	やや内側する山脚部。脚部上面に凹縫合がのびる。内面しながら開く。輪端は外側にカブリする。内面剛毛の可能性。外上方に直縫合のものと、輪端部の移り込み。口縫合部は直縫合で毛をす。外縫合部は凹(5cm)の内縫毛(4丸)。輪端は直角で毛を持たず。内面剛毛(5cm)。	外) にいし縫(7.5YR7/4, 2/6) 内) にいし縫(7.5YR7/4, 6)	
124	体 1C?	(1段目 脚部) 脚部	口径 8.4 脚部 高さ	体部 3/4 脚部 高さ	突出して内側から下方にのびる体部。口縫合は体部から直角で外上方にのびる。体部外縫合は凹か。	外) にいし縫(10YR7/3) 内) にいし縫(10YR7/2)	
125	体 2B	10区 暗褐色	口径 (5.6) 脚部 高さ	体部下端 2/3 脚部 高さ	突出する山脚部から上方にのびる直角脚。口縫合部は直角の輪端部を有する。内面は凹(3cm)、外面は凹(5cm)。	外) (7.5YR7/6) 内) にいし縫(7.5YR6/4)	金糸含む。 内面黒糸あり。
126	底部	10区 暗褐色 黒瓦上唇	口径 3.6 脚部 高さ	口径 脚部 高さ	脚部を下に伏せる山脚部から内側しながら外上方にのびる体部。内面剛毛。輪端毛も持てる。直縫合部指揮棒による。輪端部は凹である。	外) にいし縫(7.5YR7/4, 6/4), 黒(7.5YR 1/7), 黑(10YR7/4)	企業母少含む。 底部外縫合糸あり。
127	底部	7区 笠合	口径 6.1 脚部 高さ	底部定形 脚部 高さ	突出する山脚部から外反足筋に外上方にのびる体部。外縫合は内面の凹(5cm)、内面剛毛(4cm)。外縫合は凹である。	外) にいし縫(2.5YR6/3, 6/4) 内) 黑(10YR2/2)	企業母少含む。
128	脚台 Aa	10区 暗褐色 黒瓦上唇	口径 (28.6) 脚部 高さ	口径 1/4 脚部 高さ	大外反する口脚部。輪端上に直角に突起する。輪端は凹(5cm)。外縫合は凹(5cm)。その他の内縫合と輪端は2枚一持の構造で直縫合である。外縫合部は凹(5cm)。直縫合部は凹(5cm)。	外) にいし縫(10YR7/7, 7/4, 6/4) 内) にいし縫(7.5YR6/3), にいし縫(7.5YR 2/2)	輪端小さく企業 母少含む。
129	脚台 A	9区 暗紅褐色土 下唇	口径 (22.6) 脚部 高さ	口径 1/2 脚部 高さ	人大きく外張する山脚部。脚部は下に伏して直縫合する。輪端上部は2つの毛。その下を複合縫合部で輪端にする。外縫合部は凹である。	外) にいし縫(7.5YR7/4), 橙(7.5YR 7/6)	
130	広口出 A?	不規	口径 (19.0) 脚部 高さ	口径 1/6 脚部 高さ	人大きく張り出して山脚部。輪端は下に少しを傾く。輪端に引く毛。外縫合部、口縫合コブ、輪端の凹部の可能性あり。	外) 小(10R5/8), 橙(7.5YR6/6)	
131	愛 1B?	不規	口径 (18.2) 脚部 高さ	口径 1/3 脚部 高さ	なで毛と外筋から、食所へ下唇に突起するのにのびる山脚部。輪端内縫合は直角で、内面は刷毛状。輪端毛による刷毛目あ。外縫合部は凹(5cm)。	外) にいし縫(5YR6/4) 内) にいし縫(5YR6/4), オリーブ黒(5Y 2/2)	企業母少含む。
132	愛 2	気泡層	口径 (6.7) 脚部 脚部 高さ	脚部下 3/4 脚部 高さ	やや内側する比較的大きな平脚部から内側筋肉方に外上方にのびる直角脚。体部内縫合部は直角。輪端は凹である。内面は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。輪端部はナメ。	外) 橙(7.5YR6/6) 内) にいし縫(10YR6/4)	企業母少含む。 底部内縫合の3/4に墨斑あり。
133	脚部 (脚台)	7区 笠合	口径 (6.8) 脚部 高さ	口径 1/6 脚部 高さ	内済溝部に凹(10cm)の脚部。蓮瓣部は凹(5cm)。墨斑をもつて輪端部は凹(5cm)。内面は墨斑。	外) にいし縫(7.5YR2/3), 黑(N2/2) 内) にいし縫(7.5YR7/3)	企業母物含む。 外縫合部墨斑。
134	脚台	10区 笠合	口径 (17.1) 脚部 高さ	口径 3/4 脚部 高さ	脚部からくびれて下方に折れして下方に内側筋肉方に向く脚部。輪端中央や上に、幅1.4cm、奥1.1cmの凹形 筋跡がある。輪端中央や上に、幅1.4cm、奥1.1cmの凹形筋跡がある。内面は墨斑。	外) にいし縫(5YR7/3)	企業母含む。

尼ケ園遺跡

No	部種	山地部・平地	法度(cm)	残存率	形態・技法の特徴	色調	備考
135	体 3	VII SH-2	底径 4.5 脚部定形 高さ	9.7	有孔部。やや上方に張り出す脚部から直角筋肉方に外上方にのびる直角脚。輪端は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。	外) にいし縫(10R6/4), 黄褐色(10YR8/4, 5/4) 内) 種(5YR6/6, 7.5YR7/6)	体部外縫合に墨斑あり。
136	底部	VII SH-2	底径 3.4 脚部 高さ	3.9	少し内側する直角筋肉部。内面は凹(5cm)。	外) にいし縫(5YR7/4)	
137	二重脚 底	VII SH-3 東朝切縫	口径 (21.6) 脚部 高さ	14.8	脚部から内側曲んで外反足筋にのびるのち、内面へして上方に凹縫合する。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。	外) 橙(2.5YR6/6)	底縫合付に墨斑あり。
138	底部	VII SH-3 東朝切縫	底径 1.2 脚部定形 高さ	3.3	底端に凹(5cm)から内側筋肉にのびる直角筋肉部。内面は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。	外) にいし縫(7.5YR7/4), 黄褐色(2.5YR4/1, 5/4) 内) にいし縫(10YR7/4), オリーブ黒(5Y/3/1)	外縫合底斑あり。
139	底部	VII SH-3 東朝切縫	底径 3.6 脚部定形 高さ	3.3	中央が凹む突出筋肉の筋肉から、外上方に直縫合にのびる直角筋肉部。外縫合部は凹(5cm)。内面はナメ。	外) 黑(10YR3/1), にいし縫(10YR 6/6) 内) にいし縫(7.5YR7/4), にいし縫(7.5Y R6/6)	外縫合底斑あり。
140	愛	VII SH-1 北壁切縫	口径		大型の足部。底部下端に附着三角形の凸部をめぐらし、その上に制動穴で脚部。内面はナメ。	外) 黑褐色(5YR6/2), 黑褐色(10YR4/1, 5/4) 内) 黑褐色(10YR3/1)	企業母含む。
141	体 1B	VII 北壁 笠合	口径 (28.4) 脚部 高さ	11.5 4.0	平底から内側筋肉に外上方にのびる直角筋肉部。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。輪端部は凹(5cm)。	外) にいし縫(5YR6/4), 橙(2.5YR6/6) 内) 小(10R5/6, 5/6)	企業母含む。 体部外縫合底斑あり。
142	脚台	VII 北壁 笠合	口径 (13.1) 脚部 高さ	9.4	外反しながら張る脚部。筋肉の発達部をめぐらし、脚部は凹(5cm)。脚部は凹(5cm)。脚部は凹(5cm)。	外) にいし縫(10YR7/4), 橙(2.5YR6/6) 内) にいし縫(7.5YR6/4)	企業母含む。
143	体 1D	VII SH-4 脚土	口径 20.4 脚部 高さ	10.9 4.9	やや上方に張り出す筋肉から内側しながら上方にのびる筋肉部。筋肉の発達部をめぐらし、脚部は凹(5cm)。筋肉の発達部をめぐらし、脚部は凹(5cm)。筋肉の発達部をめぐらし、脚部は凹(5cm)。	外) にいし縫(7.5YR7/6), にいし縫(7.5YR6/3), 内) にいし縫(10YR7/3) 内) にいし縫(7.5YR7/4)	企業母含む。 外縫合に墨斑あり。 外縫合に墨斑。

No	種類	山地・低地・沖積	流量(cm)	既存率	形 状・枝 法 の 特 徴	色 調	備考
144	長脚趾	V区 S H - 4 種生	口徑: 7.0 高さ: 10.6 保満度: 8.6 底径: 3.5	完熟	非常に長い底脚で茎葉主の脚部をもつ。口縁部は外側に少しらが立ち上り、瓣部は丸く内側を向す。外面剛毛(16cm/cm)、口縫部内面剛毛。	外: 棕(2.5YR 6/6), 布(30YR 5/6) 内: 棕(2.5YR 6/6), ぶい黄(2.5Y 6/4)	
145	夢	V区 S H - 4 種生	口徑: (20.0) 高さ: (17.6) 底径: 9.0	口縫 1/4	浅い壺と思われる。肩の係らぬ長い脚部から瓣部して外反する口縫部。瓣部はつまみ形、外面は内面をなす。外面剛毛、内面剛毛。口縫部はコナデ。	外-内: 棕(2.5YR 6/6)	金葉母根含む。
146	高杯	V区 A a 種生	口徑: (21.4) 高さ: 8.9	1/8 壁	直立的に丸い方のびる花被部から瓣部して上方にのびたのも外反する山型の瓣部丸。瓣部外側は凸状を示す。瓣部は中空で思われる。腹被光沢、瓣部外側剛毛。内面剛毛。口縫部内面剛毛。	外-内: 棕(0YR 5/6), 棕(2.5YR 6/6) 底赤(2.5YR 4/2), 底(3Y 1/1)	
147	高杯 C?	V区 S H - 4 種生	口徑: (14.1) 高さ: 9.3 脚部: 10.0	口縫 1/3 体部 4/5 脚部 1.0	瓣部の形態。瓣部はえい。脚部は山形気味に下方方にのびる。瓣部は内側をやや弧形す。脚部上部に円形凹窓を4方に穿く。瓣部外側剛毛。脚部外側剛毛。内面剛毛。	外: 棕(5YR 6/6)	金葉母含む。
148	鉢	V区 1 C 種生	口徑: (24.0) 高さ: 12.6 底径: 3.6	口縫 1/6	尖端がぎのく曲面する平壠から内側しながら上方方にのびる。瓣部はえい。脚部は外側から斜て直立的に上方方にのびる。瓣部は外側剛毛。脚部外側剛毛。内面剛毛。	外: ぶい黄(5YR 7/6) 内: ぶい黄(2.5YR 7/3)	内面剛毛。
149	広口竜 A b	V区 種生	口徑: (16.4) 高さ: 4.8	口縫 1/6	外方にのび、瓣部付近で大きく外反する口縫部。瓣部はえい。瓣部外側剛毛コナデ。	外: 棕(5YR 6/6), 明赤褐(5YR 3/8) 内: 黄緑(2.5YR 7/6), ぶい黄(2.5YR 7/8)	金葉母含む。
150	脚部	V区 種生	脚部: (7.5) 高さ: 4.5	脚部 1/2	「ハ」字形に開いたもので内側をさすきな脚部。瓣部は舌を伸す。外側剛毛。内面剛毛。	外-内: ぶい黄(5YR 6/6)	
151	著 1 A b	V区 S D - 1	口徑: (15.5) 高さ: 25.2 脚部: 21.7 底径: 4.5	1/8 壁	天竺葵形の平壠から内側しながら上方方にのびる。瓣部はえい。脚部は外側から斜て直立する方のびる。瓣部はえい。脚部は外側剛毛。内面剛毛。口縫部内面剛毛。口縫部4枚のコロナ。外反指揮させのコロナ。	外: ぶい黄(2.5YR 7/4), 淡黃(10YR 6/2), 淡紫(2.5YR 2/2), ぶい黄(2.5YR 7/3), ぶい黄(2.5YR 7/4), ぶい黄(2.5YR 7/8)	金葉母含む。
152	著 1 A b	V区 S D - 1 種生	口徑: (17.6) 高さ: 8.9	口縫 2/5	外側が壺から周由で外反咲く。上方方にのびる口縫部。瓣部はえい。脚部は外側剛毛。内面剛毛。口縫部内面剛毛。脚部指揮させのコロナ。	外: ぶい黄(10YR 7/4), 淡褐(2.5Y 4/1), ぶい黄(2.5YR 7/4) 内: 淡褐(2.5YR 7/4)	金葉母含む。
153	坐 1 A b	V区 S D - 1	口徑: (12.5) 高さ: 26.5 脚部: 22.1 底径: 3.8	口縫 1/3 体部 1/2 脚部 1/2	口縫を全く天竺葵形の壺から内側しながらのびる。外や内、丸くひらひら。瓣部は瓣から斜めで外反咲くのが、瓣部はえい。脚部は外側剛毛。内面剛毛。瓣部付近で外反咲く。瓣部はえい。瓣部外側剛毛。内面剛毛。その他の瓣部内面剛毛。口縫部内面剛毛。	外: ぶい黄(5YR 7/3-7/4) 内: ぶい黄(7.5YR 7/4)	外側に煙管葉、内側に有機肥料、金葉母含む。
154	著 1 A b	V区 S D - 1	口徑: (15.4) 高さ: 22.1 脚部: 20.3 底径: 4.7	口縫 1/3 体部 1/2 脚部 1/2	瓣部を全く天竺葵形の壺から内側ながらのびる。瓣部はえい。脚部は外側剛毛。内面剛毛。瓣部付近で外反咲く。瓣部はえい。瓣部外側剛毛。内面剛毛。瓣部内面剛毛。口縫部内面剛毛。その他の瓣部内面剛毛。口縫部内面剛毛。	外: 疊褐(5YR 5/2), ぶい黄(5YR 6/4) 脚(2.5YR 6/6)	外側に煙管葉、金葉母含む。
155	坐 1 A d	V区 S D - 1	口徑: (19.5) 高さ: 24.9 種生	口縫 1/3 体部 1/2 脚部 1/2	えんを全く長い形で瓣部から口縫にある。脚部は外側から周由で外反咲くのが、瓣部はえい。瓣部外側は弱き(2cm)、内面剛毛(2cm)。口縫部は弱き。	外: ぶい黄(5YR 7/3-7/4) 内: ぶい黄(7.5YR 6/6)	外側に黒斑あり。
156	葉 1 B a'	V区 S D - 1	口徑: (17.6) 高さ: 24.0 脚部: 21.2 底径: 4.5	口縫 1/3	瓣部を全く壺から内側しながらのびる。丸くひらひら。瓣部は瓣から斜めで外反咲くのが、瓣部はえい。瓣部外側剛毛。内面剛毛。瓣部付近で外反咲く。瓣部はえい。瓣部外側剛毛。内面剛毛。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。内面剛毛。脚部内面剛毛。	外: 疊褐(5YR 5/2), ぶい黄(5YR 6/4) 脚(2.5YR 6/6)	金葉母含む。
157	葉 3	V区 S D - 1	口徑: (17.6) 高さ: 13.3 脚部: 16.1 底径: 4.8	口縫 1/2 体部 1/2 脚部 1/2	中央が壺から開くする底脚から内側してのびる長い形脚部。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。口縫部は弱き。	外: 棕(5YR 6/6) 内: 棕(7.5YR 6/6)	底部に黒斑あり。
158	葉系	V区 S D - 1	口徑: (21.9) 高さ: 5.6 種生	口縫 1/2 体部 1/2 脚部 1/2	中央が壺から開くする底脚から内側してのびる長い形脚部。外脚は弱(2cm)。内脚は強脚。外脚頭部頭部弱くさぎだ。	外-内: 黑褐(5YR 2/1), 棕赤(10R 2/1), ぶい黄(2.5YR 6/4)	全葉母微含む。
159	葉系	V区 S D - 1	口徑: (18.2) 高さ: 16.7 種生	口縫 2/3 体部 2/3 脚部 2/3	少し伸びる壺から内側してのびる長い丸い形脚部。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部外側剛毛。	外: 小(1)2.5(6) 内: 棕(3.5YR 6/6)	外側に煙管葉。
160	葉系	V区 S D - 1	口徑: (21.9) 高さ: 13.1 種生	口縫 1/2 体部 1/2 脚部 1/2	中央が壺から開くする底脚から内側してのびる長い形脚部。外脚は弱(2cm)。内脚は強脚。外脚頭部頭部弱くさぎだ。	外: ぶい黄(2.5YR 5/6), 明褐(7.5YR 5/6) 内: ぶい黄(2.5YR 5/6), ぶい黄(5YR 5/4, 4/3)	外側に煙管葉。
161	葉系	V区 S D - 1	口徑: (20.9) 高さ: 5.5 種生	口縫 1/4 体部 1/2 脚部 1/2	少し突出する平壠から内側しながらのびる長い形脚部。外脚は弱き。内脚は強脚の崩毛。	外: 棕(5YR 6/6, 7.5YR 6/6), 棕赤(2.5YR 4/2) 内: ぶい黄(2.5YR 5/6), ぶい黄(5YR 7/3), ぶい黄(5YR 6/6)	外側に煙管葉。
162	葉系	V区 S D - 1	口徑: (22.3) 高さ: 4.4 種生	口縫 1/2 体部 1/2 脚部 1/2	口縫を少し。直立形でやや開くする底脚から内側しながらのびる長い形脚部。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: 黑褐(10YR 5/2), 棕赤(2.5YR 4/2), 棕褐(3.5YR 6/2, 5/2), 棕褐(7.5YR 4/1)	金葉母多く含む。
163	葉系	V区 S D - 1	口徑: (16.3) 高さ: 17.3 種生	口縫 1/2 体部 1/2 脚部 1/2	口縫を少し。直立形でやや開くする底脚から内側しながらのびる長い形脚部。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: 黑褐(10YR 5/2), 棕赤(2.5YR 4/2), 棕褐(3.5YR 6/2, 5/2), 棕褐(7.5YR 4/1)	金葉母含む。
164	高杯 A	V区 S D - 1	口徑: (16.0) 高さ: 10.3 脚部: 1.0	口縫 1/4 脚部 1/2	瓣部の形態で口縫部は弱くひらひらしたが、瓣部は丸くひらひら。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: 棕(5YR 6/6) 内: 棕(7.5YR 6/6)	金葉母含む。
165	高杯 A c	V区 S D - 1	口徑: 13.8 高さ: 11.7	2/3	瓣部の形態で口縫部は弱くひらひらしたが、瓣部は丸くひらひら。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: (2.5YR 6/6) 内: ぶい黄(5YR 7/6)	全葉母微含む。
166	高杯 A c	V区 S D - 1	口徑: 9.6 高さ: 10.5	2/3	瓣部の形態で口縫部は弱くひらひらしたが、瓣部は丸くひらひら。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: ぶい黄(7.5YR 7/4) 内: ぶい黄(7.5YR 6/6)	脚部内面に黒斑。
167	高杯 A c	V区 S D - 1	口徑: (16.2) 高さ: 9.9 脚部: 10.5	1/3	瓣部の形態で口縫部は弱くひらひらしたが、瓣部は丸くひらひら。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: ぶい黄(2.5YR 6/6) 内: ぶい黄(5YR 6/6)	金葉母含む。
168	高杯 A c	V区 S D - 1	口徑: (17.7) 高さ: 10.1 脚部: 10.1	2/3	瓣部の形態で口縫部は弱くひらひらしたが、瓣部は丸くひらひら。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: 棕(7.5YR 6/6), 棕褐(10YR 5/1) 内: 黑褐(7.5YR 6/2)	金葉母微含む。
169	高杯 A c	V区 S D - 1	口徑: (15.3) 高さ: 9.6 脚部: 8.1	1/3	瓣部の形態で口縫部は弱くひらひらしたが、瓣部は丸くひらひら。瓣部は外側剛毛(2cm)、内面剛毛(2cm)。瓣部内面剛毛。脚部は外側剛毛。	外: 棕(7.5YR 6/6), 棕褐(10YR 5/1) 内: 黑褐(7.5YR 6/2)	金葉母微含む。

No	器種	上部茎・葉位	法長(cm)	残存率	形態・枝法の特徴	魚類	備考
170	桑舟 A	V区 S.D-1	L12 茎高(20.3) 葉面 9.5	桿幅 2/3 第2節先端 葉面	長い棒形の体で、枝はなく伸びし、葉部はやや安らぐ。 内側には外側した向の内側へ、葉面は巻く形。 桿部内面は無気泡。	ホタル(にい-櫻(5YR6/4) 青ボウ(5YR7/6)	
171	阿蘇	V区 SD-1	16.5 葉面 6.2	葉面12 葉面	内側氣泡少、外方に2つの枝を出す。葉部はよく卷きらず、3方向に 伸びる。葉部は内側へ、葉面は巻く形。	外) 明黄鰓(10YR7/6), 鮎(7.5YR7/6) 内) 蓋(7.5YR6/6), にい-櫻(10YR7/4)	全頭母含む。
172	鮎	V区 SD-1	19.9 葉面 9.7	口径(16.8) 葉面	桿部の内側で、葉部は入り。葉部は「ハ」字形に近く聞く。 桿部内面は刷毛の内側卷き。葉部はナメ。他のはナメ。	外) 桜(7.5YR6/6) 内) 櫻(7.5YR6/8)	
173	鮎	V区 SD-1	19.6 葉面 8.4	口幅 1/4 葉面	前部の桿部で、葉部は入り。葉面は内側巻き込みに「ハ」字形に 近く聞く。桿部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。その他はナ メと黒毛がある。	外) 桜(2.5YR7/6) 内) 櫻(5YR7/6)	
174	鮎	V区 SD-1	15.7 葉面 9.8	元形 葉面 7.1	前部の桿部で、葉部は入り。葉面は内側巻き込みに「ハ」字形に 近く聞く。桿部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。その他はナ メと黒毛がある。	外) 櫻(7.5YR7/6, 5YR6/6) 内) 櫻(7.5YR7/6), 黒鰓(10YR3/1), 鮎(10 YR2/1)	桿部内面には全 体黒斑。
175	鮎	V区 SD-1	15.1 葉面 7.8	13は定形 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉面は内側巻き込みに「ハ」字形に 近く聞く。桿部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。其他はナ メと黒毛がある。	外) 櫻(7.5YR7/6), にい-櫻(10YR2/4), 内) 黑鰓(10YR4/1), にい-櫻(7.5YR7/4)	桿部口跡付近黒 斑。
176	鮎	V区 SD-1	14.8 葉面 8.1	口幅 1/4 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部内面は刷毛の内側一 ダラ。葉部はナメ?外側全体に刷毛の内側が認められる。	外) 桜(2.5YR6/6) 内) 櫻(5YR7/6)	
177	鮎	V区 SD-1	13.3 葉面 8.4	はは定形 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は内側巻きに「ハ」字 形。葉部内面は刷毛の内側卷き。葉部内面は刷毛。外側 は陸上の木部が認められる。	外) 桜(5YR6/6) 内) 櫻(5YR6/6)	外頭部付近黒 斑。
178	鮎	V区 SD-1	13.8 葉面 8.4	13は定形 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り持つ。葉部は内側巻きに近く聞く 葉部。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側 は陸上の木部が認められる。	外) 櫻(5YR7/6) 内) 櫻(7.5YR7/6)	桿部内面黒斑。
179	鮎	V区 SD-1	12.8 葉面 9.7	口幅 1/3 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は外反込みに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。外側は刷毛。葉部内面は刷毛 の内側卷き。外側は刷毛。葉部内面は刷毛。	外) 櫻(7.5YR7/6) 内) 櫻(7.5YR7/6)	全頭母含む。
180	鮎	V区 SD-1	12.3 葉面 8.6	口幅 1/2 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は外反込みに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側は刷 毛。葉部内面は刷毛。3方に巻く。桿部内面は刷毛の 内側卷き。葉部内面は刷毛。外側は刷毛。葉部内面は刷毛 の内側卷き。葉部内面は刷毛。	外) 櫻(7.5YR7/6), にい-櫻(7.5Y R7/4) 内) 櫻(7.5YR7/6)	(黒) 女母含む。
181	鮎	V区 SD-1	12.3 葉面 9.7	口幅 1/2 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は内側巻きに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側は刷 毛。葉部内面は刷毛。外側は刷毛。葉部内面は刷毛。	外) 櫻(7.5YR6/6) 内) 櫻(7.5YR7/6)	全頭母含む。
182	鮎	V区 SD-1	12.6 葉面 7.9	14は定形 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は内側巻きに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側は は粘土色で、葉部は入り。葉部は内側巻きに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。	外) 櫻(7.5YR6/6), にい-櫻(10YR 7/2), 櫻(5YR7/6)	
183	鮎	V区 SD-1	12.0 葉面 7.9	桿幅 1/2 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は外反込みに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側は刷 毛。葉部内面は刷毛。	外) 櫻(7.5YR6/6) 内) 櫻(5YR6/6)	全頭母少量含む。
184	鮎	V区 SD-1	12.1 葉面 7.6	口幅 1/2 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は内側巻きに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側は は粘土色で、葉部は入り。葉部は内側巻きに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。	外) 櫻(5YR6/6) 内) にい-櫻(5YR6/4)	口部に黒斑。
185	鮎	V区 SD-1	11.3 葉面 7.7	桿幅 1/2 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は内側巻きに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側は刷 毛。葉部内面は刷毛。	外) 櫻(7.5YR7/6), 鮎(10YR4/1) 内) 櫻(7.5YR7/6), 鮎(7.5YR7/1)	
186	鮎	V区 SD-1	12.5 葉面 7.8	13は定形 葉面	桿部の桿部で、葉部は入り。葉部は内側巻きに巻く。葉部 は内側巻き。葉部内面は刷毛。葉部内面は刷毛。外側は刷 毛。葉部内面は刷毛。	外) 黄鰓(7.5YR7/6), 灰鰓(10YR7/1) 内) オリーブ墨(13YR3/2), 鮎(7.5YR7/3), 貝 殻(7.5YR7/8)	
187	鮎	V区 SD-1	10.0 葉面 3.9	口幅 1/2 葉面	やや突出する半球から内側しながら外方にげる形。口 輪強度は弱い。外側は切口。内側は削毛。外側内面は刷毛の 内側卷き。外側内面は刷毛。	外) 櫻(7.5YR6/6), にい-櫻(10YR6/4) 内) 櫻(7.5YR6/6), にい-櫻(7.5YR6/4)	全頭母多く含む。
188	鮎 1C'	V区 SD-1	12.0 葉面 9.6	口幅 1/4 葉面	中央が細む底辺から内側しながら外上方にげる形体。口 輪強度は弱い。外側は切口。内側は削毛。口輪強度ヨコナ。	外) 櫻(7.5YR7/6) 内) 櫻(7.5YR6/6, 7.5YR7/6), 鮎(7.5YR 3/3)	
189	鮎 2A'	V区 SD-1	10.3 葉面 5.0	桿幅 3/4 葉面	突出する半球から内側しながら外上方にげる形。口 輪強度は弱い。外側は切口。内側は削毛。外側内面は刷毛の 内側卷き。	外-内) にい-櫻(10YR7/3), にい-櫻(7.5YR7/6)	全頭母含む。
190	鮎 2A'	V区 SD-1	9.9 葉面 4.5	桿幅 1/4 葉面	突出する半球から内側しながら外上方にげる形。口 輪強度は弱い。外側は切口。内側は削毛。外側内面は刷毛の 内側卷き。	外-内) にい-櫻(7.5YR7/4)	全頭母含む。
191	鮎 2B	V区 SD-1	9.7 葉面 4.1	(7.4) 葉部充 葉面	非常に細めの底辺から内側しながら外上方にげる形。口 輪強度は弱い。外側は切口。内側は削毛。外側内面は刷毛の 内側卷き。	外) 黄鰓(5Y/4), にい-櫻(10YR7/4) 内) 赤鰓(2.5YR7/3), にい-櫻(7.5YR7/4)	
192	鮎(雌) (雄)	V区 SD-1	12.9 葉面 2.4	葉部充 葉面	尖端が丸めの底辺から内側しながら外上方にげる形。口 輪強度は弱い。外側は切口。内側は削毛。外側内面は刷毛の 内側卷き。	外) 櫻(5YR7/6) 内) 櫻(5YR6/6), にい-櫻(10YR2/3)	
193	鮎 1B b	V区 SD-1	12.6 葉面 19.5	口幅 1/4 葉面	尖端が丸めの底辺から内側しながら外上方にげる形。口 輪強度は弱い。外側は切口。内側は削毛。外側内面は刷毛の 内側卷き。	外-内) 櫻(7.5YR7/6)	武藏外周に黒斑, 全頭母少含む。
194	高柳 C	V区 SH-6 P1柱直	13.8 葉面 7.5	口幅 1/4	発育の初期で、口輪部は外側に張り気味で、輪強度はやや丸 い。口輪部外側に4枚の舌状葉を出す。葉部は外せながら外 側に向くようである。脚部は葉部は抱き、軸部内面は抱葉部分。	外) 櫻(5YR6/6, 7.5YR7/6) 内) 櫻(7.5YR6/8)	
195	鮎 2A'	V区 SH-6 P1柱直	12.8 葉面 4.9	口幅 3/4 葉部充 葉面	口幅に比べて狭く、突出する半球から内側しながら外上 方にげる。口輪部は弱い。外側は切口、内側は削毛。	外) 櫻(5YR6/6), 则赤鰓(5YR5/6) 内) 櫻(5YR6/6, 7.5YR6/6, 明黄鰓(10Y R6/6))	口輪部外周に黒斑。
196	鮎	V区 SH-6 H2 第二柱+一 次柱	10.3 葉面 4.2	口幅 1/2	上げ底状(剝離裏)の底辺から内側しながら外上方に げる形。口輪部は弱い。外側は切口、内側は削毛。	外) 黑鰓(10YR3/1), 櫻(7.5YR6/6), に い-櫻(10YR7/4) 内) 桂(5Y/3), 桂(4.5YR7/8)	外側に黒斑あり。
197	底部	V区 SH-6 H1 主柱直上	12.6 葉面 2.4	葉部充 葉面	中央が凹む底辺から内側しながら外上方にげる形。口 輪強度は弱い。外側は切口、内側は削毛(7.5cm)。底 部 - 体部は墨毛。	外) 桂(5YR6/8, 6.5YR7/6) 内) 桂(5YR6/8, 6.5YR7/5)	底部衝突に黒斑, 全頭母少含む。

No	基盤	出土地・遺跡	法長(m)	残存率	形態・被付の特徴	色調	備考
198	土手	IV区 SⅢ-6 東側周縁構 造上部	柱端丸 (22.6)	底盤は 丸形 体部は 直角四 辺形	底盤は丸 形で、柱 頭部は直 角四辺形 である。	外) 優(7.5YR6/6, SYR6/6) 内) 底盤(5YR5/2), 丸形(5YR5/4)	優等外壁に黒塗。全壁付少盒む。
199	脚部	Ⅳ区 SⅢ-6 西側周縁構 造上部	脚部(11.5)	脚部(1.2)	中段の脚部部から外反して直線的にのびる脚部。脚部は丸 く、4方向に円形をなし妻柱。脚柱部は直角四辺形である。	外) 優(7.5YR5/6), 極(7.5YR6/6) 内) 明褐(5YR5/6)	金型付少盒む。
200	脚部	Ⅳ区 SⅢ-6 西側周縁構 造上部	直径 3.3	ばば充形 厚さ 0.5	軸出しの筋脚部。中央に0.4cmの円孔を穿つ。	外-内) 明赤(2.5YR5/8)	
201	脚部	Ⅳ区 SⅢ-6 直上	直径 2.6	ばば充形 厚さ 0.6	腰板部の筋脚部。やや丸な印象。中央に0.4cmの円孔を穿 つ。外側面は、内側面ナチュラル。	外) 暗(2.5YR6/6) 内) 橙(7.5YR6/6)	
202	二重口縫	Ⅳ区 SⅢ-6 直上	口縫 16.0	口縫 1.9	外反しながら上方にのびたのち屈曲して直線的に外方に のびる脚部。脚部は丸く、4方向に円形をなし妻柱。脚 柱部は直角四辺形である。	外) 優(7.5YR6/6) 内) 暗(7.5YR6/6)	
203	脚部	Ⅳ区 SⅢ-6 直上	口縫 9.0	口縫 7.7	脚部が長いと脚部から引抜して外反脚部に外方にのびる 脚部。脚部は丸く、外側面直角四辺形である。	外-内) 暗(2.5YR6/6)	
204	柱 1C	IV区 包合層 Ⅲ-4層	口縫 (22.4)	口縫 1.2	外側がやや丸み突出する直角脚部。内側脚部は外方に のびる脚部。脚部は丸く、4方向に円形をなし妻柱。脚部から引 抜して外方に直角的にのびる脚部は直角四辺形である。 脚部は丸く、4方向に円形をなし妻柱。脚柱部は直角四 辺形である。	外) 暗(7.5YR6/6, 5YR6/6), 黒(2.5YR6/6) 内) 暗(2.5YR6/6, 5YR7/6), にじみ赤(5 YR5/3)	金型付少盒む。
205	柱 1C	IV区 東部 包合層	口縫 16.9	口縫 5.7	内側脚部に上方にのびる脚部からそのまま外反して外七方 のひのき口縫である。外側脚部は直角四辺形であるが、コニ カル。	外) にじみ赤(10YR6/4), 暗(7.5YR7/6) 内) 暗(10YR6/6), 暗(7.5YR7/6)	金型付少盒む。
206	棟	Ⅳ区 包合層	口縫 (8.5)	約1/3	穴を空さない直脚部から内側ながら上方にのびる脚部。口 縫部は外反45度。脚部内凹が多いが、外側面直角四辺形。	外-内) 暗(4N), にじみ黄(10YR7/4), 黑 黄(10YR6/2)	
207	脚部	Ⅳ区 包合層	脚部 6.1		外側脚部に上方にのびる脚部。脚部内面剛刷りのちナチュ ラル。外側は丸く、内側は直角四辺形。	外-内) にじみ暗(7.5YR7/4)	
208	苔台	Ⅳ区 包合層	口縫 (13.4)	口縫 3.8	垂直な苔台部。脚部は丸形で、脚部活は直 角四辺形である。外側脚部は丸く、内側脚部は直角四 辺形である。	外-内) にじみ暗(7.5YR7/4)	
209	脚部	Ⅳ区 (苔台)	脚部 (4.9)		直角的な脚部。脚部は丸形で、脚部活は直 角四辺形である。外側脚部は丸く、内側脚部は直角四 辺形である。	外-内) にじみ暗(7.5YR6/6)	
210	脚部	Ⅳ区 包合層	脚部 12.1		内側脚部の脚部。脚部は丸形で、脚部活は直 角四辺形である。外側脚部は丸く、内側脚部は直角四 辺形である。	外-内) 黑(5YR5/2)	(他地城窓)
211	底盤	Ⅳ区 東部 包合層	底盤 4.7	底盤規 規則 直角 内凹	中央が丸く凹凸から外方へ直角的にのびる脚部。外 側は丸く(3~4cm)、内側は直角四辺形である。	外) 暗(5YR6/6) 内) 暗(7.5YR6/6)	外側に黒塗あり。 金型付少盒む。
212	底盤	Ⅳ区 中南部 包合層	底盤 3.4	底盤規 規則 直角	中央から斜めに下方に外方にのびる脚部。外側は丸く、内 側は直角四辺形である。	外) 暗(7.5YR6/6, 6/8) 内) にじみ暗(7.5YR6/4)	
213	底盤	Ⅳ区 西部 包合層	底盤 4.3	直角 直角	平底から内凹しながら外方上方にのびる脚部。脚部不 規則。脚部内凹である。	外) 暗(7.5YR6/6, 2.5YR6/6) 内) 暗(7.5YR6/6)	外側黒塗あり。 金型付少盒む。
214	底盤	Ⅳ区 中南部 包合層	底盤 5.5	底盤完 成規 直角	中央が丸く凹凸から外方へ直角的にのびる脚部。外側は 丸く、内側は直角四辺形である。	外) 暗(5YR6/6), にじみ黄(10YR7/2) 内) 暗(5YR6/6, 2.5YR4/1)	
215	口縫	Ⅳ区 包合層	破片		外側に3つの凹溝とその中に複数横突を描く縫口縫。ナ チュラル。背合か?	外) 暗(5YR6/6) 内) にじみ(7.5YR6/4)	
216	苔台	Ⅳ区 SⅢ-7 板土	口縫 (25.0)	口縫 7.1	外-内) 直角的にのびる口縫。縫口は上方に内凹する。下方に 直角的にのびる口縫。縫口は上方に内凹する。2本の口縫が直角四 辺形である。	外) 黑(7.5YR6/1), にじみ黄(10YR 7/6), にじみ暗(7.5YR7/4), 黑(5YR2/1) 内) にじみ暗(7.5YR7/4, 6/4)	金型付少盒む。
217	苔台	Ⅳ区 SⅢ-7 板土	口縫 (19.8)	口縫 4.0	外-内) 直角的にのびる口縫。縫口は上方に内凹する。 下方に直角的にのびる口縫。縫口は上方に内凹する。	外) にじみ暗(7.5YR7/4) 内) 暗(5YR6/6)	
218	底盤	Ⅳ区 SⅢ-7 板土	脚部 (10.1)	体・直 脚部 直角	中央が丸く凹凸から外方へ直角的にのびる脚部。外側は 丸く、内側は直角四辺形である。	外) 優(5YR6/6) 内) にじみ暗(7.5YR7/4)	
219	二重口縫	Ⅳ区 SⅢ-7 板土	脚部 3.1	口縫少 量	外側したのみ。上方に直角的にのびる複数の口縫。縫口は外 側には丸く、内側には直角四辺形である。	外) 優(5YR6/6) 内) にじみ暗(7.5YR7/4)	
220	底盤	Ⅳ区 SⅢ-7 板土	脚部 5.3	底盤規 規則 直角	中央が丸く凹凸から外方へ直角的にのびる脚部。外側は 丸く、内側は直角四辺形である。	外-内) 暗(2.5YR6/6)	金型付少盒む。
221	脚部	Ⅳ区 SⅢ-7 板土	脚部 (14.2)	脚部 4.3	外反気泡のうち内凹気泡の脚部。脚部は丸や丸い。外側は凹 く(3cm)のちナチュラル。内側は直角四辺形である。	外) にじみ暗(7.5YR6/4) 内) 暗(5YR6/6)	金型付少盒む。
222	筋脚	Ⅳ区 SⅢ-7	直徑 2.9	ばば充形 厚さ 0.4	直徑の筋脚部。外側に凹字の凹凸を有する。外側は丸や 丸い。0.4cm程度の孔を穿つ。歯状孔ある。	外-内) 暗(2.5YR6/6)	
223	広口壺 A b	Ⅱ・Ⅳ区 斜面土質 斜面土質	口縫 (15.6)	口縫 1.4	内側が丸く凹凸から直角的にのびる脚部。脚部は内 側に直角に脚部を持ち、若干下に凹凸する。外側は丸や 丸い。内側は直角四辺形である。	外-内) 暗(2.5YR6/6)	
224	広口壺 A b	Ⅱ・Ⅳ区 斜面土質	口縫 (13.4)	口縫 9.5	やや弧の筋脚部から外反して外反気泡のうち大きくなり る口縫。脚部は丸や丸い。外側は丸や丸い。内側は直角四 辺形である。	外-内) 暗(2.5YR6/6)	(他地城窓)
225	須彌壺	Ⅱ・Ⅳ区 斜面土質	口縫 (10.3)	口縫 1.0	脚部から直角して上方に直角的にのびる脚部。脚部は直 角四辺形である。	外-内) 暗(7.5YR6/6)	
226	広口壺 A b	Ⅱ・Ⅳ区 斜面土質	口縫 13.2	口縫 3.9	外反脚部のうち外反する口縫。脚部は直角四辺形である。 脚部は丸や丸い。内側は直角四辺形である。	外-内) にじみ暗(10YR7/4)	(他地城窓)
227	広口壺 B c	Ⅱ・Ⅳ区 斜面土質	口縫 (10.5)	口縫 3.6	脚部から直角して下方に直角的にのびる脚部。脚部は直 角四辺形である。	外-内) にじみ暗(7.5YR6/4)	金型付少盒む。

No	樹種	古土堆等	法度(cm)	残存率	形 素・枝 法 の 特 殊	色 調	備考
228	I A a	II 区間周 斜面土壌群	口径(18.1) 溝深(5.3)	表面下 地盤から露出する外気蒸気にによる口縁被。端部は厚みを失 て丸くなっている。内部は削り切開部。	外・内: 墓(7.5YR 6/8)	金雲付合む。	
229	4 A	II 区間周 斜面土壌群	口径(33.1) 溝深(17.1)	口径 1/5	人類の遺跡。比較的古い形態で、口縁被は全体から露出して内凹 しないが、上方に伸びる。底部には削り切開部。厚さは全体によ る割合で目を付す。外縁は叩き打たれたもの。内縁は削り切開部のナダマ。	外: 褐(2.5YR 6/6) 内: 褐(5YR 6/6)	
230	株 1B	II 区間周 斜面土壌群	口径(26.0) 溝深(3.0)	口径 1/4	突出する口底から内凹部しながら上方に伸びる。口縁被は 全体からそのままで外方に反覆してそのまま。端部は丸い。外縁下 部茎葉。上半部毛。内縁茎葉。	外: に bei 墓(5YR 7/4) ~ 深黃褐色(7.5YR 8/4) 内: に bei 墓(5YR 6/4)	全雲付合む。
231	株 1C	II 区間周 斜面土壌群	口径(17.9) 溝深(9.3)	口径 1/2	同じに比して溝部は直線的で、溝底は直線的。外縁に伸びる 口縁被。底部は直線的。削り切開部を付す。外縁は削り切開部。 内縁はドヤリが5ある。底部の削り切開部。上部は10倍のmの模様被。	外: に bei 墓(5YR 6/4) 内: に bei 墓(5YR 6/6)	紺土きめ細かい。
232	株 2A	II 区間周 斜面土壌群	口径(14.8) 溝深(8.7) 口径(4.6)	口径 1/2	中央部が削り切開して露頭から内凹部に向かってのびる 形態。口縁被はやや尖ら。内縁に削り切開部。底部無葉は削 り尖ら。その他不明。	外: に bei 墓(7.5YR 7/4) 内: に bei 墓(7.5YR 7/4)	全雲付合む。
233	馬仔 A a	II 区間周 斜面土壌群	口径(26.5) 溝深(4.2)	口径 1/3	外気流する直角部。底部は削り切開部。端部は丸く。口 縁被は丸い。内縁は削り切開部。底部附近ヨコナガ。	外: 褐(7.5YR 6/6) 内: に bei 墓(7.5YR 6/4)	全雲付合む。
234	脚踏	II 区間周 斜面土壌群	溝深(17.8) 溝高(5.1)	脚踏 1/3	外気流するに伸びる脚踏。脚踏は削り切開部を付す。円錐附近を 1方向に伸びる。外縁削り毛(5 ~ 6角/cm)。内縁削り毛の 模様被。	外: に bei 墓(2.5YR 6/6) 内: に bei 墓(5YR 6/6)	金雲付合む。
235	脚踏 (苔台)	II 区間周 斜面土壌群	溝高(11.6)	脚踏中央部 のみ	脚踏は直線的に外方に伸び、端部に近い部分から3方向 に伸びる。脚踏は削り切開部。露頭部外側に削り切開部を付す。 端と斜面は削り切開部。	外: 墓(2.5YR 5/6), 木場(10YR 6/6), に bei 内: に bei 墓(7.5YR 7/4), 木場(2.5YR 6/6)	全雲付合む。
236	脚踏 (苔台)	II 区間周 斜面土壌群	脚踏(11.6) 溝深(14.1)	脚踏 1/3	外気流する直角部。底部は削り切開部。端部は丸く。内縁削 り毛のままで。内縁削り毛。底部附近ヨコナガ。	外: に bei 墓(2.5YR 5/6), 木場(10YR 6/6), に bei 内: に bei 墓(7.5YR 7/4)	全雲付合む。
237	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(6.8)	底踏 1/3	やや削り切開する直角部から内凹部に向かう形態。外縁は削り 切開部のままで。内縁削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(5YR 5/6) 内: 木場(5YR 6/6)	
238	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(6.0) 溝深(6.1)	底踏 1/3	中央が4方向突出する底踏から直角部に向かう形態の 外縁削り毛。内縁削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(10YR 7/3), に bei 墓(7.5Y R 6/6)	全雲付合む。
239	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(4.8) 溝高(4.4)	底踏 1/3	中央ののみ削り切開から外方に伸びる形態。外縁は削り 切開部。内縁削り毛。底部削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(10YR 7/3), に bei 墓(7.5Y R 6/6) 内: に bei 墓(2.5YR 5/6), 底(30Y 4/1)	内面黒底あり。
240	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(4.7) 溝深(2.3)	底踏 3/4	中央が4方向突出した底踏から内凹部に向かう形態。内縁 削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(5YR 6/4) 内: に bei 墓(7.5YR 7/3) ~ 深褐色(10YR 4/1)	
241	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(3.2) 溝深(4.1)	底踏 3/4	突出する直角部から内凹部に向かう形態。外縫は丸く。内縫削 り毛のままで。底部削り毛。	外: 墓(5YR 6/6) 内: 木場(5YR 5/6)	
242	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(5.8) 溝深(4.7)	底踏 3/4	突出する直角部から内凹部に向かう形態。外縫は丸く。 内縫削り毛のままで。内縫削り毛。	外: に bei 墓(7.5YR 7/4) 内: 墓(5.5)	全雲付合む。
243	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(4.2) 溝深(3.4)	底踏 3/4	中央が4方向突出した底踏から内凹部に向かう形態。 外縫は削り切開部のままで。内縫削り毛。	外: 墓(7.5YR 6/6) 内: 墓(5YR 6/6)	黒底あり 全雲付合む。
244	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(4.6) 溝深(3.5)	底踏 3/4	中央がやや凸むけ出して直角部から内凹部に向かう形態。 外縫削り毛。内縫削り毛。底部削り毛。	外: 墓(7.5YR 6/6) 内: 墓(5YR 6/6)	全雲付合む。
245	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(4.8) 溝深(7.9)	底踏 3/4	中央がやや凸むけ出して直角部から内凹部に向かう形態。 外縫削り毛。内縫削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(5YR 5/6) 内: に bei 墓(7.5YR 6/6)	底面黒斑あり。
246	底踏	II 区間周 斜面土壌群	底踏(5.0) 溝深(3.3)	底踏 3/4	やや削り切開する直角部から内凹部に向かう形態。 外縫削り毛。内縫削り毛。底部削り毛。	外: 外: 墓(7.5YR 6/8)	
広口壺 Ab	III 区間周 西底部土壌群	口径(13.6) 溝深(29.0) 底踏(29.8) 底踏(5.4)	口径 1/2	突出する直角部から内凹部に向かう形態。外縫削り毛。 内縫削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(7.5YR 7/4), 墓(2.5YR 7/6) 内: 木場(5YR 6/8)	砂粒少なく他の 地域系。	
247	広口壺 Ab	III 区間周 西底部土壌群	口径(19.2) 溝深(11.6)	口径 1/2 底部削り 底踏	突出する直角部から内凹部に向かう形態。外縫削り毛。 内縫削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(7.5YR 6/6, 6/8), 木場(2.5YR 6/8) 内: 木場(2.5YR 6/6), 木場(2.5YR 6/6)	
248	B C	II 区間周 西底部土壌群	口径(16.1) 溝深(5.3)	口径 1/6	外上方に直角部のままで外縫被。底踏部は下直する。外縫削 り毛のままで。内縫削り毛。	外: 墓(5YR 6/8) 内: 墓(7.5YR 6/8)	全雲付合む。
249	広口壺 B c	II 区間周 西底部土壌群	口径(16.1) 溝深(5.3)	口径 1/6	外上方に直角部のままで外縫被。底踏部は下直する。外縫削 り毛のままで。内縫削り毛。	外: 墓(5YR 6/8) 内: 墓(7.5YR 6/8)	全雲付合む。
250	広口壺 A b	II 区間周 西底部土壌群	口径(12.8) 溝深(6.1)	口径 1/5	直線して底踏部が丸く外方へ外反する直角部。底踏部は下 直するに少し削り毛。底踏部削り毛。削り切開部ヨコナガ。	外: 明褐色(5YR 5/6) 内: 墓(7.5YR 6/6)	形状特異。底地 底端部。
251	壺	II 区間周 西底部土壌群	口径(6.8) 溝深(3.4)	口径 1/3	底踏から削り切開して外方に伸びる直角部。外縫被はさうじ 削り毛。内縫被は削り毛。底部削り毛。	外: 墓(2.5YR 6/8) 内: 墓(2.5YR 6/6)	全雲付合む。
252	壺 1A b	II 区間周 西底部土壌群	口径(17.2) 溝深(29.8) 底踏(20.7) 底踏(4.8)	口径 1/2 底部削り 底踏	突出する直角部から内凹部に向かう形態。外縫被はさうじ 削り毛。内縫被は削り毛。底部削り毛。	外: 墓(2.5YR 6/8), 墓(2.5YR 5/6), 内: 墓(2.5YR 6/6)	底部下方に黒斑。
253	壺 1A b	II 区間周 西底部土壌群	口径(19.1) 溝深(22.2) 底踏(26.2)	口径 1/2	やや削り切開する直角部。口縫被は直線から露出して外方に 直線的に伸びる。縫縫部は直線をもち、縫縫部に削り切開部による 削り目を付す。縫縫部削り毛。縫縫部削り毛。底部削り毛。	外: 墓(2.5YR 6/6, 6/8), 黑被(5YR 5/2) 内: 墓(2.5YR 6/6)	外縫に黒斑付。
254	壺 1B a	II 区間周 西底部土壌群	口径(21.6) 溝深(11.0)	口径 1/3 底部若干 削り毛	底踏から削り切開して外方に伸びる直角部。外縫被は直線から 露出して外方に伸びる。縫縫部は直線をもち、縫縫部に削り切開部による 削り目を付す。縫縫部削り毛。縫縫部削り毛。底部削り毛。	外: 墓(2.5YR 6/6) 内: 墓(7.5YR 7/6)	内縫に黒斑付。
255	壺 1B b	II 区間周 西底部土壌群	口径(17.2) 溝深(20.2) 底踏若干 削り毛	口径 1/4	底踏から削り切開して外方に伸びる直角部。外縫被は直線から 露出して外方に伸びる。縫縫部は直線をもち、縫縫部に削り切開部による 削り目を付す。縫縫部削り毛。縫縫部削り毛。底部削り毛。	外: 墓(2.5YR 6/6), 墓(7.5YR 4/1), 内: 墓(2.5YR 6/6)	外縫に黒斑付。
256	壺 1A b	II 区間周 西底部土壌群	口径(15.9) 溝深(21.8) 底踏(19.8)	口径 1/2 底部若干 削り毛	底踏から削り切開して外方に伸びる直角部。外縫被は直線から 露出して外方に伸びる。縫縫部は直線をもち、縫縫部に削り切開部による 削り目を付す。縫縫部削り毛。縫縫部削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(5YR 6/8) 内: 墓(7.5YR 5/6)	内縫に黒斑付。
257	壺 3	II 区間周 西底部土壌群	口径(17.3) 溝深(16.2) 底踏若干	口径 1/4	底踏から削り切開して外方に伸びる直角部。外縫被は直線から 露出して外方に伸びる。縫縫部は直線をもち、縫縫部に削り切開部による 削り目を付す。縫縫部削り毛。縫縫部削り毛。底部削り毛。	外: に bei 墓(5YR 7/4, 7.5YR 7/4), 墓(2. 5YR 4/1) 内: 墓(2.5YR 2/1), 明黄色(10YR 7/6)	内縫全体に黒斑。 外縫一部黒斑付。

番号	種類	山地地区・樹種	法則(cm)	既存率	形態・技法の特徴		色調	備考
					外型	技法		
258 1 A b [*]	焚	夏区山地 西部上部群	口徑(6.1) 高さ(6.4)	口縫(1) 底面(6.4)	丸みのある体部から直角に外上方に向むる口脚部。底部はやや丸く、口縫側削毛のヨココナ。		外-内) 棕(2.5YR6/6)	全葉身含む。
259 2	焚	夏区山地 西部上部群	口徑(11.5) 高さ(13.7) 底面(11.2)	口縫(1/3) 底面(13.7) 側面(2.0)	小型の壺。中央が円筒小さな尖端から内凹気味に外方にのびる。油瓶花茎形の体部。口脚部は削毛から直角に上方に向むる。底部は丸い。底部外周に凹き(3mm)のち下垂毛。底部下部に凹毛。底部下部ナデ(1/4)、下垂毛ナデ。口縫側内面削毛。		外) 棕(7.5YR7/6), 黒(7.5YR1, 7/1) 内) 棕(7.5YR7/6)	体部外側基盤。
260 (變)	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(13.7) 底面(9.6)	体部切下 底面(4.1)	少し上上がりの底部から内凹気味に外上方に向むる口脚部。外面は弓形(3mm)。内面は縱方向の削ナデ。要の体・茎と思われる。		外) 棕(2.5YR7/6), 黑(7.5YR1/1) 内) 底白(5Y7/2), 棕(4N), にぶい黄(6Y R7/3)	
261 (變)	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(16.1) 底面(5.1) 高さ(13.8)	体部(1/6) 底面(1/2)	少し上上がりのやや突出した底部から内凹気味に外上方に向むる口脚部。外面は弓形(3mm)。内面は縱方向の削ナデ。要の体・茎・底部と思われる。底部側面削毛。		外) 棕(2.5YR6/6), 黑(7.5YR4/1), 棕 (7.5YR4/2) 内) 黄(2.5Y4/1), 棕(7.5YR6/6)	外間に黒、内面にお黒付有。
262 (變)	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(27.6) 底面(6.2) 高さ(24.3)	約1/2	底から立ちぬいて外方にのびる修飾。最高点は下枝と思われる。外面は弓形(3mm)のち削毛。(5~6mm), 下端は圓錐形。内面は強力な削毛(4~5mm)。要の体・底部と思われる。底部側面削毛。		外) 棕(10R6/6), 黑(10R5/6), 底白(10R 4/2), 棕削(10R3/1) 内) 底棕(10R6/6), にぶい赤褐(5Y5/4)	外間に黒付有。
263 (變)	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(21.7) 底面(18.5)	体部若干 底面(5.6)	中央が凹で、突出した底部から内凹気味に外方にのびる修飾。外面は弓形(3mm)のち削毛。(5~6mm), 下端は圓錐形。内面は強力な削毛(4~5mm)。要の体・底部と思われる。底部側面削毛。		外) 棕(2.5YR6/6), 黑(7.5YR7/4) 内) 黄(2.5Y4/1), にぶい黄(10Y7/7/4) 棕(2.5YR7/3)	外間に黒付有。
264 1 A	林	夏区山地 西部上部群	口徑(27.5) 底面(3.3)	口縫(1) 側面(1/2)	底から立ちぬいて外方にのびる修飾。通部は下方に手足状の突起。外面側面削毛。底部内面削毛。		外) 棕(10R6/6), 黑(10R5/6), 底白(10R 4/2), 棕削(10R3/1) 内) 底棕(10R6/6), にぶい赤褐(5Y5/4)	外間に黒付有。
265 1 C	林	夏区山地 西部上部群	口徑(21.2) 底面(8.1)	口縫(1) 側面(1/2)	底から立ちぬいて外方にのびる修飾。撮影はほぼ雪の上。外側削毛。内面ナデ。		外) 棕(2.5YR6/6) 内) 明寒鶲(2.5YK5/6)	
266 1 C	林	夏区山地 西部上部群	口徑(19.5) 底面(8.6)	口縫(1/4)	底部から折して更にのびる口脚部。通部は直立を持つ。外側削毛ナデ。内面ナデ。		外) 棕(2.5YR6/6), 黑(2.5YR5/2) 内) 棕(2.5YR6/6), にぶい赤褐(2.5YR 5/4)	
267 4 B	林	夏区山地 西部上部群	口徑(17.2) 底面(9.3)	口縫(1/3)	底から立ちぬいて外方にのびる修飾。通部は下方に手足状の突起。底部内面削毛。内面削毛と側筋不明。		外) 棕(2.5YR6/4, 2.5YR6/4) 内) にぶい赤(7.5YR7/4, 6/4)	
268 4 B	林	夏区山地 西部上部群	口徑(12.3) 底面(9.7) 高さ(9.3)	口縫(1/2) 側面(2.7) 底面(9.7)	台形脚、輪郭の杆状で、下方に大口内側したちの脚部。底部は下方に手足状の突起。通部は丸い。輪郭は外方側に第1脚底通孔をもつて下方に突き出る。外側削毛と側筋不明。		外-内) 棕(2.5YR6/8), にぶい赤(7.5YR 6/4)	全葉身含む。
269	脚部	夏区山地 西部上部群	口徑(8.6) 底面(7.3)	脚部(3/4)	脚部半球形である。輪郭はハリ形に近く圓筒。輪郭は丸い。3方向に円錐透孔を有す。外側削毛。内面ナデ。		外) 棕(2.5YR6/8, 2.5YR6/8) 内) 棕(2.5YR6/8), にぶい赤(2.5Y6/3)	全葉身含む。
270	脚部	夏区山地 西部上部群	口徑(10.5) 底面(4.1)	脚部(1/3)	内凹気味に外方にのびる修飾。輪部は丸い。圓錐小開。側筋の凹性がある。		外) 黄(2.5Y5/5), にぶい黄(7.5YR 6/4)	
271 (合計)	脚部	夏区山地 西部上部群	口徑(14.5) 底面(14.0)	脚部(1/3)	外凹気味で、あまり大きくなれない脚部。輪部は丸い。外側削毛の凹性がある。内面削毛。脚部との凹凸感が厚い。		外-内) にぶい赤(2.5YR6/4), 赤褐(10R 5/4), 棕(7.5YR4/1)	
272 A C	舌台	夏区山地 西部上部群	口徑(26.9) 底面(6.7)	口縫(1/4) 側面(1/2)	脚部から立ちぬいて外反して直線的に開く脚部。底部は下中央に凹毛と2枚一付の竹状脚底通孔を有する。脚部と底面内側に各1つずつ、ヨコナデ。腹四方ナデ。脚毛と続く。外側削毛。		外) 棕(5Y4/1), にぶい産(5YR7/4), 棕 (2.5YR6/6), 旗白(10YR6/6)	全葉身少量含む。
273 A c	舌台	夏区山地 西部上部群	口徑(20.6) 底面(1.7)	口縫(1/8)	直線的に開く脚部。輪部は下方に弧状する。輪部と舌脚部に内凹気味全くなく、通部を遮る内凹削毛。		外-内) 棕(7.5YR6/8)	
274	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(4.8) 底面(4.0) 高さ(6.5)	体脚下半 口縫(4.0)	大きな脚部から内側しならがるのびる体部。内面削毛(8 mm)。底部に凹(4 mm)あり。外側削毛と側筋見え。側筋の凹性がある。		外) 棕(2.5YR6/6) 内) 明寒鶲(2.5YK5/6)	底面黒頭あり。
275	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(4.2) 底面(10.4)	底面(4.2)	上部底部から突出した底部から外方に内凹気味にのびる修飾。内面削毛と側筋。底部側面削毛見え。側筋の凹性である。		外) にぶい赤褐(2.5YR5/4) 内) 明寒鶲(2.5YK5/6)	体部外側基盤あり。 体部外側削毛。
276	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(4.0) 底面(8.4)	底面(2.2)	上部底部から外方にのびる修飾。外側削毛のち。内面削毛。底部側面削毛。		外) にぶい赤褐(10YR6/4) 内) 明寒鶲(10YR6/4)	
277	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(5.0) 底面(7.5)	底部元形 口縫(4.4)	中脚部が円錐形から外上方に直線的にのびる修飾。外側削毛(4 mm)。内面削毛ナデ。底部側面削毛。底部側面削毛。		外) 棕(2.5YR6/6) 内) にぶい赤(2.5YR5/4)	内面にお黒付有。
278	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(4.6) 底面(5.5)	底部元形	上部底部から外上方に直線的にのびる修飾。外側削毛(4 mm)。内面削毛ナデ。底部側面削毛。底部側面削毛。		外) 棕(7.5YR6/8)	外間に黒斑あり。
279	底部	夏区山地 西部上部群	口徑(5.7) 底面(8.4)	底部元形	突出する底部から外方にのびる修飾。外側削毛(4 mm)。内面削毛ナデ。底部側面削毛。底部側面削毛。		外) 明寒鶲(2.5YR6/6) 内) 明寒鶲(2.5YR5/6)	全葉身含む。
280 3	脚部	夏区山地 西部上部群	口徑(4.8) 底面(8.6)	脚部元形	右側面、突出する脚部から外上方に直線的にのびる修飾。外側削毛(4 mm)。内面削毛ナデ。底部側面削毛。底部側面削毛。		外) にぶい赤(2.5YR7/4, 5YR7/4), にぶい 黄(10YR7/4) 内) にぶい赤(10YR6/4), 棕(2.5YR6/6)	全葉身含む。
281 4 A	脚部	夏区山地 西部上部群	口徑(24.8) 底面(7.6)	口縫(1/8)	脚部から直角してよく立ちぬかせる脚部。輪部は下方に少し彎曲。底部は山形をもち、叩き全体に丸く丸みをもつ。底部外周に凹(4 mm)。内面削毛。		外-内) にぶい赤(2.5YR6/6) 内) にぶい赤(2.5YR6/4)	
282 A s	広口器	夏区 低木群	口徑(20.1) 底面(7.3)	口縫(3/8)	脚部から直角してよく立ちぬかせる脚部。輪部は下方に少し彎曲。外側削毛。内面削毛。		外) にぶい赤(2.5YR6/4) 内) にぶい赤(2.5YR6/4)	微粒粒雲合含む。
283	底部	夏区 低木群	口徑(4.4) 底面(4.5)	底部元形	突出する甲板から内側しながらのびる体部。外側削毛。内面削毛。		外) にぶい赤(2.5YR6/4) 内) にぶい赤(2.5YR6/4)	全葉身含む。

塗装箇所

No	器種	出土地区・場所	法長(cm)	残存率	形態・技法の特徴	色 調	考 参
284	底部	2段目裏側 包含層	灰青 4.0 灰青 3.7	底部はぼ くとん	平底の上外方にのびる体部。外側は叩き、内側はナガ。表面削離部分多い。	外・内) にぼい模(7.5YR 6/4)	
285	底部	2段目裏側 包含層	底径 (4.7) 底高 5.7	底端 底高	1-17底部のみやや丸く底辺から外方に直線的にのびる体部。底部は叩き、内側はナガ。表面削離部分多い。	外・内) 明褐色(7.5YR 5/6)	
286	土瓶		底径 (6.0) 底高 6.5	1/2瓶	円形に近い丸形の底付土瓶。底盤は約 2cm で、孔径は約 2.5cm、口径ななり。	外・内) 深黄褐(10YR 8/4)	

高尾跡跡

No	器種	出土地区・場所	法長(cm)	残存率	形態・技法の特徴	色 調	考 参
287	壺 1A a	調査区 南東部 トレンチ剖面 包含層	口径 (11.4) 底径 22.5 底高 4.5	口縁 1/2 底部完形	突出気泡の上外側から外上方に直線的にのびたもの。内面しながりナガである。外側は叩き、内側は削離部から墨出しし、祝のびる。体部外所叩きも一部削り、内腹部内所の墨削り。底部墨削りナガ。底部削りのものナガ。口縁墨コナザ。	外・内) にぼい模(5YR 6/4), 模(7.5YR 6/6)	
288	壺 1B c	調査区 南東部 トレンチ剖面 包含層	口径 (13.7) 底径 4.7	口縁 1/6	体部はくちこぼ状の凹折して直線的にのびる口縁部。内腹の壁はやや低い。隣接付近は内壁に墨を拂す。裏面に米粒状の割み目を施す。体部外表面叩き、内面は墨削り。口縫部内窓墨削り。	外・内) にぼい模(5YR 5/4)	
289	壺 1B e'	トレンチ剖面 包含層	口径 (12.5) 底高 5.3	口縁 1/4	体部はくちこぼ状に凹折して内腹部にのびる口縁部。内腹の壁はやや低い。隣接付近は墨を拂す。裏面は凹縮状に出入り。体部外表面叩き、内面は墨削り。口縫部墨コナザ。	外・内) にぼい模(5YR 6/4)	
290	壺 B	調査区 南東部 トレンチ剖面 包含層	口径 (22.8) 底高 12.4	口縁 1/4	底底部は内窓する。口縁部は杯底部が大きくて内凹して上方にのびたもの外反して尻へのびる。縁部は上方に若干肥厚し、やや凹曲を呈す。内側する。内腹部はやや空で偏る。底部は叩き底部の毛刷毛を拂し、脚柱部も剃毛跡等で3方向に向って透かしを争つ。	外・内) 砥突(7.5YR 4/2), にぼい模(5YR 5/4)	
291	鉢 1C	調査区 南東部 トレンチ剖面 包含層	口径 (20.0) 底高 5.2	口縁 1/8	内窓する体部からそのままで反する口縁部。縁部は上方に若干外張し、底底の両を持つ。外側の毛もら毛を拂し、内面墨削り。	外・内) にぼい模(5YR 5/4)	外側墨斑あり。
292	広口壺 A a 又 は B a	口縫 包含層	口径 (12.6) 底高 4.3	口縁 1/4	外窓する縁部がそのまま口縁部となる。縁部は内外に墨み付する。縁部はやや凹屈を呈する。縁部外側墨削り、口縫部はコナカノ開窓。	外) 穴(5YR 6/6) 内) にぼい模(7.5YR 5/4)	
293	底部	調査区 南東部 トレンチ剖面 包含層	底径 2.8 底高 3.6	底部完形	中央のみみぶみやや曳引する小さな平底から外上方にのびる体部。外側墨。内面墨毛。	外) 墨毛邊(2.5YR 5/6) 内) にぼい模(7.5YR 6/4)	
294	底部	調査区 南東部 トレンチ剖面 包含層	底径 4.1 底高 3.3	底部完形	突出する上げ底状の底部から外上方にのびる体部。外側は叩きのもの刷毛。内面はナゲドリ。	外・内) 模(2.5YR 6/6)	

写 真 図 版



① SH-1 (西から)



② SH-1 周溝内土器出土状況(南西から)



③ SH-1 周溝内土器出土状況(南西から)



④ SH-1 中央土壤断面(東から)



⑤ SH-1 調査状況(北から)

禿山遺跡



S X - 1 (南から)

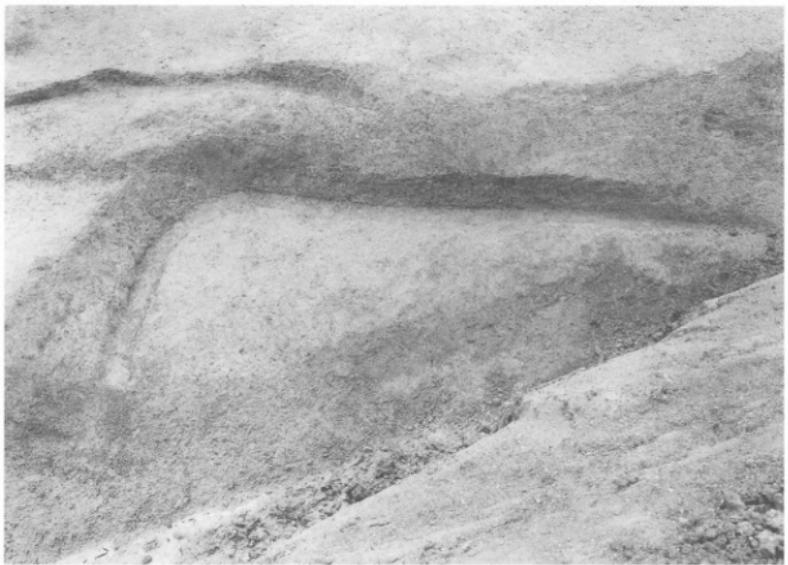


S X - 2 (南東から)

禿山遺跡



S X - 3 + 4, S H - 2 (南から)



S H - 2 (西から)

禿山遺跡



SD-1(南から)



谷部全景(南から)



谷部 土層断面(北半, 西から)



谷部 土層断面(南半, 西から)

禿山遺跡



谷部 土層断面(西部, 南から)



谷部 土器出土状況(南から)

尼ヶ岡遺跡



SH-1 ~ 3 (南西から)



SH-1 ~ 3 (南から)

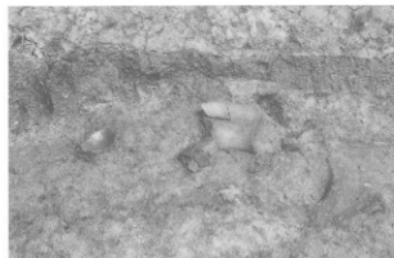
尼ヶ岡遺跡



① SH-1 北側周溝内土器出土状況(南から)



② SH-2 土層断面(南から)



③ SH-3 東側周溝内土器出土状況(西から)



④ SH-3 石錐出土状況(南西から)



⑤ SH-4 (西から)

尼ヶ岡遺跡



S H - 4 土層断面(南から)



S H - 4 土層断面(東から)

尼ヶ岡遺跡



① S H - 4 中央土壤土層断面(東から)



② S H - 4 埋土土器出土状況(南から)



③ S H - 4 埋土土器出土状況(南から)



④ S H - 4 埋土土器出土状況(南から)



⑤ S H - 4 周溝内石製投弾出土状況(南から)

尼ヶ岡遺跡



SD-1 土器群検出状況(西から)



SD-1 土器群検出状況(北から)

尼ヶ岡遺跡



S D - 1 土器群検出状況(東から)



S D - 1 土器群西部(南から)



① SD-1 土器群中央部(南から)



② SD-1 土器群細部(中央部東寄り, 北から)



③ SD-1 土器群細部(中央部西寄り, 北から)



④ SD-1 土器群細部(西端部, 北から)



⑤ 土器取り上げ作業状況(南から)

尼ヶ岡遺跡



S H - 6 全景(南から)



S H - 6 岁・焼土検出状況(南から)

尼ヶ岡遺跡

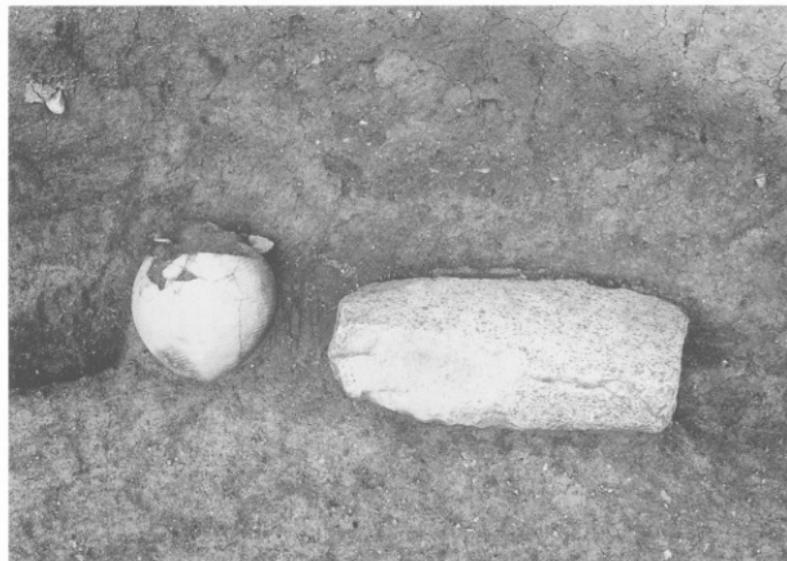


S H - 6 土層断面(東から)



S H - 6 土層断面(南東から)

尼ヶ岡遺跡



S H - 6 東端遺物出土状況(西から)



S H - 6 北西部土器出土状況(南東から)

尼ヶ岡遺跡



① SH-6 北東部炭・焼土検出状況(南西から)



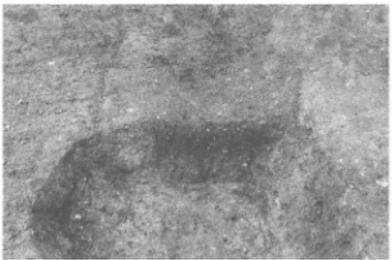
② SH-6 中央部炭・焼土検出状況(南から)



③ SH-6 南西部紡錘車出土状況(東から)



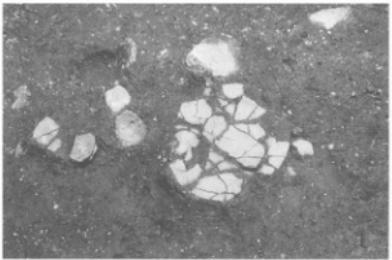
④ SH-6 西側周壁溝土層断面(南から)



⑤ SH-6 中央溝中央部土層断面(南から)



⑥ SH-6 中央溝南部土層断面(南から)



⑦ SD-2 + 3 上面土器出土状況(南から)



⑧ SD-4 土層断面(北東から)

尼ヶ岡遺跡



SH-7(西から)



Ⅲ区テラス土器群出土状況(下面、南から)

尼ヶ岡遺跡



① SH-7 土層断面(東から)



② SH-7 埋土土器出土状況(西から)



③ Ⅲ区テラス土器群出土状況(上面, 南から)



④ Ⅲ区テラス土器群出土状況(中面, 南東から)



⑤ 挖削状造構(南から)

塩壺東遺跡



調査後全景(南西から)



中央部(北から)

高尾遺跡



①調査後全景(東から)



②遠景(東北東から)



③調査前全景(東から)



④伐開後全景(東から)



⑤遺跡から南東方向を望む

高尾遺跡



①調査状況(縦間より北方明石海峡を望む)



②土器出土状況(東から)



③調査区東端平坦面(東から)



④調査区南壁土層断面(北東から)

岩屋台遺跡



⑤調査前遠景(東から)



⑥調査後遠景(東から)



⑦調査区全景(南東から)



⑧調査区南側壁土層断面(北から)



1



4



2



6



3



10



17, 18



21



22

S H - 1 · S K - 1 · 谷部下層出土土器



25



26



32



36



49



58



54



62



65



71



67



72



73



70



76

谷部中層出土土器



78



104



85



111



88



112



96



115

禿山遺跡・高尾遺跡



117



132



119



134



123



287

禿山遺跡 谷部旧河道・包含層出土土器、高尾遺跡出土土器



141



142



143



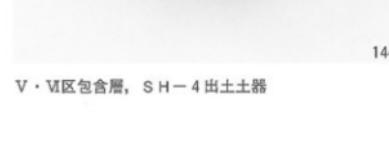
146



144



147



148

尼ヶ岡遺跡



153



164



156



167



157



168



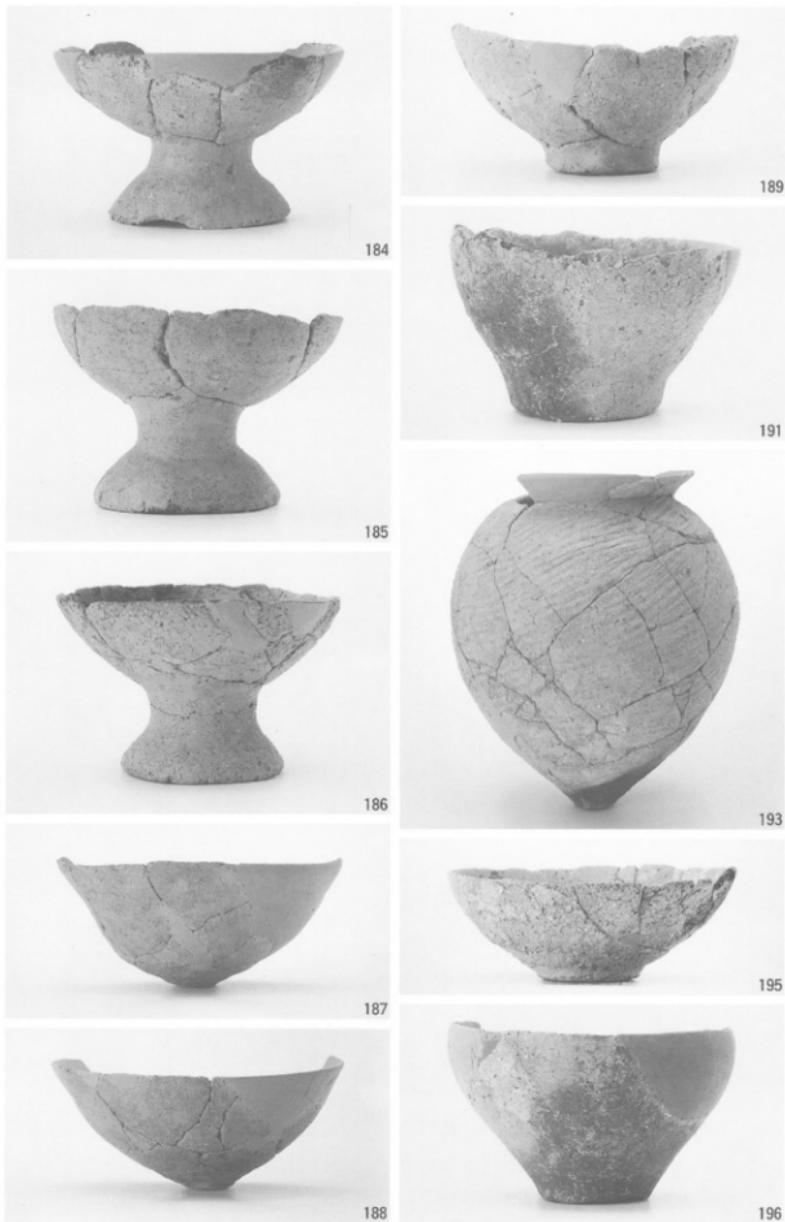
169

尼ヶ岡遺跡

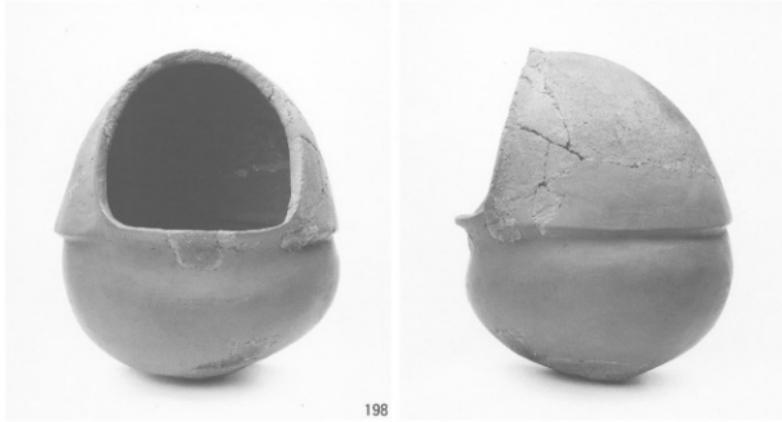


S D - 1 出土土器(2)

尼ヶ岡遺跡



SD-1 出土土器(3)・SH-6 出土土器



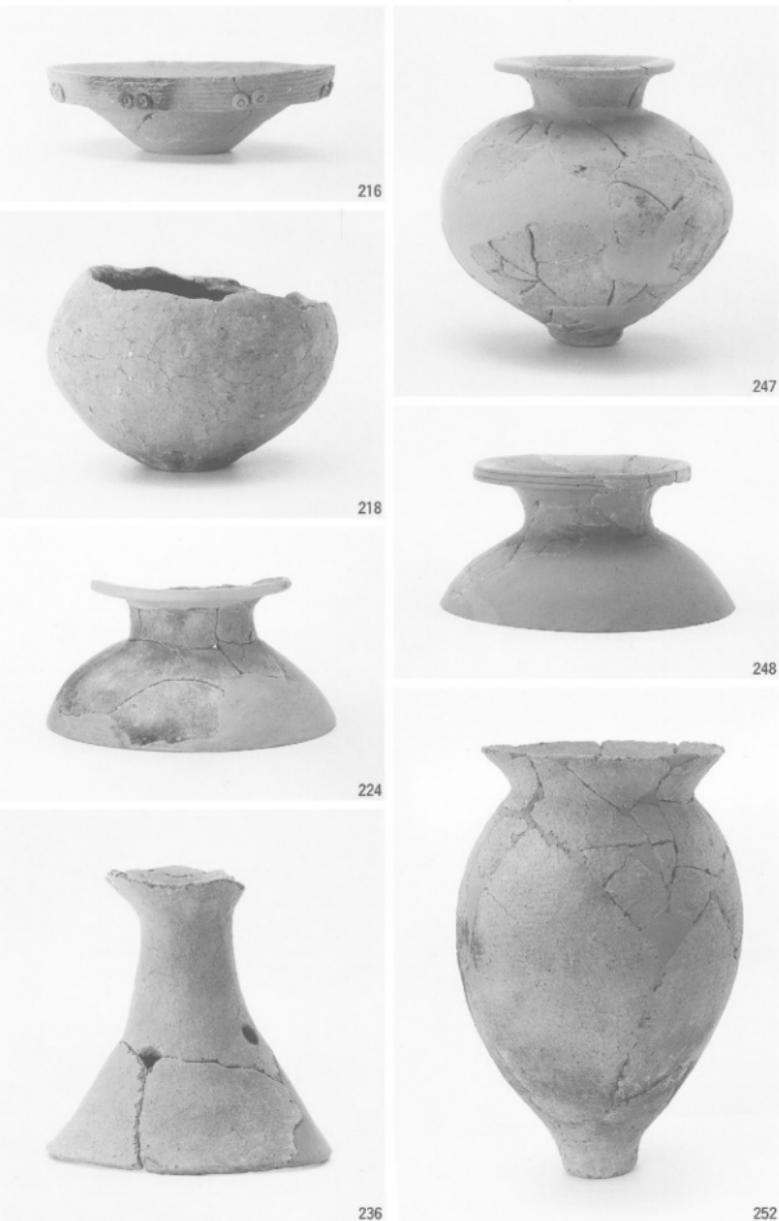
198



204



206



SH-7, II・III区間斜面土器群, III区テラス土器群出土土器

尼ヶ岡遺跡



253



260



259

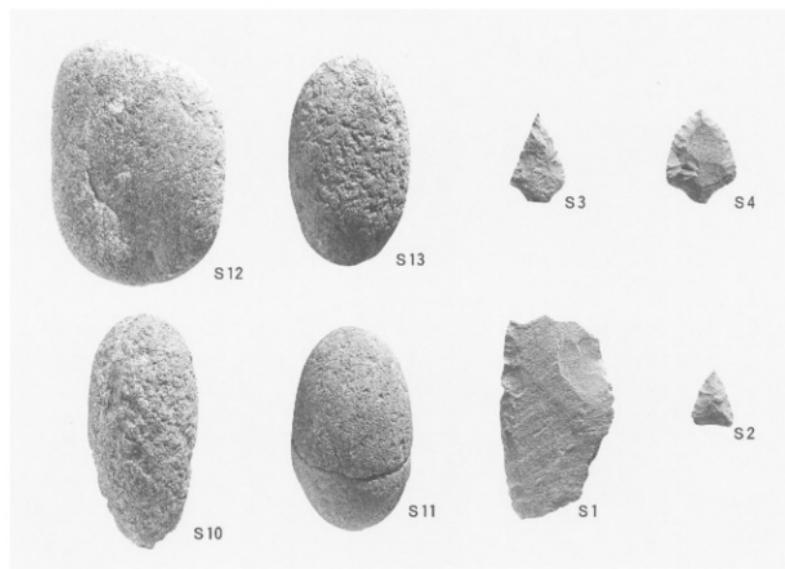


268



272

禿山遺跡・尼ヶ岡遺跡・塙臺東遺跡



出土石器

兵庫県文化財調査報告 第177冊
—本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 IV—

禿山遺跡他発掘調査報告書

1998年3月20日 発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
〒652-0032 TEL078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 丸山印刷株式会社
〒676-8566 高砂市神爪1丁目11番33号

報告書抄録

ふりがな	はげやまいせきほかはくつちょうさほうこくしょ						
書名	宍山遺跡他発掘調査報告書						
副書名	本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
巻次	IV						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番	第127号						
編著者名	岸本一宏・山本 誠						
編集機関	兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011						
発行機関	兵庫県教育委員会						
所在地	〒650-0011 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-341-7711						
発行年月日	西暦1998年3月20日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 道跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
宍山遺跡	兵庫県津名郡東浦町 白山599ほか	28686 910012	34度31分55秒	134度58分12秒	1991.5.7~7.30	2,114	道路(本州 四国連絡道 路)建設
尼ヶ岡遺跡	兵庫県津名郡東浦町 白山599ほか	28686 910013	34度31分54秒	134度58分46秒	1991.5.7~7.30	1,440	同上
塩竈東遺跡	兵庫県津名郡淡路町 岩屋3035ほか	28682 920162	34度34分42秒	135度1分24秒	1991.5.11~5.30	218	同上
高尾遺跡	兵庫県津名郡淡路町 岩屋3117ほか	28682 910072	34度34分53秒	135度0分55秒	1991.9.~10.21	258	同上
岩屋台遺跡	兵庫県津名郡淡路町 岩屋3141	28682 910073	34度35分15秒	135度0分47秒	1991.8.21~9.	117	同上
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
宍山遺跡	集落跡	弥生	堅穴住居2?, 土墳4, 溝1, 土器群	弥生土器・石器			
尼ヶ岡遺跡	集落跡	弥生~古墳	堅穴住居7, 溝6, 振築状遺構1, 土器群	弥生土器・土師器・石器			
塩竈東遺跡	集落跡	弥生	柱穴状遺構5	弥生土器・石器			
高尾遺跡	集落跡	弥生		弥生土器・石器			
岩屋台遺跡		弥生~古墳		土師器			